

Q. バカはあっち、テスト
トはこっち。では、召
喚獣はどっち？

黒猫ノ月

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

試験召喚戦争という一風変わった制度が存在する学園……文月学園に、あっちこっこの主な5人と先生1人、姉1人をぶっこんでみました。

さてはて、ただでさえ波乱万丈な学園にどのような化学反応が起こるのか？

こう、ご期待っ!!!

??バカテスを元としたあっちこっこのクロスです。

??アンチはありません。

??カップリングもクロスします。

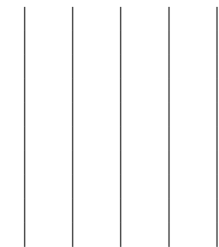
以上がダメならブラウザバックをお願いします。

目次

第8話	第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話	一巻	プロローグ2	プロローグ
145	129	110	95	82	69	53	37		24	1

第20話	第19話	第18話	第17話	第16話	二巻	第15話	第14話	第13話	第12話	第11話	第10話	第9話
354	337	317	300	286		266	249	235	216	200	181	164

第 2 5 話
第 2 4 話
第 2 3 話
第 2 2 話
第 2 1 話



440 425 408 388 368

プロローグ

——
僕はバカだ
——

——
勉強は底辺で

——
追試・補修は当たり前だった
——

——
僕はバカだ
——

——
いつも先生に怒られて

——
いつも誰かにバカにされてきた
——

——
僕はバカだ
——

——
時には思いきり暴れて

——
時には誰かを泣かせたりもした
——

Q. バカはあっち、テストはこっち。では、召喚獣はどこ？

校舎全体が解放感に包まれる放課後。

ある者は部活動に専念するためにそれぞれの部室に向かい。

ある者は友人たちとこれからの予定を話し合いながら下駄箱へと向かい。

またあるものは次の”特別なテスト”に向けて自習室へと足を運ぶ。

そして、ある者たちは……。

「待てえ、貴様らあああ!!」

「チクシヨオおおお!!」

学校内を、鬼神相手に全速力で爆走していた。

「どうしてくれるんだよ雄二！ 雄二があのととき躓いたりするから鉄人にバレちゃったじゃないかあ！」

「それはこっちの台詞だ明久！ そもそも何でテメエは塩の瓶なんてもものポケットに入れてるんだ!? 躓いたのもそのせいだろうが!!」

「雄二も知ってるでしょ!? 塩は僕の命を繋ぐものなんだよ！ 万能食材なんだよ!!」
「知ったことか！ 俺はそれを何でわざわざポケットに入れていたのかを……!!」

「待たんかあああああ!!」

「クソオオオオオオオオ!!」

鬼神に追われながらもこうなつた原因を言い争う彼ら……吉井明久と坂本雄二。しかし鬼神……てっじ……西村先生は着々とそんな彼らとの差を詰めていく。

「チイっ！ 今は言い争ってる場合じゃねえ！ 携帯も無いから助けも呼べん！ このままだと捕まるぞっ!!」

隠密行動中だった明久と雄二は携帯を持っておらず、いつもの仲間たちに連絡が取れずにいた。

「どうするのさ雄二っ!! このあとはみんなと今度のテストの対策するんですよっ!!」
もし捕まったら地獄は確定だよっ！ 僕はまだ死にたくないっ!!」

「だったらその口閉じて黙って走りやがれバカ野郎！　今それを考えて……あれはっ
！」

「伊御と御庭さんだ！」

後がない状態でも言い争いを止めない二人。しかしそんな彼らが廊下の角を曲がった時、遠くの下駄箱の前を歩く、よく知る、男女が見えた。この一年で仲良くなつた音無 伊御と御庭 つみきだ。

雄二はその二人を見た瞬間、かつて神童と謳われていた頭脳をフル回転させる。勉強に対しては錆びていようとも、ことそれ以外の事に関しては、その冴えは全く衰えてはいない。そして雄二は今を打開する策を導き出す。その間僅か数秒。

「……………よしっ、あれならっ！」

「雄二！　プランはっ!?」

「Cだっ！　バカなお前でも覚えてるなっ!」

「当たり前だろ！　生死に関わってるんだから僕だつて覚えるよっ!!」

「ならいいっ！　おい伊御、御庭っ!!」

「……………？　あれは明久と雄二か？」

「……………後ろに西村先生を連れてるわね」

その声に振り向く二人。しかしそのときには目の前を通りすぎようとする悪友たち

がいた。雄二は去り際に叫ぶ。

「伊御っ！ プランCで頼むっ!!」

「……プラン？」

雄二の言葉に疑問を浮かべるつみきを他所に、「頼んだぞおお……」とエコーをかけながら雄二は明久と走り去り、2階へと鉄人と共に消えていった。

「……はあ、全く」

「また何かやらかしたようね」

「みたいだな。あの様子だと、このあとの勉強会には顔を出すんだろうけど……」

「……伊御、プランCって？」

「ん？ ああ、後で教えてあげるよつみき。今はとりあえず……」

伊御はポケットから携帯を取り出し、そして……。

「ミッション・スタートだ」

幼馴染みの番号を画面に表示させた。

□1階廊下□

あれから一進一退の攻防（2階から跳んだり、窓から校舎に入ったり、掃除用具をば

ら蒔いたり)を繰り返しながら、鉄人との距離をなんとか離れた明久と雄二。しかし、鉄人はまだ二人を視界に捉えていた。

「雄二、鉄人まだ僕らを追ってくるよっ!」

「やっぱあれぐらいで撒けるほど甘くはないか。……走れ明久! 伊御がやってくれたならこの辺りで……っ!」

「おい、お二人さーん!」

「こっちじゃよー!」

「やったっ! 伊御がやってくれたみたいだよ!!」

「よしっ!」

廊下を爆走する二人の前に現れたのは、先程の二人と同様、そこそこの付き合いになる戌井 榊と片瀬 真宵だった。

「あの人」なら保健室辺りだ! さつき怪我した奴を連れてつてたぜ! こっから右に行きやあ”近道”出来る!!」

「ああん!?! そっちは確か……っ! なるほど、分かった!!」

「ハイGuys! 受けとるにやあ!」

明久たちが二人の前を走り抜く瞬間に、真宵が雄二に小袋を投げ渡す。

「どうしても捕まりそうになったら、中のものを先生の足元に叩き付けるんじゃよー!」

雄二は少し困惑しながらも、ポケットへ仕舞う。そして雄二と明久はT字路を右へ走っていった。

「お前たちっ！ 何を企んでおるかあ!!」

目の前でのやり取りが何を意味するのかは知らないが、明らかに追っている二人に有利になりそうなことをしている榊と真宵を少し遠くから声をあげて怒鳴る。

「そんな先生、俺たち何も企んでなんていませんよ♪」

「そうじゃよん。ただの通りすがりじゃよっ♪」

「ねー♪♪」

「……くっ!」

絶対に何かあるのだが、二人は別に何か悪さをしたわけではない。そのため、鉄人は見逃さざるを得なかった。それに、早くしないと戦犯の者たちを見失ってしまう。そして鉄人も榊と真宵を置いて、T字路を右に曲がった。……………口角をつり上げながら。

「……ふん、バカめ。そちらは“行き止まり”だ!」

「——とか思ってるんだろーなあ、鉄人は」

「ふえっふえっふえ。甘いんじやよ」

廊下で取り残された二人は、悪い悪い顔をしていた。

□1階倉庫前□

さて、この場所のことを話しておこう。この場所は倉庫へと続く扉があり、その倉庫は校舎と校舎の間に位置している。そのため、突っ切ることができれば、今いる場所から明久たちは最短で次の校舎にある目的地へとたどり着けるのだ。

倉庫の扉が両方とも開いていたら、だが。

その倉庫は貴重品等もあり、生徒がイタズラをしないよう、職員室で鍵を保管してある。そのため、そこは普段は通り抜けることが出来ない。

……そう、” 普段なら”。

「あれっ!? 雄二、こっちつて確か」

「いいから走れっ!!」

「ふははは! バカどもめ、袋のネズミだっ!!」

追いかけることが続くなか、鉄人はこちらの勝利を半ば確信していた。

あとは奴等をとつちめた後、ここまで手こずらせたことを含めて、どのように料理してやろうかと思いを馳せる。

そうして、三人は行き止まりである倉庫へと差し掛かる。鉄人は少し速度を緩め、絶対に逃がさぬようにと体勢を整えようとして……。

…ガラガラガラ

「んしょつと。これでいいんでしょうか？」

「つ?!? なにいいー?!?!?!?」

普段なら開かない倉庫の扉が、内側から開け放たれた。……一人の女生徒によって。その女生徒の名前は春野 姫。これまたこれまた明久たちの友人の一人である。

「ナイスだ! 春野っ!!」

「ありがとう、春野さん!!」

「え? ……ふえええええええつ?!」

扉を開けた瞬間に、「何故か」感謝の言葉を述べられながら自分目掛けて走ってくる知人たち。それに驚いた姫は、驚きの声をあげながら二人に道を反射的に譲り、さらに腰が抜けそうになった。

その二人は「開け放たれている」向こう側の扉からそのまま駆け抜けていった。呆然としながら二人を見送った姫。だが、そんな姫に追い討ちがかかる。

「まあああてええええええええつ!!!」

「ふええええええええええええええつ!!」

それは、尋常ではない速さと形相で自分の目の前を風と共に走り抜ける鉄人であった。

その出来事に、今度こそ姫は腰を抜かしてへたりこんだのだった。

かなり差を広げられてしまったため、全速力で走る鉄人。彼は、春野姫を責めることをしなかった。何故なら、彼は春野姫という人物の人物の人物の人物を少なからず知っているからだ。……そう、鉄人は悟っていた。

春野姫は、なにも知らずに利用されただけなのだ。

「あううう……。い、一体何だったのでしょうか?」

未だにぺたんと床にお尻をつけている姫。そこに榊と真宵がやって来た。

「おー姫、大丈夫……って大丈夫じゃ無さそうだな」

「姫っちい? 大丈夫かじゃ?」

「は、はひい。な、なんとか……」

「立てるか、姫？」

へたりこんでいる姫に手を貸す榊。姫はそれを借りてなんとか立ち上がった。

「んんんつとお。あ、ありがとうございます、榊君」

「んーいや、悪いの完全にこつちだし、礼はいいよ」

「ふえ？ なんのことです？」

「えつと、それはじゃねえ……」

□□1階保健室前□□

姫のアシストにより鉄人を巻いた悪童たちは、現在保健室前で鉄人を待ち構えていた。明久は少し屈み、ノックの姿勢で待機。雄二は保健室の周りが静かなのを利用し、耳を済ませてタイムリングを計る。それからすぐに……。

……どどどドドドっ

ターゲットはやって来た。雄二は明久に視線をやり、それに明久は頷いき、扉をノックした。

「すみません！ 1年の吉井です。坂本くんが足を怪我したんですが、誰か居ませんか！」

『あら、吉井くん？ 坂本くんが怪我したんですの？ 少し待つてくださるかしら』

中から聞こえる声に明久と雄二は頷き、先程からこちらに向かってくるダツシユ音と怒声とは反対方向へと静かに走り去った。

ドドドドドドドドツ!!

…ガラガラガラ

そして、策は成る。

「こちらかあっ!!」

「きゃあああああっ!!?」

「なっ!!? 桜川先生っ!!?」

保健室から出てきたのはこの学園に勤める女教師……桜川キクエであった。とても優しく温厚な女性で、怒っても、逆に怒られている側が和んでしまうほどである。しかし、この人……。

「び、ビックリしましたの……。……西村先生っ! 教師である貴方が、保健室の周りを声を荒げながら走り回るとは何事ですのっ!」

「い、いや……それは……」

鉄人に対しては、究極兵器と化す。

「私は、吉井と坂本がまた悪さをしていたので、奴らを捕まえようと……」

「そんなことはここを走っていい理由にはなりませんの！ ……西村先生がいつも生徒のために頑張られているのは知っています。しかし、だからといって他のことを蔑ろにしているというわけではありませんのっ！」

「む、むう。お、仰る通りですな」

「そもそも！ 追いかけることが可笑しいではないですか！ 例え生徒が何かイタズラをして逃げたとしても、追いかけるのではなく、呼び出しなどをして叱ることは出来ま
すの！」

「……仰る、通りで」

「私たちは生徒の模範となるべき教師ですの！ そのあなたが！ 率先して大声で校内を走るのはどうなのですか!？」

「……誠心、申し訳なく」

「全く！ 西村先生は前々から……っ！」

「……………」

……それからしばらく、保健室前では鉄人が大きい体を縮こませて、自身よりも遙かに小さいキクエ先生に叱られ続けていた。

□下駄箱前□

鬼の追っ手を逃れた明久と雄二は、教室で鞆を取りに戻ったあと、少し駆け足で帰宅しようとしていた。

「まったく、お前のせいで無駄に疲れちまったじゃねえか。このバカの代名詞が」

「それはこっちの台詞だよ。この歩くワイセツ物が」

「……………ッ！」（メンチの切りあい）

「……………ほんと、あいも変わらずだにやーお二人さんは」

「ナツハツハ。ケンカをするほどなんとやらつてやつですな」

「お、お二人ともつ。ケンカはダメですよ」

今にも殴り合いになりそうな二人の前に、先程逃亡をサポートした三人が同じく鞆を持ってやって来た。

「あつ、みんな！ さつきはありがとう。お陰で捕まらずにすんだよ」

「ああ、助かった」

「なんのなんの。こっちはこっちで楽しかったしな」

「その通りじゃよ」

「わ、私は楽しくなくてなかったです。榊さんも真宵さんもヒドイですよ」

「メンゴメンゴ〜♪」

「も〜…」

姫は榊と真宵にうまく利用されたことに、頬を可愛らしく膨らませている。

榊と真宵はまず、机の替えを探すために鍵を借りてきてほしいと姫に頼む。そのとき、扉を両方開けたいと頼まれて、よくわからないが姫は何も疑うことなく承諾した。姫の人柄は教師陣もよく知っており、職員室へ倉庫の鍵を借りに来た姫に快く貸してくれたという訳だ。

「……あ、やつと来た」

「みんな遅いわよ」

「ゴメンね御庭さん。伊御もありがとう。……僕らを見捨てないでくれて」

「まあ、電話するだけだったからな」

雄二が伊御に頼んだプランとは、『鉄人をキクエ先生と鉢合わせるために動け』という内容である。

それはAからFまでであり、それはそれぞれ集めた情報を提供してくれる場所を示している。Cは1階廊下だったということだ。あとは仲間たちの無駄なハイスペックさで各々サポートしてくれ、というわけだ。

……これ以上プランに内容を加えると、約1名頭がオーバーヒートを起こすため、内容は単純にしている。因みに、このプランを共有しているのは明久と雄二、伊御、榊、真宵、あとはここにいない腐れ縁の二人である。

「……それで？　今回は何をしたんだ？」

「……没収物の回収を」

「……………助けなきやよかつたかな」

「こ、今度何か奢るから次も何卒おお」

「いや、俺はそこまで鬼ではないよ」

明久の食事情を知っている伊御は断ろうとするが、それに助けてもらったもう一人である雄二が賛同する。

「いいじゃねえか。今度俺と明久で飯を奢らせてくれよ。もちろんお前らもな」

「やりいっ！」

「ヤツタにやあつ！」

「え、えと……。いいんでしょうか？」

「ああ。遠慮するな」

「「ごちになりまーすっ！」」

「じゃあ、頼もうかな」

「ん」

「ありがとうございます、お二人とも」

「う、うんっ！　任せてよっ!!　……………だ、大丈夫。朝と昼を水で過ごせば……」

「……それは大丈夫ではないわよ」

本当に死にそうな顔でブツブツと呟く明久に、聞こえていたつみきが突っ込んだ。そんな風にガヤガヤと賑やかに一同は靴を履きかえて玄関を出る。このあとは次のテストのため、榎の姉が経営する『ハチポチ』で勉強会を行う予定である。

そうして一同が校門に差し掛かったとき、雄二がふと思い出し、ポケットにしまったものを取り出した。

「なあ、そういえば片瀬。 ”これ”、なんなんだよ?」

「にや? ……おおつ! それはじゃねえ…」

それは真宵が投げ渡した小袋であった。真宵はそれを見て、雄二に説明をしようとしたとき。

……おどどどどどどどつ!!

「きいいさあまあああらああああつつ!!」

「……なん、だどつ!」

キクエ先生に捕まっていた鉄人が不死鳥のごとく復活し、正面玄関からこちらに向け爆走していた。その顔は神をも殺さんとするかのような形相であった。

「ど、どどどどどどうするのさ雄二つ!!」

「くそつ、予定よりも解放されるのが10分早えつ! 逃げるぞ、お前らつ!!」

「ノンノン♪ ちようどいいんじやよ!」

追つてくる鉄人見て、逃げようとする二人を呼び止める真宵、それに雄二が怒鳴る。

「おい片瀬っ! 今はふざけてるときじゃっ!」

「いいからいいから、その袋の中身を先生の足元に投げるんじやよっ!」

「……ああっ?」

「早く早く♪」

「……ちっ!」

明久と雄二の前に立ち、投げるように急かす真宵。真宵はこんなでも女の子であるため、あまり強くは出れない雄二は、本当に……本当に仕方なく言う通りにすることにした。雄二は袋の中身を取り出し、こちらにあと10メートルまで近づいてきた鉄人の足元目掛けてぶん投げた。

「おっらあっ!」

…ビュンツ!

投げられた物体は一直線に鉄人の足元に向かい、そして……。

…べっちやああっ

「ぬおああっ!!?」

「「「「……………えっ?」」」」

「ニヨホホホッ! 成功じゃよっ♪」

驚き、絶句する一同とその中でより響く奇つ怪な笑い声。鉄人の足元に着弾した物体は一瞬で弾け、地面と鉄人の足を中心に何かの液体が広がった。……それは、ただの液体ではなかった。

「くっ?! な、なんだこ……っ?!? う、動かんっ!」

鉄人はそれを無視して足を動かそうとしたとき、自身の足がまったくして動かないことに気付く。いや……動いてはいるのだが、動かした反動で足が元に戻ってしまう。その原因であろう液体は、すぐに粘性の高いものとなっていたのだ。結果、鉄人はその場から離れられなくなってしまったのだった。

「……………おい、片瀬」

「おほんっ。あれは私が開発したネバネバ君6号じゃよっ!」

「何てもの作ってるのよ、あなた」

「イヤーここまで来るのに苦労したんじゃよ」

正気に戻った雄二が尋ねると、嬉々として話す真宵。呆れた声はつみきだ。

「……………つ雄二! 今だよっ!」

「……なんか釈然としないが、まあいい。行くぞ、お前ら！」

「あ、おい待て貴様らっ!!? く、そ…っ！ このおっ!!」

雄二の声に、笑い声とため息、戸惑いをそれぞれ浮かべながら校門をくぐって行く。それを黙って見過ごすわけにはいかず、何とかして抜け出そうと鉄人はもがくも、足はいつこうに抜ける気配がなかった。

そんな鉄人に、最後尾にいた真宵が声をかけた。

「あ、先生っ！ それは30分で固まって脆くなるから、それまで頑張つてにゃん♪」

「ま、待てっ!! 片瀬ええええっ!!」

それから30分後、無事抜け出せた鉄人……西村先生。その夜は、普段飲まない酒を飲んでいたと言う。



「…ふうつ、笑った笑った！」

「真宵さん、いいんですか？ あんなことして？」

「私はあれを作っただけじゃよ。使ったのは雄二さんじゃ！」

「おいテメエっ！ だからわざわざ俺に投げさせたのかっ!？」

「ふえっふえっふえ」

「はっ、バカだね雄二は！ かつての神童が聞いて呆れるよ！」

「なんだとっ!？」

「もう！ ケンカはダメですううっ」

校門を出た後、伊御とつみきを先頭に騒がしく歩いていく。

「嫌いわね」

「でも、悪くないだろ。つみき？」

「……ふい」

「……クス」

…なでこなでこ

「……（てれり／＼／＼）」

「「「ニヤニヤニヨニヨ」」」

「………っ!!？」

プロローグ2

「えっ!? 今日伊御休みなのっ!?」

「ああ。どうやら風邪を拗らせたらしい。熱も高いから今日は家で養生するそうだ」

「そうなんだ……。今日は振り分け試験なのに、可哀想だね」

「確かに。試験欠席は問答無用でFクラス行きだ。アイツならAクラスも夢じゃ無いだろうに……」

雄二は残念そうにそう言って、手元の参考書に目線を落としました。

昨日もギリギリまで勉強……。していたつもりが、気付けばゲーム機のコントローラーを手に握り朝を迎えた僕。朝をカッブ麺4分の1で済ませて、遅刻ギリギリのため学校まで全力疾走して来た僕に悪友が教えてくれた情報は、本当に残念なものだった。

伊御……音無 伊御は、クラスは違うけど、僕がこの学校で初めてできた友人だ。人一倍親切で、人一倍優しく、人一倍お人好しな伊御は、バカな僕をいつも助けてくれた恩人でもある。最近では、鉄人から逃げるのを助けてくれたり、今回の大事なテスト勉強も一緒にやってくれたり、恩は増すばかりだ。

そんな恩人、兼友人がこの大事なテスト……。振り分け試験を休んでしまったことは、

僕に少くない衝撃を与えた。

2年に進学する時にAからFにクラス分けを行うのだが、振り分け試験の点数がそのクラス分けに反映される。雄二も言ったけど、このテストを受けなければ理由は何であらうとFクラス……底辺クラス行きになってしまうのだ。

僕はテストを受ける前から憂鬱になってしまったが、テスト勉強を見てくれた伊御の為にも頑張ろう（本当にそう思っていたらテスト前日にゲームしねーよ：読者の声）と気合を入れ、自分の席に向かおうとして……気付く。

「……ねえ雄二」

「あ？　なんだよ？」

僕の呼ぶ声に返事はすれど、あいも変わらず参考書を見続けている雄二。そんな雄二に僕は今思ったことを告げた。

「……御庭さん、大丈夫なの？」

「……大丈夫だと思うのか？」

「……………」

「……………」

「伊御、やらかしたな」

僕は、風邪で休んだあんちくしように想いを寄せる女の子が沈んでいる姿を想像し

た。



「あ、あのう……、つみきさん？」

「つみきさん、タイタニツクなんてメじゃないくらい沈んでるんじゃないよ……」

「……………うーっ」

「ああっ、泣かないでくださいつみきさんっ！」

ワタシの目の前では現在、机に突っ伏し、目尻に涙を溜めているつみきさんを姫つちが慰めてるんじゃないが、これはダメじゃねえ。つみきさんのネコミミがへにやつてる幻覚が見えるんじゃないよ。

原因は伊御さんが風邪で休んでしまったこと。今回の試験は2年に上がる時のクラス決めに重要なもので、点数によってクラスが決まるんじゃないが、伊御さんをつみきさんならAクラス……最上クラスは間違いないはずだったんじゃない。

だけど伊御さんは風邪で学校を休んでしまった。この試験は理由がなんであれ、受けなければ問答無用でFクラス行き決定じゃ。伊御さんは別にFクラスでもいいって爽

やかに笑いながら言うんじやろうが……そういう問題じゃないんじやよ。

伊御さんが大好きで大好きで仕方ないつみきさんは、次も伊御さんと同じクラスになる為に伊御さんと一緒に勉強してAクラスになるよう頑張ってたんじや。だけどその頑張りも水の泡、儚い夢と散ってしまたんじやよ。

……んー、実は伊御さんと同じクラスになる方法はいくつかある……んじやけど。例えば無回答で出す、仮病を使って同じく休むなんかあるねん。だけど無回答で出すと、今まで一緒に勉強してきた伊御さんが疑問に思つて、そこからつみきさんが伊御さんラブラブチュッチュツなのバレる（ニブチン伊御さんなら気付かない可能性大）かもしれないし、次の仮病は朝一番にワタシの後頭部を狙つた一撃を見舞つたところをクラスのみんなが見てる為ほぼ無理。

まあ、ツンツンデレデレなつみきさんはワタシが何か案を出しても素直に頷かないだろうし、親しいワタシ達ならともかく、他の人に伊御さんが好きなことを知られたくないだろうから、余計なこととはしたくないだろうしねー。

……まっ、伊御さんとつみきさんの関係は公然のヒミツとなつてるんじやけど☆
知らぬは本人達ばかりってねん。

しかーしっ！ そんなつみきさんとの付き合いももう一年、ワタシにかかればつみきさんの密かな（バレバレ）願いを叶えてあげられんじやよっ！ 要は伊御さんと周囲に

バレないようにすること。さりげなく、偶然、何かのミスで同じクラスになること。なーらこれじゃねん。

「つみきさん、つみきさん」

「……………ぐすつ、あによう」

「……………伊御さんと同じクラスになりたい？」（コソツ

「……………別に」(プイッ

つみきさんは案の定、素直になれずにワタシから顔を背けた。しかしつみきさん？

ネコミミはワタシに意識を集中させてますよ？

「つみきさん、実は誰にも……………それこそセンセーにさえバレずに伊御さんと同じクラスになれる方法があるんじゃないけど……………興味ない？」

「……………」

「そ、そのような方法が？」

ワタシの言葉に、つみきさんはワタシの顔をチラチラ見ながら、姫つちは興味津々にワタシの言葉を待ってる。うむうむっ、そんなに聞きたいなら話してしんぜよう！

「つみきさん、まず聞きたいんじゃないが……………つみきさんはFクラスでもいいのん？」

「……………別に、どこでも勉強はできるもの」

つみきさささ、設備の有無は重要だと思っうんじゃないけど……………素直じゃないねっ☆

「も、もしかしわざと点数を落とすんですか？ それじゃあ、バレちゃいますよ？」

「チツチツチ、姫っちはまだまだじゃねー。んならつみきさんはFクラスでも問題ない、と」

「……それがなんなのよ」

「えっとねー……………」

ワタシは自分の考えを話し、つみきさんはそれを実行した。



昨日の夜から続く熱がどれほど下がったか確認するために、体温計で体温を測っているが、どうだろうか？ ……ん、測り終わったかな。

「……ゴホツ、39度2分。熱が下がらないな」

ベッドに横になりながら測った体温は、朝測った時とほとんど変わらなかった。

体温計を横の机に置き、目覚ましを確認すると16時40分。今日の試験はもう終わってる時間だ。そのことのためにため息をつき、仕方ないかなと苦笑して布団を被り直した。

今日の試験は次の学年のクラスを決める大事なもので、俺も本当は行きたかったが、

昨日夜から何かと面倒を見てくれたみいさんから絶対安静を言い渡された。今日の朝を振り返ると……。

……

……

……

『……あの、みいごさん。俺は大丈夫なので』

『ダメよ伊御くん。寝ていなさい』（ニコニコ

『……いや、でも』

『ダメよ伊御くん。寝ていなさい』（ニコニコ

『……今日は大事なしけ』『ダメよ伊御くん。寝ていなさい』（ニコニコ……ハイ』

……

……

……

「……最後の方は怒ってたな。笑顔だったけど」

あの人にはどうにも頭が上がらない。そのことに少し苦い思いはするけど、自分をあそこまで心配してくれることに感謝の思いが圧倒的に優っている。ただでさえ普段から両親がいないので、その代わりに色々気にかけてくれているのだ。これで文句を言う

ほど俺は馬鹿じゃない。けれど……。

「つみきに、悪いことした……な」

他の女の子達より一回り小さくいじっぱりな女の子を思い浮かべ、申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

ここ最近、ずっと試験勉強を一緒にしてきて、俺の勉強をつみきに見てもらったりしていたのだ。そのおかげで、ギリギリＡクラスにいけるかどうかだったのが、Ａクラスはほとんど大丈夫だろうというところまで学力を上げることが出来た。

つみきが自分の勉強を置いてまで教えてくれたものは発揮されることなく、俺はＦクラス行き。Ｆクラスに行くこと自体は全然大丈夫なのだが、ただつみきに対する罪悪感。この感情が俺の胸にチクチク刺さった。

「ゴホツゴホツ………今度、何かお詫びしないな」

俺はせめて自分ができる感謝の気持ちと謝罪の気持ちを伝えるため、言葉とともに送るものを考えながら眠りにつこうとした時、家のインターホンがなった。

「……ん、みいこさん………はちぼちがあるから、榊かな？」

俺は来客を予想しながら汗ばんだ重い身体を起こし、玄関に向かった。

「………はい、今開けます。……あれ、つみき？」

「………こんにちは、伊御」

しかし、来客は俺の予想と違って、今さつきまで頭に思い浮かべていた女の子……つみきだった。

とりあえず玄関で立ち話もなんなので、とうかつみきが俺を心配してくれて、早く寝るように言ったのでつみきを家の上らせて俺の部屋に入れた。

俺はベッドに横になり、つみきは俺の頭の横にぺたんと腰を下ろした。

「大丈夫、伊御？」

「ああ、大丈夫……じゃないけど、寝ていれば治るから心配ないよ」

「そう。……えっと、ごめんね？ 連絡もせずに来て。携帯で起こしたらいけないと思つたの。ここに来たのも寝ていたらそれはそれで良かったからで、えっと……あのっ」

「……ん、別にいいよ。来てくれてありがとう、つみき」

俺は少しワタワタしてるつみきにありがどうの気持ちを込めて、ベッドから手を伸ばしゆつくり頭を撫でる。

「~~~~~っ／／／／／ そつ、それならよかつたわっ」（プイッ

下手をすれば熱がある俺よりも顔を赤くして頭を撫でられるつみきに、微笑ましい気持ちになりながらもつみきの頭から手を退ける。

「あつ」

「……? どうかした、つみき?」

「っ!? にやつ、にやにやにやんでもにやいわっ!」

「……そつか。ゴホツゴホツ」

「っ! ごめんにやなさい、大きな声出して」

ああ、つみきは悪くないのに気を使わせてしまった。つみきは申し訳なさからネコミミをへにやらせた。その状態でつみきはそばにあった水差しからコップに水を入れて、俺を優しく起こしてコップを渡してくれた。

「……んっ、んっ……はあ、ありがとうつみき。でもつみきのせいじゃないから、気にしないで」

「でもっ」

「……それに、謝らなければいけないのは俺の方だよ」
「?」

俺は残りの水もゆっくりと、けど一気に飲み干し、横の机に置いた。そしてまたゆっくりとベッドに横になり、不思議そうにしているつみきと話を続ける。

「……せつかくつみきが勉強を教えてくださいましたのに、ゴホツ……風邪を拗らせて台無しにしちゃったんだから」

「伊御……」

つみきを目の前にしているからだろうか、胸をチクチクと刺していた罪悪感はだんだんと膨れ上がる。けれど、つみきはそんな俺に向かって恥ずかしげな笑顔を浮かべながら首を横に振った。

「……伊御、私は気にしてないわ」

「つみき……。でも……」

「……………わ、私は……その……………から」

「……………？ つみき？」

最後の方が声が小さく聞こえなかったが、つみきは深呼吸を数回、その後に俺を見ながら小さな口を開いて言葉を綴った。

「……私は、伊御と勉強ができて……楽しかった、からっ」

「つみき……」

「だっ、だからいいのっ」(プイッ)

つみきがかもじもじしながら、ハニカミながら綴った言葉に……俺の胸を刺していた罪悪感は溶けて消え、暖かいものが胸をゆっくりと満たしていった。

俺は自分を許してくれて、罪悪感を溶かしてくれた恥ずかしがりなネコに感謝の気持ちを伝える。

「……………ありがとう、つみき」(ナデナデ)

「……………／＼／＼／＼／（てれてれ

俺は照れてこつちを見てくれないつみきの頭を撫でてあげた。

それから俺が睡魔に襲われるまで、少しだけつみきと話をしながら過ごした。

【おまけ】

「……………つみきさん、大丈夫でしょうか？」

「だいじよだいじよぶっ！ 今頃風邪を引いてる伊御さんと同じぐらい顔を真っ赤にさせてるじやろうしねえ」

「だなっ！ もしものために伊御の家の鍵も渡してあるし、寝ている伊御にチュウも可能だっ!!」

「チュウ、チュウっ／＼／＼／!!? ……ぷはあっ！」

「おおっ！ 姫の愛が鼻からっ!!」

「けどナイスアシストだよ真宵さんっ。これでまた一步2人の仲は進展だねっ！」

「ああ、その通りだな。……これでこつちもやり易くなる」(ボソツ

「じやろじやろっ！ もっと褒めてえーん！……ん？ なんかいっただかにや、雄二さんっ！」

「いや、何も？ さて、さっさとはちぼちに行こうぜ。みいこさんが試験が終わった祝いを用意してくれてるんだろ？」

「「おーっ！」」

「チュ、チュー……／＼／＼／＼／＼ ぷはっ！」

「……誰か春野の血を止めてやれ」

一卷

第1話

春の暖かな日差しを浴びながら、この一年で歩き慣れた通学路を歩く。

一ヶ月前の振り分け試験を風邪で休み、みんなにも心配を掛けてしまったけど、その数日後には風邪も治り、春休みはいつものみんなと賑やかに過ごした。

中でも印象に残っているのは、いつか雄二が言った「俺と明久で何か奢る」というのが実施され、みんな焼肉を食べにいった時のことだ。焼肉自体は食べ放題で、神や真宵なんかは遠慮など一切なく食べていたけど、みんなで騒がしくも楽しい時間だった。……そこまではよかった。

それからもみんな（特に男連中）でゲームなんかしてほぼ毎日遊んでいたのだが、……明久が日に日にやつれていったのだ。5日も経つ頃には、顔はげっそりと痩けて身体はフラフラと不安定に揺れていた。さすがにおかしいとみんなで問い詰めると、本当に水と調味料で過ごしていたらしい。そういうことで急遽俺と神主催の鍋パーティーを決行し、つみきたちも呼んで明久に食べさせたわけだ。……明久は滝のような涙を流してたよ。

そんなこんなで騒がしくも楽しく過ごした春休みも明けて、高校2年目の進学を迎えた。今日がその第一日目だ。

そうして賑やかだった過去に想い馳せていると、俺の視線の先にバス停の側で佇むつみきの姿が見えた。つみきも気付いたみたいで、少しおどおどしながらも小さく手を振ってくれた。そんな人見知りな子猫みたいな姿に少しほっこりしながらも俺は手を振り返し、小走りでつみきの元に向かった。

「おはよう、つみき」

「お、おはよう。伊（ぼふっ）御っ!？」

俺は朝の挨拶を交わすついでに、ほっこりした気持ちをもそのままにつみきの頭を優しく撫でる。その拍子に、つみきの頭からびこんつとネコミミが出てくる。

「い、伊御っ／＼／＼／＼ こ、これは……?」

「ん? 嫌だったかい?」

「べっ、別にっ。す、好きにすればいいわ／＼／＼／＼ (びこびこっ)

「そっか」

「……………んにい／＼／＼／＼ (びこびこびこっ)

「……………ふふっ」

つみきが気持ちよさそうに鳴くなか、俺はつみきが満足するまで撫でてあげた。



それから少しして、恥ずかしさから俺の手に齧り付いたつみきを連れて学校に向かった。今は途中で合流した榊や真宵、姫の5人で、桜の花びらが舞う文月学園の坂を歩いていた。

「さてはて、皆様の振り分け試験の結果はどうなんたんじやろうかねえ」

「そ、そうですね。今からすごく緊張しますう」

「姫ならDかCは固いから、そんなに緊張しなくても大丈夫よ」

「は、はひい」

「榊、お前はワザとFクラスにいけるようにしたんだっただか？」

「おうっ！ 伊御もいるし、中途半端なEクラスつてももなんだしな」

「榊の頭ならそんなことしなくても自動的にFクラスでしょう」

「フツ。俺様の神の如き頭脳に不可能はないぜっ！」

「そうじゃねえ。『紙』の如き頭脳じゃねっ☆」

「ペラペラだな」

「かみ違いっ!？」

そんなことを話しながら、文月学園の校門を潜る。校門から玄関までの道のりにも桜が咲き誇り、新入生や在学生の新しい一年を祝っている。そうして玄関前に着くと、生徒のみんなから鉄人と恐れられる西村先生がみんなに紙を配っていた。

「おつ、あれが振り分け試験の結果か？」

「そうみたいだな、配られた紙を見て回りが一喜一憂してる」

「どうします？ 並びますか？」

「んー、少し待って落ち着いてからみんなでもらおうぜ」

「その方がよさそうね」

「んじゃあしばらくか待機じゃ！」

そうして待つことしばらく、周りの人も少なくなり、俺たちも西村先生から紙をもらうために玄関前に歩き出した。

「うん？ ……ああ、お前たちか。おはよう」

「おはようございますっ。にしむつらセツンセー！」

「おはようございます」

「うむ。さて、早速お前たちのクラスが書かれた紙を渡そう。まずは……音無」

「はい」

俺は西村先生から紙を受け取るが、その際に西村先生は顔をしかめて俺に言葉をかけ

てくれた。

「音無、今回は残念だったな。お前ならばAクラスにも行けただろう」

「いえ、体調管理をきちんとしなかった俺のせいですから。それにFクラスもわるくないかな、と」

「むうう、そうか。お前が気にしてないのならいいんだがな。……今年のFクラスは問題児だらけだ」(ボソツ)

「? 何か言いましたか?」

「いいや、何も。次からは体調管理もしっかりするように、それもまた大事なことだからな」

「はい、ありがとうございます」

そう言つて俺はもらった紙を開くと、そこには『F』の文字が。俺はそれに苦笑しながらもポケットに紙をしまった。

「次は……戌井、お前だ」

「ういつすつ!」

呼ばれた榊が紙をもらい、意気揚々と紙を開くと……なぜか震え出した。そして次の瞬間、榊の絶叫が辺りに響いた。

「なぜだあああ……っつっ!!?」

「うおっ。どうした榊?」

「どうしましたっ、榊くん?」

俺と姫の心配を受け、続けて榊は叫んだ。

「な、なんで……。なんで“E”クラスなんだよおー!?」

そう叫んだ榊は膝から崩れ落ちた。そんな榊に西村先生は呆れたようにため息をついた。

「貴様はなぜがっかりしているんだ。“ギリギリ” Fクラスではなかったのだから喜ぶべきだろうに」

「……ギリギリ?」

西村先生の言葉に疑問を持ったつみきが先生に尋ねた。

「ああ。戌井はあと少し点数が足りなかったら、Fクラスの最高成績者となっていただろう。つまりはEクラスでは最低成績者だな」

「それはまた……」

「(ことごとく期待を裏切らないんじやよ)」

それを聞いた俺たちは、榊の“いつもの”が発動したことになんとなく生暖かい視線を崩れ落ちる榊に送った。

「ちなみにじやが先生。Fクラスの最高成績者は誰なんじや?」

「……はあ。坂本だ」

「あれま〜」

「……う、うう。何故だ雄二つ、何故なんだっ!？」

別に雄二のせいで榊がFクラスに行けなかったわけではないのだが、まあ、そういう言い方をされれば雄二のせいに思えなくもないのが不思議だ。

それにしても、まさかの身内がFクラスの最高成績者だった。というかあいつならEクラスは余裕だろうに、何してるんだ？

西村先生はそんな榊を無視して、渡す紙を探して次の人を呼んだ。

「片瀬」

「ういいうい」

真宵も紙をもらって、気兼ねなく紙を開く。

「むーん、やっぱりFクラスじゃったかあ」

「なんの面白みもないわね」

「面白さもFクラスか」

「それなら榊はまだマシね」

「勉強ができないことより傷つくんじやよっ!？」

真宵をつみきと2人でいじり、西村先生が次の人を呼ぶのを待つ。

次に呼ばれたのは姫だった。

「……春野、次はお前なんだが……」

「はっ、はひっ!」

「? どうしたんですか、西村先生?」

何故か歯切れの悪い西村先生に俺が尋ねると、先生はゆっくりとため息をつきながら口を開いた。

「……お前は試験どうこうのまえに、落ち着くことが大事だぞ」

「ほえ?」

不思議そうな顔をして紙を受け取った姫は、そのまま流れで紙を開く。するとそこには『F』の文字が!

「「「え、F——っ?!」」」

「「「ええええええっ?!」」」

ようやく立ち直った榊も合わせた5人の声が玄関前に響いた。この驚愕の事実真相と榊が西村先生に詰め寄る。

「に、西村先生っ!?! これはどういことじゃよっ!?!」

「姫がFってなんかの間違いだろっ!?!」

2人ほどではないが、俺も驚いている。何かしらのミスがなければ姫ならDかCは固

いはずだ。……ん？ミス？

「お前たちの疑問はもつともだが落ち着け。これは間違いでなくてもなんでもなく事実だ。……春野、お前が何故Fクラスかという……」

「「「ゴクリ」」」

俺たちは先生の言葉を固唾を飲んで待つ。そして聞かされた真実は……。

「……ほとんどのテストにおいて、回答がひとつづつズレていたため……数学以外の点数が一桁であったこと。これが原因だ」

「っだーっ！」「ずこーっ！」

「姫……」

「あううう。やってしまいましたあ……」

西村先生の言葉に榊と真宵はづっこけ、俺とつみきは土壇場に弱い気弱な姫に憐憫の視線を送った。

そうか、数学は他の科目と違って問題と空欄の大きさが各問題で違うから間違いないのか。それ以外の科目でも問題によって違うのだろうけど、数学ほどじゃない。天然な姫は不思議に思えどそのまま書いてしまったのだろう。……可哀想すぎる。

「姫、泣かないで」（なでなで

「そうじゃよ姫っち！……これでワタシたちはみんな一緒じゃし」（ボソツ

「ぐすつ、ひぐつ……ありがとうございまずつ、お二人とも（ぐしゅぐしゅ

「……春野、確認したが、解答欄がズレていなければお前はCクラスだった。勉強も大事だが、落ち着くことはどんな時でも大事だぞ。緊張するなどは言わんが、出来るだけ慣れるようにな」

「は、はひい……ぐすつ」

先生もいたたまれなくなつたのか、他のみんなと違い幾らか優しい声で姫に声をかけ、また紙を探し始めた。

「にしてもビックリしたな伊御」

「あ、ああ。けど、姫らしいといえば姫らしい」

「ナハハ、確かに。けど、お前はもつと驚くと思うぞ？」

「？ それはどういうことだ？」

「まっ、それはお楽しみについてことで」

「？」

榊の言葉に疑問が残るが、答える気は無いらしい。なら、言葉通り楽しみにするとしよう。

つみきと真宵のおかげでだいぶ落ち着いた頃、先生が最後の1人を呼んだ。

「最後は御庭だな。……はああ、全く。お前たちときたら本当に……」

「……………」

先生がそういうということは、つみきも悪かったのだらうか？ 俺は気になって、つみきのそばに立って一緒に見ることにした。そしてつみきが開いた紙に書かれていたクラスは……………『F』。

「えっ？」

「……………」(ネコミミぴいびい)

「うっしっしっし」

「あつ、えつとお……………あのっ！ ど、ドンマイですつつみきさん！」

「ええ、残念だわ」(ネコミミぴっこぴい)

俺は驚きで言葉が出なかった。だけどそんな俺をよそに、他のみんなはそれぞれつみきに声をかけるが、俺ほど驚いてるようには見えなかった。俺も驚きから立ち直り、つみきに声をかける。

「えつと……………つみき？ どうして？」

「さあ、なんでかしら？ 西村先生、どうして私はFクラスなのかしら？」

「……………今回のテストで各科目一つづつ、〃無記名〃のものが存在した。全テストを確認すると……………御庭、お前のテストだけ存在しなかった。よって、この無記名は御庭のものだと判断し、テストの点数はすべて0点。御庭はFクラスとなった」

「そんな……」

西村先生の言葉に、納得したくない自分がいた。理由を聞けば姫と同じ勉強以外のうっかりミス。けれど、俺はつみきがどれだけ頑張っていたか知っている。そんな俺からすれば、本当に悔しくてたまらない。

俺がつみきの結果にがっかりしていると、俺の袖を引く感覚があった。そちらを見ると、俺を見上げるつみきがいた。

「……伊御、気にしないで」

「けどつみき、つみきはあるなりに頑張っていたのに……」

「いいの」

「だけど……」

「……から」

「……？」

「……い、伊御が一緒だから……いいのっ／＼／＼（プイツ

「つみき……」

つみきの言葉に、本当に気にしていないこと。それと俺と一緒にいれることが嬉しいということが伝わってきた。それは、俺の胸を暖かいもので満たしてくれていた。

俺は今も恥ずかしかってこっちを見てくれないつみきの頭に手を置き、優しく撫でて

あげる。

「……俺も、同じクラスになれて嬉しいよ。つみき」(にっこりなでなで

「……………っ／＼／＼／＼」(ぴこぴこてれてれ

「ニヤニヤ」(ニヨニヨ

「っ、つみきさああんっ／＼／＼／＼」(鼻血たらたら

そうして、一瞬にして甘々空間と化した玄関前。西村先生は深いため息をつき、周りにいた他の人たちは一様に生暖かい視線を浮かべニヨニヨしていた。



「御庭、少し話があるから残れ」

「……………？ はい」

あれからしばらくして、恥ずかしくなつたつみきが周りを威嚇し散らした後、俺たちはそれぞれの教室(ほとんどFクラス)に行こうとした時、西村先生がつみきに声をかけた。

「つみき、靴箱で待ってるよ」

「ん」

つみきに一声かけて、玄関を潜った。



「御庭。俺は一教師である以前に一人の大人として、生徒たちが将来立派になれるように勉強や礼儀など、厳しく指導することになっている」

「……はい」

「だから今回の件、俺はお前を厳しく叱り、しっかりと罰を与えなければならんだろう。……なぜかは、お前が一番よく分かっているな？」

「……っ」

「………しかし」

「……っ？」

「俺は勉強や礼儀などと同様に、学校での普段の生活……所謂『青春』と呼ばれるものも大事にしなければならぬと考えている」

「………」

「人生でわずか数年しかない時期だ。その間に様々な経験を重ね、時には喧嘩をし、時には力を合わせ、そして引かれ合い、そして離れ合う。楽しいことも、苦しいことも、嬉し

いことも、悲しいこともあるだろう。しかしそれらはすべて無駄ではない。それらを学校で学び、感じることで人はまた成長するのだ」

「……………」

「むっ、いかな。話が長くなってしまった。……んんっ。つまり俺がいたいことはだ……恋愛も大事だが、それを理由に他をないがしろにはするな、ということだ」

「っ!!?／／／／／ にやっ、わ、私は違っ!!?／／／／／」

「俺からはそれだけだ。では、行ってよし」

「／／／／／っ／／／／／!! うにや／／／／／っ!!!」

ダダダダダダダッ

「……………はあ。全く、若いな」

【おまけ】

「ん？ ああつみき、どうだった、つとと！」

「／／／／／っ／／／／／!!」（ぐりぐりぐりっ）

「ど、どしたんじやつみきさん!? いきなり伊御さんの胸板に顔をぐりぐりとっ!!」

「は、はううっ！ つみきさん可愛いですう／／／／／」

「……あー。鉄人って名前に似合わず聡いところあるから、バレちったかなあ」
「あー。なーる」

「よしよし。つみき、大丈夫だぞ〜」（なでなでぎゅっ

「うううううっ／＼／＼／＼ フツカーーーーッ!!」（がぶがぶっ

「うおおっ！ あっ、こらつみき。痛い痛い」

第2話

一時は大変ひもじい思いをし、改めて友人の優しさを噛み締めた春休み。そんな春休みも明けて新学期を迎えた。前日（今日）のゲームが祟つて、登校初日から桜がひらひらと舞う中をダッシュで登校。けれどその甲斐もなく遅刻してしまった。

そんな時に限って文月学園の玄関前でまさかの鉄人とエンカウント。さらには鉄人からの言葉に騙され、「やっぱ僕って言うほど馬鹿じゃないっ!？」と言う期待からのまさかの馬鹿確定宣告。……泣いていいかな？『F』と書かれた紙がそれを証明してるかのようで、余計に涙を誘った。朝から泣きつ面蹴つたりである。

目から流れる汗をそつと拭い、校内に入ると、まずはAクラスが見えたので中を覗いてみたが……なんだアレ、高級ホテルか何かかな？　そこでAクラスの最高成績者の霧島さんを見たが、かなり美人な人だった。あんなに美人なのに、同性愛者という噂があるというのは残念だと思う。

そんなこんなでやっとFクラスにたどり着いたのだけど……なにこのボロ小屋、Aクラスとの格差がヒドイ。けれど、これからしばらくはここで過ごすのだ、そう文句を言つてられない。

僕は新学期初日から遅刻してしまったので、せめて最初の印象は良くしようと思つた。たつぷりに教室に入つたら、突然の罵倒。「なんだこの先生はっ!」と思つたら、教壇に立っていたのは悪友の雄二だった。先生が遅れているので、Fクラスの最高成績者としてクラスメイトを教壇から見ているらしい。

Fクラスの最高成績者を器用に狙つて手に入れた雄二とそこで話していると、先生がやつて来たので適当な席に……なんで机が卓袱台なんだ? なんで畳なんだ? なんで座布団なんだ?! いくらなんでもこれはないだらう!

思うことは多くあるけど、とりあえずは座つて先生の話を聞いた。先生が不備がないかと尋ねたら、数人申し出た……けど、「我慢してください」や「自分で直してください」など……ヤバイ、ここ相当ヤバイよっ!

そして今は自己紹介の時間だ。早速僕の知っている生徒が立ち上がった。

「木下 秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

秀吉は僕の友人の1人で、真宵さんと似た話し方をしている。だけどこつちの方はなんか武士っぽい話し方をしている。それも特徴的なところではあるが、何よりも特徴的なところは……見た目がもう、ね? 女の子にしか見えなないんだ。だが、騙されるな!

秀吉はレッキとした男だ。

「……………土屋 康太」

次に立ち上がったの生徒も僕の友人だった。口数が少なく、大人しそうな外見だが、運動神経は僕と雄二並み。さらには男子生徒から「あること」に関して一目も二目も置かれている男だ。

次の人は知らない人で、また男子。やはりFクラスともなると女子はいないのかなあ？

「……です。海外のドイツ育ちで、日本語は会話出来るけど読み書きは苦手です。あつ、英語もね？ 趣味は……」

おつ、これは女子の声だ。考え事をしているといつの間にか数人自己紹介を終えていたらし……。

「趣味は吉井 明久を殴ることです☆」

誰だっ?! 恐ろしくピンポイントかつ危険な趣味を持つ奴はっ！

「ハロハロー、吉井。今年もよろしくねー」

活発そうな笑顔を向けて僕に手を振ってくる女子生徒は、島田 美波さん。ポニーテールがよく似合う子だ。一年の時におなじクラスだったんだけど、最初は避けられてたなあ。あれ？ いつからよく話すようになったんだっけ？

「どども皆さん、私は片瀬 真宵！ よろしくじゃよー」

あつ、また人が変わってる。今度は真宵さんだな、いつも通り元気いっぱいだ……つ

てちよつと待て、ここまで僕の知り合いだらけなんておかしくない？ まさか類は友を呼ぶというやつでは……馬鹿なっ!? 僕がこのメンツと同類だなんてっ!

「は、はははじめましてっ! 春野 姫といますっ。あう、えつと……うう、よろしくお願いします、ですう」

次の人も知っている……人おっ!?! な、なんで春野さんがこんな底辺の掃き溜めになっ!? 春野さんならCクラスでもおかしくないはずなのに、何かあったのかな?

「御庭 つみき。よろしく」

僕の衝撃が収まる前に次の人が。今度も女子生徒で、またしても僕の知ってる人。うん、よかつた。ちゃんとFクラスになれたんだね、御庭さん。つてことは……。

「音無 伊御です。趣味は……ゲームと料理、かな。これから一年、よろしくお願いします」

うん、やつぱり伊御は御庭さん近くにいたね。あの2人はセットだよなー、微笑ましい。つてうおっ! なんか魚をロツクオンしてる狩人のようなネコの視線がつ!?

……御庭さんか、なんとなしに人の心を読まないでほしい。本当に素直じゃないんだからなあ。

それからは僕の知ってる人もおらず、次々と色んな人が自己紹介をしていく。そしてやつと僕の番が回って来た。こういうものは最初が肝心。よし、軽いジョークも混ぜて

自己紹介といこう。僕は立ち上がり、明るい感じで自己紹介をする。

「……コホン。えつと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って『『『ダーアアーリーー
ンツ!!』』』いえやっぱ結構です忘れてくださいこれからよろしくお願いします」

このクラスの奴らは馬鹿なのかつ!? まさかジョークを間に受けるなんてつ! ヤ
バい、吐き気が止まらない。……おい、そのじやよ女子とニブチンつ! 笑いを押し
殺すなっ!!

僕の不快感をよそに、自己紹介は続いていく。そんな僕の不快感も無くなり、いい加
減眠くなって来た頃、いきなり教室のドアがガラリと開いた。そこには胸に手を当てて
息を整えている女子生徒の姿が見えた。

「あのつ、遅れてつ、すいま、せん……」

「『『『えっ?』』』」

しんつ、と静まり返る教室。そして少しずつ騒がしくなっていくあたりで、担任の
福原先生がその女子生徒に話しかけた。

「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので、姫路さんをお願いします」

「は、はい! あの、姫路 瑞希といいます。よろしくお願いします」

小柄な体をさらに縮めて恐縮する姫路さん。彼女の容姿は一般的に見ても絶対に美
少女と言われるもので、その今のもじもじとしている姿からも保護欲が次から次へと湧

いてくる。しかし、このクラスのみんなはそんなことに驚いたんじゃない。

「はいっ！ 質問です！」

「あ、はいっ。なんですか？」

「なんでここにいますか？」

そう。彼女は容姿もさることながら、学力も他の比じゃないんだ。入学してからテストでは学年一桁をキープしている。学年中の誰もが姫路さんはAクラスだと思ってるだろう。

「そ、その……。振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました……」

その言葉に、クラスのみんなは「ああ、なるほど」と納得した。伊御が休んだり、御庭さんが無記名で出したりと強制的にFクラスに行かされるパターンには、試験の途中退出もあるんだ。

「そう言えば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに」

「ああ、化学だろ？ アレは難しかった」

「俺は弟が事故に遭っ「黙れ一人っ子」おいつ、最後まで言わせろやつ！」

「俺も妹が熱で「紹介してください、お義兄様！」失せる野郎どもっ！ てめーらなんかに逢わすかつ！」

「ワタシは友人の風邪か気になって……」

「俺を言い訳にするんじゃない、面白さFクラス」

「もうやめるんじゃないよそのネタっ!？」

姫路さんの言葉を皮切りに言い訳をしだす野郎ども。……ここは想像以上に馬鹿だらけだ。

「そ、それではよろしくお願いしますっ!」

そんな空気にいたたまれなくなつた姫路さんは僕と雄二の隣の開いている卓袱台に座ろうとする。その顔は少し不安そうだ。……そうだ! 何事もコツコツと。ここで声をかけ、僕が少しでもその不安を取り除くことで姫路さんの僕への好感度は上昇。これで2人の物語が始まる!

「あのさ、姫「姫路」(この元神童(笑)っ! よくも遮つてくれたなっ!)」

「は、はいっ。なんですか? えーつと……」

「坂本だ、坂本 雄二。よろしく頼む」

「あ、姫路です。よろしくお願いします」

どうしてくれるんだ! 『私とあなたの出会い、私を気にかけてくれたあなた』
が開始5秒で打ち切りになつちやつたじゃないかっ!

「ところで、姫路の体調は未だ悪いのか?」

「あ、それは僕も気になる」

と、先ほどの憎悪を仕舞い込み、2人の話に加わる。僕は振り分け試験の時、姫路さんの隣だったんだ。その時はとても具合が悪そうだったから、今も引きずってない心配だ。

それから僕がいたことに驚く姫路さんに雄二が僕に対して大変失礼なフオローをしたり、僕のことを好きな……ぐすつ、だ、男子がいるっていう半分冗談の暴露を聞かされた……。ねえ、雄二っ！ 残りの半分はっ!?

そんな話をしていると、少し大きな声で話しすぎたのだろう。福原先生が教卓を軽く叩いて僕達を注意した……瞬間、大きな音を立ててゴミ屑と化した教卓。……せめて先生が使う道具はまともなものにしようよ。

そのあと、先生が気まずそうに替えを用意してくると言っつて、足早に教室を出て行った。その様子に苦笑いをする姫路さんを見て、僕は思った。僕や雄二みたいに実力でここに来たならまだわかる。けど、姫路さんや伊御みたいな風邪や熱でいきなりFクラス行きはあんまりだ。

こうなつたら意地でもまともな設備にしたい。

「……雄二、ちよつといい？」

「ん？ なんだ？」

「(イヤイヤ)じゃ話にくいから、廊下で」

「別に構わんが」

「あと……伊御、ちよつと来てくれないかな？」

「……明久？ いいけど」

2人を連れて廊下に出る。その時、一瞬だけ姫路さんと目が合つて、御庭さんの獲物を見る目を見た……すぐに（伊御を）返しますんで。

「んで、話つてなんだ？ 伊御まで連れて来て」

「……何かあつたのか、明久？」

雄二は少し気怠げに、伊御は僕を見て少し真剣な表情を見せた。……ここなら人影もないし安心して話が出来そうだ。

「この教室についてなんだけど……」

「Fクラスか。想像以上に酷いもんだな」

「まあ、ね。さすがに腐りかけの畳に壊れかけの卓袱台、隙間風が吹く教室は予想できなかつたよ」

「Aクラスの設備は見た？」

「ああ、凄かつたな。あんな教室は他に見たことがない」

「そこいらのホテルより贅沢な感じだったな。……つみきもあんなミスをしなければあそこに行けたんだろうに、な」

……言えない。御庭さんが伊御と一緒にいたいがために無記名で提出したなんて、こんな悲しそうな顔をしている伊御には絶対に言えないっ！

僕は雄二と素早くアイコンタクトをとり、2人で絶対にバレないように隠し通そうと誓った。

「んんっ。そこで僕からの提案。折角2年生になったんだし、『試召戦争』をやってみない？」

『試召戦争』を、だど？」

「また急だな」

「うん。しかもAクラス相手に」

「……何が目的だ」

僕の言葉に、雄二の目が細くなる。どうやら警戒されているようだ。なんて最低なやつだ！友人を疑うなんて！

「いや、だつてあまりに酷い設備だから」

「嘘をつくな。全く勉強に興味がないお前が、今更勉強用の設備のためなどに戦争を起こすなんてあるはずないだろう」

うぐつ、相変わらず勘だけは元神童ながら妙にいいな。

「そ、そんなことないよ。興味がなければこんな学校に来るわけが……」

「明久がこの学校を選んだのは『試験校だからこそその学費の安さ』が理由じゃなかったか？」

「そうだな」

しまった！ 2人には僕がこの学校に来ている理由を話したことがあるんだった。な、何かないか！ 何かっ！ ……そうだ！

「い、伊御が可哀想だと思っただつ！ 確かに体調管理は大事かもしれないけど、風邪で休んだだけでFクラス行きはヒドイよ！ だから御庭さんはうぼああっ!!」

「ゆ、雄二っ!? なんで明久の鳩尾に膝蹴りを叩き込んだんだ!?」

「いやなに。素直に吐かないこいつにウンザリしてな！」

（お前の頭は本当に脳みそが詰まってんのかっ!? さつき隠し通すと決めたじゃねえかっ!）

（ゴホツ、ゲホツ……ご、ごめん！ ゴホツ）

確かに僕が悪かったけど、イキナリ膝蹴りは酷くないっ!?

「……ん？ 今つみきって……」

「伊御の聞き間違いだろう。なんでここで御庭が出て来るんだ？」

「(コクコクコクツ)」(あまりの痛さに声が出ない)

「そうか？ ……そうだな」

ふううう〜、なんとか誤魔化せたみたいだ。けど、それじゃあどう言い訳しよう。

「……はあー。姫路の為だろ」

ビクウツ！

お腹を抑えて猫背になっていた背筋が真っ直ぐに伸びる。

「(ど、どうしてそれをつ!?)」(痛みで声がまともに出ない

「ん? そうなのか?」

「そのようだと伊御。……本当にお前は単純だな。カマをかければすぐに引つかかる」

雄二は僕を楽しげに見ながら笑みを浮かべる。嵌められたつ！

「いや、さっきの言葉もあながち嘘ではなさそうだな。3対7で伊御の為もあるか?

もちろん伊御が3な」

「ふむ」

「(別にそんな理由じゃ……)」(痛みが引いて来てる

「はいはい。今更言い訳は必要ないからな」

「……明久、俺はついででも嬉しいよ。……健気だね」

「だから本当に違うってば!」(治った

やめろ、そんな微笑ましい目で僕を見るなつ！ そんなで目で見ていいのは伊御と御

庭さんだけだつ！ ……ダメだ、全然取り合ってくれない!

「気にするな。お前に言われるまでもなく、俺自身Aクラス相手に試召戦争をやるうと思っていたところだ」

「え？ どうして？ 雄二だって全然勉強なんかしてないよね？」

「また初耳だな」

「……世の中学力が全てじゃないって、そんな証明を試みたくてな」

「??？」

「……………」

どこか遠くを見ながらそんなことを話す雄二に疑問を浮かべる僕と静かに見つめる伊御。……なんだ？ らしくない。

「それに、Aクラスに勝つ作戦も思いついたしな」

「え、あ、そう……」

先ほどの憂いを帯びた感じが失せて、好戦的な表情を見せる雄二。おつ、らしくなった。

「……うん、いいね。やろうか、試召戦争」

「おつ、伊御も乗り気だな」

「ああ。明久の気持ちも嬉しいし、何よりつみきをAクラスの設備に入れてあげたいんだ」

「伊御……うんっ、やろうっ！」

伊御の優しげな笑顔に頷く僕。やれる、僕たちなら！

「おっと、先生が戻って来た。教室に入るぞ」

「うん」「ああ」

雄二に促されて僕達は教室に戻った。それから先生が気を取り直して自己紹介を続けさせた。特に問題も起こらず、また淡々とした自己紹介が続いた。

そして、最後に雄二の番が回って来た。先生に呼ばれ、返事をした後、ゆつくりと堂々とした足取りで教卓に向かっていく。その姿はFクラスの代表に相応しい貫禄のようなものが身を包んでいるようだった。

「Fクラス代表の坂本 雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

教卓に上がり、教室を見渡すように話す雄二。Fクラス代表といえどどんぐりの背比べ。他の人とは大して変わらない存在。

「さて、皆に一つ聞きたい」

クラスメイト一人一人目を合わせながら告げる。今このクラスの中で、雄二を見ていない人はいない。そして全員を見た後、雄二の視線は今度はこのクラスの設備ひとつひとつに目を向ける。

カビ臭い教室

腐りかけの畳

古く汚れた座布団

薄汚れた卓袱台

隙間風が吹く窓際

雄二の視線を追って見るこの教室の設備は本当に最悪だ。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが……」

雄二は一拍おいて、静かに告げる。

「……不満はないか？」

「……大ありじゃあ（にやあ）っ!!」「……」

ボロ小屋に響くFクラス生徒の魂の叫び。

「だろう？ 俺だつてこの状況は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

「そうだそうだ!」「いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ!」「改善を要求する!」「これじゃあ補強は出来ても流星に改造はできないにやあ!」「勝手に改造しな!」

堰を切ったかのように溢れる不満の数々。

「皆の意見はもつともだ。そこで……」

クラスメイトの反応に満足したのか、自信に満ちた不敵な笑顔を浮かべて、本題を言い放った。

「FクラスはAクラスに……『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う！」

Fクラス代表、坂本 雄二はこれから始まる戦争の引き金を引いた。

第3話

Fクラス代表からのいきなりのAクラスへの宣戦布告。予想通り、Fクラスの生徒は皆は戸惑いを浮かべてそれを口にしていく。

「勝てるわけではない」

「もし負けてこれ以上設備を落とされるなんて嫌だ」

「姫路さんがいたら何もいらぬ」

「春野さんを愛でたい」

そんな中、前にいたつみきが振り返り、俺に尋ねてきた。

「……伊御、さつき出ていったのはコレ？」

「ああ、そうだよつみき。明久からの提案で、なんでも俺と姫路さんの為にAクラスの設備にしたいんだって」

「そう……」

「まあ、ほとんどは姫路さんの為みたいだけどね」

「……………そう」

俺の言っていることの意味に気が付いたのかな？ つみきの顔が少し赤い。

しかし、雄二はどうするんだろうな？　いくら普通のFクラスとは一味違うこのクラスのメンバーでも、流石にAクラスは厳しいと思うが……。

教室のざわめきが静かになっていくのを待って、雄二は自信を持って話を続ける。

「そんなことはない。必ず勝てる……いや、俺が勝たせてみせる」

それでもなお、Fクラスの面々は否定的な意見を覆さなかった。……まあ、そうだろうな。俺もそう思ってるし。けど……。

「……？　何、伊御？」

「ううん。なんでもないよ、つみき」(ぼふっ)

俺はつみきの頭に手を乗せ、頭を撫でることで誤魔化す。ついででも、明久の想いは嬉しかった。それに、つみきをAクラスの設備に入れてあげたい。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている。それを今から説明してやる」

それでもなお、雄二の言葉は揺るがず自信に溢れていた。流石に何かあるのだと思いはじめたのだろう。ざわめきは止まらないが、否定的な意見は無くなっている。

雄二はいつも悪巧みをしているときの不敵で好戦的な笑みを浮かべ、教卓から皆の視線を一身に受けた。そしてその勝つ為の要素であるものに視線を向けた。

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートの中を覗いてないで前に来い」

「……………!!」(ブンブンツ)

「は、はわっ」

必死になって顔と手を振って否定する男子生徒とスカートの裾を抑えて遠ざかる姫路さん。俺はそんな変態な人物を知ってるんだけど……何をしてるんだ、康太。つみきたちの康太に向ける視線が少し冷たいのは気のせいではないはずだ。

顔についた畳の後を隠しながら壇上上がる康太。……あそこまで恥も外聞なく覗いておいて、今更隠せると思ってる康太はある意味すごい。だから「あんな名前」で呼ばれるんだよ、康太。

「土屋 康太。こいつがあのある有名な『寡黙なる性職者(ムッツリーニ)』だ」

「……………!!」(ブンブンツ)

ああ、雄二が言ってしまった。土屋 康太という名前は知らなくても、そっちの名前はこの一年であまねく生徒に知られているはずだ。事実……。

「ムッツリーニだと?」

「馬鹿な、奴がそうだといいのか……?」

「だが見ろ。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だ隠そうとしているぞ……」

「ムッツリーの名に恥じない姿なんじゃよ」

Fクラス男子生徒が畏敬の念を康太に向ける。例えどれほど確かな証拠があれど、自

分の下心は隠し通す。あの異名はそれを表してる。

「???」

ああ、姫と姫路さんの頭に疑問符を浮かべている様子にはっこりする。君たちは純粋なままでいてほしいよ。

「姫路のことは言うまでもないだろう。皆だつてその力はよく知っているはずだ」

「えっ? わ、私ですか?」

「ああ。うちの主力その1だ。期待している」

姫路さんは確かつみきさえも超える、学年一桁台の頭脳の持ち主のはずだ。それは俺たちの学年では有名なことだ。

「そうだ。俺たちには姫路さんがいる」

「彼女ならAクラスにも引けを取らない」

「姫路さん結婚してください」

彼女を賞賛する中に、熱烈なアタックをする奴がちらほらいるけど……あれはネタだよな? 本気じゃ……ないよな?

「ウチの主力その2とその3、御庭 つみきと音無 伊御だつてそうだ。この2人もAクラス相手に十分戦える」

俺たちの名前も呼ばれた。つてことで2人揃つて壇上に上がる。

「御庭さんと音無か。……分かつているな？」

「あの2人は黙ってニヤニヤ見守ること……常識だ」

「そうだ。あの微妙な距離感を微笑ましく眺めるのだ」

「あそこまで来ると、妬みも嫉みも湧いてこないからなあ」

「早く自覚しろよにぶちん」

「ばっか。あの悶々とする感じがいいんだろうが」

「御庭さんフアイト」

……何だろう。康太と姫路さんと違って、なんか生暖かい視線が向けられるのだ。って痛い痛い。つみき、なんでかは分からないけど頭を噛まないで。

「そして主力の最後の1人。春野、来てくれ」

「ふえっ？ わ、私もですかあっ!？」

「もちろんだ。Cクラス並みの実力は、科目によってはAクラスに匹敵する。頼むぞ」

「は、はひい。……が、頑張りますっ!」

姫がおどおどしながらも、雄二の言葉にしつかりとした返事を返す。姫は持ち前の天然を出さなければ、しつかりと実力以上の力を出してくれるはずだ。

「木下 秀吉だっている」

秀吉は学力こそ低いけれど、こと演劇に関することではおそらくこの学校で右に出る

ものはいない。……康太の時点で気付いていたけど、秀吉の名前を出すことはまともな戦い方をしない気だな雄二のやつ。

「片瀬 真宵。……知らない奴はいないよな？」

「「「ああ」」」

「んもーう。照れるんじやよっ☆」

違う真宵。皆はお前に対してある意味恐怖の視線を送っているんだ。……何をしでかすか分からないから。この一年で真宵の起こした事件は数知れず。軽いお巫山戯から重い悪戯まで多種多様だ。やっぱり雄二は正々堂々戦わないつもりだ。

「当然俺も全力を尽くす」

「確かに何だかやってくれそうだ」

「坂本って、確か昔は神童って呼ばれてたんじやないか？」

「なら、振り分け試験では手を抜いていたのか？」

「やれるっ！ これだけのメンツが揃えばAクラスだって……！」

徐々に熱気を帯びていくFクラスの教室。……うん。まともに戦えばDクラスまでに行けるかな。そこからは雄二の策に期待しよう。……そういえば、明久は呼ばないのか？ だって明久は……。

「それに、吉井 明久だっている」

……………シンツ……………

一気に熱気が冷めていくFクラスの教室。……あれ？ 明久のことって有名じゃなかったのか？

「ちよつと雄二！ どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！ 全くそんな必要ないよね！」

「誰だよ、吉井 明久って」

「聞いたことないぞ」

「ほら！ 折角上がりかけた士気に翳りが見えてるし！ 僕は雄二達と違って普通の人間」「それはない」「馬鹿なっ!？」

明久が普通の人間な訳ないだろう。世迷いごとを言うんじゃありません。

「そうか。知らないようなら教えてやる。こいつの肩書きは『観察処分者』だ」

俺達知ってる組が大きく頷く。うん。それなら皆知ってるだろうね。……明久がなんで言ったのっ？ みたいな顔してるけど、これは言わないとダメだろう。

「……それって、バカの代名詞じゃなかったか？」

教室の誰かがそんなことを口にした。やっぱり知ってるよね。

「ち、違うよっ！ ちよつとお茶目な16歳に付けられる愛称で」「そうだ（じゃよ）。バカの代名詞だ（じゃよ）」肯定するな！ バカ雄二と真宵さん！」

ある事件の後に押された烙印なんだけど……よく退学にならなかつたなあ明久。まあ、滅多に課せられるものでもないから相応の処分なんだろうけど。

俺が物思いに耽っている間に、姫路さんに雄二が『観察処分者』について説明しているようだ。

「凄いですね。試験召喚獣って見た目と違って力持ちって聞きましたから、そんなことができるなら便利ですよね」

「あはは。そんなに大したもんじゃないんだよ」

姫路さんはキラキラとした視線を明久に向けている。その視線には羨望と尊敬が込められてるみたいだけど……それは決して現在進行形で処罰を受けている状態を指す明久に向けていいものではないよ、姫路さん。

それに、この召喚獣にはそれ相応のデメリットが存在する。それは召喚獣の負担が何割かフィードバックして使役者に返ってくることに。痛みさえフィードバックするから、処分としてはかなり重い。

ほら。『観察処分者』について詳しく知っている人達がデメリットについて話している。明久もあまり試召戦争に参加するつもりはないみたいだけど……。

「気にするな。どうせ、いてもいなくても同じような雑魚だ。こんな雑魚でも使い道がある」

「雄二。フォローがフォローになってないよ！」

やっぱり。雄二は明久も使い潰す気だ。……仕方ない。

「大丈夫だよ明久。俺がちゃんとフォローするから」

「い、伊御っ！」（うる目）

「おいおい。あんまり甘やかすなよ伊御。伊御の役割もちやんとあるんだからな」

「ああ、任せろ」

俺は雄二に向けて頷く。

「さて、勝利への要素は揃えた。これより、俺達の力の証明としてまずはDクラスを征服してみようと思う」

雄二の言葉に各々がやる気を見せながら立ち上がる。

「皆、この境遇は大いに不満だろう？」

「……当然だ!!」

「ならば全員筆を執れ！ 出陣の準備だ!!」

「……おおーっ!!」

「俺たちに必要なのは卓袱台ではない！ システムデスクだ!!」

「……おおおーっ!!」

「……おー……」

クラスの雰囲気を押されながらも、姫と姫路さんも小さく拳を作り掲げていた。……
2人の様子にほっこりする。

「明久にはDクラスへの宣戦布告の死者になってもらう。無事大役を果たせ！」

雄二がこの盛り上がった流れで明久に大役を任命した。なんだかんだで明久のことも考えてるんだよな、雄二は。

「……下位勢力の宣戦布告の使者つて大抵ヒドイ目に遭うよね？」

「大丈夫だ。奴らがお前に危害を加えることはない。騙されたと思って行ってみろ」

「本当に？」

「もちろんだ。俺を誰だと思っている」

それでも少し逡巡する明久に、俺が声をかける。

「明久。折角雄二が任命してくれたんだ。行つてきなよ」

「……わかったよ。それなら使者は僕がやるよ！」

「ああ、頼んだぞ」

クラスメイトの歓声と拍手に送り出され、明久はDクラスに向かった。

「ナイスフォローだ、伊御」

「？ 何がだ雄二？」

「……まさか無自覚だったのか」

「なんのことだ？」

「伊御さん、明久さんは神風となったんじゃよ」(ビシッ

「……え？」



「騙されたあつ！」

「這々の体で転がるように教室に入ってくる明久。……凄いボロボロだ。

「やはりそうきたか」

「その様子に平然と頷く雄二。……お前を信じた俺がバカだったよ。

「やはりってなんだよ！ やっぱりヒドイ目に遭うことは予想通りだったんじゃないか
！」

「当たり前だ。そんなことも予想できないで代表が務まるか」

「すこしは悪びれろよっ！」

「肩を怒らせる明久に俺が頭を下げる。

「ごめん明久。俺はこうなるって知らなくて……」

「い、伊御は謝らなくていいんだよ！ 伊御がこんな腹黒ゴリラみたいに騙したんじゃない、なくて純粹に想ってくれたのは分かっているから！」

「でも……」

「ほんとにいいから！ これ以上伊御に謝られると僕がガリガリ削られるっ！」

「……うん、ほんとごめん」

「……伊御、さすがに俺もクるものがあるからその辺で頼む」

雄二が顔を背けてそう言うってくる。……なら最初からしなければいいのに。

「優しい人代表の伊御さんにあそこまでさせたら、そりゃあ堪えるにやあ」(ボソツ)

「そうね。坂本も思わぬカウンターを食らったわね」(ボソツ)

真宵とつみきが何やらボソボソ言っている横で、姫路さんと島田さんが明久と話している。……なんか明久が腕を抑えてバタバタし始めたけど、どうした？

「そんなことより、今からミーティングに向かうぞ」

雄二がそう言つて教室から出て行く。ここでは話し合いをする気は無いようだ。真宵や姫、秀吉や姫路さんがそれぞれ明久を慰めてから雄二の後を追った。

「伊御、行く？」(くいくいっ)

「うん。行くうかつみき」(ぼふっ)

「……うん」(ネコミミ、ぴい、ぴい)

俺もつみきと一緒にその後続いた。

【おまけ】

「……………」

「全く。ムツツリーニは本当に性に関する知識だけはズバ抜けてるね」

「……………!!」(ブンブンッ)

「……………うん? どうしたの島田さん?」

「……………どうしたらあんなふうに親しく……………」(ボソッ)

「島田さん?」

「うえっ!? な、何よ吉井!」

「えっ。みんなで話し合うから移動するんでしょ?」

「え、あ、そうね。……………行きましようか」

「??」

「……………素直じゃ無い」

第4話

面倒な話し合いになりそうだったから逃げようとしたのに、島田さんに捕まってしまう。仕方ないので雄二達の後を追おうとしたら、僕を捕まえた本人の島田さんが立ち止まってブツブツ言ってたんだけど……あれはなんだったんだらう？

しばらく歩くと、先頭の雄二が屋上への扉を開けて外へ出た。すこし早いながらもお昼だ。風の冷たさもなくなり、みんなが暖かな春風に撫でられる心地よさに目を細める。……ムツツリー二は風ではためく姫路さんのスカートを注視しようとして伊御に成敗（内側から弾ける拳）されてた。

「明久。宣戦布告はしてきたな？」

雄二が腰を下ろしながら僕に確認してきた。

「一応今日の午後に開戦予定と告げてきたけど」

雄二の後にみんながその周り腰を下ろした。

「それじゃ、先にお昼ご飯ってことね？」

「そうなるな。明久、今日の昼ぐらいまともな物食べろよ？ 春休みの時みたいにくたばられても困るからな」

「くたばってないよ!」 もう少しで骨と皮になりかけてただけさっ!」

「それはそれでヤバいと思うんじゃないけど……」

「あの時は本当に死にそうだったからな……」

伊御、あの時は本当にお世話になりました!

「えっ?」 吉井君ってお昼食べない人なんですか?」

姫路さんが驚いたように僕を見る。彼女は僕と違って規則正しく生活してるんだろ
うな。……色々発育があっ!」

「御庭さんと島田さんっ!」 如何しましたのでしようかっ!」

2人の拳が僕の両頬を掠めたんだけどどっ!」

「何か不穏な気配を感じたから(の)っ!」

「僕は2人に対して何も感じて無いよっ!」

そうさ、僕は姫路さんの発育に目を向けていただけさっ! ……あ、ごめんなさいな
んでも無いのでその拳を下ろしてください。

「食べる食べないの話じゃ無いと思うがな」

「……何が言いたいのさ」

僕は御庭さんと島田さんを宥めながら、雄二の哀れむような声に反応した。

「いや、お前の主食って……水と塩だろう?」

「失敬な！　ちゃんと砂糖も食べているさ！」

「あの、吉井君。水と塩と砂糖って、食べるとは言いませんよ……」

「舐める、が表現としては正解じゃねい」

「なんか、みんなの目が妙に優しいのが逆に辛い。」

「はあ。……ほら、明久。サンドイッチだ」

伊御がサンドイッチの一切れを僕に渡してくれた。……あれっ、伊御の顔が歪んで見える。

「ううっ、ぐずっ、ありがとう。伊御が天使に見えるよ」

「大袈裟……ってわけでも無いのが悲しいところじゃの」

「明久君、ちゃんと食べなきやダメですよ？」

「ダメよ姫。吉井には命をかけてもやらなきやいけないことがあるから」

「えっ、なんか想像以上に壮大なんだけど!?!　何があるのよ吉井！」

「ただ自分の趣味に全力で金を使い込んでるだけだ」

「し、仕送りが少ないんだよっ！」

両親が海外出張に出ているから、仕送りにも貰ってるんだけど……趣味ってお金がかか
るよね♪

「……あの、良かったら私がお弁当を作ってくださいませようか？」

「あつ？」

伊御の優しさが嬉しくて僕の耳も遂におかしくなったかな？ ……えつ、お弁当？

女の子のっ？ 手作りのっ!?

「本当にいいの？ 僕、お昼に塩と砂糖以外のものを食べるなんて久しぶりだよ！」

「はい。明日のお昼でよければ」

「ありがとう！」

やった！ 姫路さんの手作りだつ！

「……俺がさつきあげたサンドイッチは無かったことになったのか」

「[[[[最低]]]]」

「あつ!? 違うんだ伊御!? これは……っ」

ああつ、そんな顔しないで伊御っ！ 僕のメンタルがヤスリで削られていく！

「……クスッ。冗談だよ明久。……良かったね」(ボソツ

「っ!? さっさっ」

そんな微笑ましい顔しないで！ 恥ずかしくなるからっ！

「……ふーん。瑞希って随分優しいんだね。吉井に“だけ”に作ってくるなんて」

島田さんがなんだか面白くなさそうにそんなことを言った。なんでそんな棘のある

ことを言うんだ！ 「やっぱりやめます」なんて言われたらどうしてくれるんだ！

「姫路さんって優しいね」

「そ、そんなこと……」

心からそう思う。なんて献身的で、魅力的な人なんだ。

「今だから言うけど、僕、初めて会った時から君のこと好き」「おい明久。今振られると弁当の話がなくなるぞ」にしたいと思っていました」

さすが僕、失恋回避に成功だ。言い切る前だからこそできる回避行動と判断力だ。

「……それだと自分の欲望をカミングアウトした、ただの変態よ」
恨むぞ僕の判断力。

「……貧乏根性に負けてへたれてしまったんじゃよ」

「負け犬根性丸出しじゃのう」

「明久……」

「だって……お弁当が……」

それもこれも僕が今を生き残るため。全ては貧乏が悪いんだ！

「さて、話がかかり逸れたな。試召戦争に戻ろう」

そうだった。すっかり忘れていた。……ほらみんな。僕をそんな目で見ないで雄二に注目しよう。

「雄二。一つ気になっていたんじやが、どうしてDクラスなんじや？ 段階を踏んでい

くならEクラスじゃろうし、勝負に出るならAクラスじゃろう?」

「そういえば、確かにそうですね」

「まあ、雄二さんのことじゃから何か考えがあるんじゃないけど」

「まあな。当然考えがあつてのことだ」

みんなの声に、雄二が鷹揚に頷く。

「ほえ? どんな考えです?」

「色々理由はあるんだが、とりあえずEクラスを責めない理由は簡単だ。戦うまでもないからだ」

「え? でも僕らよりクラスは上だよ?」

「それに……榊さんもいるんじゃないよ」

真宵さんの言葉に、不敵に笑う榊が思い浮かぶ。……確かに、榊なら雄二の策を引つ掻き回しそうだ。

「奴のことなら問題ない。すでに買収は済ませてある」

「……いつの間にそんなことをしてたんだ?」

「伊御達がFクラスに来た後には行動していた。奴にはEクラス代表を言いくるめるようにも言つてある。……今回の試召戦争を傍観しないと、真宵の恐怖がクラスを襲うぞと」

「それはもはや脅迫ではっ!？」

「……知らない間に脅迫の材料にされてたんじゃよ」

真宵さんも榊に負けず劣らずの問題児だからなあ。全く、僕の周りは問題児だらけだ。

「さて、確かに振り分け試験の時点では向こうが強かったかもしれないが、実際のところは違う。明久、周りの面子をよく見てみる」

「えーっと……」

雄二に言われた通りその場にいる面子を見回してみる。ふむふむ、僕の周りには……。

「美少女が4人と馬鹿が3人、ムツツリが1人に優しさの塊が1人いるね」

「誰が美少女だと!？」

「ええっ、雄二が美少女に反応するの!？」

「……………」(ぼっ)

「あ、明久……その、照れるのじゃが」

「嬉しいよ、明久」

「男が全員反応しただと!？」 確かに美少女4人とは言ったけど、お前達自分の性別を思い出せっ!」

「二「明久が言ったんだらう?」」

「つだー!! ツツコミが追いつかないっ!」

僕は素直に答えただけに、なんでこんなにしんどい思いを……はっ!?

「貴様ら! 僕を使つて遊んでいるなっ!」

「二「やつと気付いたのか」」

なんて奴らだ! 友人で遊ぶなんて友人の風上にも置けない!

「つてあんた達。話が脱線してるわよ!」

「明久さんも落ち着くんじゃよ」

「ん、そうだな。少しいじり過ぎた。……まあ、要するにだ」

何事もなかったように雄二が説明を再開し、雄二に注目する面々。……なんだろう、このやり切れなさは。

「姫路に御庭、伊御がいる今、正面からやり合つてもEクラスには勝てる。Aクラスが目標である以上はEクラスなんかと戦つても意味がないって事だ」

「? それならDクラスとは正面からぶつかると厳しいの?」

「ああ。『今の時点』では確実に勝てるとはいえないな」

「今の時点?」

「忘れたのか。伊御達は今点数は無いんだぞ」

「あつー！」

そうだった。伊御や御庭さん、姫路さんは欠席や無記名、途中退席で点数がそもそも無いんだった。

「春野もうつかりで今は点数がそれこそFクラス並だ。まずはこいつらのテストを受けさせなければならぬ」

「そういえば、春野さんはなんでFクラスに？」

「そ、それはあ……うう〜」

なんでも、ほとんどの科目で解答欄が一つずつズレていたとか。……春野さんのうつかりぶりが涙を誘う。

「というわけで。主力の点数を補充している間、Dクラスを相手に戦えるのはお前達しかない。そうなるとDクラスは中々にいい相手だ」

「雄二君。それならそれこそEクラスの方が良かったのではないのですか？」

春野さんのいう通りだ。わざわざ脅してまでEクラスと戦わないようにしたのはどうしただろう？

「……まあ、色々あるんだよ。これもAクラス打倒に必要なプロセスだ。ついでに言えば、2つ上のクラスを倒せば嫌でも土気は上がるだろう？」

「ほええ。雄二君は色々考えてるんですね」

春野さんのキラキラした目に顔を背ける雄二。……心が汚れている奴は純粹なものに目を合わせることができないからねっ。

「でも坂本。そもそもこの話ってDクラスに勝てなかったら意味ないわよ？」
「負けるわけないさ」

島田さんの疑問に、雄二は笑い飛ばしながら自信を持って言い放った。

「お前らが俺に協力してくれるなら勝てる」

そして、雄二はここにいるみんなそれぞれに目を合わせながら断言する。

「いいからお前ら。うちのクラスは……最強だ」

それは不思議な感覚だった。根拠のない言葉なのに、本当にそうだと思わせてくれる力が雄二にはあった。

「いいわね。面白そうじゃない！」

「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

「……………」(グッ)

「が、頑張りますっ」

「フェツフェツフェツ。腕がなるんじやよ☆」

「むんっ。こ、今度は間違えませんっ」

「さて。下克上と行こうか」

「……おー」

雄二の言葉を聞いたみんながそれぞれ自分を奮い立たせる。

打倒Aクラス。

他の人たちが聞けば、何を馬鹿なと鼻で笑うだろう。机上の空論だと蔑むだろう。……でも、やってみないと何も始まらないんだ。

「そうか。それじゃ、作戦を説明しよう」

春の陽光が降り注ぐ中、僕らは勝利への階段の第一歩を踏み出した。

【おまけ】

Eクラス教室

「おーい中林！」

「? 何かしら戌井くん」

「ああ。どうやらFクラスがDクラスに試召戦争を仕掛けるらしいんだ」

「はあ? 進学初日から? 馬鹿じゃないの? ……ああ、馬鹿の集まりか」

「ん、まあそういうわけで、俺はFクラス代表から言伝を持ってきたんだが……試召戦争中は一切動かないでほしいということだ」

「…………ムカつくわね。なんで私たちがFクラスなんかのいうことを「もし動いたならば、片瀬 真宵の恐怖がEクラスを襲う。だと」……………」

「……………」

「ふ、ふんっ！ だからどうしたのよ。…………ま、まあ今回は様子見つてところね」（スタスタスタ

「……………ほっ……………」

「…………真宵のやつ。何しでかしたんだ？」

第5話

□Fクラス□

「吉井！ 木下たちがDクラスの連中と渡り廊下で交戦状態に入ったわよ！」

ポニーテールを揺らしながら僕の元に駆けてくるのは同じ部隊に配属された島田さん。……うーん。改めて島田さんを見ると、顔立ちは整っていて脚も細くて綺麗なのに何か女性的な魅力に欠ける。何が足りないんだ……ああそうか。

「胸か」

ヒュオツ（島田さんの足が僕の首を狙う音）

サツ（頭を後ろに下げて避ける僕）

グサツ（その僕の眉間を狙ったシャーペン）

「んのおおーっ!?!」（ピューツ）

僕の額から血がっ、血がっ！

「ふんっ！ デリカシーのないことを言ってるからそんな目に合うのよ」

額を押さえて転がる僕を見下す島田さん。確かにその通りかもしれないけど、いったいどこからっ!?

痛みをこらえて辺りを見回す。……と、こちらをテストを受けながら雰囲気で威圧する御庭さん。そして何事もなかったよう問題を解く面々と監督する先生。……どうやら御庭さんの技が速すぎて誰も気がつかなかったようだ。もはや人間離れた所業だよな。

「ふ、ふーっ。とにかく、試召戦争に集中しないと」

僕は額を押さえて立ち上がり、前線部隊がいる渡り廊下付近に部隊を連れて向かった。

□渡り廊下前□

額の傷も治り、僕は部隊長としてみんなを導くために戦場の雰囲気を感じて気を引き締めようとする。戦線へと意識を集中させ、そして聞こえてきたのは……。

『さあ来い！ この負け犬がっ！』

『て、鉄人!? 嫌だ！ 補習室は嫌なんだっ！』

『黙れっ！ 捕虜は全員この戦争が終わるまで補習室で特別講義だ！ 終戦まで何時間かかるかわからんが、たっぷりと指導してやるからな』

『た、頼む！ 見逃してくれ！ そんな拷問耐えられない！』

『拷問？ そんなことはしない。これは立派な教育だ。補習が終わる頃には趣味が東○テスト、尊敬する人は○先生、といった難関大学を目指せる学生に仕立ててやろう』

『い、○でしょっ!? お、鬼だ! 誰か助けっ(ボタン、ガチャ)』

……………よし、試召戦争の雰囲気は大体わかった。

「島田さん、この援護部隊全員に通達」

「ん、なに? 作戦? 何て伝えんの?」

「ここで僕が出すべき指示はただ一つ。

「総員退避、と」

「この意気地なし!」(ぶすっ

「目が、目があっ!」

そして殴られる僕。 ……:チヨキで。普通グーかパーじゃないっ!?

それから島田さんに自分達の部隊が担う役割の重要さを諭され、僕は目が覚めた(痛みで開かないけど)。島田さんの上に立つものとしての素晴らしさに涙が止まらないよ

(多分原因は違う)!

「ごめん、僕が間違ってたよ。補習室を恐れているはAクラスになんか届かない!」

「ええ。確かにウチらは弱いけど、これは戦争。多対一で戦えば良いのよ」

そうだ、点数が低いことは百も承知。それに雄二は言っていたじゃないか。学力が全てではないんだっ!

「そうだね。よし、やるぞ!」

「うん。その意気よ、吉井！」

拳を上げて意気込む僕達。そして、そんな僕達のところにやってくる前線からの報告係。

「吉井、島田！ 前線部隊が後退を始めた！」

「総員退避だ（よ）」

うん。僕らには荷が重すぎた。僕らは精一杯頑張ったよ。

くるとFクラスへの方向転換。すると、振り返った先にはFクラスに配置されているはずの横田君がいた。

「吉井隊長！ 代表より伝令です！」

「なんだい横田君。僕達はこれから退「逃げたら御庭のアイアンクロ」全員突撃しろおーっ！」

気が付いたら戦場に向かって全力ダッシュをかましていた。僕達はFクラスのため、神風となる覚悟がある！ ……僕はまだ顔を剥ぎ取られたくない。と、前方からこつちに向かつてくる美少……年を発見。

「明久、援護に来てくれたんじゃない！」

「秀吉、大丈夫？」

「うむ。戦死は免れたが、点数はかなり厳しいところまで削られてしまったわい」

「真宵さんは？」

「計画通り、殿を務めておるよ」

真宵さんの今回の役割は、戦うのではなく……「戦わせない」といものだ。……ほら、聞こえて来たよ。

「五十嵐先生！ Dクラス金岡、召か『ぼええーっ!!』」

「先生！ Dクラス岩無、召『ぼええーっ!!』」

「布施先生！ D『ぼええーっ!!』」

「『うるせーっ!!』」

「『よほほほほっ!』」

何か大きなものを肩に担ぎ、奇妙な笑い声をあげる真宵さん。真宵さんは音の衝撃を受けぬように、耳にヘッドホンのようなものをつけている。……そして、肩に担いだものから吠えるように爆音を振りまくのは、『蒼たぬき産 某世紀末の歌声君』だ。

試召戦争は召喚者の直接戦闘は禁止されているため、いつかのような『ネバネバくん六号』のようなものを使った足止めはアウトだ。……ならば間接的に妨害しようと開発されたのがアレだ。

召喚の際は、先生の許可を得るため『召喚』の言葉を言い切る必要がある。そこであの道具だ。大音量による爆撃は生徒の声をかき消し、先生の耳には『召喚』の言葉は届

かない。……さすが真宵さんだ。

「相手はどうやら化学教師を連れて来たようでの。それによつて戦線が拡大して撤退を余儀なくされたんじゃないが……片瀬は埒外じゃのう」

その様子にため息と苦笑を浮かべる秀吉は、そう言つて前線部隊を連れて点数を補充するために下がつていった。

「島田さん、早く真宵さんと合流しよう！ 流石に1人では音の妨害も限度があるよ」

「そうね。行くわよ、みんな！」

「……おおーっ！」「……」

そして僕はみんなを連れて駆け出し、すぐに真宵さんと合流した。

「真宵さんお疲れ様！ 僕達が援護するから下がって！」

「りよ〜！ ではでは、後は任せたんじゃよ〜！」

そして後方へと下がつて行く真宵さん。……次はなにをしてくれるんだろうか？

その後は、総合科目と化学による戦闘が渡り廊下で繰り広げられる。僕と島田さんは化学に自信がなかったので、少し遠くの学年主任である高橋先生のところまで行こうとしたら、島田さんがクルクルツイントールの子（清水 美春と言うらしい）に見つかった。

「よし、島田さん。ここは君に任せて僕は先を急ぐよ！」

「ちよっ！ 普通逆じゃない!? 「ここは僕に任せて先に行け!」 じゃないの!?!」

「そんな死亡フラグ建設予定はありません!」

「この根性無し!」

なんとも言う方がいい。

「お姉さま、お覚悟ですっ!」

「くっ、美春。……やるしかないってことね……!」

彼女達の近くにいる五十嵐先生から十分離れて、向こうの様子を伺う。2人は向かい合って召喚獣を呼び出した。

「試獣召喚っ!」

2人の間に召喚された召喚獣。それは各々をデフォルメしたような姿だった。そして始まる戦いは、舌戦と共に行われた。その内容は痴情のもつれのように……なんか、島田さんが遠い。

得物による打ち合いの後、最後には力比べが始まり……島田さんが押し負けた。武器を取り落とした島田さんの召喚獣を押し倒し、刃を喉元に突きつける清水さんの召喚獣。その頭上には……。

化学

『Fクラス島田 美波―23点 VS Dクラス清水 美春―41点』

点数はまだあるが、急所をやられたら一発で終わる。喉元に刃が突きつけられている今、島田さんは迂闊に動けない。

「さ、お姉さま♪ 勝負はつきましたね？」

「い、嫌っ！ 補習室はっ「フフツ。補習室なんかには行きませんか？ お・ね・え・さまっ♡」……え？」

「お姉さま。……この時間なら、ベッドは空いていますよね？」

清水さん！ こんな大事な時に欲望に忠実すぎるっ！

「よ、吉井！ 早くフォローをお願いっ！ このままじゃウチは補習室行きより危ぶないことになりそうなのっ！」

だろうね。清水さんの目が血走ってるもん。でも……。

「殺します。美春とお姉さまの邪魔をする人は、八つ裂きです」

ごめん。僕の死地はここじゃないんだ。

「島田さん、君は永遠に僕の心の中にいるよ！」（ダッ！

「えっ／＼／＼／＼！？ ちよっそんないきなり……っ／＼／＼／＼。 ……え、吉井？ な

んで背中を見せるの吉井……っ！？」

「さあお姉さま♡ 美春と……結ばれましょう？」

「……っイヤア……っ！！」「……島田さんっ！ い、今から加勢しますっ！」……

えっ」

島田さんの貞操の危機に颯爽と現われたのは……春野さんっ!?

「い、五十嵐先生！ Fクラスの春野 姫、試獣召喚ですっ!」

春野さんの声に呼ばれた彼女の召喚獣は、彼女そっくりのとても愛らしいフォルムで召喚された。可愛らしい白のワンピースを身に纏い、黒のカチューシャを付けている。装備は花の装飾が施された銀の胸当てぐらいいしか見当たらない。そんな春野さんの召喚獣だが、1番目を引くのは……召喚獣がギョっしてしているととても大きなクマのぬいぐるみだ。

見た目は春野さんを表したような無害そうな召喚獣だけど……上に表示されてる点数がエグい。

化学

『Fクラス春野 姫ー132点 VS Dクラス清水 美春ー41点』

春野さんの登場とその点数に唖然とする清水さん。そんな無防備な清水さんの召喚獣に春野さんの召喚獣がぬいぐるみを振りかぶり……っつまさか。

「ええい!」

可愛い掛け声とともに、春野さんはどぐしやーっ! とぬいぐるみが出した音には聞こえない音を叩き出して清水さんの召喚獣を壁に思い切り叩きつけた。……無抵抗

で受けたため、一気に清水さんの点数が0になる。

「戦死者は補習ーっ！」

「は、離してくださいっ！ お姉さまっ！ 美春は、美春は諦めませんからねーっ
！」

どこからともなく現れた鉄人に連れて行かれる清水さん。……うん。悪は滅びる定
めだよっ！

貞操の危機が去って安心したのか、それとも自分が助かった状況が信じられないの
か。島田さんは立ち尽くしたままだ。

「……え、えとえと。大丈夫ですか、島田さん？」

そんな島田さんを心配し、少しおどおどしながらもそう尋ねる春野さん。……さつき
の救い方といい、春野さんが戦場の天使に見える。

「……え……う」

「あ、あのー？」

「……っ姫ーっ……っ!!!」(ぎゅうううっ

「はうああっ!?!」

正気に戻った島田さんが、自分を助けてくれた戦場の天使に嗚咽をこぼしながら抱き
つく。

「あり、とう……うつく、ありがとおつ。……ひぐつ」（ぐすつぐすつ???) ……だ、大丈夫ですよお。もう怖くないですよ」（よしよし）

なんでこんなに泣いているのかわからない春野さん。それでも島田さん何かを怖がっていたことは分かったのか、島田さんの頭を撫でながら優しい声で宥めている。このすんつつごい微笑ましい光景にここが戦場だと忘れそうになる。

「春野さん。よかつたらこのまま島田さんをFクラスまで連れて行つてくれないかな？ 点数の補充も兼ねて休ませる必要があると思うから」

「は、はひ。わかりました」

「……ぐすつ。姫、ちよつと待つて」（ボソツ）

「ふえ？ ……いいですよ」

くつ、しかしさすがはDクラス！ Fクラス幹部である島田さんをここまで追い詰めるなんて……許さないっ！ 君の仇は僕がつ（ガシツ）……………えっ？

「……あの、島田さん？ なんで僕の後頭部を掴んでいるのかな？」

「……………」

「…………し、島田様？」

「……………吉井」

「は、はいっ!？」

ヤバイッ！ 島田さんの僕を呼ぶ声に、未だ嘗てない僕の第七感あたりが危険信号を発しているっ！

「ウチを、見捨てたわね？」

「……………」

「見捨てたわね？」

「……記憶にござ」潰れて果てるおおおおおっつ!!」ぶぎやあああああ————っつ!!」(グツシヤアッ！

「あ、明久く————んっ!!?」

女性である島田さんの何処からこのような力が出てきたのか。島田さんは力に任せて僕を廊下さんと轟音と共にキツスさせた。……それに飽き足らず、ねじ込むように廊下さんとくっつけようとする島田さん。……………ふっ。

「タモ||^%↓T…+X…\$+*」

「ふんっ！ 姫、行こっ」(ぎゅうっ

「ええっ!? 明久君、放置ですかっ!」(されるがまま

「いいのよあんなクス野郎。……ほんとにありがとね姫。私あのままだったら……ううっ」

「し、島田さん。ほほ補習室ってそんなに恐ろしい場所なのですかっ?」

「……あははつ。違うわよ。それより姫、今度からウチのことは美波って呼んでね？」
 「ほえ？ ……えつとお。は、はひ……美波、さん？」

「んんんっつ可愛いわねえ姫はっ！」（スリスリ）

「ふえええ？」（されるがまま）

そして遠ざかる（気配がする）島田さんと春野さん。……うん、仲が良くなったよう
 で何よりだよ。

「吉井隊長」

未だ廊下さんとランデブーをしている僕にかげられる声。この声は……須川、君か？

「@ % || ^ + x T ? ♪ ☆」

「いや、何を言ってるかはわからないけど……一言いいか？」

「x < % # .」

「吉井隊長……」

「……流石に今回はあんたが悪い……」

骨身にしみて理解しております。

【おまけ】

□Eクラス（授業中）□

……わーっ！

「……はあ、うるさいわね。本当に何で進学早々に試召戦争なんて」によほほほほっ

！」……」

「「「「「……」」」」」

「……ううっ」

「お、おい！ しっかりするんだ！」

「サブロー君……目前に小隕石……うわあーっ！」

「ああーっ!? キンカズの……キンカズのオーバーヘッドシユートがああーっ!!」

「気を、気をしっかり持つんだあ！」

「ど、どうしたのですが皆さん！ 授業中になぜいきなり頭やお腹を抱えて……っ！

落ち着いて、落ち着くんです！ 代表、代表は何処に！」

「……」(ガタガタガタガタッ

「代表っ!? なぜそこまで震えているのです!? 誰か、誰か保健室の先生をーっ！」

「……あー、実験台にされたのか。なむー」

【おまけ2】

「それにしても。姫は普段あんなにほんわかして危なっかしいのに……。さっきの姫はかつこよかったわよ♪」

「は、はう／＼／＼／＼／＼。は、恥ずかしいですう／＼／＼／＼」

「おー、帰ったか。……どうしたんだ春野。そんなに顔を赤くして」

「あ、ねえ聞いてよ坂本。さっき姫がねえ……」

「み、美波さん！ やめてください／＼／＼／＼」（わたわた

「美波さん、ねえ？ ずいぶん仲良くなったもんだ」

「ふふつ。そうでしょ？」

「く／＼／＼／＼／＼」

「つてことは、春野は活躍して注目を浴びたってわけか」

「？ うん。渡り廊下のほぼ真ん中だったし」

「……よしよし。予想以上の成果だぞ、春野」

「ほえ？ ありがとうございます??？」

「これで、Dクラス代表をより狩やすくなった」

第6話

□渡り廊下中央□

「吉井隊長！ 横溝がやられた！ これで布施先生側は残り2人だ！」

「五十嵐先生側は俺だけだ！ 援護を寄越してくれ！」

「藤堂がやられそうだ！ 助けてやってくれ！」

「布施先生側は援軍が来るまで防御に専念させて！ 五十嵐先生側は総合科目の人と交代しながら効率よく戦って！」

「「「了解！」「」」」

「藤堂君……分かってるね？」

「う、うおーっ！」

「なっ!? こいつ捨て身で……っ！ くそー!!」

「棚山が相討ちに持つてかれた！ 奴ら、捨て身まで使つて来るぞ!!」

「Fクラスめ。明らかに時間稼ぎが目的だ！」

「おそろく援軍待ちだ！ 援軍が来る前に押し切れ！」

廊下さんとのアバンチュールを終えた僕は今、仲間の援護部隊と窮地に立たされてい

た。Fクラスに援軍を要請したから、もうすぐ彼女が……来た！

「明久君、お待たせしましたっ」

「待ってたよ春野さん！」

僕の想像通り、春野さんが後ろに3人ほど連れて援軍に来てくれた。春野さんは先程戦闘を行ったが無傷で勝利してるため、余裕で戦闘に参加できる！

「春野さんは布施先生の方の援護を！ 他の3人は点数が下がっている人と交代して戦ってー！」

「は、はいですっ」

「了解！」

これで戦況を五分に持っていった。春野さんたちは先行された援軍。本体が来るまでこの状況を維持だ！

「情報通り春野さんがいるぞ！ 奴ら隠し球を持ってやがった！」

「くっ！ 点数がCクラス並みとか反則だろっ!？」

「落ち着け！ 彼女は無理に倒さなくてもいい！ 坂橋！ 五十嵐先生側はいいから春野さんを抑える側に加われ！ 誰か！ 援軍の要請を！」

敵側の指揮官は声が大きく指示が通りやすいが、おかげでこちらにも作戦が伝わってくる。それから前線はしばらく膠着状態になった。しかし、それに反して情報は次々と送

られて来た。

それをまとめると、僕達Fクラスは世界史担当の田中先生に採点をしてもらい、採点の甘さとそれに伴う採点の遅さで長期戦に持ち込む。Dクラスは数学担当の木内先生を連れて、木内先生の採点の早さから短期決戦を目指している。

Dクラスとの戦争で与えられた僕の役割は1つ。それはこの前線を長く保つことだ。……今日の授業が終わるくらいまで。その為に……。

「須川君、偽情報を流して欲しいんだけど」

これ以上前線を拡大されたり採点をされたりしてしまつたら、いくら春野さんがいると言えど前線が持たない。ならば、それらを行う先生をこの場所から遠ざけることで阻止する！

了承の声とともに駆け出す須川君を見送って、僕は前線指揮に専念する。さあ、正念場だ！



「塚本！ このままじゃ埒があかない！」

「春野さんが硬すぎる！ 他の連中も防御に専念してるし、このままじゃ長期戦だ！」

「もう少し待っている！　いま数学の船越先生と英語の桜川先生を呼んでいる！」
 まずい！　この状況に終止符を打とうとDクラス側が前線を拡大する為に先生をこの場所に呼ぼうとしている！　どうする？　このままでは僕も戦わなくてはいけなくなる。すると……。」

ピンポンパンポン……

《連絡します。船越先生、船越先生……》

須川君をの声が校内放送として流れて来た。丁度話題に上がった船越先生を遠ざけるなんて、ナイスタイミングだよ須川君！

《Fクラスの吉井　明久君が体育館裏で待っています》

………w h a t？

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

Fクラス対Dクラス最前線で、僕の絶叫が響き渡った。



□ Fクラス □

「………坂本、あんたって鬼畜ね？」

「……雄二」

「これも俺達が勝つ為に必要な犠牲だ。だから伊御、そんな目で俺を見るな」

いや見るよ。流石にこれはひどい。俺がやられたら多分一生許さないレベルだよ。

俺は今受けるテストを全部受け終えて次の先生が来るまで待機中だ。つみきと姫路さんはまだテストを受けているんだけど……すごい、ペンを持つ手が霞んで見える。

「須川にもしばらく情報収集に徹するように言っている。明久の憎悪をこの戦争中にぶつけられることは無いだろう」

「……後で雄二の指示だと言ったぞ？」

「ああ。振り返りにしてやる」

腕を組んで鼻で笑う雄二に溜息をつく。全く、仲が良いんだか悪いんだか……。

ピンポンパンポーン……

「ん？ また放送か？」

Fクラスに待機してる面々が不思議に思ってる中、無然とした表情で静かに佇む雄二。……また何かしたのか、雄二。

《連絡します。桜川先生、桜川 キクエ先生……》

校内放送の声は真宵で、呼んでいるのはキクエ先生。この時点で嫌な予感しかない。

《西村先生が、補習室で体罰を行っているという情報を入手しました》

……………は？

《先生の携帯へ証拠をお送りしましたので、確認の末、西村先生を叱ってやって下さい。
西村先生は補習室にいらつしやいます》

ピンポンパンポーン……

「……………」

雄二に無言で視線を向けるFクラスのみんな。その視線に動じずに、雄二は何もなかつたようにFクラスのドアへと向かう。

「さあみんな。そろそろ明久達を回収しに行くぞ」

「……………雄二」

「なんだ伊御？ ああ、伊御は待機だぞ。お前の出番は“次”だからな」

僕はFクラスのみんなを代表して、雄二に対して口を開いた。

「……………完全に私怨だよな？」

「ふんつ。何を言いだすかと思えば……………」

雄二は俺の目を見て、しっかりと、はつきりと言い放った。

「当たり前じゃないか」



□ 渡り廊下中央 □

Fクラス、Dクラス共に英雄として認められた僕。そのおかげFクラスの士気は急上昇し、逆にDクラスの士気は下がった。……非常に遺憾である！ 戦いながらも僕を心配してくれた春野さんに思わず泣きつきそうになった。戦場の天使が天使すぎる。

そんな最前線が一時騒然とした中、何か校内放送が流れたような気がしたんだけど……まさかまた僕のことじゃないよねっ!?

春野さんと急上昇した士気のおかげで、まだ前線は維持されている。……いや、今傾いた！

「よし！ 後は布施先生側は春野さんだけだ！ 五十嵐先生側で余裕のあるものは春野さんを討ち取る方に回れ！」

「Fクラス工藤、戦死！」

「工藤の代わりにFクラス中地、試獣召喚！」

「Fクラス西村、総合残り100点！ まだやれる！」

「よし、森川が戻って来た！ 春野さんのところには行かせないぞ！」

「う、うっつ。さすがにもうダメですう」

とうとう布施先生側が春野さん1人になり、4人が包囲している。春野さんの点数は50点を切った。まずい！ここで春野さんを落とさせられるわけには行かないっ！今の僕の部隊は全員で6人。そのうち4人は五十嵐先生側はで必死に持ちこたえている。……ここは僕が行くしかないか。

「明久！ あと少し持ちこたえろ！」

っ！！ Fクラス側遙か遠くから雄二と仲間達の姿がっ！ 援軍だっ！ よし。あと少しで良いんなら、この奥の手を使わせてもらおう！

「Fクラスの援軍だ！ 合流される前に吉井達を全滅させろ！ 最悪春野さんだけでも構わん！」

Dクラス前線指揮者の塚本君がそんな事を指示した……させるかっ！

「部隊員に告ぐ！ SETツ！」

僕の呼びかけに、Fクラスの各々がすぐにさっさと目を隠す。……春野さんが対応できずにワタワタしているが、仕方ない。

「ハッ！」

そして僕は懐から野球ボールぐらいのものを取り出し、地面に叩きつけた。

瞬間、爆ぜる閃光。

「ぐわーっ!? 目があ、目がああ!？」

「くうつ。フラッシュグレネードだ?! これはルール違反じゃないのか!」

「お、おのれFクラス! 卑怯なり!」

「よし、今だよみんな! 春野さんはこっちに!」

「「了解!」」

「はくくくく? 目がチカチカしますうくく」

僕は部隊員を先に撤退させ、春野さんの手を引いてゆっくりと後退する。今のは真宵さん特製『太陽君マークII』だ。撤退用に1つだけ渡されていんだけど……役に立ってよかった。

「待たせたな明久! 行け、お前ら!」

「「「おうつ!」」」

「布施先生! Fクラス近藤、行きます。試獣召喚つ!」

化学

『Fクラス近藤 吉宗ー91点 VS Dクラス中野 健太ー43点』

「くつ! ここは引くぞ! 全員遅れるな!」

塚本君が撤退命令を出し、下がって行くDクラスの面々。雄二はそれに深追いせず、僕達を回収してFクラスに帰還する。……どうやら予定通り、下校時間まで待つようだ。そうでないと、坂本 雄二という男は全てを見下しながら高笑いしてDクラスに進

行するだろうから。



□ Fクラス □

帰ってきて早々、目を回している春野さんを見た島田さんに怒られる一幕があったが、春野さんが許してくれたこともありことなきを得た。本当にごめんね？

「明久、よくやった」

雄二がらしくもなく僕を素直に褒める。その顔は満面の笑みだ。それはもう、ムカつくくらいに。

「さては貴様、校内放送を聞いたな？」

「ああ。バツチリだ！」

くそっ！ 人の不幸を喜んでやがる！ 許せん！ ……ただ、今は。今はこいつではないのだ。僕が今制裁を下さなければならぬ相手は。ああ、何処に。何処にいるんだい須川君？ 早く、早く逢いたいよ……。

「明久」

家庭科室からパクってきた包丁を僕の憎悪で研いでいると、後ろから伊御の呼ぶ声が

聞こえた。

「ああ伊御。須川君知らないかな？ 僕、今とくくつても逢いたいんだっ！」

「……あの放送なら雄二の仕業だよ」

「シヤアアアアッ！」

「おい伊御！ 裏切ったのかっ!？」

「自業自得だろ」

「こいつかつ！ コイツガゲンキヨウナノカ！」

狙うは急所！ 雄二の元まで一足で踏み込み、肝臓を目掛けて掬い上げるように包丁で突き出すが、さすが雄二。いきなりの不意打ちでも紙一重で交わした。さあ、次は貴様の愚息だ！

「あつ、船越先生」

……キィッ、バタン（イン掃除用具入れ

ちいつ！ 体育館裏に来ないから探しにきたのかっ!? 奴を仕留められないのは残念だが、今は僕の貞操が大事だっ!! ……あ、これがあの時島田さんが感じてた恐怖か。後で全力で土下座しよう。

「さて、暗殺者も片付けた。馬鹿は放っておいて、そろそろ決着をつけるぞ」

「そうじゃな。下校時間にちらほら人が見え始めたし、頃合いじやのう」

「じゃ、行きましようか姫」（ぎゅっ）

「は、はひ！」（借りてきた子猫のように）

「……ふむん。こう見ると美波さんが本物の百合に見えるんじやよ」

「ん〜？ 違うわよ？ ウチは姫を愛でてるだ〜け」（なでなで）

「えへへ」（少し嬉しそう）

「ダメじゃつ。いつもの美波さんなら大声で否定するのに、完全に姫たちの魅力にやられてるんじやよ！」

「仲良しでいいじゃないか。……みんな、いつてらっしやい」

「「「「いつてきますっ！」「」」」」

『……………』

……ふ、ふんっ！ 今の僕は本当に怒ってるんだ。べ、別にあの暖かな雰囲気羨ましいわけじゃないんだからねっ！！ ……………ぐすっ。

「明久」

そんな掃除用具入れでいじけてる僕に声をかけてくれた伊御。ああ、やっぱり伊御は優しいね。そんな伊御の優しさに触れたいけど、僕は今出れないんだ。この教室に船越

「船越先生の事なら、あれは雄二の嘘だよ」 貴様あつ、雄二いいいいーっ！！

「その首落としてやらああああーっ！！」

僕は転がるように掃除用具入れから出て、雄二の後を追うように教室を出た。逃がさ
んぞ雄二いつ！

そして、憎悪を連れて教室を出る僕の耳に聞こえてきた声……。

「ふう、全く。……いつてらっしやい、明久」

……伊御の優しげな声が、僕の背中を押した。



□ 渡り廊下、Dクラス寄り□

『Dクラス塚本、討ち取ったりい！』

渡り廊下まで頭を低くして疾走してきた僕に聞こえてきた憎き雄二の声は、僕達を苦しめた塚本君を討ち取ったというものだった。どうやら雄二の作戦はうまくいつてるようだ。

下校している生徒に混じり、Dクラスの生徒をFクラス数人で囲みリンチを行うこの作戦。姑息だが効果的だ。

その証明として、僕の目線の端々で次々Dクラスの面々を討ち取って行く仲間達。真宵さんはみんなの援護（爆音）。島田さんは春野さんと二人一組で敵を屠って行く。

……けど、今の僕にとってはどうでもいい事だ。それよりも早く雄二を殺らないと！
「雄二、何処だ！」

先程の声は……確かあつちだ！ 雄二、貴様は今日で胴体とおさらばするんだ。せいぜい名残惜しむがいいっ！ 僕は雄二の元へ駆け出そうとしたその時。

「援護に来たぞ！ もう大丈夫だ！ 皆、落ち着いて取り囲まれないように周囲を見て動け！」

くっ！ あれはDクラス代表の平賀君！ そしてその後にいるDクラスの本隊。これでの渡り廊下に主戦力が集まっていることになる。

「本隊の半分はFクラス代表の坂本 雄二を狙え！ 残りをまた半分に分けて、片方は春野さんを獲れ！ もう片方は囲まれている仲間を助けるんだっ！」

「「「「おおうっ！」」」」

平賀君の号令の下、早速行動に移すDクラス本隊。あつという間に雄二と親衛隊の周りと、春野さんの周りをDクラスメンバーに囲まれた。親衛隊や島田さんがそばにいるとはいえ、こうなってくると戦況はかなり厳しい。

それに雄二が囲まれているから僕も近づけない。くそおっ！ 僕の憎き仇があっ！！

「Dクラス本隊のほとんどを俺達と春野が引き受ける！ お前達は確実に敵を数人で仕留めろっ！」

「させるなっ！ 本隊の者と二人一組で行動して確実に討ち取るんだ！」

自分の防備をさらに薄くする平賀君。平賀君はDクラス代表であり、Dクラス最高成績者だ。例えFクラスメンバーが数人襲って来ても、しばらくは問題ない。一番の脅威でもある春野さんは既に包囲済みだ。だからこそその自信なんだろう。

そして、気配を限りなく薄くした僕の視界に平賀君の姿が入った。もう間に邪魔な親衛隊が確認出来ないほどに防備が薄くなっている。……くっ。仕方ない！

「ハッ」で……獲る！」

こうなれば早く戦争を終わらせて、気が緩んでいるところで雄二狩ろう。……クツクツク、後が楽しみだ。

幸い平賀君の周りに近くには現国の竹内先生と古典の向井先生がいる。平賀君を討ち取れなくても、少しでもダメージを与えるっ！

「竹内先生！ Fクラス吉井が挑みます！ 試獣召喚っ！」

「馬鹿なっ！ 一体何処からっ!? ……チツ、応戦するっ！」

そして召喚される僕と平賀君の召喚獣。

現代国語

『Fクラス吉井 明久ー40点 VS Dクラス平賀 源二ー129点』

くっ。やっぱり点数が高い！

「ふんっ。誰かと思えば船越先生の彼氏君じゃないか」

「ち、違う！ あれは雄二が勝手に……！」

「そんなに照れなくてもいいじゃないか。じゃあ、僕の手で君に祝福を捧げよう」

「そう言つて得物を構える平賀君の召喚獣。……雄二を殺すときは苦しめて殺すことにしよう。……あつ。」

「……………」

「ん？ どうしたんだい彼氏君？ 自分から挑んでおいて、急に怖くなったのかな？」

「なに、直ぐに戦争も片付くだろうから恐怖は一瞬さ」

「…………ハハッ」

「？ なにがおかしい？」

「いや、これで僕もお役御免つてね」

「はあ？」

僕のもつたいぶつた返事に「なに言ってるんだこの馬鹿は？」つて顔をしてるけど。……君はもう終わりだよ、彼女の登場でね。

「あ、あの…………」（もじもじ）

「え？ あ、ああ姫路さん。どうしたの？ ここはAクラスは通らないはずだけど」

「Fクラスの姫路 瑞希です。えと、よろしくお願ひします」

「あ、こちらこそ……?」

「その、Dクラス代表の平賀君に現国で勝負を挑みます。さ、試獣召喚ですつ」
「……はあ、どうも」

戸惑いながらも勝負に応じる平賀君。……まあ、そうなるよね。

現代国語

『Fクラス姫路 瑞希ー339点 VS Dクラス平賀 源二ー129点』

ああ、アレは無理そうだなあ。あの点数差に、姫路さんの召喚獣の装備の凄さ。そして、未だどういいう状況か理解してない平賀君に姫路さんが襲いかかった。

「ぞ、ぞめんなさいっ!」

見た目召喚獣の数倍はある大剣を振りかざし、文字通りあつという間に狩られてしまった平賀君の召喚獣。これにより、FクラスはDクラスを討ち果たした。

【おまけ】

□補習室□

「な、何だ今の放送はっ?!」 あの声は……片瀬かつ! あいつはまたなんてことをっ!

……っ!」

バタンツッ!

「に、西村先生! これはどういうことですか!」

「さ、桜川先生っ! これは誤解です! また、奴らのいたずらですよ!」

「嘘を仰らないでください! ちゃんと証拠もありますのよっ!」

「しよ、証拠っ!?!」

「ええ。……ほらっ」(ぼちっ)

『た、頼む! 見逃してくれ! そんな拷問耐えられない!』

『拷問? そんなことはしない。これは立派な教育だ。補習が終わる頃には趣味が東〇テスト、尊敬する人は〇先生、といった難関大学を目指す学生に仕立ててやろう』

「っ!?! い、いやこれはっ!」

「西村先生っ! 確かに勉強は大切ですが、体罰をしてまでさせるものなのですかっ!?!」

「桜川先生私の話を……! そ、そうだお前達! お前達からも何か言ってくれっ!」

「……グスツ。桜川先生助けてーっ!」

「貴様らっ!!」

「西村先生っ!」

「は、はいっ!?!」

「……て……ました……のに」

「さ、桜川先生？」

「つに、西村先生は。やりすぎるとはあつてもつ……つ。生徒を大切に、つ、想っている人だとつ！ 尊敬、してつ……ぐすつ。信頼してましたのにつ。……ひつぐ」(ぼろぼろ

「っ!!? なつ……ぐつど、どうすればっ！ さ、桜川先生。私が、私が悪かったので……

泣かないでください。お願いしますっ」(オロオロ

(……怒られるより辛いだろうなあ)(…)

さすがに見兼ねた生徒により、誤解は解けたのだが……桜川先生はしばらく西村先生の顔を見れなかったという。

第7話

Dクラス代表 平賀 源二 討死

その報はFクラスで待機していた俺達の元にも届き、次の瞬間には教室が歓喜に沸いた。よかった、間に合ったんだね姫路さん。

「……よし、とりあえずは第1段階が終わったのかな？　ここから雄二はどうするんだろう？」(ぼふっ)

「さあ？　今日か明日にでも話すのではないかしら？」(ぴこっ)

「そうだね。とりあえず、今は喜ぼうか」(なでなで)

「……うん」(ぴっこぴい)

それからしばらく。つみきと2人で待っていると、明久達がいつものように騒がしく帰ってきた。

「おかえり、みんな」

「……「ただいまー！」「……」

みんなを出迎えてから、そこに雄二と姫路さんがいないことに気付く。

「あれ？　雄二と姫路さんは？」

「ふ、2人なら廊下で話しているよっ」

「……なんでそんなに慌てるんだ？」

「えっ!? ベ、別に慌ててなんかないよっ! 決して僕が姫路さんの眼中にないんなら

スカート捲り放題とか考えてないよっ!」

「「「「「「「「」」」」」」」」」

「……あつ」

「…………吉井?」(ニコツ)

「ヒイツ!」

そして下される女性代表の島田さんからの鉄拳制裁。卓袱台を巻き込んで吹っ飛ぶ明久を見て俺は嘆息した。俺は明久が飛んで行った所まで行き、しゃがんで小声で話しかける。

「明久」

「……ひゃ、ひゃひ? ひほ?(何、伊御?)」

卓袱台の残骸からのそのそと顔を出す明久。……中々に酷い顔だ。

「誤魔化したいのは分かるけど、わざわざ別の本心を言わなくても……」

「……隠そうと思つたら、つい」

「……ふう。何を隠そうとしたかはわからないけど、深くは聞かないから安心して」

「い、伊御っ。うっ……ぐすっ」

「……よしよし」(なでなで)

目元を腕に当てて泣く明久を慰めていると、後ろに皆が集まって来た。

「全く。こんな変態に甘くしなくても良いのよ、音無」

「伊御君は優しいですから」

「しかし考えることが突拍子も無さ過ぎるのう」

「馬鹿だからでしょ？」

「……むーっ」(イライラ)

「つみきさあくん。そんな明久さんにまで嫉妬しなくてもブハッ！」

ドンガラガツシャーン！

「ま、真宵さーんっ!!」

「……………#」

「……クスッ」

俺の後ろでまたはしゃぐ皆に、俺は笑みが溢れる。本当に騒がしくて……とても楽し

いクラスだ。

「おいおい。なに馬鹿騒ぎしてんだお前ら？」

「よ、吉井君？ どうしたんですかっ？」

そんなところに、遅れて2人が教室に入って来た。雄二は呆れながら、姫路さんに俺に慰められている明久を心配して駆け寄って来た。

「ああ。心配しなくても良いよ姫路さん。少し明久がやんちゃしただけだから」

「ぐすつ。……うん、大丈夫だよ」

「……ほつ。そうですか」

皆も揃ったところで、それぞれが帰る支度をし始める。……さつき明久から聞いたけど、雄二暗殺は失敗したらしい。中々に雄二もしぶといようだ。

秀吉や島田さん、姫路さん達と教室で別れ、俺達は帰路につく。俺とつみき達、明久達は帰る方向が一緒だからね。そういえば教室での別れ際、明久と雄二が姫路さんと何か話していたが……なにを話していたのかな？

「それにしてもさ」

「あん？」

「Dクラスとの勝負って本当に必要だったの？別にエアコンぐらいなら他の方法でも壊せたと思うけど」

「ああ、そのことか。理由は他にもある。前にも言ったが、Fクラス全体の士気の向上や伊御達の十分な補充試験期間、他のクラスにプレッシャーを与えるとか。あとはFクラスメンバー、特に春野を試召戦争に慣れさせることも理由だ」

「ほえ？ 私ですか？」

「ああ。振り分け試験がいい例だが、春野は緊張すると思わぬことをする時がある」

「ウンウン。西村先生にも注意されてたねん」

「はうう」

「また、春野はその性格からも分かるが戦闘に不向きだ。……なら簡単な事だ。攻めさせなければいい。だから試召戦争の雰囲気慣れてもらうことと、防御主体の戦い方身につけてもらうために試験を途中で切り上げて防衛戦に参加してもらった」

「そういうことね」

「す、すみません雄二君っ。お手間を取らせてしまつて……！」

「いや、気にするな。なんていったつて今回の戦争のMVPは間違いなく春野、お前だからな」

「ふええっ!? 私がですかっ!?」

雄二の言葉に驚く姫。と頷く俺達。

「今回の第一目標である前線の維持への貢献。Fクラス幹部の島田の救援。Dクラスの注意を引く囚役。それによるFクラスメンバーの負担の軽減とDクラス代表の油断を誘い、姫路をより近づけさせやすくするなど。……どうだ皆、異議はあるか？」

「……異議なし！」

「というわけだ。だから気にするな春野。今回は本当に助かった、礼を言う」
 「い、いえいえ！　こちらこそありがとうございます」

雄二に褒められ、さらにお礼まで言われてタジタジな姫。……うむ、可愛い。

「馬鹿なっ!?　あの雄二が礼を言うだどっ!?」

「こら明久、引つ掻き回すな」

「うっ！　ごめん」

まあ、明久の気持ちは分からなくもないけどね。雄二は基本、素直じゃないから。

「そして今回の功績を称え、これより春野をFクラス防衛隊長に任命する。頼むぞ、『戦場の天使』」

「はえ？　……ふええええっ!?!」

雄二の言葉に一瞬呆然とし、次には驚愕の声を辺りに響かせた。

「うむっ。納得の地位と配役じゃね！　これからはワタシ達のこと守ってねんっ、『戦場の天使』様☆」

「よかったわね。『戦場の天使』」

「これからよろしくね！　『戦場の天使』！」

「頑張つてAクラスを目指そう。『戦場の天使』」

「メチャクチャ恥ずかしいのでこれ以上はやめてくださいいいっ／／／／!!」

俺達は姫の渾名を連呼して、恥ずかしがる姫を愛でる。……うむ、可愛い。

「あ、話が逸れちゃったね。なら雄二、Dクラスの設備を手に入れなかったのは？」

「目的はAクラスだろ？ Dクラスの設備を手に入れてしまうと、一部の奴はこれからの戦争に反対し始めるかもしれないだろう？ その防止と、不満によるモチベーションの維持が理由だ」

姫のことといい、本当によく考える。こういう時、雄二が昔神童つていわれていたのが納得できるといつも思う。

「Aクラスに勝てるかな？」

「無論だ。俺に任せておけ」

「……ありがとう。僕の我儘の為に」(ボソツ)

「別にそんなわけじゃない。試召戦争は俺がこの学校に来た目的そのものだからな」

そう言つて夕暮れの春空を見上げる雄二。雄二は時々、こういうふうに見える時がある。勉強の話や神童の話をした時などにそれは顕著だ。……雄二の過去に何があつたかは詳しくは知らない。けど、雄二がその時考えている事はなんとなくだけ分かる。それは多分、勉強や学力なんかよりも大切なものがあるんだって事じゃないかと思う。……俺も、そう思うよ。雄二。

「目的の為に、明久にだつてきつちり協力してもらおうからな」

「了解だよ」

「なら、勉強しなくちゃじゃねえ」

「……ぐうう」

「真宵、あなたもよ」

「……ぐうう」

やれやれ。本当に勉強が嫌いだね、2人とも。

「ゲームばかりしてないで、少しは勉強するんだよ。明久」

「うう。伊御もゲームしてるのに、なんでそんなに頭良いの!? 理不尽だっ!」

「ちゃんと考えてやってるからだよ」

俺もゲームは好きだけど、夜通しとか一日中とかしない。要はメリハリだよ。時間を

決めてゲームと勉強を交互にするとかね。

「くっ! それであんなに凄技を繰り出す伊御はやっぱ理不尽だと思うんだ!」

「いいから帰って勉強しろ」

「……はいはい。教科書くらいは読んで……ん?」

明久はカバンを確認して、「僕、やつちやった!」て顔をした。どうやらカバン中に教科書の類がないらしい。……どれだけ勉強に興味がないんだ、明久は。

「はあ。皆、先に帰っていいよ」

「んじやな」

「うん。じゃあお疲れ。明久」

「お疲れ様じゃよっ！」

「明久君、また明日です」

「またね」

俺達は学校へとんぼ返りする明久を見送って、それぞれの帰路についた。



その日の夜。家で数学を解いていると、携帯に着信があった。どれどれ……明久からか。しかも電話。……何かあったのかな？

「もしもし。明久か？」

『あつ、伊御？ 今ちよつといい？』

「ああ。数学もキリのいいところで終わったし」

『うっ！ 伊御、勉強してたんだ』

「……学校にまで教科書を取りに帰って、明久は勉強してないのか」

『い、いやっ！ しようとしてたんだよっ!? けど、全然手につかなくて……』

「ん？ やっぱり何かあったのか？」

『……………えっと』

電話越しに言いづらそうな気配を感じた。…………ふむ。

「明久。学校でも言ったけど、無理に話さなくてもいいよ。…………そうだね、少し何か話そうか。そうすれば少しは気が紛れると思うから」

『伊御…………。うんっ、ほんとにいつもありがとう』

「気にしないで」

明久は確かに普通の人より馬鹿かもしれない。だけど、明久だって人間だ。悩みだつてあるだろう。俺で少しでも役に立てばいいけど。

『…………うん。伊御、僕の友達の話なんだけど』

「ああ」

『うーんと。僕の友達のA君がね、自分の好きな子…………Bさんと放課後にA君の教室で出くわしたんだけど、Bさんの手にはら、ららラブレターがあつたんだって』

「うんうん」

ほうほう、恋の悩みかな？

『でね。A君はBさんの好きな人を知っていて、それはA君の友達のC君なんだよ』

「ほうほう」

ふむふむ、三角関係かな？

『A君は最初は信じたくなって、C君へのラブレターを不幸の手紙だと頑なに思おうとしたんだけど……Bさんにこれはラブレターですって断言されちゃって……くっ』

「ふむふむ」

……あれ？　なんで今明久は悔しがったんだ？

『で、一応確認の為にそのラブレターは誰宛なの？　って聞いたらこのクラスの人ですってBさんは言うんだ。C君がいるこのクラスの！』

「……うんうん」

なんで明久はそんなに力強く話すんだい？

『Bさんの好きな人がC君であると確信したA君は、Bさんにその人のどこが好きなのって聞いたら……外見も好きだけど、何よりも中身が好きだつてっ！　そんな馬鹿なことがあるはずがないんだよっ！！　奴のっ……C君に良いところなんてカケラもないはずなんだ！』

「……………へー」

それから明久はC君がどれだけ酷くて、狡猾で、薄情で、残忍な奴であるかを朗々と語った。その話はいかにも体験したような、その場で見ているような臨場感溢れる内容だった。……というか、C君が行ってきた悪事の大半を俺は知っていた。

『Bさんにも言ったんだ。脳外科医に行った方がいいって！　けどBさんは頭がおかしくなったわけじゃないって言って、自分がどれだけC君を好きなかをぼつ……A君に話すんだ』

「……………」

それからも明久の話を聞いてただけど……どうしよう。全く隠す気が無くなってきた明久のせいかもしれないけど、気付いちやダメなことに気付いちやった気がする。

要は……

一、今日の放課後、明久が教科書を取りに行ったら自分の好きな人である姫路さんがラブレターを持っていた。

二、それが雄二宛であると「思い込んだ」明久が必死に説得しようとするけど、姫路さんは逆に明久に自分の好きな人の良いところを挙げていった。

三、姫路の想いについての折れた明久が、そこまで好きなら応援しなくちゃとその場では「良い返事が貰えると良いね」と姫路さんに言ったが、1人になって振られたという現実に打ちひしがれて俺に電話してきた。

つてことらしい。……どうしよう、多分合ってるぞこれ。明久は姫路さんの好きな人を隠す為にA、B、Cを使って話したんだと思うけど、本人がヒートアップしすぎて俺にそれぞれが誰であるのかバレてしまったぞ。

というか、明久は勘違いしてると思うんだ。だっておそらく、姫路さんの好きな人は……明久だと思うから。

姫路さんが話したっていう自分の好きな人の良いところっていうのが、雄二より明久に当てはまると思う。そして何より、今日の姫路さんの視線は明久にいつも向いていたし、仕草や動作だっていつも明久を気に掛けていた。

今日のお昼だってそうだ。他の人より断然優しい姫でさえ、今まで明久にお弁当を作りましたよ？なんて言わなかった（おかずはあげてた）のに、同じクラスになって初めての昼食で姫路さんは明久にお弁当を作ってくると言ったんだ。それぐらい、明久を意識してる。

でも、このことは言わない方がいいんだろな。これは2人の問題だし、そもそも恋愛なんてしたことない俺の予想や直感が外れることの方が大いにありうる。

だから俺は見守ろう。そうであっても、そうでなくても。これから少なくとも1年は一緒なんだから、流れが2人を引き合わせるまで、ね。

『……伊御ー？』

「ん？ どうしたんだい、明久？」

『いや、返事がなかったから寝ちゃったのかなって』

「流石に寝るには早いよ。でもごめん、明久の話を俺なりに整理してたんだ」

『そっか。で、どう思う?』

「んー。そうだなあ」

……けど。

「本当にBさんはC君ことが好きなのかな?」

『えっ!!? いやだって……』

友人のたれを思つて考えた予想や、感じた直感を少しは信じてもいいんじゃないかなつて。

「BさんがC君を好きだつて言つてたのを聞いたのかい?」

「えっ? いや、聞いてないけど……でもっ! 見ればわかるよっ!」

流れを少し誘導するくらいはいいんじゃないかなつて、そう思つたんだ。

「じゃあ、明久の話を又聞きで聞くことしか出来なかつた俺に免じて、友人A君に話してくれないかな? もう一度、落ち着いて、ちゃんと確認してみてごらんつて」

『……………うん。分かつた! そうしてみるよ!』

「ああ」

『伊御。長々と電話してごめんね』

「気にしてないよ。少しでも力になれたらよかつたよ」

『少しなんてものじゃないよ! 伊御のおかげでだいぶスッキリしたし!』

「それはよかった。じゃあ明久、頑張ってね”。おやすみ」
『おやすみ、伊御！』

俺は電話を切つて、窓際に近づき窓を開けた。夜空を見上げれば、星が様々な色をたえている。俺は夜に輝く星々を眺め、友人へメールを送った。

「頑張れ、明久。……頑張れ」

【おまけ】

「ふーっ。……伊御に電話してよかったなあ。伊御は自分のことに関してはニブニブだけど、他人のことに関してはすごく聡いからね」

「そんな伊御が、僕が勘違いしてるかもしれないって言うんだ。今度機会があれば姫路さんにちゃんと聞いてみよう。誰かは話してくれないとは思うけど、ヒントくらいならね」

「うんっ。なんかモヤモヤがスッキリした気がするよ！ さて、せっかくだし暗記ものぐらいしようかな」

「……………」

「……………」

「…………あれ？　なんで伊御はA君の話をしてたのに、僕に頑張っってなんて言っただら
？……………あれ？　…………あれっ!？」

第8話

昨日の夜は、結局伊御の言葉が気になって勉強が手に付かなかった。……ねえ伊御、気付いてないよね。ないよね？

僕の気のせいだと願いながら向かえた翌日。学校に登校してからも散々だった。伊御には笑顔で誤魔化されるし、1限目から船越先生に貞操を狙われるし、昼までテストだったしでホントもう辛かったよ……。ねえ伊御！ 笑顔で肩叩かないで！ やっぱり気付いてるよねっ!?

そして向かえた昼休み。僕達は食堂と購買に向かおうとしたんだけど、姫路さんが昨日の約束を覚えてくれていて僕達にお弁当を持ってきてくれたんだって！ いやっほうー！

僕達は急遽食堂と購買に行くのをやめて屋上に向かった。雄二と島田さん、そして伊御とつみきさんの4人は僕達の飲み物を買ってきてからこつちに来ることになってい

る。
青空の下、僕達は今ビニールシートにみんなで座って姫路さんがお弁当を出すのを待っていた。

「あの、あまり自信は無いですけど……」

「「「「おぉー！」」」」

そして開かれた重箱の中身は、唐揚げやおにぎり、エビフライなどの定番メニューが詰まっている。

「それじゃあ雄二達には悪いけど、先に「いただきじゃよっ！」あっ！ズルイよ真宵さん！」

「真宵さんっ。お行儀が悪いですよ？」

「ふへへい！早い者勝ちじゃよ！」

素早く重箱からエビフライを摘みとった真宵さん。そして流れるように口に運び……。

「あーんっ」

パクっ……。パタンッ（ガタガタガタッ

豪快に顔から倒れ、小刻みに震えだした。

「「「……………」」」

「ま、真宵さんっ!?!」

「わわっ、片瀬さん!?!」

顔を見合わせる男衆と、ワタワタと慌てる女の子達。しかしそんな僕達を他所に、真

宵さんはムクリと起き上がった。

「……な、ナンテウマインダー」(グッ)

……真宵さん、立てた親指や脚がまだ震えているよ？

「あ、お口に合いましたか？ 良かったですっ」

「真宵さん大丈夫なんですか？ 顔から倒れられましたけど」

「……アマリノオイシサニオドロイタノ」

「そ、そうですか？」

「ウン。ゴシンパイナク」

真宵さんっ！ なんでカタコトなんだい!? しかも口調がいつもと違うんだけどっ

!?

「皆さんも良かったらどんどん食べてくださいね？」

「う、うん。……あ！ やっぱりみんな揃って食べた方が美味しく食べられる気がする

から待ってよーかなあっ！」

「そ、そうじゃのう！ それがよいのう！」

「……………」(コクコクコクッ)

「それもそうですね。皆さんを待ちましょか」

「はあひい。そうですねえ」

僕達の言動や挙動に何も疑問を持たず、春野さんと姫路さんはホワワンと座って皆が来るのを待ち始めた。……よしっ！ なんとか時間を稼げた。今のうちに現状把握と作戦会議だ！

僕達は未だ虚ろな目をして座っている真宵さんも輪に入れて小声で話し始めた。

(……真宵さん、大丈夫？)

(……一瞬、お花畑と川が見えたんじやよ)

それ三途の川つてやつじやないのっ!?

(そ、想像以上にやばそうじやな)

(……)(コクコク)

僕達は表面上は笑顔で会話する。この会話や僕達の動揺を姫路さんに知られるわけにはいかない。彼女はとても繊細なんだ！

(2人とも。胃袋に自信ある？)

(僕はジャガイモの芽程度ならなんともないが、果たしてそれで耐えられるかどうか……)

(……)(ふるふる)

(……僕も自信ないよ。食事の回数が少なすぎて胃が退化してるから)

(……個人的な感想じゃけど、何か薬品めいた味がした気がするんじや……)

う、だめ……」（パタンッ

（真宵さーんっ！）

僕達が表面上は笑顔で会話している中、真宵さんが限界を迎えたようだ。……真宵さん、君の犠牲は無駄にしないよっ！

「……あれ？ 片瀬さんは眠ってしまわれたんですか？」

「う、うん！ テストが大変だったみたいだね！ 春野さん、真宵さんを膝枕してあげてよー！」

「は、はひ。わかりました。……しよっ」（なでなで

「………」（チーン………

真宵さん。せめて天使の膝の上で安らかに。

僕達はその後も対策を練ろうとするが……ダメだ！ いい案が浮かばない！ そして……。

「おう、待たせたな！ へー、こりゃ美味そうじゃないか。どれどれ？」

飲み物を買って来てくれた雄二達が登場した。

「こら雄二。行儀が悪いぞ」

「ちゃんとお箸で食べなさい」

「そうよ。別に逃げるわけでもないんだし」

「いいじゃねえか。飲み物買ってきたんだしこれくらい。……よつと」
「あ、雄二……」

僕達が止める間も無く、雄二は素手で卵焼きを口に運び……。

パクッ……バタンッ（ガタガタガタッ

お茶のペットボトルを辺りにぶちまけて倒れた。

「っ!?!」(ビクッ!)

「お、おい雄二! どうしたんだ!?!」

「坂本、大丈夫なの!?!」

御庭さんが耳と尻尾を立てて驚き、伊御と島田さんが倒れた雄二に駆け寄る。

(（間違いない。こいつは本物だ……))

僕、秀吉、ムツツリーニは顔を見合わせ頷く。

すると、雄二が倒れたまま僕の目をじっと見て、目でこう訴えて来た。

《毒を盛ったな》と。

《毒じゃないよ。姫路さんの実力だよ》

そう目で返して、僕は膝枕されている真宵さんを見やる。……ヨダレを垂らして時々

震えてるんだけど、大丈夫かな真宵さん。

雄二も僕の視線を追い、真宵さんを見てやつと信じたようだ。僕達はいつも一緒にいたからこうやって目で語れる。こういう時はすごく便利だ。

「あ、足が……攣ってな」

姫路さんを傷つけないように嘘をつく雄二。昨日の姫路さんが放課後で言っていたように、女性には優しいかもしれない。

「いや、そんな倒れ方じゃなかったと思うが……」

（伊御、話を合わせろ！）

雄二は疑う伊御に小声でそう言って、それを聞いた伊御はため息を一つして頷いた。流石伊御、現状を把握したみたいだ。

「……まあ、そういう倒れ方もあるか」

「……本当にあるのかしら？」

疑う御庭さんだが、伊御が言ったことだから深くは考えないことにしたらしい。ナイス、ラブの力！

「あはは。ダッシュで階段の昇り降りしたからじゃないかな？」

「うむ、そうじゃな」

「……………」（コクコク

「そうなの？ 坂本ってこれ以上ないくらい鍛えられてると思うけど」

島田さんはまだ不思議そうにしてるな。余計なことを言いだす前に退場させた方がいいかな。

僕はそれから島田さんを巧妙な話術（ただの嘘）で屋上から退場させた。よし、これでリスクは低減された。

「真宵は寝てるのかしら？」

「はひい。テストで疲れてしまったみたいで……」

「普段から勉強してないから疲れるのよ」

「あはは……」

そして鋭い御庭さんもいつもの輪に加わって話し始めた。これでさらにリスクは下がったはずだ。

「……それで、なんで姫路さんに本当のことを言わないんだい？」

（伊御！ しーっ、しーっ！）

普段の音量で話す伊御を手を掴んで無理矢理座らせ、小声で話すように言う。せつかく隠しているのにバレたらどうするんだ！

「??？」

「ああ、なんでもないよ姫路さん」

あははと笑って誤魔化する。……よし、なんとか誤魔化せたようだ。

(それで? なんで隠すんだ?)

(姫路さんは他の子達と違って繊細なんだ。そんな傷つかせるようなこと言えないじゃないか!)

((コクコク))

何を言ってるんだ伊御は! いつもの優しすぎる伊御らしくない。

(……はあ。ことういうのはどうやっても傷つかせてしまうものだよ。俺たちに出来るのは、その傷を浅く済ませるか深く済ませるかなんだ。なら、浅く済ませてしまう方がいいんじゃないか?)

(ぐうっ)

ぐうの音も出ないとはこのことか。いや言っちゃったけど。ってそうじゃなくて、なんて正論を並べてくるんだ! 何か反論しないと……そうだ!

(伊御、今日のところは隠し通そう! そして後日、伊御と僕、姫路さんと一緒に料理を作って姫路さんが間違っていたことを自分で気付かせるんだ。そうすればそれこそ姫路さんの傷は最小限で済む!)

姫路さんは自分の間違いを僕達に気付かれなくてよかったってなるはずだ。うん。

我ながらナイスアイデアだ!

(……………はあ。俺は言ったからな。万が一があつたら明久が謝るんだよ?)

よっしやーっ! ああの伊御を説き伏せた! 今日僕は誰よりも輝いてるよっ!
(それで、あの重箱の中身はどうするんだ?)

僕の輝きはあつという間に消え失せた。

(明久! 次はお前が行け!)

(む、無理だよ! 僕だつたらきつと死んじやう!)

(片瀬の話だと、薬品めいた味がしたそうじゃ。それを聞かされると儂も食べたくないのう)

(……………)(ふるふるふる)

(薬品めいたって…………。姫路さんは何を料理に入れてるんだ?)

少なくとも洗剤では済まないと思う。

(雄二が行きなよ! 姫路さんは雄二に食べてもらいたいはずだよ!)

(そうかのう? 姫路は明久に食べてもらいたそうじゃが)

(そんなことないよ! 乙女心が分かってないね!)

(…………明久。昨日言ったと思うけど)

(わーっ!)

やっぱり伊御気付いてるよねえっ?! 伊御は聡いから気付いたのは仕方ないかもし

れないし、誰かに無闇に話したりなんて絶対にしないとと思う。けどどちよいちよい絡めてくるのはやめてほしい！ 色々恥ずかしくなるから！

（明久が乙女心？ 馬鹿も休み休み言え。この中で誰よりも分かってないのはお前……）

（ええい、往生際が悪い！）

「あつ！ みんな、アレはなんだ！」

「えっ？ なんですか？」

「ふえ？ 何ですか？」

「ん？」

女性陣が僕の差した方向を見たうちに……っ！

（おらあつ！）

（もぐ）ああおつ!!）

雄二の口の中に重箱の中身を口いっぱい押し込み、無理矢理咀嚼させた。何事にも犠牲はつきものだ。ありがとう雄二、君のおかげで僕達の平和は守られた。

「ふう、これで万事解決！」

「……お主、存外鬼畜じゃのう」

「……………」（コクコク

「……明久」

やめて伊御！ そんな目で僕を見ないで！ 僕は君の平和も守ってあげたんだよ？

「ごめんごめん。僕の見間違いだったよ」

「あ、そうだったんですか」

「明久君はおつちよこちよいですね」

こんな古典的な手に引つかかってくれる2人が少し心配になる。変なものに引つかからないといいけど。

「……」

……ヤバイ。御庭さんが何か気付き始めている。流石に彼女には厳しかったか。ならば対御庭さん最終兵器！

「伊御！ 御庭さんが少し寂しそうだよ。構ってあげて！」

「にやつ!? べ、別にそんなにやことにやいわつ」（プイツ）

「……………ふむ」

伊御は恥ずかしがって顔を逸らした御庭さんに静かに近寄り……。

「にや、にやによ?」（チラッ）

「……君のさみしがり屋な心に、寄り添いに来たよ」（キメ顔）

「~~~~~つ／／／／／ぶはっ!」（一発KO）

流石伊御！ 僕ならそんな言葉、恥ずかしくて言えたものじゃないっ！ これで僕の目論見通りとなったんだけど、伊御の破壊力は広範囲に渡ったらしい。

「……（ぷしゅ）／＼／＼／＼／＼」（鼻血タラタラ）

「あう、えつと……／＼／＼／＼／＼」

「……う、む……／＼／＼／＼／＼」

2人の女性陣も大ダメージを食らったようだ。……秀吉、君は男だよな？ だからそんなモジモジしないで！ 君が女の子にしか見えなくなっちゃう！

「…………っ！」（パシヤツ、パシヤツ）

秀吉の可愛さにムツツリーニもカメラを連写してる。……後で写真の焼き増しをもらおう。

「姫路さん。お弁当美味しかったよ、ご馳走様！」

「……はっ！ ……あ、早いですね。もう食べちゃったんですか？ ……よ、吉井君がいるのに……私つたらっ」（ボソツ）

「？ うん。特に雄二が「美味しい美味しい」って凄い勢いで」

視界の隅で倒れている雄二が震えながらも首を縦に振る。これで姫路さんの好感度は上昇だよ。……だから伊御、その目をほんとにやめて。雄二には悪いとは思ってるし、まだ姫路さんに確認は出来てないけど、この場は黙って収めてお願い。

「そうですかー。嬉しいですよ」

姫路さんは本当に嬉しそうにそう言ってくれた。ウンウン。これで全部丸く収まっ
「あの一、実はですね。……デザートもあるんです」。

「ああ姫路さん！ アレはなんだっ!？」

「待って明久！ 次は流石の雄二もきつと死ぬぞ!？」

流石に見兼ねたのか、伊御が僕を止めにかかる。止めないで伊御！ 1人の犠牲で全
てが丸く収まるんだ！

（明久！ お前は俺を殺す気か!?)

（仕方がないんだよ！ こんな任務は雄二にしか出来ない！ 僕達の命運は君にかかっ
てるんだ!）

（貴様らの命運など知ったことか!）

（この意気地なし!）

（そこまで言うならお前にやらせてやる!）

（なっ！ その構えはっ！ ……貴様っ！ 僕を殺してから口の中に詰め込むつもりだ
な!）

（察しがいいじゃねえか！ さあ、齒を食いしばれ!）

（大人しくやられるものかあっ!）

今の奴は瀕死。返り討ちにしてやるっ！

そして僕達が死闘を演じようとしたとき、すつと伊御が立ち上がった。

(……俺が食べるよ)

(伊御!? 無茶だよ、死んじやうよっ！)

(俺のことは率先して犠牲にしたよな!?)

何を当たり前のことを。優しさの詰め合わせである伊御の方がアホ雄二より大事なのは当然じゃないか。じゃなくて。

(それに今回は伊御は関係ないでしょ！ 伊御は僕達と違って姫路さんに素直に話そうとしてたのに)

これは隠し通すと決めた僕達の業だ。伊御に背負わせるわけにはいかない！

(いや、無関係ではないよ。俺もなんだかんだと隠すことに同意したんだ。なら、明久達と同じだよ)

そう言つて微笑む伊御。……ヤバイ、伊御が聖人すぎてヤバイ。

((……))

ほら見て。押し付け合いをしてた真つ黒な僕達じゃ伊御を直視できないよ。自分達の良心の呵責に胸が締め付けられそうだよ。

「あつ。スプーンを忘れちゃってますね。私取ってきますっ」

そんな僕達に気付かず、スプーンを取りに教室に戻っていった姫路さん。今の僕達の周りには、すでに脱落している真宵さんと、ときめきダメーじから回復してない御庭さんと春野さんだけだ。食べるのなら今なんだけど……。

「じゃあ、この間に食べておこうかな」

そして、ゆっくりとデザートに向けて歩き出す伊御。だ、ダメだ伊御！ 考え直すんだ！

「……」

僕達は強敵に立ち向かう心の優しい聖人を見送る。……そ、そうだよ！ ぼ、僕達は押し付けたわけじゃない。伊御が自分から食べるって言ったんだ！ さつき自分で言っただろ？ 一人の犠牲で全てが丸く収まるんだ！ いいじゃないか！

「……さてと。……南無三」

「……」

伊御は怯えを一切見せずにデザートに手を伸ばし、口元に持って行って、そして……。

「……うおおー！！」

「わっ。……あ」

「……あああー！！」

僕達はもう耐えれなかった。自分達が招いた災いを、どうして心優しい友に押し付けることが出来ようか。いや、いくらクスだと自覚ある僕達でも出来るはずがございませんっ!!

僕達は伊御が手にしたものを奪い、残っているものも全部それぞれが持つて一気に口の中に放り込んだ!

「……はっ! 自分のケツぐらい自分でボはあつ!」

「……全くお主はお人好しじゃゴばあつ!」

「……素直じゃ(ボタンツ)」

各々がそれぞれ何かを誤魔化すように言い捨て、散っていく。そんな僕達を呆然と見つめる伊御に、最後に残った僕が決め台詞を言い放つ!

「……伊御、押し付けようとしてごめんなブほあつ!」

そして僕の意識はブラックアウトした。

【おまけ】

□伊御以外倒れている屋上□

「……………」

「あ、お待たせしまっ!! えっ、皆さんどうしたんですかっ?」

「少しウチがいない間に何があったのよ音無!」

「……えーつと。テスト疲れと自業自得、かな?」

「[??]」

「あと、姫路さん。明久達がデザートご馳走様だつて」

「え? あつ、食べちゃったんですか?」

「ちよつと! ウチ何も食べてないんだけどっ!」

「俺もなんだ。だから島田さん、購買の残りものを買いに行こうかなって思うんだけど、食べる?」

「……はあ。仕方ないわね、ウチも行くわよ音無」

「ん、じゃあお願いしようかな」

「……よかつた。食べてくれました」(ボソツ)

「明久は喜んでたよ、姫路さん」

「ふえっ。そ、そうですかっ／＼／＼／＼」

(……やつぱり予想通り、か)

「……むーつ。……やつぱり、こういう女の子っぽいことをした方がいいのかしら?」
(ボソツ)

(……もしかしてとは思ってたけど、島田さんもか。……モテる男は辛いね、明久?)

第9話

地獄の昼食を死屍累々ではあつたが、乗り越えた僕達。その後、伊御と島田さんが買ってきてくれた購買の残りパン（半額）を皆で食べながら軽くこれからの方針を話し合つた。伊御の優しさに僕達は咽び泣いたよ。

雄二が言うには、僕達はどう足掻いても正攻法ではAクラスには勝てないらしい。だからBクラスを倒して、そのBクラスに設備を取り替えないことを条件にAクラスに攻め込むよう交渉する。そしてAクラスには僕達がBクラスとの勝負の後に攻め込むぞつて交渉する。そうすることで僕達に有利な一騎打ちに持ち込むのが雄二の策だ。

一騎打ちならば姫路さんに伊御、御庭さんがいるから、勝率はかなり高くなる。さすが雄二だ。こういうことに関しては頭の回転が早い。

そして問題のBクラスへの宣戦布告なんだけど……。予想通り、雄二が僕に行かせようとした。そう何度も騙されるものかつ！と拒否したのだけど、雄二の卑劣な罠に掛かり結局僕が行く羽目に。

そんな時、伊御が自分が行くと言いだした。どうやら、まだDクラスの宣戦布告に僕を行かせたことを悔やんでいたらしい。伊御、君はほんとお人好しが過ぎるよ！ た

だでさえ今日だけでも大変迷惑をかけてるのに、伊御に行かせる？ ……行かせるわけがないだろっ！

と、いうわけで伊御が行く前に僕が屋上から全速力でBクラスに宣戦布告をしに行つた。予想通り、僕を集団リンチしようとしたけど……ナメるなッ！ 今の僕には聖人（伊御）の加護が付いてるんだ！ 貴様ら程度が僕の彼への信仰心を下げると思うなっ！！

そんな死闘を乗り越えた僕は加護のおかげで被害は軽微、相手を思わぬ反撃で苦しめることに成功した。……午後のテストは力尽きてしまったけど。

そして、僕達は翌日のお昼からBクラスと試召戦争を行うこととなった。



翌日、Fクラスにて。

「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

教壇に立った雄二が皆を見渡しながら、話し始めた。

「午後からBクラス戦を開始する訳だが……殺る気は十分か？」

「……………おおうっ！……………」

「今回の戦争は敵を教室に押し込めることが重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けられない。そこで……」

雄二は隣にいる伊御と御庭さんに視線を向け、それを受けた2人は一步前に出た。

「伊御と御庭。この2人を先鋒として渡り廊下を駆け抜けてもらう！ 2人とも、遠慮なく屠ってこい！」

「了解」

「ん」

「2人には迅速に渡り廊下戦を行ってもらう為、敵が溢れる可能性が高い。なので2人の後追いとして、姫路が指揮する部隊に残りを殲滅してもらう。野郎ども、きっちり死んで来い！」

「が、頑張りますっ」

「[[[[うおおおー!!]]]]」

雄二の言葉に、一步前に出てむんつと気合いを入れる姫路さん。そしてそんな姫路さんと前線で戦える皆の士気は最高潮に達していた。

今回は伊御と御庭さん、姫路さんによる初っ端からの全力戦だ。その為、姫路さんの部隊にFクラスの殆どをつぎ込む。取り零した敵を確実に包囲し殲滅することで、教室に押し込めた後の戦を有利にする作戦だ。

キーンコーンコーンコーン

昼休み終了のベルが鳴り響く。これでいよいよBクラス戦開始だ。

「よし、行って来い！ 目指すはシステムデスクだ！」

「「「サー、イエッサー!!」」」

「それじゃ、行こうか。つみき」(ぼむっ

「ん、頑張る」(びこびこ)

「2人とも！ 後ろは気にせず戦って！ 僕達が背後の不意打ちなんてさせないから

！」

「ああ。任せたまよ、皆」

「「「任された!」」」

さあ、僕達の力を見せてやるぞっ！ Bクラス!!



俺はつみきと一緒に廊下を駆ける。俺達は孤立するし、敵の得意な科目で対決するところになるけど……多分、大丈夫かな。

「伊御、敵発見」

「うん。高橋先生を連れてるね」

疾駆している俺達とは違い、Bクラスの面々はゆっくりとした足取りだ。けど、走ってくる俺とつみきを見て慌てた。……ふむ、数は10人程度。やれるな。

「お、おい！ 音無と御庭がこちらに向かつてくるぞ！」

「焦るな！ たとえAクラスレベルといえどたつた2人……待て！ 奴らの後方に大勢

見える。奴ら、短期決戦が目的か!？」

「伝令！ Bクラスに応援を要請して！ ここで音無君と御庭さんは仕留めておきたいわ！」

応援はこつちも願ったり叶ったりだ。敵を押し込めるにしても、少ない方が後々やり易い。

「つみき、敵を無理に殺さなくてもいいよ。俺たちは皆が倒せるくらいまで削りながら突き進むのが役割だからね」

「うん」

「じゃあ……」

「試獣召喚っ！」

俺とつみきの声を皮切りに、Bクラス戦が開戦された。



伊御と御庭さんの声に、2人の召喚獣が呼び出される。

伊御が呼び出した召喚獣は、黒を基調とした紅がアクセントとなっている軍服を着ていた。目元には片眼鏡、地面を踏みしめるブーツ、そして肩に羽織られた黒のロングコート。極め付けは、その手に持つ服と同じ黒と紅の長剣。……敵の血を啜りそうだ。色合いやキリツとした伊御の面差しも合わさって、いかにも『悪の帝国国軍の將軍閣下』みたいな召喚獣………ねえ。

「伊御の召喚獣カッコ良すぎない!？」

「いや、俺の意思とは無関係なんだが。俺はこんなイメージなのか？」

僕は少し遠くから伊御にツツコんだ。違うよ伊御! 普段のイメージとは真逆で召喚されたものだからインパクトが強いんだよ! 人はそれをギャップ萌というんだ! ほら見て、隣の御庭さんが鼻を抑えてるよ。

そんな御庭さんの召喚獣は……あれ? ネコミミと尻尾が生えてる! 召喚獣って人の耳を尖らせたような耳なのに、御庭さんの召喚獣にはそれが無い。……まさかそんなところまで如実に再現されるとは……恐るべし試験召喚システム!

装備は見た目通り機動重視。緑と薄紫の涼やかな色合いで、ブーツとハーフパンツに

布の胸当て、裾が短めのローブを羽織ってる。武器は短剣を二本装備していて、『森を守る猫族の護り人』ってイメージかな？

そして表示される総合科目の点数は……。

総合科目

『Fクラス音無 伊御ー3118点 VS Bクラス野中 長男ー1943点』

総合科目

『Fクラス御庭 つみきー3562点 VS Bクラス金田一 裕子ー1895点』

ぶほおっ!? ……3000越えっ!? Aクラスの平均超えてるよ!?

「なあっ!? こ、こんなの勝てるわけない!」

「なんであんた達みたいなのがFクラスにいるのよっ!」

「問答無用」

そして目にも止まらぬ速さで敵を両断&三枚下ろしにする2人。強い、強すぎる!

それからは2人の三國無双だった。……こう、「り、りよりよ、呂布だーっ!!」って感じ。時々、召喚獣が空を舞うんだ……。でも、さすがはBクラスってことで2人の猛攻を凌ぐ奴もチラホラいる。それらを狩るのが僕らの役目だ。

「ゲへへエ。あの世に送ってやるぜお嬢さん」

「怖いでちゆね。ママ来まちなね」

「ヒヤッハーツ！ 優等生は消毒だあ！」

「ねえねえ。補習室と実験台、どっちがいいかにや？」

「いやーっ！」

「た、助けてっ！ 助けてマンマーっ！」

「補習室はっ、補習室は嫌だー!?」

「お、俺は補習室だっ！ 西村先生！ 早く俺を補習室につっ！」

……………完っ壁に悪役だよね僕ら。どこの世紀末だよ。…………ん？ どうやらBクラスの援軍が来たみたいだ。高橋先生を下げて、古典の向井先生に入れ替えてる。得意の文系で進行を食い止めるつもりだな。

因みにだけど、僕達は今回先生を呼んでいない。伊御達が消耗させた人達を狩るようになるため、同じ教科でないと意味が無いからだ。

古典

『Fクラス音無 伊御ー225点 VS Bクラス 岩下 律子ー210点』

古典

『Fクラス御庭 つみきー270点 VS Bクラス菊入 真由美ー191点』

くっ！流石得意科目だっっていうことはある。御庭さんとはかく伊御がほとんど変わらない！

「真由美！ 2人で力を合わせましょう！ そうすればあんな奴ら私達の敵じゃ無いわ！」

「そうね律子！ 私達のコンビネーションを見せてあげるわっ！」

「そう言つて2人掛かりで伊御と御庭さんに迫る2人の召喚獣。……あの2人、もぐりだな。」

「だって、つみき」

「別に、そう思わせておけばいいわ」

Bクラス2人の言葉を聞いた2人は自然体で迎え撃つ。まず伊御と御庭さんが左右に分かれた。

「律子！」

「ええ！ 狙うはそっちの男子！」

点数が低い伊御を2人掛かりで狙おうと伊御に意識が行つた瞬間、2人の召喚獣の背後にいる御庭さんの召喚獣。

「なあっ!?!」

「……飛んでけ」

そして1人をBクラス側に、もう1人を伊御の方に飛ばす御庭さん。伊御の方に飛んで行つた召喚獣がどっち女生徒のものか知らないが……終わつたな。

「いらつしやい」

「あつ!？」

空中で投げ飛ばされた状態じゃ、操作に慣れてないと何も出来ない。今日初めて召喚した女生徒じやあ待ち構える伊御に対してされるがままだ。案の定、上段切りがその女生徒を襲った。

古典

『Fクラス音無 伊御ー225点 VS Bクラス菊入 真由美ー0点』

いくら点数があろうと、致命傷は即0点だ。無抵抗に伊御の一撃を受けたんだ。当たり前の結果だった。

「真由美ーっ!」

「人の心配をしている場合なのかしら?」

「えっ!? またいつの間に!？」

Bクラス側に飛ばされた女生徒……岩下さんが突然現れた御庭さんの召喚獣になんとか反応した。

「きゃあつ!」

「逃さない」

しかし、御庭さんの二刀による激しい剣戟は続く。それにギリギリ致命傷は免れる

も、防御から次に移せない岩下さん。このままなら御庭さんの勝利だ。

古典

『Fクラス御庭 つみきー270点 VS Bクラス岩下 律子ー93点』

岩下さんの点数が3桁を切った。このままなら押し切れる。けど……。

「こおんのおっ!!」

「!」

焦れた岩下さんが、傷を負いながらも御庭さんを弾き飛ばした。肉を切つて骨を断つ……とまではいかないけど、生きてれば負けじや無い。

「くっ! ここは一度撤退してっ……」

「させないよ」

「なあっ!?!」

かなり離れていた伊御がいつの間にかすぐそばに来ていた。まあ、伊御が近づくと時間はあつたからね。

それにしてもあの岩下さんって中々やるなあ。今の伊御の一撃もギリギリで受け止めた。でも岩下さんももう終わりかな?

「ううっ! だ、誰か援軍をっ!」

「もう遅いわ」

「あっ……」

そして、伊御と鏝迫り合いをしていた岩下さんの背後に現れた御庭さんは短剣を振り抜き……。

斬っ！

と、首を一刀両断した。致命傷を受けた岩下さんの召喚獣は0点となり、補習室行きが決定した。

「そ、そんな……」

「お前が戦死者だな？」

「っ!? いやーっ!」

岩下さんが連れていかれるのを見送る。まあ当然だよな、だって……。

「うん。こんなものかな？」

「コンビネーション（笑）ね」

「……クスツ。そうだね、つみき」（ぼふっ

「……」（びっこびっこ）

コンビネーションであの2人に勝てるはず無いもの。……しかし、初めて召喚獣を操ったようには見えない戦いぶりだね、あの2人。……ぼ、僕のアイデンティティが脅かされそうだ。

「い、岩下と菊入が戦死したぞ！」

「なっ！ そんな馬鹿な!？」

「音無と御庭のコンビ。前情報が無かったから対処が追いつかないぞ！」

「今は大勢で2人を囲め！ これ以上Bクラスに近づけさせるなあ！」

うん？ ……あの2人がやられたことで、Bクラスに衝撃が走ってるみたいだ。そこ

そこのポジションだったのかな？ Dクラス戦に2人を出さなかったことがここので生きてきたな。

「さて、もう少しでBクラス前だ。Bクラス前に着いたら奥側につきみきが行って教室に押し込めて。俺は手前をやるよ」

「ええ、わかったわ」

「もう一息だ。頑張ろうね、つみき」

「うんっ」

そして2人は進軍を再開した。確かに他の生徒の点数は先の2人よりは低く、何より士気がガタ落ちた。たった2人を止められずに蹂躪されてるんだ。無理もない。

「さあみんなっ！ Bクラスは目の前だ！ あの2人に続けえーっ！」

「「「うおおおーっ!!」「」」」

僕もあの2人の活躍を利用して皆の士気を上げる。効果は絶大で、残党狩りが一層

拂っている。

「す、すごいですね。音無君と御庭さん」

後ろで指揮を執っていた姫路さんが僕のもとにやって来た。まあ、残党狩りなんて集団で囲んで終わりだから指揮することもないよね。

「あの2人は僕達と違つて埒外だから、当然といえば当然だよ」

「……お主も大概じゃとは思うがのう」

「またまたあゝ」

僕はごく普通の少しお茶目な高校生さつ！

「……………私も、あのお2人みたいに……………」(ボソツ

「?」 どうしたの姫路さん?」

「ふえつ。あ、なんでもないですよつ」

「そう? もし体調が悪かったら言つてね? 無理は禁物だから」

「はい。吉井君は本当に優しいですね」

「そ、そんなことないよつ。これくらい当然さ!」

「お主もわかりやすいのう」

シヤラップ 秀吉。

「おーい! 明久さーん、秀吉さーん!」

「ん？ あれは片瀬じゃな」

一時撤退していた片瀬さんが僕達を呼びながらこちらに走って来た。

「どうしたんの真宵さん？ 何かあった？」

「……実はそうなんじゃよ。明久さんと秀吉さんは私と一緒に撤退じゃあ」

僕達3人を撤退させるのか。本当に何かあったらしい。

「姫路さん。そういうことで僕達は一度戻るから、ここをよろしくね？ 頑張ってたって

言つてれば、皆は簡単に君のために死ぬ死兵と化すから」

「はい、わかりまし……えっ？ それはダメなんじゃっ……」

そして僕達は前線を離れ、Fクラス向かう。

「お二方はBクラスの代表が誰か知ってる？」

「うむ。根本 恭二じゃな」

「根本って、あの根本？」

「ういういう。あのとにかく評判が悪い根本じゃよ」

真宵さんの話を聞いて、少し不安になる。雄二がそんな奴にやられるとは思えないけど用心に越したことはない。僕達は少し足を早めてFクラスに帰還した。

【おまけ】

□ Bクラス戦前日□

「へー。Fクラスが次はBクラスを攻めるってのは本当だったのか」

「ああ。ところでEクラスの様子はどうか、榊？」

「皆、真宵が大声を上げて通るたびにビクビクしてるよ。雄二はこれも想定済みだったのかよ？」

「無論だ。Eクラスは部活で活躍する奴が多い傾向がある。真宵が一年の頃、色々な機械の実験に部活を回って恐怖を植え付けたことを知っていたからな。交渉の材料になると踏んだ」

「ヒューッ。さすが元神童、効果は絶大だったぜ」

「茶化すな」

「悪い悪い。それにしても、ふーむ。Bクラスか……」

「あん？　なんかあんのかよ？」

「いや、確かBクラスの代表って根本だったよな？」

「ああ。一年の頃からかなり目障りだったからな。この機会に潰させてもらう」

「……………」

「おい榊。何かあるなら言え、据わりが悪い」

「……伊御を気にかけてくれてくれよ、雄二」

「伊御を？」

「ああ。……もし、根本が “一線” を越えたら」

「……」

「……伊御が、キレルぞ？」

第10話

真宵さんに呼ばれて僕達がFクラスに帰ってみれば、酷く荒らされた教室が目に入ってきた。これじゃ卓袱台や筆記用具が使えない。僕達も汚い手や姑息な手、卑怯な手上等だが、なんだろう……根本君って器が小さいなあ。

どうして雄二が居ながらこんなことになってしまったのか。僕達がそう尋ねたら、どうやらBクラスから協定の申し出があり、調印を結ぶ為に教室を空にしていたらしい。……なんで協定なんか結んだんだろう。

協定内容は今日の午後4時までに決着がつかなかったら、戦況をそのままにして続きを明日の午前9時に持ち越す。そして、休戦期間中は試召戦争に関する行為を一切禁ずる。というものだった。

なんでこんなものを結んだのかと言えば、それは姫路さんの為だ。詳しくは知らないが、今回の作戦には伊御と御庭さん、姫路さんの力は不可欠らしい。だけど、姫路さんは2人と違って身体があまり強くない。だから明日に持ち越すことで万全の状態でBクラスを打倒するそうだ。

……でも、疑問が残るんだ。なんでこんな都合のいい協定をBクラスは結んだんだ？

教室を荒らしたからってだけでこんなことをするほど、根本君は甘い男なのだろうか。一応、気に留めておこう。

Fクラスは雄二達に任せ、僕と秀吉、真宵さんは前線へと戻る。すると前線では事件が起きていた。

「動くな！ それ以上近づけば、島田の召喚獣を殺して補習室送りにするぞ！」

Bクラスの生徒2人が島田さんとその召喚獣を人質にとっていたんだ！ 側には鉄人まで用意している周到さだ。なんて卑怯な！ でも、これならまだ理解できる。捕まった過程によつては捕まった方が悪いとさえ僕は思うね！

「島田が捕まってしまったか。伊御達は最前線で戦っておるし……。さて、どうするか」「んー。アレあつたかにや〜？ どこかにや〜？」（ゴソゴソ）

「真宵さん、何か打開策があるの？」

真宵さんは白衣の袖やポケットを弄って何かを探している。……。どうしてだろう。真宵さんがそうしていると落ち着かない。これは、そう……。なにを仕出かすか分からないからだなあ。

「う〜〜〜にやつ？ ……あつたにやー！」

「あ、それは『太陽君マークII』！」

「おーっ。それならいけそうじゃのう」

Dクラス戦で僕が使ったやつで、所謂フラッシュユグレネードだ。

「んでんでえ、このサングラスも合わせて誰かに使ってもらって、美波さん救出大作戦じゃー！」

「流石真宵さん！何か都合が良すぎる気がするけど、それならそれでいいよね！」

御都合主義万歳。

「では、誰に使ってもらうかじゃが……うむ、須川つ。少し良いかの？」（ボソツ

「ん？ ああ木下、なんだ？」（ボソツ

秀吉が現場へと近づき、召喚獣を既に召喚している須川君に真宵さんから渡してもらったサングラスを渡して、こちらに戻ってきた。

「明久、片瀬。例の掛け声で須川が動く。明久が奴らの気を逸らしたら片瀬が投げるのじゃ」

「了解（にやあ）！」

秀吉と真宵さんの策を実行に移す為、僕は現場に、真宵さんは僕から少し離れて現場付近へと移動した。……さて、やるぞ！

「島田さん！」

「よ、吉井！」

「そこで止まれえ！こいつがどうなってもいいのか！」

よしよし、こっぴちに意識が向いてるな。もう少し引き付けるか。

「君達の要求はなんだ！」

「俺達をBクラスまで無事に逃すことだ！」

「そうすればこいつを解放する！」

「……よ、吉井く（うるうるっ

「っ!?!」

し、島田さんが目を潤ませてる、だどっ?!? ……まさかつ!

「君は偽物の島田さんだなっ！」

「なんでそうなるのよ！」

なんでって、そりゃあ……。

「島田さんがそんな女の子らしいことするはずが「吉井、また廊下との逢瀬がしたいみたいね」やっぱり島田さんだね! 僕は信じてたよ!」

あの殺気、彼女は本物の島田さんだ。あれ程の殺気を放つ人は島田さんか雄二しか知らない。僕が島田さんの殺気に怯えていると……。

「SETツ！」

真宵さんの声が聞こえてきて、瞬間の閃光。

「なっ!?!」

「眩しっ!？」

「獲ったーっ!!」

古典

『Fクラス須川 亮ー63点 VS Bクラス鈴木 二郎ー21点 & 吉田 卓夫ー18点』

閃光の中、サングラスをかけた須川君が一気に2人を刈り取った。

「ようやく戦死したか。人質を取るなどという根性も合わせて教育してやろう」

「た、助けてえー……」(キィ、バタンツ)

これで悪は滅びた。……ふっ、正義は勝つん「ブオンっ!」だあっ!?

「し、島田さん!?! 何をするんだ!?!」

「チツ! 仕損じたか」

せつかく助けてあげたのに、なんでそんなことをするんだい!?

「これは明久が悪いのう」

「じゃねー」

ここに味方はいなかった。解せぬ。

「でも、なんで島田さんは捕まったの? 島田さんがそんな簡単に捕まるとは思えない

んだけど」

「えっ／＼／＼／＼！ べ、別に！ 油断しただけよっ！」

「フッフッフ。明久さくん、聞いたところによると明久さんのためじゃよ？」

「なっ／＼／＼／＼。ちよつと真宵っ!？」

「え、僕？」

僕がどうしたんだろう？

「明久さんが怪我をしたっていう偽情報が流れて、それを聞いた美波さんが戦線を離れて1人で保健室に向かったんじゃないかって」

「えっ」

「な、何よ……／＼／＼／＼」（プイッ

島田さんは顔を少し赤くさせて、僕から顔を背けた。……島田さん。

「怪我をした僕に止めを刺しにいくなんて、アンタは鬼かつ!？」

「違うわよ！ 吉井のバカッ！」

「アバすっ!？」

頬を打たれて吹っ飛ぶ僕。やっぱり鬼じゃないか！

「……ウチがアンタの心配をしちゃ悪いつての。バカ吉井」（ボソッ

「いやー。そんな風にすぐ手を出しちゃうから、明久さんが勘違いするんじゃないか
にやあ？」（ニマニマ

「少しは素直になつたらどうかのう」（ニヤニヤ

「な、なんのことよつ！／＼／＼／＼／＼」

「なんのことにやあ（かのう）？」（ニヨニヨ

「／＼／＼／＼／＼／＼」

ビンタが効いて、会話が途切れ途切れにしか聞こえないけど楽しそうだ。……別に仲間外れにされて悲しんでなんかないんだからねっ！ 僕には廊下さんがいるんだから！

「ほら明久。うつ伏せで拗ねてないで儂等も行くぞ」

「うあゝい」

僕達は伊御達がいる最前線へと向かった。



午後四時になり、Bクラスとの協定通り一時休戦となった。俺とつみきで敵をBクラスに完全に押し込むことに成功したから、明日からは出入り口で1対1の戦いとなる。これで雄二からの課題はひとつクリアだ。

「ん？ Cクラスの様子が怪しいだと？」

「……………」(コクコク)

今は康太が雄二に斥候として、入手した情報が報告していた。前回と今回の試召戦争では、康太は斥候として活動している。しかし、Cクラスがここで動き出すことは……。

「雄二。Cクラスの目的は漁夫の利、かな？」

「流石伊御だな。おそらくその通りだろう。いやらしい連中だな」

この戦争で勝利した方を相手に戦いを挑むつもりなんだろう。勝てばBクラスの設備だからね。

「雄二君、どうするんですか？」

「んー、そうだなー」

姫の問いに、雄二が時計を確認して少し考えてから口を開いた。

「Cクラスと協定でも結ぶか。Dクラス使つて攻め込ませるぞ、とでも脅してやれば俺達に攻め込む気もなくなるだろ」

「それじゃあ、行くかな」

「いや、伊御と御庭は休んでろ。今日はお前達が一番働いたんだからな」

「そうか？ なら、そうさせてもらうかな」(ぼふっ)

「お言葉に甘えさせて貰うわ」(びいびいっ)

「フラグ回収乙！」

「変なこと言う暇があったら走れボケ！」

僕達は現在、Bクラスに追われながら廊下を走り抜けていた。Cクラスに協定を結びに行ったら、そこに根本君が取り巻きとともに現れ、協定にある「休戦中は試召戦争に關する一切の行為を禁ずる」を盾に襲いかかってきたんだ。

「真宵！ なんかないのか！」

「美波さんを助けた時のやつが最後じゃよ！」

「くっ！ こんなことなら伊御達も連れてくるんだったね！」

「いや、Bクラスが連れてる先公は現国の竹内だ。今日の戦いで疲弊したアイツらじゃ
厳しい！」

そんなところも考慮してたつて言うのか。やっぱり根本君は甘いやつじゃなかった
みたいだね！

「はあ、ふう……」

「はあ、ひい……」

僕と雄二が話していると、姫路さんと春野さんが少しづつ遅れだした。運動が得意で
ない春野さんと、それに加えて体が弱い姫路さんじゃ全力疾走は厳しそうだ。

「み、皆さん、さ、先に行ってくださいいっ。わ、私が、囨になります、からっ」

まだ少し余裕がある春野さんが言う。彼女はFクラスの防衛隊長で、『戦場の天使』という戦場のアイドル的存在になっている。明日の戦争では前線の士気を上げるという役割がある。

「わ、私も、春野、さんと……残り、ますので」

姫路さんは息も絶え絶えに言う。彼女は春野さんと同じでFクラスの野郎どもの士気を上げる役割と、さらに明日には伊御達と一緒に重要な役割があったはずだ。2人も、ここで失うわけにはいかない。……仕方ない、か。

「雄二ー！」

「なんだ明久ー！」

「ここは僕が引き受ける！ 雄二達は姫路さん達を連れて逃げてくれ！」
僕は皆の為に、殿になることを決意した。



□ Fクラス前廊下□

「見事にフラグが回収されたわね？」

「余計なことを言わなかったらよかったな」

「後悔先に立たず、ね」

「その通りだね。つみきは点数大丈夫？」

「無理に倒す必要はないから問題ないわ。それに、操作に慣れた吉井もいる」

「そうだね。『観察処分者』は伊達じゃないよね、明久」



「いいいよいしよーっ！」

僕は召喚獣を操り、敵の召喚獣の後頭部を掴んで廊下に叩きつけた！ その場で鈍い音が響き、周りの皆は呆然としてるだけだった。どうよっ！

現代国語

『Fクラス吉井 明久166点 VS Bクラス真田 由香171点』

さっきの戦闘の参考用点数が表示される。やめて！ 点数が高い人と並べないで！

「な、なんでだよ！ 真田の方が点数が高いはずだろ!?! なんてあんな弱そうな召喚獣が強いんだよ！」

「あれ？ でも私の召喚獣、まだ生きてる」

そりやこの点数差じゃダメージは微々たるものだ。でも、1対1なら負ける気はしな

い！

「吉井、どういうこと？」

「美波さん、『観察処分者』の数少ない利点ってやつじゃよんっ☆」

「利点って？」

「要するに、召喚獣を操るのに慣れてるってことかな」

僕と一緒に残ってくれた島田さんと真宵さんと話しながら、敵の動向を伺う。

伊御と御庭さんはそうでもなさそうだったけど、普通なら召喚獣の操作はかなり難しいんだ。武器を振り下ろす、突撃するなんかの単純な操作ならできても、足払い、ジャンプで避けるみたいなアクロバットなものはかなり慣れないと難しい。その点、僕は雑用なんかで召喚獣をいつも動かしてたんだ。昨日今日操作し始めた人なんかに負けてたまるもんか！

「ぐ、偶然よー！」

敵が再度武器を構えて突撃してくる。さっきので怯んでくれたらよかったけど、そう上手くはいかないか。

「うりゃっ」

僕はそれを木刀で受け止め、受け流して隙だらけの胴を薙いだ。

現代国語

『Fクラス吉井 明久166点 VS Bクラス真田 由香135点』

よし！ この調子で倒すぞ！ そうやって意気込んだ矢先に隣から悲鳴が聞こえた。
「うにやあつ!!」

「真宵っ！ 大丈夫!？」

「あ、危なかつたんじゃよ……」

真宵さんの召喚獣が廊下に膝をついていた。武器である三角フラスコは廊下に転がり、白衣は汚れている。かなり点数を消費してみたんだ。

島田さんは春野さんに教わった守り方で真宵さんをサポートしながら一緒に戦っていたけど、流石に点数差が響いてきたか。

現代国語

『Fクラス島田 美波132点 & 片瀬 真宵114点 VS Bクラス工藤 信二1126点』

大分削ってみたいんだけど、これは流石に厳しいか。

「工藤！ そのままその2人を倒せ！ 俺達はいいつを確実に殺す」

「Fクラス相手に4人掛かりつても嫌だけど、そうも言ってもらえないな」

くそっ！ 後ろで高みの見物決め込んでた3人がこっちの戦線に加わってきた。流石にあの点数差で4人掛かりは無理だ！

僕が迫り来る4つの武器に必死で対応しようとした時、僕の後ろから友の声が聞こえた！

「Fクラス音無 伊御」

「同じく御庭 つみき」

「試獣召喚っ！」

「伊御、御庭さんっ！ 来てくれたんだね!!」

召喚された2人の召喚獣は、伊御は僕の、御庭さんは島田さん達の援護に来てくれた。助かった！ 点数を消費してる2人だけど、これならそう簡単には負けない！

「な、バカな！ 援軍だどっ!？」

「し、しかも音無と御庭だ。勝てる気がしねえ！」

「馬鹿っ！ 2人はこの科目を消費してるはずでしょ！ 落ちていて倒すのよ！」

Bクラスの動揺はすぐに収まった。やっぱりその辺りも計画に含まれてたんだ。伊御の点数は101点、御庭さんは134点。これならギリいけるか？

「伊御、ここで倒しきる？」

「うーん。……いや、ここは無理せず撤退しよう。島田さんと真宵が危ないからね」

「了解！ なら……。真宵さん！」

「あいあいさーっ！」

御庭さんが来てくれたおかげで離脱することに成功した真宵さんに、合図を送った。細かいことは何も話してないけど、一年間遊んで（悪巧み）来た僕達なら意思疎通は楽勝だ！

「これで終わり」

「なっ、そんなっ……！」

真宵さんが準備してる間に御庭さんが敵を屠つたらしい。流石御庭さんだ！

「工藤がやられたっ！」

「クツソっ！ 真田、泡瀬！ お前達が御庭を抑えろ！」

「ざくんねんっ！ 時間切れじゃよっ☆」

そして準備が終わった真宵さんの消化器が火を吹いた。

……ブツシャアアッ！

僕達はそれに乗じて戦線を離脱することに成功した。



その後、教室に帰って来た僕達に姫路さんと春野さんが駆け寄ってきて心配してくれ
た。うむうむ。この笑顔だけで殿を務めた甲斐があるってもんだ。

「伊御と御庭さんもありがとう。今日は大変だったのに、僕達の救援まで……」

「いや、気にしなくていいよ」(ぼむっ)

「ええ」(ぴこんっ)

「さて、こうなつてくるとあの策を実行に移す必要が出て来たな」

「……ロクなことじゃないとは思うが、どうするんだ？」

伊御が雄二をジト目で見ている。ふんっ、あの伊御にそんな目で見られるなんて、雄二が腹黒の証拠だね！

「……不愉快な視線があるが、今は置いとく。で、策だが明日に行く。俺はムツツリーニと準備を行うから、今日はここで解散だ。皆、明日が本番になるから英気を養うように」
「」「」「了解！」「」

【おまけ】

□下駄箱□

「それにしても、真宵さんと島田さん。一緒に残ってくれてありがとう」

「ういうい。気にしなくてもいいんじゃないよ」

「……ええ」

（そういえば真宵だけ下の名前なのよね。ウチも下の名前で呼ばれたいけど……っ無理無理！ 美波って呼んでほしいなんて言えるはずないじゃない！）

「……………ピコーンッ。ふえっふえっふえ、明久さん明久さん」

「？ 何、真宵さん？」

「せっかくこのメンツで死線をくぐり抜けたんじゃし、この機会に美波さんのこと下の名前で呼んでみたらどうかにゃ？」

「ほえ？」

「なっ!?」

「1人だけ上の名前じゃ寂しいじゃろ？ ほれほれっ！」

「僕は別にいいけど。……島田さんは嫌じゃないの？」

「ふえっ!? ……べ、別に！ 呼びたいんなら好きにすればっ！」

「明久さん！ ここぞ……………」（ここによぎによぎ）

「ふむふむ。うーん、少し恥ずかしいけど……………み、美波？」

「っ!? くくくっ／＼／＼／＼／」

「うわっ！ 顔真っ赤だよ！ 大丈夫？」

「み、見るなあっ!!」（グーパン）

「ボぐはあっ!?!」

ダダダダダッ!

「やれやれ。ほんとに素直じゃないねん」

「ま、真宵さんの嘘つき! 下の名前を呼び捨てにすれば少しは優しくなるって言ったのに!」

「ノンノンツ。継続は力なり、じゃよ? 明久さん」

「??」

「これからも呼び続ければ少しずつ効果が現れるから、明日も美波って呼ぶんじゃよっ☆」

「ほ、本当かなあ?」

第11話

『静かにしなさい！ この薄汚い豚どもっ！』

『な、何よアンタ！』

『そつちから話しかけないで！ 豚臭いわ！』

『な、なんですつてえ！』

Cクラスの中から罵詈雑言の嵐と、ヒステリックにそれに対抗する声が聞こえる。
……秀吉、すごいなあ。色んな意味で。

僕達は今、雄二が昨日言っていた策を実行している。それはCクラスを挑発して、Aクラスに攻めさせるというものだ。挑発するのはAクラスに在籍している秀吉のお姉さんに扮した秀吉だけど。スカート姿の秀吉は大変可愛かったです。

これでBクラスとの共闘によるFクラスへの介入は無くなるはずだ。今もすつごい当てつけのような言葉で秀吉が挑発して、Cクラス代表を確実に怒らせている。しかし、ここで疑問が残る。それは……。

「ねえ雄二？ なんで伊御を待たなかったの？」

「……………」

そう。ここには伊御以外の男連中はいるんだ。女子を呼ばなかったり待たなかったのはこんなもの見せられたものじゃないからわかるけど、ならなんで伊御が登校するまで待たなかったんだらう？

「……伊御は木下 優子と仲がいい」

「えっ、そうなの!？」

「……………」(コクコク)

いつまでも僕から顔を背けて話さない雄二の代わりに、ムツツリーニが話してくれた。へー、いつの間に仲良くなったんだらう？ 僕と伊御はクラスは違ったけど、去年はかなりの時間一緒にいたからいつ仲良くなったのか余計気になる……あれ？

「……………ねえ雄二?」

「……………なんだ?」

「“これ”、ヤバくない?」

「……………」

僕の疑問にまた顔を背けて無言になる雄二。ねえちよつと！これが伊御にバレたら流石に伊御も怒るよ!？ 伊御が怒ったら怖いもの知ってるでしょ!？

伊御は怒ると、笑うんだ。けど、それはいつもの微笑むのとはわけが違う。そして何よりも怖いのは雰囲気荒々しくなることだよ！ 怒った伊御の背景からゴゴゴツて

音してたものっ！ 笑った伊御とその雰囲気組み合わせると、鉄人なんて目じゃない。

僕が雄二を問い詰めようとした時、今まで黙っていた雄二が突然僕の方に振り向き、肩をガシツと掴んだ。

「……いいか明久。ここまですれば俺達は共犯だ。伊御にバレないよう全力で協力しろ。いいな？」

「ふざけるなバカ雄二！ 僕は伊御に怒られるのはゴメンだよっ！ 今から雄二がしでかしたことを伊御に話してきてやるっ！」

掴まれた肩を乱暴に引き剥がし、雄二から距離を取る。僕は本当にここにくるまで何をするか知らなかったんだ！ 伊御にそれも含めて話せばわかってくれるはずだ！

「させるかっ！ ムツツリーニ！」

「……我ら一連托生」(ガシツ)

「なっ！ 離せえ！」

「っらあっ！！」

「グぼおっ!!？」

背後を取られ、動きを封じられた多くのボディに雄二の渾身の一撃が入る。……く、そ。

廊下に倒れ臥す僕を見下ろす雄二が言葉を放つ。

「これもAクラスに勝つため。悪く思うなよ、共犯者」

「……おぼ、え………て……」(ガクツ)

そして……僕が次に意識を取り戻した時は、Bクラスとの戦いが始まる寸前だった。僕は雄二の思惑通り共犯者となつてしまったのだった。



Bクラス戦が始まってしばらく。俺とつみきは昨日消費した科目を出来るだけ早く終わらせ、今はBクラスに向かっている。それと、俺が登校してきた時には既にCクラスへの対策は済んだいたらしく、CクラスにAクラスへと戦争を仕掛けるよう仕向けたそうだ。……何をしたか頑なに話してくれなかったんだが、一体何をしたんだ。雄二。

まあ、それは今は置いておくとして。俺達の今日の役割は、出来る限り敵を他の皆が減らした後、姫路さんと協力して敵を圧倒し、注意を俺達にひきつけることだ。Bクラスの外機も、Dクラスに壊すよう指示を出してるみたいだし……窓は全開かな？

そしてようやくBクラス前に到着し、戦線の確認をしようと思つて周りを見渡すと………ん？

「……Fクラスの皆の動きがきこちない？」

「指示がうまく伝わってないみたいね」

「ドアと壁をうまく使うんじゃない？ 伊御と御庭がせっかく押し込んだのじゃ。戦線を拡大させるな！」

「……秀吉？」

違和感を感じた俺の耳に届いてきたのは、激しく指示を飛ばす秀吉の声だった。……おかしい。ここの指揮官は姫路さんだったはずだ。なんで姫路さんじゃなくて副指揮官の秀吉が指示を出してるんだ？

「伊御。ひとまず木下のところに行こ？」

「……そうだね。ここで考えても仕方ない、か」

俺はつみにきに連れられ、先程秀吉の声が聞こえた方へと向かう。するとそこには秀吉だけでなく指揮官であるはずの姫路さんとサポート役の明久がいた。……よかった。姫路さんに何かあったわけじゃないんだ。

「皆、おまたせ」

「伊御！ 御庭さんも！ 補充試験が終わったんだね！」

「ああ。……それで、戦況はどうなってるんだ？」

「それが……」

明久が声を潜めて俺に話してくれた。明久の話によると、どうやら姫路さんの様子がおかしいらしい。一向に指示を出す気配もなく、また参戦する様子もない。明久が何かあったかと尋ねてみても、何でもないの一点張りだそうだ。

「……………ふむ」

「伊御、どう思う。やっぱり姫路さんの体調が悪いんじゃないか……」

「木下！ 古典が展開してる左の出入り口が突破されそうだ！」

「いかんっ！ 姫路、ここは……」

「つみき、お願い」

「伊御っ!？」

「ん、了解」

俺は秀吉の言葉を遮り、つみきに救援に行ってもらった。本当なら点数の高い姫路さんに行ってもらいたいところだけど、今はそうも言ってもらえない。

「悪い秀吉、副指揮官の指示に背いて」

「いや、それは構わんのじゃが。……………良いのか？ お主と御庭は今2人で姫路の点数を

少し超えているぐらいのはずであろう？ 後々の作戦に響くのではないかのう」

「確かにそうだけど、今は仕方がないよ」

俺とつみきは今回、早く前線に戻れるようテストを早めに切り上げている。だから点

数が少しいつもより少ないんだ。それも考慮して、本当ならば2つある出入り口をそれぞれ、俺とつみきで片方、そしてもう片方を姫路さんで突破する予定だったのだが、このままでは俺とつみきで1つずつになりそうだな。

俺は明久と少し後ろで控えている姫路さんの元に向かい、声をかけた。

「あつ、吉井君、音無君。さつきはそのつ」

「姫路さん。何かあつたなら話してくれないかな？ 僕達に気を使ってるんだつたら気にしなくていいよ。それよりも姫路さんの方が大事なんだから」

「明久の言う通りだよ。もし話したくないなら、とりあえずはFクラスで休んでおくといいよ。ここは俺達で何とかするから」

「だ、大丈夫です！ 本当に何でもありません！」

俺達の言葉にも強く否定する姫路さん。だけど……ならどうして君は泣きそうなんだい？

「右側出入り口、教科が現国に変更されました！」

「数学教師はどうしたのじゃ！」

「Bクラス内に拉致された模様！」

「くっ！」

右側もBクラスが得意な文系科目に変わったか。これはそろそろ俺も入るかな。

「私が行きます！」

しかし俺が行こうとした時、姫路さんが戦線に加わろうと駆け出した。でも……。

「あつ……」

急に駆け出した足を止め、その場に俯いてきゅつとスカート裾を掴んだ。……何だ？ 今、何かを見て足を止めたようだけど……。

明久も俺と同じように気付いたみたいで、俺達は姫路さんが見ていた方を目で追ってみた。するとその先には、窓際で腕を組んでこちらを見下ろす……確か、あれが根本だったはずだ。あまり好ましくない顔でこちらを見ている。そして……。

そして俺は。俺達は。どうして姫路さんが動かない……いや、動けなかったかを、理解した。

少し遠くに見える根本の手には、手紙のようなものがあつた。俺も、それだけなら別に何とも思わないだろう。だけど……俺は気付いてしまった。

根本が姫路さんに見せつけるように揺らめかせる手紙。そう、手紙なんだ。……俺はつい最近、手紙関連の話を相談された。そう。あの手紙は……。

BさんがA君に渡すために用意したもの。心に秘めた想いが込められた……何物にも変えがたい、大切なラブレターだ。

そう気付いた時には、何かが切り替わった音がした。

「……明久」

「……うん」

明久はすぐに頷いて姫路さんに声をかけた。

「姫路さん」

「は、はい……」

「具合が悪そうだからあまり戦線には加わらないように。試召戦争はこれで終わりじゃないんだから、体調管理には気を付けてもらわないと」

「……はい」

「伊御、代わりに指揮官やってくれるかい？」

「ああ、任せろ」

「じゃ、僕は用があるから行くね」

「あ……！」

姫路さんは明久に何か言いたげだったが、気にせずこちらに向かって歩き出した。そして、俺と明久はすれ違いざまに……。

「伊御」

「明久」

「あのクソ野郎を、ブチ殺す」

絶対の覚悟を持って、手を合わせあつた。



僕はFクラスに向かつて駆け出ししていた。雄二に作戦変更をお願いするため。その最中に思う。バレたのが伊御でよかつたつて。あんなに姫路さんのことを想つて怒ってくれた伊御に嬉しくなつたんだ。……覚悟しろよ根本 恭二。お前は多分この学校で1番怒らせちゃいけないやつを怒らせたんだ！



「伝令、左に姫を向かわせてつみきを回収してきて。その時姫に突撃させて、その隙に古典教諭をこちらに引っ張り出せ」

「は、はい！」

「康太、生物教諭を連れて左の出入り口に展開させて。暗記ものだからFクラスでもま

しな方だし、Bクラスの不得意科目の1つのはずだ。その後は……例の配置につくように」

「……………ッ！」（コクコクコクッ！）

「須川、右の現国教諭はそのまま。2人1組で戦線を保て。絶対に教室から出すな」

「り、了解であります！」

「秀吉、真宵からの連絡はまだか？」

「ま、まだじゃ。……の、のう伊御よ。一体、片瀬に何を命令したんじや？」

「知る必要のないことだよ」

「し、しし承知した！ いらんことを聞いてすまんかった！」

「いや、気にしてないよ」（ニコッ……ゴゴゴゴッ！）

（（（（こ、こっえーっ！！）））））

（の、のうムツツリーニよ。もしやこれはバレてしまったのではないかのう）

（……………それなら俺達に怒りが向けられるはず。原因はおそらく別にある）

あれ、おかしいな？ 俺は笑ったはずなのに、何で皆そんなに怯えてるんだろう？

確かに根本に対しては怒りはあるけど、俺はそれを誰かにぶつけるようなことはしない

よ？

「き、来た！ 御庭さ……御庭様が来たぞおー！」

「み、御庭様！　どうか、どうかお願いします！」

「仏の怒りを鎮めてください！」

「……………」

ん？　どうやらつみきが帰って来たみたいだね。……だけど皆。何でつみきのことを様付けで呼ぶんだい？

「伝令、姫に生物教諭が来たら待機するように伝えて」

「は、はいっ！」

姫への伝令を走らせた。これで少しの間戦線は保たれるかな。

「……………伊御」(くいくいつ)

「ん？　どうしたんだい、つみき」(ニコツ)

「……………あ、あによね」(へんにやり)

「うん」

あれ？　つみきのネコミミがへんにやりしてしまってる。どうしたんだろう？
……………また何か仕出かしたのか、根本。

「っ!?　い、伊御!？」

「大丈夫だよつみき。根本は必ず潰すから」(ニコツ……………ゴゴゴゴゴツ！)

(……………あいつかーっ!!)(……………)

「ち、違うわっ！ 別に何かされたとかではなくて、その……あによっ！」
「……………」

……どうやら、俺がつみきを怖がらせてるみたいだな。知らぬ間に怒りが漏れてたみたいだ。反省しないとな。

「…………ごめんつみき。怖がらせるつもりはなかったんだけど……」

「ううん、それはいいの。でもにえ、伊御……」

「うん？」（ニコツ）

「……………そんなふうには、笑わないで」

「っ!？」

「伊御は、優しく笑ってる方が……いいの」

「……………」

……………。……………。そっか。

「…………うん。わかったよつみき。心配させてごめん」（ぽふっ）

「べ、別に心配にやんかしてにやいわ…………／／／／／（ぴこぴこ）

俺は自分を諫めてくれたつみきに感謝も込めて優しく撫でてあげる。俺は普通に笑ってるつもりだったんだけど、つみきにはそうは見えなかったのかな。

「皆、ごめん。少し冷静じゃなかったみたいだ」

「う、うむ。よいよい。たまにはそういう時もある」

「そうだな。おいお前達！ 仏を怒らせたのはBクラス代表根本 恭二だ！ 奴の首を取り、仏に献上するんだっ！！」

「！！！！うおおおおおーっ！！！！！！」

「なっ?!? こ、こいつら急に勢いづいてっ！」

……よかった。戦場の雰囲気も悪くない。なら、次に進もうか。

「秀吉、指揮を頼む。時が来たら俺とつみきでBクラスへ猛攻を仕掛けるから、その時まで前線で待機してるよ」

「心得た。頼むぞ、伊御」

「ああ。つみき、これから俺と一緒に無茶をしてもらいたいんだ。戦死する可能性も高いけど、やってくれるかい？」

「うん、やる」

「ありがとう、つみき」(ぽふっ

~~~~~♪(ぴっぴっ♪)

そして俺とつみきはそれぞれの出入り口付近で待機した。後はその時を待つだけだ。

つみきや皆のおかげで、頭はだいぶ冷えた。……今は怒りを抑えるんだ。それに今回の主役は俺じゃない。明久だ。今俺がやるべきことは、Fクラスを勝利に導き、さらに

明久がやりやすいように場を整えること。後は……この戦いが「終わった後」からが、俺の仕事だ。

【おまけ】

□Bクラス戦前日□

「伊御がキレたらどうなるんだ？」

「うーん。……雄二は伊御が怒ったところは見たことあるんだよな？」

「ああ。あれは確か……モノを隠して楽しんでる奴らを見た時だったか？ いつもの微

笑みが消えて、笑ってやがったんだよ。纏う雰囲気もまるつきり変わってよ」

「あれだろ？ ゴゴゴゴゴツ！ って感じのやつ」

「それだ。まあ、モノを隠すなんて陰湿なことをする奴らだ。泣きべそかいて逃げ出してたぜ」

「あれは怖いよなく。俺達のおふぎけに怒ってるのとはまた違うんだよなく」

「そうだな。道徳に反したことに對して怒ってる感じか？」

「それなら雄二と明久はいつか伊御を怒らせそうだなっ」

「……やめろ。俺もそんな気がしてんだから」

「ひひひつ。つとお話が逸れたな。まあ、伊御は怒るとそうなるわけだが……」

「伊御がキレると……伊御の周りが凍る」

「……何？」

「空気が凍るんだよ。んで無言になって、表情が伺えなくなる」

「……」

「まあ、滅多になるようなことじゃないんだがな。流石に根本でもそこまでクズじゃないとは思うけどなあ」

「……伊御がキレるその一線ってのは？」

「一概には言えないんだよな。俺もみいこ姉もキレた伊御を見たのは片手で数えられる程度だ」

「なら、最後にキレた時は？」

「……中3の頃。……大切にしていた猫が、遊び半分で殺された時だよ」

## 第12話

「おつらあつー！」

……ドオーンッ

「んのおつー！」

……ドオーンッ

「ぐううっ!？」

……くう、やっぱり痛い。脳天から爪先にかけて走る激痛に吐き気がする。でも、今は気にかけてる場合じゃないっ！

「はああつー！」

……ドオーンッ

僕は痛みを堪えて、がむしやらにDクラスの……Bクラスと接している壁を殴り続ける。

僕はFクラスにいた雄二に、姫路さんをこの作戦から外してくれるように頼んだ。絶対に無理だと言われると思ったが、予想外にも条件付きでなら構わないと言ってくれた。その条件が、僕が姫路さんの代わり……根本 恭二に攻撃を仕掛ける。というもの

だった。

しかも出入り口は今のまま。つまりそこから侵入することはできない。……難しいことを言ってくれる。だが、Fクラス最高戦力を作戦から外してもらうんだ。これくらいやらないきやだめなんだ！

僕がどうするか悩んでいると、雄二がらしくなく僕を励ますように「僕には僕の秀でている部分がある」と、「信頼している」と言ってくれた。……なら、やるしかないでしょっ！

そして僕は閃いた策を実行するため、Dクラスに向かったんだ。



少し遠くから何かをぶつけている音が聞こえてきた。……よし、今だな。

「秀吉に伝令。今からつみきと一緒に特攻を仕掛ける。その後に続いてできるだけ出入り口から雪崩込むんだ」

「了解です！」

「つみきに。今から突っ込む、遅れないでつて。あと……ありがとうつて」

「イエッサー！」（ニヤニヤ

伝令を走らせ、俺は出入り口で行われている戦いを注視する。生物の科目で行われている戦いは、Fクラス生徒の劣勢で進んでいる。そして……今！

「Fクラス音無 伊御。試獣召喚！」

「なっ?! 音無は後ろに控えていたんじゃっ?!」

生物

『Fクラス音無 伊御ー275点 VS Bクラス金町 翔也ー91点』

俺は敵がとどめを刺そうと武器を振り上げた瞬間を突いて、ガラ空きの胴を一閃した。

遠くを見れば、ほぼ同時に敵を倒すつみきの姿。……よかった。合わせてくれた。

「このまま推して参る！」

俺はその勢いのまま生物教諭を連れて、Bクラスに躍り出た。つみきの方も、後からきたキクエ先生を連れて俺と同時に侵入した。

「皆の者！ 2人に続けえーっ!!」

「「「うおおおーっ!!」」」

秀吉の声に、雪崩れ込むようにBクラスに押し寄せるFクラスの面々。一瞬にして廊下側がFクラスで溢れかえる。

「しまった！ 隙を突かれた!」

「焦るな！ 所詮Fクラス、落ち着いて対処……」

「させないよ」

「っ!?! 音無!」

俺は部隊長と思われる男子生徒に戦いを仕掛ける。

生物

『Fクラス音無 伊御ー275点 VS Bクラス左鍋 原ー1163点』

「ふっ、ふざけるなっ！ なんだこの点数は!」

「御託はいい。いくぞ」

「くっ……!」

俺が特攻し、敵に囲まれてる中、つみきも根本に向けて特攻したので囲まれた状態で戦闘を開始していた。

英語

『Fクラス御庭 つみきー321点 VS Bクラス 花巻 香苗ー175点』

「か、勝てるわけない! 誰か、援護お願いっ!」

「その前に倒す」

そして俺とつみきは、Bクラス代表根本 恭二に向けて単騎決戦を挑む。



「……アキ。音無とつみきが特攻をかけたみたい」

「っ。……そっか。なら、僕もそろそろっ！」

昨日の下駄箱の出来事より、今日から僕を下の名前を略したもので呼び始めた美波の言葉に、僕も再び気合を入れる。両手にはもう痛みしがなく、足元には血だまりができています。……伊御が特攻を仕掛けてまで僕にチャンスをくれんだ。ここで失敗するわけには……いかないんだっ!!

僕は今できる最大限の力を込めて……壁をぶん殴るっ!!

「だああーっしやあーっ!!」

……ドゴオーンっ!

「ぐうううっ!」

僕は全身に走る激痛に堪える。……まだ、ここで倒れるわけにはいかない。僕にはまだやることあるんだっ!

「根本 恭二いいいいーっ!!」





「根本 恭二いいいいーっ!!」

「んなあつ!?!」

突如破壊された壁から現れ出た明久とそれに驚いて顔を引きらせる根本。そしてその壁からBクラスへと侵入するFクラス数名が明久と共に根本 恭二の元へと駆ける。今Bクラスの戦力のほとんどは俺とつみき、先に侵入したFクラスの対応に精一杯だ。ここで昨日と今日とで減らした数の差が功を成した。

「あいつらなんてところから! 誰か、奴らを止めっ……!」

「させない」

「しまっ!?!」

生物

『Fクラス音無 伊御1221点 VS Bクラス中瀬 忠男10点』

目の前の敵を屠り、俺が敵の注意を引きつける。ここで俺からマークを外せば、俺が根本を獲ると言わんばかりに。さらにつみきや侵入したFクラスの面々もBクラス生徒を誰一人として根本のところへ向かわせなかった。そのおかげで、根本を守る親衛隊

数名以外は誰も明久達を止められない。



僕は伊御や御庭さん、Fクラスのみんなが足止めしてくれてる間に根本を討つ為に根本の元へと駆け抜ける！

「遠藤先生！ Fクラス島田が……」

「Bクラス山本が受けます！ 試獣召喚っ！」

「Fクラス葉山が根本へ……！」

「Bクラス中田！ 受けます！」

次々と親衛隊に根本への戦闘を食い止められる。

「は、ははっ！ 驚かせやがって！ 残念だったな！ お前らの奇襲は失敗だ!!」

そんな僕達を見て取り繕うように啞う根本。しかし僕達の手はまだ残ってるんだ！

「……ムツツリイーニイー!!」

僕が彼の名前を呼ぶとともに、開放された窓から勢いよく侵入するムツツリーニと土屋 康太と保健体育の先生。保健体育の先生の特徴はその抜群の運動神経にある。それを生かし、ムツツリーニと一緒に屋上からロープを伝ってBクラスへと侵入に成功

したというわけだ。この為に僕達はDクラスを倒し、室外機を破壊させたんだ。

「……Fクラス土屋 康太」

「き、キサマ……!!」

文字通りFクラスほぼ全員で根本 恭二を丸裸にした。これが……。

「……Bクラス根本 恭二に保健体育勝負を申し込む」

「く、そがぁぁーっ!!」

これがFクラスの力だ！ 根本 恭二いいーっ!!

「……試獣召喚」

保健体育

『Fクラス土屋 康太1441点 VS Bクラス根本 恭二203点』

根本の召喚獣はムツツリーニの召喚獣の小太刀一閃の一撃で敵を切り捨てた。

今ここに、Bクラス戦は終結した。



「終わったか……」

「か、閣下！ 奴に関する音声を洗ったら、すごいものが出てきたのでありますっ！」

「そっか。なら有り難く使わせてもらおうよ。真宵」

「はっ！ 光栄であります！」

「……真宵、どうしたのその喋り方？」

「いえっ！ お気にならず！」

「……まあ、いつか。さて、あとは雄二と榊にっ」と



試召戦争も終わり、今は雄二がここに来るまで待機してる状態だ。……ううつ。手が痛いよう、痛いよう。

「明久君、大丈夫ですかあ？」

「なんとも……お主らしい作戦じゃったな」

「普通は壁を壊すなんて発想は思いつかないわね」

「つみきさんなら素手でやってのけそうなんじゃよ」

「やれるのとやるのは違うわよ」

「で、でしょ？ もっと褒めていいと思うよ？」

自分を犠牲にしてまで勝利を導いた僕を誰か褒めて？

「後のことを考えず、自分の立場を追い詰める。男気溢れる素晴らしい作戦ね、アキ？」

「自分が傷つくと心配する人のことを考えない。とても明久らしい作戦じゃのう」

「……遠回しにバカって言うてない？」

学校の壁を壊したんだ。問題にならないはずがない。僕の放課後は鉄人とのラブコメで埋まってしまった。……暑苦しいよう。

「ま、それが明久の強みだからな」

「あ、雄二」

Bクラスにやって来た雄二が肩をバンバンと叩きながら床に座り込む根本の元へと歩いて行った。……バカが強みだどっ!? なんて不名誉な!

「さて、それじゃあ抱腹絶倒の戦後対談といこうか。なあ、負け組代表？」

「……………」

雄二の言葉に、歯をくいしばるだけで何も返さない根本。さっきの威勢が嘘のようだ。

それから雄二の交渉が始まった。内容はBクラスの設備の交換を免除する代わりに、根本にAクラスに行つて試召戦争競争の準備が出来ていると宣言して来いというものだ。……女子の制服を着て。案の定、根本は慌てふためきながら拒否した。……往生際が悪いな。

「ば、馬鹿なことを言うな！ この俺がそんなふざけたことを……！」

「Bクラス生徒全員で必ず実行させよう！」

「任せて！ 必ずやらせるから！」

「それだけで教室が守れるなら、やらない手はない！」

Bクラスの仲間たちが満面の笑みを浮かべて協力を申し出た。すごい。これだけで根本が今まで何をしてきたかがわかるようだ。

「いや、協力は必要ない。こちらで完璧にデコレーションしてやろう。……片瀬、榊」

「「やいやいやさーっ！」」

「なっ！ 貴様ら何処からっ!? は、離せえーっ!!」

雄二の声に呼ばれた真宵さんと榊。……ちよつと待って。榊何処から湧いたの!?

榊はEクラスでしょ!?

真宵さんと榊に服を剥かれ、パンツのまま何処かへと連れ去られる。僕は散らかった根本の服を漁り、目的のものを入手し、服をゴミ箱へシユートする。根本にはスカートで自宅まで帰ってもらおう。

それから僕は目的のもの……姫路さんの手紙を元の場所へ戻すため、Fクラスに向かった。……あれ？

「……そういえば、伊御は何処に行ったんだろう？」



「……つてえ！ 貴様ら、こんなところに連れてきて何をつ……！」

「やあ、根本」(ニコッ)

「っ!? 貴様は、音無か？」

俺は真宵と榊によつて連れてこられた根本を夕陽が照らす屋上で待っていた。2人は屋上へ続く階段で見張ってもらっている。……さて、始めようか。

「俺がお前に話があるから、2人に連れてきてもらったんだよ」

「話だと？ それは服を剥かれてからするものなのか？」

「いや？ 服を剥かれることについては、心当たりがあるんじゃないか」

「なんだと？ ……まさかっ！」

俺の言葉に心当たりが見つかったようだ。そうだよ、姫路さんの手紙だよこのクズ野郎。それにしても、パンツ一枚で夕暮れの風の寒さに肌をさする姿は……。

「……クスッ。滑稽だね、根本」

「っ！ ……貴様っ！ 調子に乗るのも大概にっ！」

「単刀直入に要件を言おうか。根本お前……姫路さんの好きな人を手紙を見て知ったな

「？」

「……………だから？ お前には関係のないことだ」

「関係のない？ 確かにそうだ。これは2人の問題であって……………俺も、お前も、関係がないんだよ。」

「雄二が下した罰じや、周りのみんなは報われても……………姫路さんと明久が報われない。ズル賢いお前のことだ。今回のことを逆恨みして、姫路さんを脅してまた最低なことをするつもりだろう？」

「っ!？」

俺の言葉に驚き、バツの悪そうな顔をする。……………やっぱりか、こいつ。

「……………ふ、ふん！ だからなんだ！ そこまでわかってるなら話が早い。お前も姫路のためを思うんなら俺のいうことをつ……………」

「……………ふざけるんじゃないぞ、根本 恭二」

「ひっ!？」

俺は姫路さんじゃ飽き足らず、俺さえも脅そうとしてきたこのクズ野郎を睨みつける。もはや笑うための表情筋すらピクリとも動かない。……………少しでも反省してるなら



「ここまで」するつもりはなかった。だがもう知らない。お前にはこれからの学園生活、怯えて過ごしてもらうぞ。

「……貴様はとことんクズだな根本。頭は多少回り、上位者への媚びも忘れない」

「……?」

「だが、傲慢ゆえの詰めめ甘さ。これがお前の敗因だよ。根本 恭二」

「……き、貴様は……一体何を言ってる」

俺は根本の言葉を無視して、ポケットからテープレコーダーを取り出し……スイッチを押した。

『……分かったか? 俺のバックにはこの学園の教頭が付いてるんだ。多少の無茶、もみ消してくれるさ』

「なあっ?!」

それから。俺と根本しかいない夕暮れの屋上では、しばらく根本の悪事が朗々と奏でられた。それは、この文月学園の教頭との繋がり。カンニングや情報提供など……。それらは汚職とも呼べるものだった。

これは真宵が学校内に仕掛けたマイクが拾ったものだ。面白さを求めて仕掛けたものだけど、ときたまこういうものが入ることがあると聞いたことがあった。だから調べてもらったんだけど、ビンゴだったね。

「……で、デタラメだ！　こんなのはお前達が作った嘘の証拠にすぎない！」

これを聞かされてもまだ足掻く根本に嘆息し、レコーダーを止めた。

「……やっぱり、お前は雄二の足元にも及ばないな」

「な、なんだと!？」

「これをしかるべきところに提出すれば、俺達が偽造した物かなんてすぐにわかる」

「っ!？」　そ、それだけじゃないっ！　それが……!」

「この中のお前の言葉が本当であろうと嘘であろうと、どっちでもいいんだよ。根本」

「ど、どういうことだっ!」

本当にわからないのか。悪事で有名な奴が聞いて呆れる。

「仮に嘘だとして。教頭が自分の経歴に傷をつけるような物や人物を野放しにするのも思っているのか?」

「そ、それはっ!」

「こんなものが存在したというだけで、教頭は何らかの影響を受けるだろうね」

「……や、やりたければやればいいっ！　俺には……」

「教頭は助けてくれないと思うぞ?」

「っ!？」

さっきまで嘘だデタラメだと抜かしていたのに、今では繋がりを肯定しだしたぞ。

……俺は、こんな小物相手に怒っていたのか。……早々に終わらせよ。

「当たり前だろう？ お前のような奴を助けるのと、切り捨てるの。どちらが簡単だと思うんだ？」

「……………」

「俺がこれを学園に提出したら、どうであろうとお前は終わりだ。良ければ退学。悪ければ……………どうなるだろうな？」

「……………」

とうとう根本は何も話さなくなった。俯いてただ震えているだけだった。

「根本 恭二」

俺は奴の名を呼びながら、顔を恐怖に染める根本へと歩き出す。

「ひ、ひっ！」

「俺はお前がカンニングをしようが、教頭と繋がっていようがどうでもいいんだ。好きにすればいい、けど……………」

迫る俺から逃れようと、じりじりと後ろに後ずさる根本。そしてとうとう壁という行き止まりにぶつかり、俺と奴の距離はわずか10cmというところまで近づいた。

「もう2度と、俺の大切な友達に危害を加えるな。……………次は、ないぞ？」

「…………つ。わかり、ました…………。」

根本が俺の言葉を聞いたのを最後に、膝をついて肩を震わせていた。

「これは一応保管しておく。…………さっきも言ったけど、俺はお前が何をしようとして、それこそこれからも悪事を働こうが介入するつもりは一切ない。お前が、俺の大切なものに触れなければ、ね」

俺は崩れ落ちた根本を置いて、屋上を後にした。



「…………それじゃあ、あとはよろしく」

俺は屋上前で見張つてくれていた真宵と榊に声をかけた。これから奴は雄二の方の罰を受けることになる。

「了解にやあ！」（ダダダダダッ）

俺の言葉に嬉々として屋上の扉をくぐった真宵。けど、榊は行かなかった。

「…………伊御」

「ん？　なんだ、榊」

「……いんや、なんでもない。ま、あんまり背負い込むなよ？」

「……………ああ。ありがとう、榎」

「いいってことよ。んじやまあ、いじり倒してやるぜい！」（ダダダダダッ

俺に心配の声をかけることはなく、ただ軽く肩を叩いて屋上へと向かった榎。俺は長年の幼馴染との心の通じ合いに少しだけ苦笑した。そして、俺は本当にその場を後にした。

『……………あ、な？ お、お前達何をっ!? や、やめろ！ もう十分だろっ!? や、やめっ!?』

……………うああああーっ!!』

「ふははははあー!」

【おまけ】

□ Fクラス □

「……………? つみきか」

「あつ、伊御」

「どうしたんだ？ 教室で1人でいるなんて」

「……べ、別に。ただなんとなくよ」

「そっか。……それなら、一緒に帰る？」

「……ん」

「分かった。……よつと。それじゃあ、帰ろうか。つみき」

「……ね、ねえ？ 伊御？」（くいくい

ん？」

「………わ、私じゃつ。その……えつと」

「………」

「……ううん。なんでもないの。けどね？」

「うん」

「……あまり、一人で抱え込まないで、ね？」

「！」

「……伊御？」

「……ふふつ。うん、分かったよ。つみき」（ぽふっ

「わ、分かったのなら、いいのっ／／／／（てれてれぴこぴこ

## 第13話

昨日の夕方、根本 恭二と話し合い（脅迫）を終えて俺はつみきと一緒に帰った。榊 やつみきに心配されたけど……俺は大丈夫だよ、2人とも。

そして翌日の朝。俺は珍しく1人で学校に登校していた。いつもなら通学路のどこかでつみきと会うのに……。昨日は激戦だったし、疲れが出てるのかな？

今日は補給テストに全て当て、明日にAクラスに一騎打ちを申し込みに行く予定だ。その一騎打ちには俺も参戦する予定だから、今日のテストは気合を入れてやらないとな。

そうして今日の補給テストに向けて密かに意気込んでいると、下駄箱で知人と出会った。

「優子。おはよう」

「……あら？ 伊御君じゃない。こうやって面と向かって会うのは久しぶりね？」

彼女は木下 優子。Aクラスに所属している秀才で、頭脳も学年トップ10の常連だ。少し厳しいと感じるところはあるけど、優しくて明るい人だと思う。そして優子は……秀吉の双子の姉でもある。彼女とは去年の秋に知り合ったんだけど……これは今

話すことじゃないかな？

「そうだね。メールや電話でなら話してるけど、最近は俺も忙しくて中々時間が取れなかったからね」

「聞いているわよ。Bクラスを倒したんだって？ Fクラスじゃ普通は無理だろうけど、まあ伊御君がいるなら分かるかな」

「いや。雄二の策や明久の機転とか、あれはFクラス皆で頑張ったおかげだよ」

「ふふつ。そういうところは本当に相変わらずね。……けど、流石に昨日あなた達がいなかったことは……ちよつと軽蔑するかな？」

「？ 昨日？ ……えつと、明久が壁を壊したこと、かな？」

優子が俺に向けて視線が少し冷たくなつた。俺は向けられた視線に心当たりが……あ。もしかして、「アレ」を見られた？ いや。あの時は真宵と榊が見張っていたから見られるはずはない。なら、なんだ……？

俺が昨日のことを必死に思い出し、キチンと優子を傷つけてしまったことを謝ろうと考えていたところで、溜息が聞こえた。

「……やつぱり、伊御君は関わってないか」

「やつぱり？ ……優子。Fクラスの誰かが優子に何かしたのか？ なら、もしよかつたら話してくれないか？」



「……はあ。あのね……」

そして優子から話を聞いた俺は、とりあえず下手人達を成敗しようと決めた。



Bクラス戦の後、姫路さんの鞆に手紙を入れてミツシヨンコンプリートした時、背後から声をかけられた。振り返れば姫路さんが涙を零していて、どうしたのかと尋ねたら僕に抱きついてきたんだ！ すっごく柔らかくていい匂いがありました！

僕は動揺を誤魔化した後、何事もなかったように教室を出ようとしたら姫路さんに呼び止められて手紙のことでお礼を言われた。僕は偶然見つけたからとはぐらかそうとしたんだけど、嘘だと見抜かれた。

さらにはこの試召戦争を姫路さんの為にやっていることまでバレた。いや、バレてた。雄二や伊御と相談してるところを見られたらしい。なんだろう、すごく恥ずかしい！

僕と姫路さんの間に流れるむず痒い感じの雰囲気になんて耐えきれなくなって、僕は伊御に相談して尋ねようと思っていたことを尋ねた。「その手紙の相手ってもしかして……」って。そしたら姫路さんは手を大きく振って否定したんだ！ ……いよつ

しゃーっ！ 僕の勘違いだったよ！ ありがとう伊御！ 君が正しかった！

僕は雄二ではないってことが分かったから、それだけで満足だった。姫路さんの本当に好きな人？ そんな野暮なことは聞かないさ。僕は上機嫌に「その手紙がうまくいくといいね！」って！ 姫路さんも満面の笑みで頷いてた。うん！ 今日なんて最高な日なんだ！

僕はルンルン気分であつて、健やか眠りについた。本当に昨日は最高の1日の終わり方をしたなあ。……………。

よし、現実を見よう。…………翌日の今日。僕が珍しく普通に登校してきたFクラス教室では…………。

「……………」(ニコツ…………ゴゴゴゴツ)

「……………」

阿修羅様が罪人を正座させて、降臨していらつしやつた。

「やあ、明久。正座」(ニコツ…………ゴゴゴゴツ)

「……………」

伊御の問答無用の正座発言に僕は抵抗することなく受け入れた。…………ダメだ。もう心当たりが「アレ」しかない。

顔をうつむかせて小刻みに震える僕、雄二、秀吉、ムツツリー二に軽く頷いてから伊

御は口を開いた。

「さて、これで全員揃ったね。……4人とも。なんで正座させられているか、分かるね？」

「「明久が悪いです」」

「貴様らっ！ 僕を巻き込んでおいて、さらには身代わりになるとかふざけるなよっ！」  
「こいつら揃って僕を見捨てやがった！ なんて奴らだ！」

「……俺は、イエスカノーしか答えることを許してないはずだけど？」（ニコツ……ゴゴゴゴツ）

「「「ごめんなさい！ イエスです！」」」

怖い。伊御の笑顔がものすごく怖いよう。

「……ふむ。明久、今君が口に出したことに興味がある。明久だけ発言を許すよ。話してごらん？」

「は、はい！ え、えつと実はですね……」

僕は包み隠さず全てを話した。何をするかCクラスに着くまで知らなかったこと。策を実行してる際に事のヤバさに気付いて伊御に報告に行こうとしたこと。それを雄二とムツツリーニに止められたこと。そのせいで共犯にさせられたこと。

僕が話してる最中に雄二が何かを言おうとしたけど、伊御が笑みを浮かべた一睨みで

黙らせた。何も発言できなくなった雄二達は、僕が懺悔していると段々と震えが大きくなっていた。……ザマアみる。僕を共犯にしたり、見捨てようとした罰だ！

僕の話聞き終わった後、伊御は顎に手を当ててふむと一つ頷いた。

「明久。それは嘘ではないと誓えるか？」

「うん！ 嘘だったら僕はこの屋上から飛び降りるよ！」

「……雄二。発言を許す。今の明久の話、何一つ間違いはなかったか？ もし嘘だとわかつたら、俺は君を許さないよ」

「……………全て、事実です」

伊御の言葉に素直に自供する雄二。……そうだよね。優しさの権化である伊御に許さないなんて言われたら、立ち直れないよね。

「明久」

「は、はい！」

「今回のことはこれで終わり。不問とする。本当は遅くても後で言っただけで、昨日はそれどころじゃなかったからね」

「ありがとうございます！」

（（チツ！））

伊御に隠れて舌打ちする3人を無視して、僕は正座をやめて断罪場から立ち去る。

ま、当然の結果だよね！

「さて、残るは君達なんだけど……やることは、分かるね？」

「「今からAクラスに赴き木下 優子様には謝罪をします！」」

「うん、わかってるならいいよ」

伊御は今度はいつもの微笑みを浮かべて雄二達を許した。チツ！ もう少し罰を与えてもバチは当たらないと思うんだ！

「……雄二。俺は卑怯な手や最低な手も勝つためには必要だつて分かるし、ある程度は容認するよ。それが俺の知り合いでもね。雄二は、一線は超えないつて信じてるから」

「……………」

「けど、そういう時は一言俺に言つて欲しいんだ。ことが全部終わった後に、俺がちゃんとその人に謝れないから」

「……はい」

「それに……俺達は共犯だろう？ そういうことに呼ばれないのはさ……少し悲しい、かな」

「……………い、伊御。……………」

伊御の言葉に顔を上げて目頭を抑える雄二。……………くっ！ 奴の気持ちがかつてしまふ！ 伊御、君はなんて素晴らしい人格者なんだ！ 僕は君と友達になれて心から誇

りに思うよ！

「二では、いつてまいります!!」

「うん。ちゃんと謝ってくるんだよ？」

「二はいー!!」

伊御が見送る中、雄二達はAクラスに向けて駆け出した。……仕方ない。木下さんに許されるようには祈っておくよ。

『秀吉く？ あなた、豚呼びを満面の笑みでやってたみたいじゃない。アタシは普段からあんなか・し・らく』（メキメキメキイッ

『す、すまんかった姉上！ 心から謝罪するから……違っ！ 姉上！ 腕はそっちに曲がるようには出来てな……っ！ のおおおーっ!?!』

『……………』（ガタガタガタツ

『……………雄二』（チラッ



昨日はあの後、秀吉はボロボロで帰ってきたけど、雄二とムッツリー二は無事帰還し

てきた。なんでも木下さん的には実行した秀吉が1番許せなかったらしく、2人は嚴重注意で済んだらしい。チイツ!

その日はそれ以外は何事もなく、Fクラスのみんなが補充テストを終えることができた。……そして、運命の日の朝。僕達は……。

「総員、狙ええっ!」

「「「はっ!」」」

「なっ!? なぜ明久の号令で皆が急に上履きを構える!?!」

「黙れ男の敵! Aクラスの前に貴様を殺す!」

憎つくき敵である雄二を包囲していた。だって、雄二がああ美人で綺麗な霧島さんとお、おお幼馴染だって言うんだ! これほどの裏切りはないっ! Aクラス代表への必勝法? 大化の改新? 知るかっ!

「俺が一体何をしたと!?!」

「遺言はそれだけか? ……待つんだ須川君。靴下はまだ早い。それは押さえつけた後で口に押し込むんだ。真宵さんはロープを。怪力の雄二が解けない丈夫なやつを準備するんだ」

「了解です(じゃあ)隊長!」

「待て! 片瀬は女子だろ!?! なんで明久に協力する!?!」

「えっ？ おもしろいから？」

「くそッ！ こいつはこういうやつだった！」

我らが仇敵め！ 男子高校生46人分の上履きと言う名の怨念をとくと味わえ！

「あの、吉井君」

「ん？ なに、姫路さん」

「吉井君は霧島さんが好みなんですか？」

「そりゃ、まあ。美人だし」

「……………」瑞希さん瑞希さん。ゴニヨゴニヨ……………」！

「姫路さん？」

「…………え、えいっ！」（抱きつ

「ほわああああっ!!」

突然腕に抱きついてきた姫路さん。ちよまつ！ う、腕に柔らかな膨らみが！ ……

あ、幸せ「総員！ つてえー!!」うをおおーっ!!

雄二の号令より、僕に向かって放たれる上履き。僕は姫路さんを抱えて全力で避け切った。何をするんだ！ 僕はともかく姫路さんになにかあったら「こんのお、ドスケベ！」どらんちえっ!!

僕は後頭部を襲った蹴り（おそらく美波）によって壁に頭が埋まった。



「まあまあ。落ち着くんじや皆の衆」

「ほら、明久も埋まったことだし、これでひと段落ひと段落」

パンパンと手を叩いて場を取り持つ秀吉とそれに合わせてみんなを抑える伊御。……ねえ伊御。僕が壁に埋まってひと段落っておかしくない？

それから気を取り直した雄二が再び霧島さんの弱点を言つて、さらには伊御や御庭さん、姫路さんがいることから一騎打ちなら必ず勝てると言い放つた。それに盛り上がるFクラス一同。そして壁に埋まったままの僕。

雄二は皆を連れてAクラスに向かつて行った。そして壁に埋まったまま放置された僕。僕は残つてくれていた伊御と春野さん、姫路さんに助けられた。……優しさが目に沁みます。ぐすつ。



僕達が遅れてやってきたAクラスでは、雄二と木下さんの交渉が進んでいた。片瀬さんにどうなったかを尋ねると、雄二の思惑通りの5人選出の一騎打ち。今は勝負する科目はどうするかで揉めてるみたいだ。雄二は自分たちが科目を選べるようにしたいみたいだけど、まあ僕達には伊御や御庭さん、姫路さんがいるからね。向こうが頷かない

のも無理はない。しかし……。

「……受けてもいい」

「え？ 代表？」

Aクラス代表の霧島さんが雄二の提案で受けてもいいと言ってきた。けど、それには条件があった。それは「負けた方はなんでも一つ言うことを聞く」というものだった。そしてそれは……姫路さんや春野さんをじっくりと見ながらその条件を提示してきた。……まさかっ！

「……………」(カチャカチャ

「ムツツリーニ、まだ撮影の準備は早いよ！ というか、負ける気満々じゃないか！」

やっぱりそうか！ まずい！ 霧島さんは同性愛者という噂と今の2人を値踏みするような視線！ このままだと姫路さんか春野さんの貞操が危ない！ どどどどどうしよう！ すっごくドキドキする！ 僕はあんなことやこんなことをしている場面を目撃してしまうのか！

「じゃあこうしましょう？ 勝負科目をアタシ達が3科目、貴方達が2科目決めれるようにさせてあげる。ほとんどそっちの条件を飲んでるんだからこれぐらいはいいでしょう。」

木下さんの妥協案で雄二も頷いた。ってちよつと待て！

(ゆ、雄二！ 何を勝手に！ まだ姫路さんや春野さんが了承してないじゃないか！)  
(心配するな。絶対にあの2人に迷惑はかけない)

断言するように言う雄二。そこまで勝利を確信してるのかな？ それからAクラスとの一騎打ちは午前10時からということ僕達はAクラスを後にした。負けられない！ 姫路さんや春野さんの無事のためにも！ ……す、少しは見てみたいけど。

【おまけ】

□ Aクラス

「それじゃ、一騎打ちに参加するのはアタシと美穂、愛子に久保君、そして代表ね？」

「わかりました」

「オツケく♪」

「分かった」

「……それでいい」

「ならば誰を相手にするかなんだけど……代表は坂本君でいいのよね？」

「……うん」

「久保くんは姫路さんをお願いね？」

「それが妥当だろうね」

「愛子は土屋君、でいいのよね？」

「うんつ。僕が手取り足取り色々教えてあげるんだ♪」

「美穂は伊御君をお願い。アタシは御庭さんを相手にするわ」

「それは構いませんけど、この配役には理由が？」

「まあ、ね。代表は坂本君と戦いたいだろうし、久保君と姫路さんはほぼ同じぐらいの実力だから。愛子は土屋君が必ず保健体育でくるからね。それで伊御君を美穂にぶつけた理由は……」

「理由は？」

「アタシが御庭さんと戦いたいから、かな？」

## 第14話

「ではこれより、Aクラス対Fクラスの試召戦争を行います。各クラスの出場者は前へ」  
決戦の時が来た。場所はAクラス。ここで僕達の全てが決まる。

Aクラス担任であり学年主任の高橋先生の声に、Fクラス最高成績者として前に出る雄二を筆頭とした5人。伊御と御庭さん、ムツツリー二に姫路さんだ。

対してAクラスからは学年最高成績者である霧島さんをはじめ、木下さんと女子2人に男子1人の構成だ。女子は2人とも知らないけど、男子は有名だ。彼は久保 利光君  
といって、この学年の次席の座にいる。つまりは姫路さんよりも学力が上なんだ。

選ぶ科目はもうすでに提出しており、僕達Fクラスは雄二戦とムツツリー二戦の科目を指定している。なので伊御と御庭さん、姫路さんは敵の得意科目で勝負となる。……  
敵しい戦いになるね。

「各クラス代表者、準備は良いですか？」

「ああ」

「……問題ない」

2人の代表者の了承を合図に、Aクラス戦一騎打ち5番勝負が開幕した。



「それでは一人目の方、どうぞ」

「……私が出るわ」

僕達からは御庭さんが先鋒として名乗り出た。対するAクラスは……。

「じゃあ、アタシねっ」

木下さんか。……木下さんには本当に悪いことをしたと思ってます。

「つみきさん！ ファイトじゃよっ！」

「頑張ってくださいっ。つみきさん」

「ええ。行ってくるわ」

「つみき、頑張ってるね」(ぼふっ)

「……うんっ」(びっこびっこ♪)

御庭さんが真宵さんや春野さんにエールを送られ、伊御からはラブを注入されていった。よしっ！ これで御庭さんには敵なしだ！

「……負けないわよ」(ボソッ)

「……優子？」

「あ、ああ。なんでもないわ代表。ちゃんと勝ってくるから」  
「……信じてる」

Aクラスの方でも、木下さんに霧島さんがエールを送っていた。霧島さんは思ったよりも冷たい人じゃないのかもしれない。2人はそれぞれ用意されたステージに赴き、所定の位置についた。

「初めましてになるかしら？　これからよろしくね」

「……ん」

位置につくと、木下さんが御庭さんに話しかけた。けど、御庭さんは素っ気なく対応する。あれが御庭さんのデフォなんだけど、木下さんの気に触ったりしないだろうか？

……木下さん、プライド高そうだし。

しかし予想に反して、木下さんは不快感を表情に出すことなく、勝気な表情で御庭さんへ話し続ける。

「悪いけど、御庭さんには勝たせてもらおうわ」

「……そう」

「だって……伊御君が見てるんだもの」(ボソツ

「っ!」(ビクウツ！)

……ん？　なんだ？　今木下さんが小声で言ったことに、御庭さんが今までの素っ気

なさをかなぐり捨てて反応したぞ。どんな挑発したんだ？ 木下さんはチラツとこちらを見た気がするんだけど……。

「彼の前で不甲斐ない姿なんか見せられないわ。それに……」

「……………」

「彼といつも当たり前のように一緒にいる貴方が少し……目障り、かな？」

「……………っ！」（キツ！）

「な、なんだ!? 御庭さんが木下さんを威嚇しはじめたぞ！ 何を言っただ木下さん

！

「だから全力でいかせてもらおうわ！ 別にこれで勝ったからって彼に対して何が変わるわけでもないけど、そうね……惚れちゃった女の意地ってやつかしら」

「……………#っ！」（フーツ！）

「あら？ 彼に対する想いも口に出して言えないなんて。貴方の彼への想いはそんなものなのね。なんだか拍子抜け」

「……………潰す」（フシャーッ！）

「ふふっ、そうよ。貴女も全力でかかって来なさい！」

「……………な、なんだろう。何を言ってるかは遠くてわからないんだけど……雰囲気があるか、こう、なんていうかなあ？」



「まるで昼ドラの修羅場を目撃してるみたいなんじゃよ」

「「「それだっ!」」」

真宵さんの言葉に全力で同意するFクラスの皆。そうだ、そんな感じだよ。……あれ?  
? じゃあなんでそういう雰囲気になっちゃってるの? 今から試召戦争をするんだよね?  
今から男を取り合うわけじゃないよね?

「……秀吉」

「な、なんじゃ雄二」

「まさかとは思うが、お前の姉貴……」

「……おそらく、雄二の想像通りじゃ」

「……伊御も大変だな」

「えっ。俺?」

「全くもって、同情するのじゃ」

「??」

僕が頭に疑問符を浮かべてる近くで、雄二と秀吉が何かわかったみたいで顔で伊御の肩を叩いていた。えっ、わかったの2人とも? なら僕にも教えてよっ!

結局2人とも僕には教えてくれず、御庭さんと木下さんの雰囲気はそのまま第一回戦が始められた。

「第一回戦の科目は数学。では、始めてください」

「試獣召喚っ！」

高橋先生の合図に2人とも召喚獣を呼び出した。御庭さんの召喚獣は猫装備の短剣二刀のスピード重視の見た目。対する木下さんの召喚獣はがっつり豪華な装備を身につけてこれまた大きなランスを持った聖騎士のような召喚獣だ。そして気になる点数は……。

### 数学

『Fクラス御庭 つみきー332点 VS Aクラス木下 優子ー436点』

なあっ!? 400点越えだっ!? 御庭さんだっけ凄いい点数なのに、木下さんがインパクトを全部持つてっちゃったよ! 木下さんっけ頭が良いんだらうなとは思ってたけど、ここまではなかったなんて!

「貴女も中々やるじゃない。でも残念ね、アタシには及ばないわ」

「……点数が、全てじゃないっ」

先に攻撃を仕掛けたのは御庭さんだ。木下さんの召喚獣に二刀の短刀による素早い斬撃を喰らわせる。今まで見た中でも一番速いっ! これまでの試召戦争で召喚獣の扱いに慣れて来てるのが分かる!

木下さんはそれを辛うじて防いでいる状態だ。御庭さんの速さに驚いてるみたいだ。

「っ！ へえ、やるじゃない。なら、こういうのはどうかしら！」

木下さんの召喚獣の腕輪が光ったかと思った瞬間、武器であるランスが水流を螺旋状に纏った。……まずい！ 何か来る！

「っ!？」

「はあっ！」

木下さんは纏わせた水流を増幅させて御庭さんを側から剥がし、その勢いでランスを振るう。すると水流が鞭のようにしななって離れた御庭さんを襲った！

「……避けてみせるっ」

御庭さんは迫り来る水流を飛んでしゃがんでと縦横無尽にかわしていく。すつ、凄いい！ 時々かすったりしてるけど、決定打は貰ってない！

「召喚獣の操作にかなり慣れてるわね。なら、避けられないよう範囲攻撃で決める！」

「……今！」

木下さんが一際ランスを大きく振るったその隙について再び迫る御庭さん。かなりギリギリだ！ ま、間に合えーっ！

「……獲った！」

「速い!? けど……！」

御庭さんの短刀が木下さんの首元に迫る。木下さんはそれを大技を止めることで自

由になった左手を貫通させて止めた。御庭さんはそれに動じず、もう一本の短刀を振り抜くも、それはランスによって阻まれた。……惜しいっ！ もうちよつとだったのに！

「……っ。惜しかったわね？ 御庭さん」

「まだ、これから……！」

「……いいえ。残念だけど……アタシの勝ちよ」

木下さんの言葉に疑問を浮かべる御庭さんと僕達。今は膠着状態でお互い何もできない状態だ。なのにあの自信……あ！ まさかつ！

「これで貴女は……逃げられないわよ、ねっ！」

「っ!？」

木下さんは再度腕輪を光らせて、水流をランスに纏わせる。それによって御庭さん短刀が思い切り弾かれる。御庭さんはこの流れに逆らわず距離を取ろうとするも、木下さんの側から離れられない。何故なら……！

「逃さないって、言ってるでしょ！」

「……っ」

木下さんの手には貫通された短刀とそれを握る御庭さんの手が握られている。木下さんは首元を狙った短刀をわざと貫通させて、それを握る御庭さんの手ごと握り込んで逃さないようにしたんだ！ 点数差で力尽くではどうしようもない！

「それじゃあ……さようなら、御庭さん!!」  
 「……ううっ!」

どうしようもない状況でも諦めずにもかく御庭さんに、木下さんの水流が直撃した。  
 数学

『Fクラス御庭 つみきー0点 VS Aクラス木下 優子ー234点』

「勝者、Aクラス木下さんです」

そして、第一回戦の勝敗が決した。



「御庭さん、少しいいかしら?」

「………何?」

「アタシは……伊御君が好きよ」

「っ!」

「さっきも言ったけど、この戦いに勝ったからって伊御君のことには何も関係ないわ  
 けど……」

「………」

「貴女に、アタシが本気であることが伝わったはずよね？」

「……………うん」

「覚えておくことね。貴女の今の場所……伊御君の側に居られることは、当たり前じゃないってことを。そして、その場所をいつでも狙ってる人がいることを」

「……………」

「周りの人達は貴女たちが結ばれることを望んでいるみたいだけど、知ったことではないわ。周りなんて関係ない。アタシは伊御君が好きだから。彼と一緒にいたいから。全力で貴女の場所を奪って……いいえ、そこさえも乗り越えて伊御君の側に行くわ」

「ま、負けないわっ」

「……………そう。なら、これからは正真正銘のライバルね？」

「……………そうね」

「それじゃ……………」

「ええ……………」

「絶対、貴女には負けない！」



勝負の後、木下さんが御庭さんの側に寄って何かを話している。それから少しして、お互いが手を握り合って別れた。あれかな？ 良きライバルみたいな感じかな？ これからもお互い勉強を頑張りましょう！ みたいな。

「おかえり、つみき」

「……ごめんにあ？ 勝てにやかかった」（へんにやり

「ううん。つみきはとても頑張ってたよ」（ほふつ

「……うん」（へんにやり

御庭さん、相当落ち込んでるな。伊御のなでなでも猫耳が反応しない。

「つみきさん！ お疲れ様じゃよっ！」

「つ、つみきさん凄かったですよ！」

凹んでいる御庭さんに真宵さんと春野さんが励ましてるけど、しばらくは立ち直れないかな？

「御庭はよくやってくれた。腕輪持ちにあそこまで戦えた時点で凄い。おかげでこちらの士気は下がってない」

雄二も御庭さんにそうやって声をかけた。その通りだ。途中まで接戦だったんだ。僕達はAクラス相手に戦えるんだということを証明したんだよ、御庭さん！

「それでは次に進みます。2人目の方、どうぞ」

「それじゃあ、次は俺かな」

御庭さんが立ち直る前に、伊御が呼ばれてしまった。高橋先生！ もう少しツン猫のケアする時間が欲しいです！

「……頑張つて、伊御」(ぴ……ここ?)

「ああ。行つてくるよ、つみき」(ぼふっ

御庭さんも伊御の出番にさすがに落ち込んではいられなかったのか、少しだけ持ち直した。

「フアイトだよ、伊御！」

「伊御、農らの分も頼んだぞい」

「伊御、ここで一勝はしておきたい。……勝て」

「ああ。全力を尽くそう」

伊御は僕達に微笑み返してステージへと歩を進めた。



「よろしくね」

「ええ。こちらこそ」



伊御とAクラス側の女生徒が軽く言葉を交わす。

「第二回戦は物理です。では、始めてください」

「試獣召喚っ！」

そして始まった第二回戦。伊御の召喚獣は相も変わらずカツコいい。今日も『悪の帝 国国軍 将軍閣下』として敵を無慈悲に屠そうだ。対するAクラスの佐藤さんの召喚獣はネイティブアメリカン風の装備に武器は鎖鎌だ。……凄い、見た目だけで圧倒してるよ。佐藤さんもタジタジだ。

「な、何よあれっ!? カツコ良すぎでしょ! ……も、もしあれを本人が着た日には……あつ、鼻血が」(ボソツ)

「……優子? どうしたの?」

Aクラス側も騒ついている。それほど伊御の召喚獣は異彩を放ってるんだ。そして召喚獣達の上に表示される点数。

物理

『Fクラス音無 伊御ー246点 VS Aクラス佐藤 美穂ー389点』

うはあつ! やっぱりAクラス上位陣は化け物だな! 400点はいってないけど、ほとんど変わらない! 腕輪があるかどうかの違いなだけだ。というか400点を超える人達が異常なだけなんだよね。

「貴方もAクラスの平均は超えているのですね。素晴らしいです。しかし、容赦はしません」

「さっきつみきも言ってたけど、点数が全てじゃないんだよ？」

「なら、証明してみてください！」

佐藤さんが鎖鎌の分銅を伊御に投げつけてきた。伊御はそれを余裕でかわし、佐藤さんに迫る！

「先ずは一撃だね」

「させないっ！」

佐藤さんは分銅を引き戻すことをせず、鎌で伊御の長剣を受ける。伊御は鏑迫り合いを避け、少し佐藤さんから距離を取った。そしてそこから召喚獣の扱いに慣れた人特有のスピードを生かして、佐藤さんの召喚獣の周りでHIT&AWAYを繰り返す。

佐藤さんは分銅を戻すこともできずに受けに徹することとなった。伊御は決定打を与えられなくとも、確実に佐藤さんの召喚獣を痛めつけていく。

「は、速い!? ……いいえ、召喚獣の動きがスマートなのね」

「まあ、Bクラス戦でたくさん戦ったからね。操作にもだいぶ慣れてきたよ」

そう。伊御と御庭さん、春野さんなんかはかなりの場数をここにくるまでに踏んでいる。多少の点数差ならモノともしないはずだ！

## 物理

『Fクラス音無 伊御ー246点 VS Aクラス佐藤 美穂ー296点』

よし！ 300点を切った！ このまま行けるか？

「っせい！」

「！」

いや、ダメだったか！ 佐藤さんもようやく少し慣れてきたのか、伊御が脚を斬りつけようとしたのを見計らってカウンター気味に鎌で凧いだ。あ、あの点数差。伊御の召喚獣は大丈夫か？

## 物理

『Fクラス音無 伊御ー142点 VS Aクラス佐藤 美穂ー296点』

一気に100点近く持つてかれた！ さすがに一撃が重い。

「さあ、仕切り直しですね」

「……………ふむ」

佐藤さんは引き戻すことが出来た分銅を回して、伊御を牽制する。…………伊御はここからどうするんだらう？

「一か八か……………行くかな」

「受けて立ちましょう！」

伊御は召喚獣をジグザグに進ませながら佐藤さんの召喚獣に近づく。佐藤さんは分銅を飛ばすこともせず、落ち着いて伊御の動きを追っている。そして伊御がある程度近づいてきた瞬間、分銅を横に凧いだ。伊御はそれを飛んだかわすが……ヤバイよ伊御！

「空中なら、身動きが取れませんよね！」

佐藤さんも飛び上がって鎌を構えて伊御を狙う！ 伊御！

「それは、決めつけじゃないかな？」

伊御は空中で勢いを殺さず、佐藤さんに向けて剣を構えて縦に回転しながら落ちて行く。……伊御はここで迎え撃って終わらせるつもりだ！

「はああっ！」

「……決める！」

そして2人の召喚獣は空中でぶつかり合い、そして……。

「くううっ！」

「っ！」

伊御の回転斬りは勢いもあり肩から胴にかけて断ち切り、佐藤さんの鎌が……伊御の召喚獣の心臓を刺し貫いた。

……多分、佐藤さんの鎌が心臓を刺し貫いたは偶然なんだと思う。伊御が召喚獣を回転させたのは、剣の威力を増すためと、狙いを付けづらくさせるため。もし佐藤さんが

伊御の狙い通りほとんどの部位を刺し貫ていたら、まだ伊御が勝利する可能性はあつたはずだ。けど、今回は伊御に勝利の女神が微笑まなかつた。

物理

『Fクラス音無 伊御 10点 VS Aクラス佐藤 美穂 124点』

こうして、第二回戦は……伊御の敗北で決着が付いた。

## 第15話

「勝てなくてごめん」

「いや、あれは仕方ないだろう。向こうの運が良かったな」

「うん。伊御の狙い通りだったら勝ち目はあったのに……」

俺は負けてしまった申し訳なさからFクラスのみんなに頭を下げる。雄二と明久はそう言つて励ましてくれるが、結果は結果だ。これでこちらは2連敗だから……もう、後がない。

「音無、気にする必要ないわよ。だって今いる代表者5人以外に誰があそこまでAクラスと戦えるっていうのよ」

「そうじゃなあ。姫つち以外は全員文字通りFクラスレベルじゃからねー」

「……………」(コクコク)

「わ、私でも無理ですよおーっ」

「…………ふふっ」

俺はみんなの言葉に少しだけ気が楽になり、自然と笑みが溢れる。そしてくいくいと袖を引かれる感覚に目をやると、耳をびこびこさせてるつみきがいた。

「伊御。これで……お揃い」(びこびこ)

「うん。負けちゃったね」(ぼふっ)

「うん」(びこびこ)

「いや、負けたことでお揃いもクソもないんだが……」

雄二が俺達に向かつてそう言う。……まあ、そうだよな。でも、何故かつみきも立ち直ったみたいだから許して欲しい。

「では3人目の方、どうぞ」

「……………」(サッ)

Aクラス担任の高橋先生の声に静かにステージに向かう康太。やっと俺達の科目選択権が初めて生きてくる。おそらく、保健体育ならこの学年で康太に勝てる奴はいない。

「ムツツリーニ、ここで負ければ俺達の敗北が決まる。……分かるな？」

「……………」(コクコク)

「康太。俺達の尻拭いをさせるようでごめん。頼むよ」

「……………」(グッ)

康太は俺の言葉に振り向くことなく親指を立てることで答えてくれた。

「じゃ、ボクが行くねっ」

Aクラスからはショートカットの活発そうな女の子が出てきた。あまり見た覚えはないけど、確か優子の話だと1年の終わりに転校してきた……。

「工藤 愛子ですつ。よろしくね☆」

そう。工藤さんだ。確か水泳部にも所属していたはずだ。それにしても……。

「工藤さんと真宵じゃ、言葉の最後の☆の可愛さが違うね」

「「「「いや全く」」」」

「いつやあーん！ 伊御さんだったら、褒めても何も出ないんじゃないよっ☆」

「いや、真宵が可愛いわけないだろ」

「「「「いや全く」」」」

「どストレートに否定されたんじゃないよ!?!」

真宵は日頃の行いや言動を見直すべきだよ。……つみき、痛いから手を噛むのをやめような。

「えへへっ。ありがと、音無くん♪ それで……土屋くんだけ？ 随分と保健体育が

得意みたいだね？」

「……………」

ん？ 工藤さんのあの言いようといい、それを知って尚あの態度といい、もしかして工藤さんも保健体育が得意なのか？ しかし、次の彼女の発言は予想の斜め上をいっ



た。

「でも、ボクだつてかなり得意なんだよ? ……君とは違つて、*“実技”*でね」

……その発言は高校生としてどうなんだろう? みんなも。顔を薄く赤らめて反応しない。……明久、君の後ろにいる2人がすごい顔で君を見てるよ。……つみき、そんなに凝視しなくても俺は冗談だつてわかつてるから。

そして工藤さんはいかにも分かりやすく反応した明久に振つてきたが、島田さんと姫路さんが「永遠にそんなこと（保健体育の実技）は必要ない!」と力強く言い放つたことで明久がさめざめと泣いていた。……強く生きるんだ、明久。

「う、ううっ。……くっ! よくも青春男子をおちよかつたな工藤さん! ならこちらからも喰らえ! 天然トキメキ生産機、伊御!」

「……お前は何を言いだすんだ、明久」

「いいから伊御! 工藤さんに魅せつけちゃつて!」

「……はあ。全く」

俺は一步前に出て、何故だか少し期待してるような顔でこちらを見ている工藤さんに向けて、一言。

「ただ君の側にいることが出来るなら、実技なんて……いらぬよ」(キメ顔

バンツ (Fクラスのツン猫, one out

パンツ（Fクラスの戦場の天使、two out

パンツ（Aクラスの双子の姉、three out

changeツ!!

……これでもいいんだろうか？ 俺にはよくわからないんだが……。

「流石伊御だ！ 僕の出来ないことを平然とやってのける！」

「そこに痺れる憧れるうーんじゃよっ！」

「どうやら良かったみたいだ。しかし何を基準で良し悪しを決めてるんだろう？」

「え、えと……。こ、これが噂に聞くやつか／／／／／／ま、まあまあかなっ／／／／／」

／

「……強がるな」

「っ、強がってないよっ!?!／／／／／」

「工藤さんも少し挙動不審だ。……まあ、これだけで動揺を誘えたなら儲けものかな？」

「……いい加減、よろしいでしょうか？」

「そうやっていつまでもはしやぐ俺達に、高橋先生がどうとう痺れを切らしたみたいだ。康太と工藤さんに確認してきた。」

「も、もちろんですっ」

「……………」（コクコク

「では。第三回戦は保健体育です。始めてください。」

「それじゃあ、試獣召喚っ！」

「……試獣召喚」

始まる前に色々あったが、こうして第三回戦が開始された。

「……………」（プシュ）」（鼻血タラタラ

「くっ！／／／／／も、もう！ 伊御君は見境がなさすぎなんだからっ！／／／／／

／」（ツンツンテレテレ



第三回戦は予想通りムツツリーニに圧勝に終わった。しかし……。

保健体育

『Fクラス土屋 康太ー572点 VS Aクラス工藤 愛子ー446点』

なんともツツコミどころの多い戦いだっただな。……工藤さん、保健体育高すぎじゃないかな？ ……康太、お前はどこを目指してるんだ？ それでムツツリを認めないって

……。

「よくやったムツツリーニ。これで2対1だ。まだ巻き返すチャンスは残った」

「……………」(コクコク)

「いや雄二。もう少し動揺しないか？」

「勝てばいいんだよ勝てば」

俺の言葉にも無然とした態度を崩さない雄二。お前はそういうやつだったよ。

「それでは第四回戦を始めます。出場者は前に」

「は、はいっ。わ、私ですっ」

「それでは僕が相手をしよう」

Aクラスからは久保君が出てきた。妥当だろうと思う。彼は学年次席。しかもいつ

も姫路さんとは学力で競い合っていたはずだ。

「姫路さん、これに勝てば雄二の策がなる！ 頑張つて！」

「は、はいっ！」

姫路さんは明久のエールに満面の笑みを浮かべて頷いた。もう俺達の言葉は必要な

いかな？ 微笑ましい。

姫路さんと久保君がステージにて位置についた。さて、2人の実力はほぼ互角だつて

聞いている。この勝負、厳しいか？

「姫路さん。前回は決着を付けることができなかった。だからここで終止符を打とう」

「……わかりました」

久保君が姫路さんに向けてそう宣言した。確か姫路さんが去年まで次席だったけど、振り分け試験で姫路さんが途中退出したため久保君が自動的に次席になったんだ。そりゃ納得できないよね。

「第四回戦は総合科目です。では、始めてください」

「試験召喚っ！」

科目は久保君が選んだ総合科目。決着をつけたいなら確かにそれが妥当だよな  
………つて、え？

「[[[[「え？」]]]]」

「なっ!？」

「………終わりです」

この場にいる全員が呆然としてしまった。……ちよつと、待とうか。

俺は落ち着いて、現在の状況を把握する。まず、勝負は一瞬でついた。姫路さんの勝ちだ。それにも驚いたが、1番驚いたのは召喚獣の上に表示されてる点数だった。

総合科目

『Fクラス姫路 瑞希―4409点 VS Aクラス久保 利光―3997点』

まさかの400点差だった。これはすごい。これは霧島さんにも匹敵するかもしれない

ない。今この場は先ほどの静寂が嘘のようにざわめきが支配した。

「ぐっ……！ 姫路さん、どうやってそんなに強くなつたんだ？」

久保君が悔しそうに膝をついて尋ねる。つい最近まで拮抗していた実力がいつの間にかここまで離されたんだ。気になるのは当然だと思う。

「……私、このクラスが好きなんです。人の為に一生懸命な皆のいる、Fクラスが」

「Fクラスが……好き？」

「はい。だから、頑張れるんです」

姫路さんが久保君に語った言葉はとても嬉しい言葉だった。その言葉に含まれる気持ちの何割かは明久が持つて行つてゐるんだらうけど、俺もFクラスの一員だ。姫路さんの好きに少しでも入ってあげたいな。

「これで2対2です。次のクラス代表戦が最終戦となります」

今のこの状況が信じられないのかな？ 鉄仮面の高橋先生の表情にもわずかに戸惑いが見受けられた。珍しいこともあるんだな。



「では、最終戦の準備をしたいと思いますのでしばらくお待ちください」

高橋先生はその言葉とともに奥に下がっていった。次の戦いはかなり特殊だ。

『科目は日本史。内容は小学生レベルで百点満点方式の上限あり』

これを聞いたAクラスは当初かなりざわめいたな。だが、これで……。

「やつと、ここまで来た。これも全てお前達のお陰だ。礼を言う」

雄二がいつになく真剣に俺達に向かって礼を言った。らしくない。けど、それぐらい

感慨深いんだろう。

「雄二、後は任せたまよ」

「ああ。任せられた」

明久と雄二が硬く握手をする。

「……………」(ビッ)

「お前の力には随分助けられた。感謝している」

康太は雄二にピースサインを向ける。

「最後まで気を抜かずに頑張るのじゃぞ」

「ああ。今回お前には悪いことをした。詫びも含めて決めてこよう」

秀吉の言葉に優子の件も含めて雄二が詫びる。

「坂本、変なミスするんじゃないわよ！」

「雄二君、頑張ってください！」

「雄二さん、後は頼んだんじゃよー！」

「……ファイ、オー」

皆が皆、思い思いに有事に向けて最後のエールを送っていく。

「坂本君。あのこと、教えてくれてありがとうございました」

「ああ。明久のことか？ 気にするな。後は頑張れよ」

「はいっ」

どうやら、雄二は雄二で明久と姫路さんの為に何かしていたみたいだ。いつもなら浮かべない優しい笑みを浮かべて姫路さんを見ていた。それを見る俺に気付いて、肩を諫めた。……お互い苦労するね、雄二。

「雄二、頑張れよ」

「ああ、行ってくる」

俺は雄二と拳を合わせて、雄二を見送った。



## 日本史

『Fクラス 坂本 雄二ー53点』

『Aクラス 霧島 翔子ー98点』

Fクラスの卓袱台がみかん箱になった。……さつきまでの気持ち返して欲しい。



「3対2でAクラスの勝利です」

「……雄二、私の勝ち」

「……殺せ」

「いい覚悟だ、殺してやる！ 首を差し出せ！」

「イヒヒイ！ コロシテヤル、コロシテヤルンジャヨ！」

「吉井君、落ち着いてください！」

「ま、真宵さんも！ どうかお気を確かにい！」

「……はあ」

座り込んで俯く雄二に制裁を加えようとする明久と真宵を後ろから抱きついて止め

る姫路さんと姫。そして溜息をつく俺とつみき、秀吉と島田さん。康太は何故かカメラの準備をしてる。……何を撮るつもりだ、康太。

「雄二。0点なら名前の書き忘れとかで分かるんだけど、53点ってことは……」

「いかにも俺の全力だ」

俺の言葉に頷く雄二。……かつての神童がこのざまとは。勉強よりも大切なものがあるとはいえ、最低限は身につけようよ。このAクラス戦のときくらいはさ。

「この阿呆があーっ！」

「コロサセロー！」

「ちよつと2人とも落ち着きなさい！ アンタ達だったら30点も取れないでしょうが  
！」

「それについては否定しない！」

「お、お2人ともっ！ 雄二君を責めちゃ駄目ですよ！」

「そうですっ。責めちゃダメですっ」

「くっ！ なんで止めるんだ皆！ この馬鹿には喉笛を引き裂くという体罰が必要なのに！」

「そうじゃそうじゃ！ このゴミは火あぶりによつて世間に貢献する必要があるんじゃない！」

「それ全部処刑よ2人とも」

姫路さんと姫が体を張って必死に明久達を止める。それでようやくと明久と真宵が雄二に襲いかかることをやめた。……姫路さん達の優しさに救われたな、雄二。

「……雄二、約束」

霧島さんが雄二に向かって例の約束の件を切り出した。……康太、お前は何で撮影の準備が万端なんだ。彼女の同性愛者という噂はかなり眉唾ものだぞ？ 明久も後追いで準備しない。

「分かっている。なんでも言え」

「……それじゃ、雄二」

霧島さんの次の言葉を待つように静まり返るAクラス教室。そして……。

「……私と、付き合って」

「「「「「……はい？」」」」」」

……あー。なるほど、そういうことか。

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか」

「……私は諦めない。ずっと雄二のことが好き」

霧島さんはずっと雄二のことが好きだった。だから告白は全部断つて、美人な子達に注意を配つてた。……雄二に寄り付くかもしれない女子を把握する為に。

「その話は何度も断つただろ？ 他の男と付き合う気はないのか？」

「……私には雄二しかない。他の人なんて、興味ない」

……雄二め。こんないい子に好かれていたくせに俺達に黙っていたとは。これは何か罰が必要だな。

「拒否権は？」

「……ない。約束だから、今からデートに行く」

「ぐあつ！ 放せ！」

「……霧島さん」

「……？」

「い、伊御！ た、助けてくれっ！」

雄二が俺に助けを求めるけど、俺はそれを無視していいデート場所を教えてあげる。

「文月学園を出てしばらく先のところに『ハチポチ』という店があるんだ。そのケーキは絶品だから、デートにはそこに行くといいよ」

「伊御っ!! お前どういうつもりだ！」

「あとは、その店の長さんは優しい人でね。多分君の味方をしてくれると思うから、雄二



「…………え？　我がFクラス？」

「ふふふ、そうだ。おめでとう。お前らは戦争に負けたおかげで、担任が俺に変わるそう  
だ。これから1年、死に物狂いで勉強できるぞ？」

「「「なにーっ!?!」」」

まさかの西村先生がFクラスの担任。……まあ、色々やらかしたからなあ。

「これからはビシバシとしごいてやるぞ。特に吉井と坂本、片瀬は念入りにだ。なにせ  
開校以来初の《観察処分者》とA級戦犯だからな」

「そうはいきませんよ！　何としてもしごきをかいくぐって、今まで通りの楽しい学園  
生活を過ごしてみせます！」

「ふえっふえっふえっ。いいのかにやあ、西村先生。前の放送のは氷山の一角。西村先  
生がキクエ先生を怒らせる材料はまだいくらかもあるんじゃないやあ？」

「……お前達には悔い改めるといふ発想はないのか」

明久と真宵の少しも懲りてない様子に呆れ果てる西村先生。頑張ってください、西村  
先生。

「とりあえずは明日から授業とは別に補習の時間を2時間設けてやろう」

それにブーブーと文句を言うFクラスの面々。まあ嫌だろうね。でも、仕方ないか  
な。……あ。明久が姫路さんと島田さんにそれぞれ腕を引っ張られて何かを言い合っ

てる。ふふっ。大変だね、明久。

俺が少し遠くで皆の様子を見ていたら、つみきがトコトコと近づいてきた。

「どうしたんだい、つみき？」

「べ、別に？ 何となく来ただけよ」

「そっか」(ぽふっ)

俺はつみきの頭に手を置いた。猫耳がぴこぴこしてるから、機嫌はそこそこみたいだね。

「……結局、状況は進展どころか後退したわね」(ぴこぴこ)

「そうだね、つみき」(なでなで)

「……ね、ねえ伊御？」

「ん？」

「え、えつとね……きよ、今日「伊御君！ ちよつといいかしら？」っ!!？」

「優子？」

つみきの言葉を遮るように俺に呼びかけて来た優子。……つみき、そこまで睨むほど今の遮られたのが嫌だったのか？

「今日このあと時間ある？ 少し前に美味しいクレープ屋さんが出来たの。久しぶりに

「2人」で食べに行かない？」

「…………ふむ。クレープ屋さんかあ。いいね、行こう」「があぶっ！#」「い、痛い…………」  
つ、つみき。どうして頭を嘔むんだい？

「あら御庭さん。そういうことだから、アタシ達の邪魔をしないでくれるかしら？」

「…………シャーっ！」

「さ、伊御君。行きましようか」

「だ、だめっ！ 伊御は私とっ！ ……そによっ！」

「……………」

これは一体どういう状況なんだろう？ みんなで行くのはダメなのかな？ 戸惑う俺をよそに、今もなお俺の目の前で何故か火花を散らす2人。俺はそんな2人の様子に、溜息と共に苦笑を漏らした。

…………ふふっ。騒がしくて、賑やかで、愉快なこの時間。この場所。…………これが。

これが、俺の波乱万丈な学園生活だ。

【おまけ】

「あらあら。まさか雄二君がこんなに綺麗な子を連れてきてくれるなんて、私は嬉しい



わ

「……みいこさん。これは違「ぶすっ！」目があつ！」

「……浮気はダメ」

「あらあら。翔子ちゃん、だったかしら？ 安心して。私は雄二君を貴女から取つたりしないから」

「……でも」

「うふふ。女の子は余裕も大事よ？ 男の子は縛られるのを嫌がるものだから。それに……翔子ちゃんはとても美人だから、雄二君が浮気をする心配はないわ」

「……本当？」

「ええ。雄二君、そうよね？」

「み、みいこさん。今それどころじゃ「そうよね？」………ハイ、ソノトオリデス」

「……分かった。雄二、ごめんね？」

「………はあ、もういいから。さっさと食べるぞ」

「………うんっ」

「あらあら。うふふ」

## 二卷

### 第16話

「……音無」

「ああ、霧島さん。どうしたの？」

「……この間ありがとう」

「うん、どういたしまして。みいこさんとは仲良くなれたみたいだね」

「……うん。男の子の扱い方を学んだ」

「……みいこさん、いつそんなこと学んだんだろう？」

「……雄二もみいこさんが話したら、抵抗を諦めてくれた」

「まあ、雄二はみいこさんには頭が上がらないみたいだからね。素直じゃない雄二にはちようどいいんだよ」

「……昔に戻れたみたいで、楽しかった」

「ふふっ。それは良かったね」

「……うん。……」

「……？ どうしたの霧島さん？ 何か悩みでもあるのなら、俺で良かったら聞くけど」

「……いいの？」

「ああ。俺は2人の仲を応援してるからね。俺で出来ることなら力になるよ」

「……ありがとう。音無はいい人」

「気にしないで。俺がお節介をしたいただけだから。……それで、何を悩んでるんだい？」

「……雄二とデートに行きたいけど、いいところがない」

「いいところ？」

「……雄二はあまりデートに行ってくれる人じゃない」

「まあ確かにそうだね。雄二は面倒くさがりだから」

「……だからデートは学校帰りの寄り道とか、家で2人で過ごすのがいい。……って聞いた」

「……ちなみに、それもみいさんから？」

「……うん。だけどその分、時々は遠出のところがいいって」

「なるほど。……流石みいこさん。雄二のことかなり把握してる。……ん？ ということは、いいところがないっていうのは、いい遠出する場所がないってこと？」

「……音無。心当たり、ある？」

「ふむ……」

「……」

「……霧島さん。もう直ぐ準備が始まる『清涼祭』で、この学校のPRも兼ねて召喚大会が開催されるのは知ってるかい？」

「……うん」

「それなら話は早い。実はその優勝商品が、今建設中の『如月ハイランド』っていうテーマパークのプレオープンチケットなんだって」

「……！」

「霧島さんの成績なら、まず間違いなく優勝できると思うから狙って見たらどうだい？」

「……うん。頑張る」

「頑張つて。応援してるから」

「……ありがとう。音無はとてもいい人」

「力になれたようで良かったよ。……そうだ。連絡先を交換しておこうか。それならいつでも相談に乗れるしね」

「……うん。音無は本当にいい人」

「……そんなに言われると、少し照れるね」



桜の花びらも舞終わり、今は新緑の葉が擦れる音が耳をくすぐるそんな季節となった。それに合わせるように、俺達の通う文月学園では、新学期1番最初の行事である『清涼祭』の準備が始まりつつあった。

「おい伊御。そっち抑えてくれ」

「了解。……こうでいいか、榊?」

「オツケー。じゃあ、切ってくぞー」

俺は今、榊と一緒に『清涼祭』で出店……クレープ屋さんを出そうと準備をしているところだ。俺達の他にもつみきと姫、真宵もおり、俺と榊は屋台の骨組み、3人は屋台のデコレーションを担当してもらってる。

『清涼祭』では、クラスで出すものと有志で出すものに分けられる。さらに有志で出すものは、部活動で出すものと俺達のように個人で出すものに分けられ、俺達は榊に誘われて有志で出すことにしたのだ。

「それにしても良かったのか榊。Eクラスを放ってこっちの手伝いしてて」

「ああ。「真宵」達と出店を開く」と言ったら、快く送り出してもらえたぞ」

「……悪意があると感じたのは気のせいか」

「気のせいさつ☆ というか、それを言ったら伊御達だってそうだろ? Fクラスを

放ってるんだから」

「いや、Fクラスのみんなは……」

『吉井！ さあ、投げてこいつ！』

『勝負だ！ 須川君！』

『お前の球なんか、場外まで吹っ飛ばしてやる！』

『言つたな?! こうなつたら意地でも打たせてやるもんかつ！』

伊御！ 僕に君の加

護の力をつ！』

『ば、馬鹿なつ！ それはかの御仏のつ?!』

『そうだ！ 伊御が僕のそばにいる限り、僕に負けはない！ ……見ててくれ伊御、この

一球は君に捧ぐ！』

「……………」

遠くからでも聞こえてくる友人や知人の声に頭が痛くなる。 ……明久。お前にとつて俺は一体なんなんだ？

「……伊御、お前はいつから野球の神になつたんだ？」

「そんなものになつた覚えは一切ないんだが……。まあともかく、今ので分かつたと思うがFクラスは『清涼祭』に参加する気がない。だからこつちに力を入れててもいいん

だよ」

「なぐる。ま、それなら俺達は俺達で楽しもうぜ」

「そうだな」

「ヤッホー。お二人さん、準備は如何程かにや?」

俺達が話していると、真宵が持ってきた色々な機材を下ろしながら話しかけてきた。

「今大きめの角材を切り終わったところだ。……それで、真宵はなんでンなもんを持ってきたんだよ」

「にや? それは今からソーラーパネルやら赤外線探知機やらを取り付けるためじゃけど」

「それもう屋台の規模じゃないだろっ!」

「真宵。ちゃんと管制システムの構築は済んでるのか?」

「もちもちロンロン☆ ちゃんとテストも繰り返し返してるし、もしものための防衛システムも別に用意してるから大丈夫じゃよ」

「ちよつと待て! 伊御は了承してるのか!?!」

「ああ。ベスト屋台賞目指してるからな」

「マジか!?!」

「ちなみにオール電化じゃよ」

「……へー」

あ。榊が考えるのをやめた。

「……伊御」(くいくい)

「ん? つみきか。そっちはどうだい?」(ぼむっ)

俺は裾を引かれる感覚に振り向くと、姫と屋台のデコレーションをしていたつみきがいた。

「ペンキがなくなつたの」(びこっ)

「それならさつきキクエ先生を見掛けたから、先生に貰つてくるといいよ」(うりうり)

「ん。わかつた」(びこびっ)

つみきは頷いて、俺がキクエ先生を見掛けた方へ小走りで向かっていった。俺はその後姿を見送り……うん、和む。

「んしよつとお。……はひい。美波さん、ありがとうございました」

「いいわよこれくらい。というか姫は頼りにしなすぎ。もうちよつと他を頼りなさい

よう?」(ほっぺフニフニ)

「ひゃ、ひゃひい」(されるがまま)

つみきが行つた後に、すれ違うように姫と島田さんが数枚の黒板を抱えてやつてきた。どうやらメニューはペンキじゃなくて黒板にチョークで書いて立てかけるみたい



だ。それにしても……うん、和む。

「姫、ありがとう。島田さんもね」

「はひ」

「どういたしました。……こっちはちゃんと準備してるのね？」

「そりゃあね。俺達がしたいって言い出したんだし。……せつかくの『清涼祭』なんだから、楽しまないと」

「ナハハ！ 有志部門で一位を搔つ攫つてやるぜい！」

「にやほほっ！ ベスト屋台賞も頂きじゃあ！」

「フフツ。みんな楽しそうで良かったわ。……はあ、それに比べてアイツらときたら」

「あ、あはは」

島田さんはこれ見よがしにため息をつき、姫も愛想笑いを浮かべている。俺も未だに野球をやつてるであろうFクラスの面々を思い浮かべてため息をついた。

そうしていると、少し表情に陰りを見せる島田さんが視界に移った。……どうしたんだろう？ やっぱり明久と『清涼祭』を楽しみたかったとかかな？

「……ねえ、音無。ちよつといいかしら？」

「……ふむ。何か悩み事かな？」

「ふえ？ 美波さん、そうなんです？」

「ん、まあちよつと……ね？」

やっぱり何かあるみたいだ。友人として、聞かないわけにわいかないな。

「俺で良かったら話を聞くとよ」(ぼむっ)

「そうね」(ぴっぴっ)

「わ、私もですつ。私ではお力になれるか分かりませんが……」

「いやいや！ 俺達に任せておけばあゝ……」

「どんな悩み事も万事解決じゃよつ！」

「……うん。ありがとう、みんな」

俺達の言葉によくやく笑みを見せてくれた島田さん。うん。やっぱり女の子は笑顔が一番だね。……あれ？ そういえばつみきはいつ帰ってきたんだい？

「さつき。ペンキは確保してきた」

「……そっか」

なんかナチュラルに心を読まれた。

そんなこんなで、俺達は作業をやめて島田さんの話を聞くことにした。しかし……。

「えつとね。実は……」「~~~~~♪」……………」

「「「「……………」」」」」

突然鳴り響く携帯のメールの着信音。それも3機同時に。……俺と榊、真宵のやつ

だ。

「「なんか、ごめんなさい」」

「い、いいのいいの！ 気にしなくていいから！」

心より申し訳なく思う俺達に、両手を振って許してくれる島田さん。本当にごめん。それにしても、3つ同時に鳴るなんて。どんな確率かしら？」

「そ、そうでよねっ。不思議ですわね！」

つみきと姫が俺達の罪悪感を払うように話題を変えてくれた。……そうだね。いつまでも沈んでも仕方ない。さっさとメールを開けて島田さんの話を聞こう。

「それにしても誰なんじゃよ。こんなタイピング悪くメールを送ってくる輩は！」

「全くだ！ 絶対に空気が読めない友達0の輩だと俺は思うわね！」

「それは言い過ぎだとは思うが。まあ、とりあえずメールを開こうか」

そして俺達はそれぞれの携帯を開き、メールを確認した。そこには……。

「From 明久」

応援求む

プランEで

t a s u k



「み、美波さんっ。おおお落ち着いてくださいいい！」

島田さんの雰囲気荒れている。……明久、今回は助けないよ。

「それじゃあ榎。俺達は教室に戻るよ」

「おう！ また後でな」

「さてはて。Fクラスの出し物は何になるんじやろうねえ」

「休憩室、とかかしらね」

「ありえそうで怖いんじやよ」

そして俺達は自分のクラスの出し物を決めるために教室へと足を進めた。

「ふええっ!? 皆さん、明久君達は放置ですかあ!?!」

『よおし。捕まえたぞ貴様ら。……覚悟はいいな?』

『んのおおおおーっ!!』

【おまけ】

「へー、クレープ屋さんかあ。伊御君が作るクレープは美味しそうね」

「そんなにいいものではないと思うけど。優子が来てくれるなら、俺が奢るよ」

「本当？ それは是非とも伺うわ」

「ああ」

「そういえば伊御君。貴方、最近代表と仲が良いわね？」

「そうだね。雄二とのことで相談に乗ったりしてるよ」

「代表、喜んでたわよ。良いデート場所を教えてもらってたって。私も手伝って欲しいって頼まれたから、召喚大会に出ることになったの」

「そうなるよ、もう勝てる人は本当にはいないかもしれないね」

「もちろん。誰も勝たせるものですか」

「ふふっ。とても優子らしいね」

「そ、そう。……ね、ねえ伊御君？」

「うん？ なんだい？」

「わ、私は負けるつもりは更々ないわ！ け、けどっ！ ……あ、貴方の応援があれば、もつと負ける気がしなくなかもなく……」（ちよんちよん

「……ふむ。優子」（ぼむり

「っ！／／／／」（ネコミミぴっこーんっ！

「俺も応援してるから。頑張ってるね」（なでこなでこ

「……うんっ／／／／」（ぴこぴこ／／／／

「勝てたら、ご褒美をあげるから」

「っ!? 絶対、絶対よ!?」(ぴこーん！)

「ああ」(なでりなでり)

「…………ご褒美、ご褒美。…………えへへ」(ぴんぴん♪)

「…………ふふっ」

「……………#」(ギリッ)

…………バキバキバキバキキイツ!!

「んにや? ……………つてぎよえええええええつ!?」

「ふわあっ!? ま、真宵さんが崩れた壁に押しつぶされましたあ!?」

## 第17話

僕らFクラスメンバーは、さつきまで清涼祭の準備をサボって野球をしていたんだけど、そこを鉄人が強襲してきた。

僕は鬼から逃げるときに、携帯でこの野球に参加してなかった伊御と榊、真宵さんにいつものプランで逃げ切るためにメールを送ったんだけど……ポイントには誰もいなかった。そのことに絶望する僕と雄二はそこで鉄人に捕まり、激しい折檻を受けることになった。鉄人め！ 僕らが卒業する時は覚えてろ！

僕と雄二は、ポイントに誰も居なかったのは有志の出店の準備で忙しくて気付かなかっただけだろうと考えて、折檻を終えた僕らは教室へと帰った。そして教室のドアを開けた瞬間、僕の側頭部を襲ってきたのは美波のシャイニングウイザードだった！

「ブラアッ!?!」(ドゴンツ!!)

「ふんっ」  
完全な不意打ちを喰らい、僕の頭の右側半分が黒板に埋まった。そんな僕の左の視界では満足そうに席（みかん箱）に戻る美波が見えた。……僕、今日何かしたっけ？

少しブルーになる僕だったが、何よりも心にキタのは、その後それを当然の報いだ



という目で見て頷く伊御達だった。あの様子だと、僕らへの救援も気付いた上で無視したみたいだ。……あの伊御にさえ見捨てられたんだ、僕。……ははは。どうやら僕は知らぬ間に外道に堕ちたみたいだ。ははははは……死のう。

「あ、ああ明久君!!? 何をしているのですかあつ!!?」

「吉井君つ! 早まらないでくださいっ」

僕が埋まった頭を思い切り抜き出し、血みどろのまま窓から飛び降りようとしたところで、姫路さんと春野さんが慌てて止めに入った。止めないで! こんな僕、死んだ方が美波の為、伊御の為なんだから!

それでも死のうとする僕を、流石に焦った伊御や美波までもが止めに入ったので、一応ここで死ぬことは諦めた。後でひっそり死のうと考える僕に、真宵さんが耳元で色々教えてくれた。どうやら僕のメールや鉄人との騒ぎが原因で、美波の悩み事を聞けなかつたらしい。なるほど、それは伊御や美波が怒るわけだよ。つて美波、悩みがあるの?

「これから清涼祭の出し物を決める。とりあえず実行委員を適当に決めてくれ。そいつに全権を委ねるから、あとは任せた」

場が収まり、ようやくと雄二が清涼祭の進行を気怠げに始めた。雄二は自分の興味が無いものにはとことん冷めてるからね。それからも誰を実行委員にするか話し合つて

いたけど、自分は我関せずと寝てるし。結局、実行委員は僕と美波になった。

そんな寝ている雄二を見て、何か寂しいと言う姫路さん。僕もあまりやる気はないんだけど、そんな僕と姫路さんは清涼祭で思い出を作りたいと言ってくれた。それに少し嬉しくなって、「僕もだよ」って言おうとした時、姫路さんがタチの悪そうな咳をしだした。

試召戦争に負けてさらに設備が悪化したFクラス的环境は彼女には毒だ。一応、真宵さんが女子を優先して色々清潔になるよう補強してくれてはいるけど……正直、焼け石に水だと思う。……なんとか、しないとな。

そんなこんなで今現在。僕が板書を担当して、美波の進行の元、クラスの出し物がある程度決まったわけだけど……。

〈候補① 写真館『秘密の覗き部屋』〉

〈候補② ウェディング喫茶『人生の墓場』〉

〈候補③ 中華喫茶『ヨーロッパアン』〉

「……補習の時間を倍にした方が良さそうだな」

後から教室に入ってきた鉄人が、頭を押さえて溜息をついた。しまった！ 僕らが馬鹿だと思われている！

「せ、先生！ それは違うんです！」

「そうです！ それは吉井が勝手に描いたんです！」

「ワタシ達が馬鹿なわけじゃないんじゃないよ！」

「貴様ら！ 僕を売ったな!？」

「馬鹿者！ みつともない言い訳をするな！」

鉄人の一喝に背筋を伸ばすFクラスの面々。流星は腐っても教師。僕を売ろうとしたクラスメイトを叱るなんて、少し見直したよ。

「俺は馬鹿な吉井を選んだこと自体が頭の悪い行動だと言ってるんだ！」

同級生なら釘バットでシバいてるところだ。見直した僕の気持ちを利子つけて返して欲しい。

「全くお前達は……。少しは音無達を見習ったらどうだ。彼らは出店で稼いだ金を、クラスの設備向上に当てると言ってるんだぞ。お前達にもそういう気持ちは無いのか？」

「えっ!? 伊御ホントなの?」

鉄人の言葉に、Fクラスが騒ついた。というかそんなこと出来るのっ!? 知らなかった……。

「ああ。俺達は別にお金が欲しいわけじゃ無いし」

「はひい。皆さんで何かをするのは楽しいですから」

「ワタシは欲しいんじゃないけど……。まあ、設備向上に当てられるならそれが一番じゃし

ねー」

「そうね」

ほえー。色々考えてるんだなあ。というか、それなら僕も誘って欲しかった……。……うん。それなら僕もやる気だそう。僕達も頑張れば、その分姫路さんに少しでもいい環境を整えることが出来るはずだ！

「み、皆さんっ！ 頑張りましょう！」

僕が1人で意気込んでると、姫路さんが立ち上がって胸の前でグーを握ってやる気を見せていた。どうしたんだろう？ 姫路さんが率先して動こうとするなんて、なんかしく無い気がする。僕が不思議そうに姫路さんを見ていたら、美波が僕に理由を教えてくださいました。

「瑞希ってば、お父さんを見返すために頑張りたいんだって」

「見返す？」

話を聞けば、家でお父さんに『Fクラスなんていう馬鹿なクラスはお前にふさわしくない』とかなんと言われたらしい。それに姫路さんは『皆の事を何も知らないのに、Fクラスっていうだけで馬鹿にするなんて許せません！』と怒ったらしい。……姫路さん。その気持ちはすごく嬉しいんだけど、皆をよく知ってる僕から見ても一部を除いてFクラスは馬鹿の集まりだと思う。

それからしばらくして、そこそこ揉めたけど僕達は中華喫茶をすることになった。伊御達も手伝ってくれるみたいだ。ありがたい。

というわけで、まずは厨房班とホール班に別れることになった。厨房班の班長は須川君。副班長はムツツリーニだ。そしてホール班の班長は僕。副班長は伊御になった。伊御は出店でクレープを作るみたいだから、こっちではそのルックスと口説き文句で女性客を呼んでもらおう。……御庭さんの嫉妬は頑張つて受け流して？

「それじゃ、私は厨房に……」

「ダメだ姫路さん！ 君はホール班じゃないと！」

僕は厨房班に入ろうとした姫路さん呼び止める。彼女を厨房に行かせるわけにはいかない！ ……死人は避けなければ。

《明久さん！ グッジョブじゃあ》

《うむ！ ナイスブロックじやの》

《……………！》（コクコク）

《……………明久。そろそろ話した方がいいんじゃないか？》

姫路さんの料理の破壊力を知る皆からのアイコンタクトに頷く。表情や言葉には出さない。姫路さんを傷つけるわけにはいかないんだ。……だから伊御、もう少しだけ待つて。中々誘う機会がないんだよ……。

「え？ 吉井君、どうして私はホールじゃないとダメなんですか？」

「あ、えーつと……。ほら！ 姫路さんはかわいいから、ホールでお客さんに接してもらった方が利益があつ?! み、美波！ 僕の側頭部を掴んで壁に押し付けようとしなくて!？」

これ以上頭をめり込ませると、流石に僕の頭の形が変わっちゃう!

「か、可愛いだなんて……。つ。よ、吉井君がそう言ってくれるなら、ホールでも”頑張りますねつ”

出来ればホールだけで頑張つて欲しい。

「アキ。ウチは厨房にしようかな」

「うん。適任だと思つ」

「……………」

「それならワシも厨房にしようかの」

「はひ。私も厨房に行きます」

「2人共！ 何を馬鹿な事を言つてるのさ。そんなに可愛いのに、厨房なんて勿体な「ふんっ！（ドゴンツ!!）……………」

僕の無事だった頭の左半分が黒板に沈んだ。

「ふえええつ!？」

「……ウチもホールにするわ」

「美波さん。じゃからそういうところがじゃねえ〜」

「な、何よ！ うるさいわねっ！」

「……………」(気持ち少しわかるツン猫)

そうして、僕達の設備向上が掛かった清涼祭が僕が黒板にめり込んだ状態で幕を開けた。

「……明久。女の子にアレはないよ」(引っ張る)

「……………」僕、ちゃんと女の子に気を使ってるよ？」(抜けない)

「……はあ」(助けるのをやめる)

「ごめん伊御！ 助けて下さい！」(懇願)



清涼祭に向けての話し合いも終わった放課後。僕達はまだ準備を焦る段階でもないので家に帰ろうとした時、美波に呼び止められた。

「ねえ皆。ちよつといい？」

「どしたの美波？」

「……もしかして、さつき言いかけてた悩みかな？」

伊御の言葉にハツとする僕。そうだ。美波は何か悩みを抱えてるみたんだよね。

……さつきは本当にごめんなさい。

「うん、それとも関係するんだけど……。やっぱり坂本をなんとか清涼祭に引つ張り出せないかな？」

「雄二を？ うーん、難しいだろうなあ」

「そうじゃねえ。雄二さんは興味がないうことには驚くほど無関心じゃし」

「多分、クラスの出し物が何かも知らないわよ」

皆がそれぞれ言葉を発する。それは一様に無理だろうというものだった。

「でも、アキが頼めばきつと動いてくれるよね？」

なんだその期待の眼差しは。美波は僕に何を見ているんだい？

「いや、別に僕が頼んだところでアイツの返事は変わらないと思うけど」

「ううん、そんなことない。きつとアキの頼みなら引き受けてくれるわ！ だって……」

「そりゃあよくツルんではいるけど、だからと言って別に「だってアンタ達、愛し合ってるんでしょ？」 僕もうお媚に行けないっ！」

どこをどう見たらそんなことになるんだ！ 奴と愛し合ってるだど!? 想像しただ



けで吐き気……グツプ。

「……明久」

「い、伊御。僕、これからどんな顔して歩けば……」

「今から霧島さんに謝りに行こうな」

「信じて伊御！ 僕はまだ清いままだよ！ 誰がゴミを巡る愛憎劇に参加するもんか！」

僕の良心が真顔で迫ってきた。……側から見たら僕と雄二はそう見えるのだろうか。甚だ遺憾である！

「それならまだ秀吉や伊御の方が断然いいよ！」

「あ、明久!？」

「……ふむ」

……あれ？ なんか雰囲気がおかしいことになってない？ あれっ!？」

「そ、その。お主の気持ちは嬉しいが、そんなことを言われても、儂らには色々と障害があると思うのじゃ。えと……ほら、歳の差とか……の?」

秀吉！ 顔を赤らめてモジモジしないで！ 秀吉ならいいかなって思っちゃうから！ それと僕達の間にある障害は決して歳の差ではないと思う！

「明久。気持ちはありがたいけど、俺は君のことを大切な友人として思ってるから……」

「ごめんね？」

伊御！ かつてないほど優しい笑みを浮かべてマジに返してこないで！ ……あれ  
!？ 僕、知らない間に告白したことになってるの!？ そしてフラれたのっ!？

「……フーツ！」（臨戦態勢）

……落ち着くんだ御庭さん。僕は決して君の想い人を獲ろうとか、そんなことを考えてるわけじゃないから。その牙と爪をしまうんだ。

「それじゃ、坂本は動いてくれないってこと？」

「え!？ ……あ、うん。そういうことになるかなっ」

僕は美波の声に慌てて答える。そうだ、今は美波の悩み事を……って伊御！ 口元隠して笑ってるってことは、僕を弄ったな！

「なんとかできないの？ このままじゃ喫茶店が失敗しちやいそうで……」

美波が目を伏せて、顔をうつむかせている。その様子に僕も伊御も、そして皆も真顔な顔になる。

「美波。別に雄二がいなくても、伊御達がいるからなんとかかなると思うよ？」

「でも音無達は出店もあるでしょう？ やっぱり坂本に参加して欲しいのよ」

「……ふむ、島田さん。とりあえず君が悩んでることを話してくれないかな？ そこを

聞かないと、今はどうしようもないから」

「……うん。でも、絶対に内緒にしてね？ 誰にも言わないでって言われたことだし、事情が事情だから……」

「ああ」

伊御の返事のあとに皆が頷く。それを確認した美波はゆつくりと息を吐いたあと、僕達に悩み事を話してくれた。

「実は瑞希のことなんだけどね？ あの子……このままだと転校するかもしれないの」

「てっ……」

「[[[[[[転校っ!]]]]]]」

姫路さんが転校？ そんな馬鹿な。せっかく同じクラスになって、これから楽しい思い出をいっぱい作っていかうとしたところなのに。まだ好きだって告白やキス、そのあとだって……。彼女が居なくなったら僕はどうなるんだ？ 僕の心の清涼剤が1人消え、春野さんは美波に持っていかれる。僕の心を癒すものはなくなり、心がすり減って勉強が手につかなくなつて退学。生きる気力もなくなり、僕が衰弱死しようとしたその時に、颯爽と現れた伊御。伊御は僕を叱責し、励ましてくれた。そのおかげで僕は生きる道を見つけることができた。そして僕は心の癒しはまだ無くなってないなかつたことに気付いて、甲斐甲斐しく世話をしてくれた伊御が僕にとって何よりも特別な存在になつて、そして……

「ありや？　もしかして明久さん、処理落ち仕掛けてるん？」

「む、本当じゃ！　おい明久！　しつかりせい！」

「明久は不測の事態に弱いのか強いのかわからないね。……明久、しつかりしろ。明久」

僕を呼ぶのは誰だろう。……ああ、伊御か。

「伊御……。こんな僕でも、きつと幸せにするから。だから結婚してください」

「……明久。そのくだけはさつき終わったぞ」

「……どういう処理をしたら、瑞希の転校からこういう反応が得られるのかしら」

「ある意味、稀有な才能かもしれないのう」

「ほくらつききさん。どうどう」

「つ、つききさん。落ち着いてください！」

「……………#」（シャーっ！）

……はっ!?　いけない、ちよつとトんでた！

「み、美波！　姫路さんが転校ってどういうことさ!?!」

僕は気を取り直して、美波に詰め寄る。……あれ？　御庭さん、なんで僕を威嚇して

るの？　そのくだけはさつき終わったよ？

「明久、落ち着け。……まあ、分からなくもないかな」

「伊御、どういこと?」

「明久。姫路さんの親御さんの立場になって考えるんだ」

「親御さんって……姫路さんのお父さんとお母さん？」

「そう。まずは今の勉学の環境だ。自分の娘は既に高いレベルにいるのに、周りの生徒の勉強レベルは底辺だ。そうなると、親御さんはどう思う？」

「親としてはもつと勉強を頑張つて欲しいのに、これではダメだと思うわね」

御庭さんの答えに皆が頷く。

「次に今の設備だ。さつきも言ったけど、自分の娘は高いレベルの学力を持つてる。なのに設備はみかん箱に擦り切れたゴザだ。となると……」

「こんな不釣り合いな待遇、ふざけるな！ ってなるわね」

美波の答えにまた皆が頷く。

「最後に、多分これが一番の問題だと思うんだけど……この劣悪な教室の環境だ。身体の弱い自分の娘を、こんな環境に1秒でも居させたいと思うかい？」

「」「」「」「」「」

僕達は皆首を横に振った。

「と、いうわけだと思うんだけど……」

「さすが音無ね。全部正解よ」

伊御が話を締めると、美波がウンウンと頷いていた。……確かに改めて考えてみたら

そうだ。こんな環境、普通の感性を持つ親なら絶対に大事な子供をいさせたくはない。

「なるほどにやー。だから喫茶店を成功させて、設備を向上させたんじゃないかね？」

「うん。瑞希も抵抗して、「召喚大会で優勝して両親にFクラスを見直してもらおう」って考えてるんだけど、やっぱり設備自体をどうにかしないと……」

「はうう。そうですよねえ」

勉強もそうだけど、1番の問題は姫路さんの健康だ。それをなんとかしないと、姫路さんの親御さんは納得しないだろう。……やっぱり、雄二を焚きつけるしかないかなあ。

「……ねえ、アキ？」

「ん？ 何、美波」

僕が雄二をどうにかできないかと考えてると、美波が僕を探るような目で見てきた。

「アキは、その……瑞希が転校したりとか、嫌だよね？」

美波は何を当たり前のことを聞いてるんだ！

「もちろん嫌に決まってるじゃないか！ 姫路さんだけじゃない！ 伊御や御庭さん、

美波や秀吉。僕の大切な仲間なら誰であつても！」

家庭の事情ならともかく、こんなくだらない理由で転校なんて絶対にさせない！

「そっか。うん！ アンタはそうだよね！」

美波は僕の言葉に嬉しそうに頷く。……ちなみにこれが雄二だったら、霧島さんのためにシャー無しで助けてやるかなってレベルだ。

「ふふっ。明久ならそう言うと思ったよ。……俺も、力になるよ」

「こんな別れ方、悲しいものね」

「はひ！ そ、そんなことはさせません！」

「クラスメイトの転校と聞いては、儂も黙っておれん」

「なら、まずは雄二さんのケツを蹴り飛ばさなきゃじゃねっ☆」

……ここにいる皆が、仲間の為にと立ち上がってくれる。僕はこの光景が無性に嬉しくなって、笑顔が溢れた。

「うん、やろう！ 皆で！ 姫路さんを転校させない為に！」

「」「おう！」「」

こうして、僕達の本当の清涼祭が幕を開けた。

【おまけ】

「……………」

「……………伊御？ どうしたの？」

「ん？ いや、明久はやっぱり明久なんだなあつて思つてね」

「??？」

「……………ふふっ。つまりね」(ぼふっ)

「うん」(びこびこ)

「底抜けに馬鹿で。何処までもひた向きで。そして、誰かが悲しんでいるのを見過ごせない。……………小さな英雄だつてことだよ」

「……………」

「……………つみぎ？」

「……………伊御だつて」

「？」

「……………伊御だつて、わ、私にとつてのっ」

「……………」

「……………私にとつての……………だから……………」

「？ ごめんつみぎ、聞こえなかつただけど……………」

「……………し、知らにやいっ／／／／(プイッ)



## 第18話

僕は姫路さんを転校させない為、まずはFクラスのブレインたる雄二にも力を貸してもらおうよう行動を開始した。まず最初に、とりあえず僕が雄二に携帯で連絡を取ってみると……。

「クソツッ！ 見つかっちゃった！ 明久、俺の鞆を持って来い。頼んだぞっ！」

と言うだけ言つて電話を切られた。……雄二は今何から逃げてるんだらう？

僕が雄二とのやりとりを皆に話すと、事情を知ってる秀吉と伊御から教えてもらった。どうやら、雄二は霧島さんから逃げ回つてるらしい。なんて贅沢で失礼な奴だ！

霧島さんのような魅力的な人、男なら逆に追い回すのが普通だ！

「それなら、今は雄二君と連絡を取るのには難しいですね」

どうでしょうか？ と首を可愛らしく傾げる春野さん。うん、可愛い。……でも大丈夫だよ春野さん。

「……うん。これはチャンス、かな？」

「そうだね伊御。これは利用しない手はない」

「ほえ？ どういうことです？」

「それはね、姫。今の状況を利用すれば、雄二を清涼祭に引っ張り出せるってことだよ」

伊御が春野さんの疑問に答えながら、僕の方に振り向いた。

「明久。俺が追い込むから、先回りしといて」

「え？ 追い込むって？ 今から霧島さんのことを利用して、雄二を脅すんじゃないの？」

「「「脅すって……」」」

僕の言葉に引き気味になる皆。え？ 何を驚いてるの？

「まあ、間違いではないんだけど……。俺は霧島さんの味方だから、霧島さんの為になるようにもしたいんだ。雄二は素直じゃないからね」

「ふーん。それで、どうするの？」

「うん。こうするんだよ」

僕の疑問に答えながら、伊御は携帯を開いた。

「それじゃあ、ミッションスタートだ」



「し、しつこいぞ翔子！」

「……雄二、逃さない」

「クツソ、捕まってたまるか！」（ダツ！

……

……

……

「はあ、はあ、はあつ。ここなら翔子のやつも……」

「……雄二。いるのは分かっている」

「っ!? なんでバレたっ!? ……くっ！」（ダツ！

「……逃さない」

……

……

……

「……よし、ようやく巻けたか」

「……逃さないって言った」

「っ!? な、なんでだっ!? なんで俺のいく先々に翔子のやつがいるんだ!」

「……雄二、いい加減素直になって」

「素直もクソもあるか! なんていきなりお前の両親に紹介されなきゃいけないんだよっ! 絶対に逃げ切つてやるっ!」(ダッ!)

「……もしもし」(びっ)

『霧島さん、お疲れ様。それじゃあとは約束通りに……』

「……分かった。……いつもありがとう」

『どういたしまして』



「はあ、はあつ。……いい、居ないか? ……ふううつ」

「あ、雄二!」

「うおおっ!? ……な、なんだ明久か。ビックリさせんじゃねえよ!」

「いや、普通に声かけたただけなんだけど……」

雄二は大きく胸をなでおろしながら、あたりを神経質に見回していた。……うん、伊

御の計画通りだ。

「それで、何の用だ？」

「イヤイヤ。雄二が鞆を持ってきて欲しいって言ったんじゃないか。はい」

僕は不機嫌そうにしてる雄二に鞆を投げ渡す。

「ああそういうえげそんなこと頼んだなっと。明久にしては気がきくじゃねえか」

「せっかく人が親切にしたってっていうのにひどい言いようだね？」

「実際そうだろうが」

「はあ、全く。……それで、なんで霧島さんに追われてたの？」

僕は事情を知ってはいるけど、あえて知らないふりをして話を切り出した。

「……………翔子の家族に紹介したいそうだ」

「……………まだ付き合って一月経ってないよね？」

「付き合ってねえ！俺は認めてないぞ！」

雄二は試召戦争で「勝った方のいうことを一つ聞く」っていう賭けに負けたじゃないか。いい加減諦めなよ。……それにしても。霧島さんはステツプを何段飛ばしに進んでるんだろう？ 愛が深い人なのかな？

「ってこんなことしてる場合じゃねえ。さつきとズラからぞ！」

「……………うーん。それは無理じゃないかなあ？」

「あ？　なんでだよ」

よし、ここからが本題だ。

「1つ聞くけどさ。もしかして、雄二が逃げる場所逃げる場所に霧島さんが居たりする？」

「……なんで分かる？」

「さつき見掛けたんだけど、霧島さんが誰かと電話してたんだ」

「電話だと？」

「うん。で、その相手が伊御だったんだ」

「っ!!　そういうことかっ！」

流石元神童。伊御ってだけで全部把握した。……果たしてそれが全部かはさておいてね。

「伊御なら俺が行く場所を読むことは容易い。さらに伊御は翔子に協力的だ。翔子が俺を捕まえるのを全力で助けても不思議じゃない!　クソっ！」

雄二は携帯を取り出し、伊御に電話をしようとするけど……無駄だよ。

「チイツ!　通話中になつてやがる!　現在進行形で助言の最中か!　……どうする?　おそらく下駄箱は見張られてる。このままじゃ……っ!」

よしよし、かなり焦ってるな。切り出すならここだ!

「ねえ雄二？」

「ああっ!? なんだよ！」

「伊御が今いる場所知ってるけど、知りたい？」

「……………何が目的だ？」

今の聞いただけで、僕がタダで教えないって分かったみたいだ。話が早くて助かるよ。

「まあまあ、そんなに睨みつけなくてよ。僕のお願いを聞いてくれらなら話すからさ」

「お願いだと? ふんっ、清涼祭の出し物のことか?」

「……………なんで分かったのさ?」

「少し考えればこれぐらい分かる。…………やれやれ。変に俺と交渉せずとも、お前が『好きな姫路さんの為に頑張りたいんだ! 協力してください!』と言えば、面倒だか協力してやったというのに」

「なっ!? べ、別にそんなことはっ…………!」

「あーはいはい。話は分かった。協力するからさっさと伊御の場所を教えてください」

さつきまで余裕なさげに右往左往してた癖に、今では愉快そうに僕を見ている。くっ

! // 後で // 覚えてろ!

こうして交渉は成立し、僕は // 計画通り // 伊御の場所を雄二に教えた。



「……なるほど、姫路の転校か。そりや明久が慣れないこととしてでも俺を動かそうとするわけだ」

「……その言い方と視線に色々言いたいけど、今は置いとく。それで、どう思う雄二？」  
ところ変わって、榊のお姉さんのみいこさんが経営する『ハチポチ』。雄二は伊御に頼んで、「今日はもう霧島さんに連絡しない」ことを約束してもらい、伊御も僕と同じように清涼祭の出し物を手伝ってもらうことを条件にそれを承諾した。

雄二は僕と同じ条件だったことに満面の笑みを浮かべて居たけど……馬鹿め、伊御の掌の上と知らずに。クッククック。

「そうなるよ、喫茶店の成功だけでは不十分だな」

「やっぱりそうじゃろうねえ」

「不十分？ どうして？」

「……お前は伊御から何の話聞いてたんだ」

雄二の言葉とともに僕を残念な目で見る仲間たち。やめて！ そんな目で僕を見ないでっ！ 僕は残念な子じゃないよ！ 少しおつちよこちよいなだけさっ！



「はあ。馬鹿にも分かるように話すぞ。明久、伊御は姫路の両親が考える転校させる理由をいくつあげた？」

「確か……3つだね」

「それぞれ言ってみろ」

えーつと、まずは……。

「まず1つ目が、姫路さんの学力に合わないクラスメイト、だったかな？」

「そうだ。これは喫茶店の成功とは関係のないことだから、別に対策を練らないとならない。しかも……」

「これに関してはFクラスの学力上、難しいと考えた方が良いのう」

秀吉の言葉に僕もそう思う。伊御や御庭さんなどのイレギュラーがいるけど、Aクラスレベル2人だけじゃ説得は厳しい。

「あ、それに関してはウチらで対策してるわよ？」

「え、そうなの？」

「……もしかして、召喚大会に参加するの？」

「流石坂本、その通りよ。瑞希に『どうしても転校したくないから協力してください！』って頼まれちゃって。これに優勝すれば、Fクラスにも勉強ができる人がいるって証明できるでしょ？」

「そうだな。本当ならば姫路抜きの方がいいんだが、そうも言つてられないか。翔子はこういうのは興味ないから参加しないだろうし、2人の優勝も十分あり得るだろう」

「任せなさい！ 必ず優勝するわ！」

そつか、美波達は召喚大会に参加するのか。あれは文月学園の宣伝も兼ねた催し物だ。当然かなりの観客がその大会を観るから、その場で優勝したらそりやいい説得材料になるよね。……うん！ これはイケる！

「……………あゝ、雄二」

1つ問題が解決したことに皆が安堵してる中、伊御が何とも申し訳なさそうな顔で雄二の名前を呼んだ。……どうしたんだろう？ あんな顔の伊御は見たことないんだけど。

「何だ伊御」

「……………出るぞ」

「……………なに？」

「霧島さん、召喚大会に出るぞ」

……………。

「……………えーっ!?!……………」

伊御の言葉に場が騒然とする。うそっ！ 何で!?!

「しかも、相方は優子だ」

優子って、秀吉のお姉さんっ!?! 御庭さんを倒したあの人も出るの!?!

「……伊御、何で翔子がこれに参加してるんだ?」(じーっ)

「……色々事情があるみたいだよ」(プイッ)

雄二の問い詰める視線を避けるように顔を背ける伊御。どうやらその事情を知ってるようだけど、言うつもりはないみたいだ。多分、内緒にして欲しいって頼まれたんだと思う。そうになると、伊御は絶対に話さない。例えばそれが僕達の不利になることだとしても。

「………はああ。となると、何か作戦を練らないとな」

「皆、ごめん」

「いいさ。何かは知らないが、お前の善意だったんだろう?」

「それに、こんなことになるとは誰も思わないわ」

「そうそう。それに、相手が例えAクラストップだろうと負けないわよっ!」

「……うん。ありがとう」

伊御は申し訳ない顔を、微笑みに変えて御庭さんの頭をポムリした。やっぱり伊御は笑ってる方がいいよ。

「さて、話を戻すぞ。じゃあ明久、2つ目は何だ?」

「2つ目は……みかん箱やゴザっていう貧相な設備だね」

「正解だ。そしてこれについてはFクラスの喫茶店や伊御達のクレープ屋での利益でどうとでもなる」

「俄然やる気が出てきたんじゃよ！」

「はひ！ が、頑張りますっ」

「ん、頑張る」

「俺も、もう一回みいこさんに美味しいクレープの作り方を教えてもらおうかな」

「いいですよ。次のバイト終わりにしましょうか」

「お願いします、みいこさん」

「つてみいこさんいつの間にな！」

「あらあら、ふふっ」

僕の問いに笑って誤魔化すみいこさん。……この人は僕が知る中でもまた違った雰囲気があるよね。

「ちよつとアキ！ 大事な時にデレデレしてるんじゃないわよ！」

「うえっ!? ベ、別にデレデレなんかしてないよっ!?」

「ふんっ、どうだか」

またいきなり不機嫌になる美波。どうして不機嫌になったかはわからないけど、また

変な誤解を生むようなことを言つて！ みいこさんを狙つてるなんて噂が立つたら、伊御と榊が全力で僕をみいこさんに相応しいかどうか試しにかかるかもしれないだろ！

………よし、受けて立とう！

「ああ榊か？ どうやら明久がみいこさんを狙つてるようなんだが……」

『何い!?　すぐ向かう！　伊御は試練の準備をしていてくれ!』

「了解。さてまずはAクラス並みの学力を身につけてもらうところから……」

「ごめんなさい！　調子に乗りました！　だから勘弁してください!!」

「あらあら、ふふっ」

馬鹿な僕をAクラス並みに!?　僕の頭が核爆発を起こしちゃうよっ！　しかも、ま  
ず、つて！　それだけでも地獄の底が見えないのに、さらに僕を地獄の奥底へ叩き落と  
そうというの!?　どれだけみいこさんの相手はハードルが高いのさ!?

「おい伊御。それは後回しにしる。今は目の前のことだ」

「それもそうだね」

「待つて伊御！　誤解を！　誤解を解かせてください!」

「片瀬」

「ういうい。………ていつ☆」(みかんの皮汗ブシャー)

「目ええっ!?」(ブリッジ!)

目が、目があああ!!

「何でそんなものを持つてるのよ」

「こんなこともあるのかとっ♪」

「どんなことですかっ!?!」

かましい真宵さん達の横で目を押さえて蹲る僕。ううっ、痛いよう。

「馬鹿が静かになつたな。よし、なら3つ目だ。明久、それは何だった?」

「今はそれどころじゃないんだけどっ! ぼくの目の前が真っ暗なんだよ!」

「それはお前の将来だ」

「なにおう!」

「吉井、お店に迷惑が掛かるわよ」

「ぐっ!?!」

御庭さんの注意に黙らざるを得なくなる僕。くっ! まだ見えないが奴の僕を嘲笑うような顔が浮かぶ。……いや、耐えるんだ僕。もうすぐ、もうすぐ奴も終わりだ!

「それで明久、どうなんだ?」

「……姫路さんの体調を崩している原因の教室のボロさだよ」

「全問正解だ。やれば出来るじゃないか」

「くうっ!」

殴りたい！ 全力で肝臓を穿ちたい！

「これが一番の問題じゃのう」

「でも、これって出し物の利益でどうにかなるものなの？」

「無理だな。教室の改修となると、片瀬の補強とはわけが違う。学校側の協力と許可が不可欠だ」

「それじゃあどうするんじやよ？」

「どうするもなにも、学園長に直訴すればいいだけだろう？」

え？ それだけでいいの？

「……それでどうにかなるものなのか？ 俺達は学校の教育方針の元、自業自得である設備に落ちたんだ。許可してくれるか疑問なんだが」

「伊御、あそこは曲がりなりにも教育機関だぞ？ いくら方針とはいえ、生徒の健康に悪影響が出てる状態を放置するのは不味いはずだ。特にあそこは試験的に運用してるからな。だから改善要求は通る確率が高い」

「なるほどね」

雄二の話に頷く僕ら。確かに言われてみればそうだ。よしっ！ 何とかなりそうぞ！

「なら、早速明日学園長に会いに行こうよ」

「そうだな。学園長室に乗り込むか。伊御はどうする？」

「うん、行くよ」

「よし。それじゃ俺たち3人で向かうか。他の奴らはそれぞれ出し物の準備を進めていてくれ」

「」「了解！」「」

これで僕達の方針が決まった。あとは明日を待つだけだ。……なら、もういいよね？

「……伊御」(ボソツ)

「……うん、いい時間だ」(ボソツ)

僕達は壁に立て掛けてある時計を目にして約束の時間がやってきたことを悟った。

……ふ、ふふ。ははは。

「はははははっ！」

「……なに突然笑い出してんだよ？　とうとう気でも狂ったか」

「ふふんっ。そう言つてられるのも今のうちだアホ雄二！」

「あん？」

「これで……」

……カランコロン

「僕達」の勝ちだ!!」



「だからなにを言つて……」

「……雄二」

「……………」

雄二の息を飲む音が聞こえ、奴の身体が少しずつ震えだす。そして、ゆっくりと、ゆっくりと振り返ると……そこには霧島さんが立っていた。

「ミツシヨンコンプリートだねっ、伊御！」

「ああ」

僕は伊御と拳を合わせて喜びを分かち合う。ざまあみさらせえっ！

「い、伊御。騙したのかっ!？」

「なにがだい?」

「今日は連絡しないと約束しただろう!」

「ああ。だから雄二と約束する前に、霧島さんにここに来るように言つたんだよ」

「なんだとっ!?! ……はっ! まさかっ!?! お前ら、グルだったのかっ!」

僕達を射殺さんばかりに睨みつける雄二。やっと気付いたのか阿呆めがっ!

「そうだよ元神童! 全ては僕達の手の平の上だったのさ!」

雄二を協力させるだけなら、あの場で伊御が「霧島さんに場所を教えるぞ」と脅すだけで良かった。だけど伊御は霧島さんの恋を応援したいから、こんな手の込んだことをやったんだ。

雄二に悟られないように僕と伊御は無関係を装い、一度霧島さんから意識を外す。そしてみいこさんがいる『ハチポチ』へと連れ込み、雄二の逃げ場をなくした状態で霧島さんに明け渡す算段だったのだ！

「それじゃあ、みいこさん！ あとはよろしくお願いします！」

「はい。任せました」

「霧島さん。家族への紹介はまだ早いと思うよ。焦らずにゆっくりやっていこう」

「……分かった。音無も吉井もいい人」

絶望した顔で絶句する雄二を放っておいて、僕と伊御はみいこさんと霧島さんにそれぞれあとを任せる。

「それじゃあ皆の衆、帰るとするかこのう」

「それじゃあ雄二さん、頑張つてねえん！」

「雄二君、また明日ですう」

「じゃ」

「明日、任せたわよ坂本」

他のみんなもそれぞれが雄二に言葉をかけて『ハチポチ』を出て行く。

「……雄二、今日は子供が何人欲しいか話し合う」

「あらあら。翔子ちゃん、まだ気が早いですよ?」

「ま、待て。……待つてくれええええつ!」

……バタン、と。『ハチポチ』の扉が閉まったことで、雄二の断末魔も聞こえなくなつた。ふう! いいことをした後つて気持ちがいいね! ……さ、明日は学園長に直談判だ! 気合いを入れるぞ!

【おまけ】

「おつ! 伊御、明久!」

「あれ? 榊……なにそのリュックサック」

「なに言つてんだ明久。お前がみいこ姉に相応しいかどうか試すためのものに決まつて

「さらばだつ!」

「ていつ」(内側から弾ける拳

「ぐあつ!」(バタンツ

「……さて、俺の家でいいか?」

「おう！ 明久、俺達はそうそう甘くないぜ？ なにせ……」

「そうだな。なにせ……」

「伊御（榊）よりいい男じゃないとダメだからな！」

「……………」

「俺かよ!?!」

「……………いや、僕の……話、を」（ガクツ

## 第19話

「Fクラスの設備の改善? ……なるほど、お前達の言いたい事はよく分かった」

「よく分かった……って事は、直してもらえるんですね!」

「却下だよ。バカ学年代表」

「雄二、ドラム缶とコンクリを。伊御は誰も来ないように見張つてて。僕はこのババアをオトすから、みんなでコンクリ詰めにして捨ててこよう」

「……明久。雄二もだけど、もう少し態度には気を遣おうな? 例え相手の態度が最悪でも、それに同じ態度で返すのはダメだよ」(あんな人と同じレベルに見られるのは嫌だろ?)

「……あんたの言ってる事は最もだが、隠された本音が透けて見えるようさね」

さて、なんのことでしようか?

俺達は昨日ハチポチで決めた通り、時間を見計らつて学園長室に訪れた。その時、雄二から怨嗟のこもった眼差しを向けられたけど……全く、本当に素直じゃないな。

学園長室前に着くと、中では学園長と教頭がなにやら言い争っていた。……教頭か。根本の時のがあるから、あまりイイ感じはしないな。

俺がそんなふうにいると、明久がなんの遠慮もなく学園長室に入って行った。雄二も我が物顔でその後に続いたことに軽くため息を吐いて、俺も学園長室に入った。その後は何故か教頭に学園長とグルであると思われたり、学園長がかなり横柄な女性だったり、雄二が敬語で話していることに俺と明久が驚いたり、色々あつて冒頭に至る。因みに、雄二の敬語はすぐにボロが出た。

「伊御の言う通りだな。失礼しました。どうか理由をお聞かせ願えますか、ババア」  
「そうだね。すみませんでした。教えてください、ババア」

「……お前達、本当に聞かせてもらいたいと思ってるのかい？」  
明久、雄二。学園長への名称に本音が出るよ。……あ、2人とも何がおかしいのか  
気付いてない。

学園長は不満げにしながらも理由を話してくれた。理由としては、俺の予想通り「この学園の教育方針だから」というものだった。……しかし、学園長は自身の頼みも聞くなら相談に乗ると言ってきた。ふむ、交換条件か。

「その条件ってなんですか？」

俺と雄二が学園長の迷惑が何かを考えていると、明久が学園長へ話を促した。

促された学園長が俺達に向けて出した条件は、「清涼祭で行われる召喚大会に優勝し、優勝商品を正賞・副賞共に回収してほしい」というものだった。どうやらこれは教頭が

進めた正式な案件らしく、今更取り下げられないらしい。……学園長は研究一筋だと聞いていたけど、さすがにトップとしてそれはどうなんだろう？

そして、副賞が『如月ハイランド プレオープンプレミアムペアチケット』と聞いた時から、雄二の視線が俺に釘付けだった。その目には……。

《伊御お前、翔子にこれを教えたな？ お前は何故そこまで翔子に肩入れする！ そもそも……っ！》

と俺への不満が長々と映っていた。……バレたか。それに何故かって？ それは、俺は恋する女の子の味方だからだよ、雄二。というか、雄二は心から霧島さんのこと拒んでないだろ？ 俺には分かっているんだからな？

俺と雄二が視線で会話する中、明久が学園長に何故優勝商品を回収したいのかを尋ねた。学園長が言うには、如月グループは副賞の『如月ハイランド ペアチケット』を使って、オープンと共にジnkクスを作ろうとしているらしい。

そのジnkクスが、「如月ハイランドを訪れたカップルは幸せになれる」というものらしい。如月グループはこのジnkクスを作るために、チケットを持って訪れたカップルを結婚までコーディネートするつもりのようなのだ。……多少強引な手段を用いてもつてうおっ！

「伊御！ お前はなんてことをしてくれたんだ!？」

雄二はかなり慌てた様子で、俺の両肩を力の限り掴んで問い詰めてきた。痛い痛い。「いや、俺もジंकクスについては初めて知ったんだ。でも、素直じゃない雄二相手なら、多少強引な方がちようどいい……」

「伊御、齒を食いしばれっ！」

あ、言い過ぎたか。

「せああっ！」（ドスッ！

「ばはあっ!?!」

俺が雄二の拳を素直に受けようとしたら、明久が俺を庇うように前に出て、雄二の喉元を手刀で貫いた。あ、明久っ!?!

「貴様雄二！ Fクラスの、いやこの学校の良心たる伊御に向かって手を上げようとするとは何事だ！」

「ゴホッ、ガハッ！」

「……明久」

「伊御、心配しなくていいよ。この外道は僕が責任持つて異端審問会に突き出すから」  
心配というより、悪いのは俺なんだが。というか異端審問会って何だ？

「お前達、争い事なら他所でやりな！」

「わかりましたババア！ さあ来い異端者！ 御庭裁判長が貴様を公平に裁いてくださ



る！」

「こちらら明久。今は設備の話だろうか？ ……雄二もごめん。確かにこういうのはお互いの気持ちが大変だよ。雄二は素直じゃないけど」

「……ゲホッ」（一言余計だ、の目

「チイツ！ 仏の慈悲に感謝するんだな！」

「……けっほ」（お前は後でクロス、の目

うん。何とか場が収まったな。さて、話を続けようか。

「つまり、俺達は……」

『召喚大会の賞品』を交換条件として、持つてくることができたら教室の改修くらいしてやろうじゃないか」

「……ふむ」

副賞じゃなく『賞品』、ね。 ……まだ何かありそうだ。

「無論、優勝者から強奪なんてマネするんじゃないよ。譲ってもらうのも不可だ。そして……参加するのは吉井と坂本の2人だ」

「ええっ!? 何で僕達だけなんですか！ 回収したいならより確実に伊御や御庭さんを参加させた方がいいでしょう！」

「嫌ならこの話は無しだ。ここから出て行きなジャリども」

「くっー」

学園長の出したさらなる条件とその態度に顔を歪める明久。……これは本格的に何かあるな。

「明久、ダメだ。学園長には譲る気が無い。この取引に応じるしかないよ」

「伊御……」

学園長自身、無茶を言ってるのは百も承知だろう。けど、それでもこの条件でないとダメだと言ってるんだ。しかもこちらは頼んでる側。元々俺達には取引に応じる以外の選択肢はない。

……実は少しだけ、根本を脅す時に使った音声記録を交渉に持ち込もうと考えていた。学園長はどうやら教頭に対して含みがあるみたいだからね。だけどあれは根元が言ったもので、教頭ではない。証拠としての強みは無いに等しい。

「コホツ……おいババア、こちらからも提案がある」

「なんだい？ 言ってみな」

やつとまともに声が出せるようになった雄二が学園長に話しかけた。

「召喚大会の対戦表が決まったら、その各戦い毎の科目の指定を俺にやらせてもらいたい」

学園長を鋭い目つきで見ながらそう持ち掛ける雄二。……おそらく雄二も俺と一緒に

で学園長の隠し事に気付いたかな。今はそれを確認してるってところか。

「……いいだろう。点数の水増しとかだったら一蹴していたが、それくらいなら協力しようじゃないか」

「……ありがとうございます」

目付きが更に鋭くなる雄二を見て、俺も確信する。……学園長は俺達に話してないことがある。しかし今尋ねてもしらばつくれるだろうから、大人しくこの条件で受けるしかない……か。

「さて。ここまで協力するんだ。当然召喚大会で優勝出来るんだろうね？」

「無論だ。俺達を誰だと思ってる？」

雄二は不敵で好戦的な笑みを浮かべる。うん。やる気は十分みたいだね。

「絶対に優勝してみせます！ そっちこそ約束を忘れないように！」

明久もやる気全開で返事をする。

「俺もやることをやるよ」

「勿論だ。期待している」

雄二の言葉に笑みが溢れる。さてと……。

「それじゃ、ボウズども。任せたよ」

「おうよっ！」

「了解」

ミッションスタートだ。



学園長室での密会から数日後、俺は今……。

「んまつ」(びこびこ)

「うまつ」(じゃよじゃよ)

Fクラスでつみき達に試作クレープを実食してもらっていた。美味しそうで良かったよ。

「な、なによこれっ!? そこのお店のやつより美味しいじゃない!」

「はひい。伊御君の作るクレープは頬が落ちそうになるんですよ」

「す、すごいですっ。どうやったらこんなに美味しくなるんですか!」

「生地とか焼き時間とか、色々と工夫がいるんだよ。作る工程も簡単そうに見えて、結構難しいしね」

「へえ〜」

俺の説明を聞きながらも美味しそうに食べる女の子達にほんわかする。みいこさん

にもう一回教えてもらった甲斐があったよ。

『いおは おんなのこたちの えづけに せいこうした』

「妙なナレーションすな、榊」

俺は何故かいる榊へとツツコム。

「これなら集客はかなり期待できるね！」

「流星は伊御じやのう」

「ありがとう」

みんなの賞賛に少し照れる。なんか気恥ずかしいね？

「おおっ！ 伊御さんが照れてるんじゃないやよ！」（パシヤッ

「あ、おい真宵。何を撮ってるんだ」

「いや、あまりの珍百景に思わず☆」（テヘッ

「俺は景色じゃないんだが……」

全く、これは言っても消さないな。……まあ、別にいいかな。

「……つみきさん、どう？」（ボソッ

「／／／／／」（テレテレぴこぴこ

「……欲しい？」（ボソッ

「……………い、要らにや」「それじゃAクラスの木下さんにもあげようかにや？」いた

「だくわ」(にやいアंकロー!)

「イタタタタツ!? さ、差し上げますので離しいつ!? か、顔が! 顔が取れるうー!」(ミシミシミシイッ!)

「……ん? また何か真宵がやらかしたのか? つみきに顔を剥がされそうだぞ。」

「伊御達のクレープは問題ないね。さて、僕達が出す飲茶は……」

「……飲茶も完璧」(スツ)

「おわっ」

「……康太。気配を消す必要はあるのか?」

「……基本技能」

お盆に胡麻団子とお茶を乗せた康太がいつの間にか俺達の後ろに立っていた。日常で気配を消す技能が基本のはずないだろう。

「……味見用」

「ふわぁ、美味しそうですう」

「土屋、これウチらが食べちゃっていいの?」

「……………」(コクリ)

「では、遠慮なく頂こうかの」

女性陣プラス秀吉が胡麻団子に手を伸ばし、作りたての胡麻団子を頬張ろうとした

時、榊が……。

「クレープと胡麻団子が胃の中でフュージョン……」

「……はっ!!」

「それで出来た脂肪なら、30分で解けるけど……」

「……ほっ」

「現実はどう上手くはいかんじやろうなあ」

「……………」(コクコク)

「……ううっ」

女性陣は胡麻団子を片手に一喜一憂している。……楽しそうだね。

「え、ええい! これくらいじゃ別にどうってことないはずじゃよっ!」

「そ、そうですよねっ」

「コクコク」

「そ、そうよねっ。その通りよね!」

「は、はいっ。大丈夫ですっ」

女性陣は自分に言い聞かせるように言った後、胡麻団子を口に入れた。……強く生き

るんだ、皆。

「うんまっ♪」

「うみやっ♪」

「美味しいですう♪」

「本当！ 表面はカリカリで中はモチモチ！」

「食感もいいのう」

「甘すぎないのもいいですねっ」

女性陣プラス秀吉による大絶賛。それに加えて、お茶も美味しいみたいだ。幸せ満点で雰囲気はほのぼのしだしてる。さっきの勢いが嘘のようだ。

「それじゃ、僕も貰おうかな」

「俺も貰うよ。ほら、榊」

「俺もいいのか！ サンキューー！」

俺達は残った3つを手に取り口に運んだ。……うん、美味しね。

「ふむふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ……」

「甘すぎず、辛すぎるといとか口の中を溶かすような刺激がとつても……」

「んゴパツ!」（バタン！）

「明久、榊!？」

2人が思い切り顔から倒れ、痙攣しながら床を這う。……この症状はまさか（どうやら、姫路が作ったものが紛れておったようじゃな）



(……よかった。当たらなくて)

(これは日頃の行いじやのう)

(……!!)(グイグイ！)

(む、ムツツリーニ!? 残りを僕の口に押し付けようとししないで！ 無理だよ！ 食べられないよ！)

(……)(ビクンツビクンツ)

明久はなんとか復帰したようだけど、榊が帰ってこない。……どうやら明久は耐性をつけたらしい。明久も大概人間離れしているとこういう時に思うよ。

幸い女性陣はほのぼのに充てられて、こつちの様子に気付いていない。この内になんとかしないと。さて、明久達が残した半分ある2つの胡麻団子をどうしようか。俺がそう考えてると、雄二が帰って来た。

「うーっす。戻ったぞー。……ん？ なんだ、美味そうじゃないか。どれどれ？」

「あ、待て雄二！ それは……」

俺が止めようとするも時すでに遅く、雄二は残った2つを躊躇なく口に放り込んだ。

……漢だね、雄二。

「………たいした男じゃ」

「雄二。君は今、最高に輝いているよ！」

「……………」(コクコク!)

「? お前らが何を言ってるのか分からんが……。ふむふむ。表面はゴリゴリで中はネバネバ。甘すぎず、辛すぎるといふか口の中を溶かすような刺激がとつても……。んごパツ!」

雄二も明久と榊に続いて、床に思い切り口付けをしに行つた。痙攣もしているけど、明久は耐性が付いていた。おそらく誰よりも姫路さんの料理を食べている雄二なら、同じようにある程度大丈夫なはずだ。

「……雄二、雄二。大丈夫か?」

「ふっ。なんの問題もない」

床に突つ伏したままで雄二が返事した。よかつた。無事なようだ。

「あの川を渡ればいいんだらう?」

無事じゃなかつた。どうやら姫路さんの料理を摂取し過ぎて、雄二のキャパは限界を迎えていたらしい。三途の川を渡ろうとしている。早く止めないとっ!

「ゆ、雄二! その川はダメだ! 渡つたら戻れなくなっちゃう!」

「雄二! 戻つてこい!」

俺は女性陣から雄二をできるだけ隠し、明久はなんでもないようにしながらも必死で雄二に心臓マッサージを施す。帰つてこい、雄二!

「6万だと？ 馬鹿を言え。普通は渡し賃は6文と決まって……はっ!?」

よし！ よく帰って来た雄二！ ……はああ。なんとか助けることが出来てよかったですよ。

「うーん……はっ!? あれ？ 俺はなんで倒れて……」

榊も帰って来たようだ。もしかしたらと思つてたけど、無事なようで何よりだ。

「あれ？ 雄二君と榊君、どうかしたんですう？」

まだほのぼのが抜けきつていない姫が、俺達の様子がおかしいことに気付いたみたいだ。

「イヤイヤ！ 雄二がまた足を攣っちゃつてね！ 榊と一緒に筋肉を伸ばしてやつてたんだよー！」

「足が攣った？ 馬鹿を言うな！ あれは明らかにあの団子の「もう一つ食わずぞ（ボソツ）」足が攣ったんだ。運動不足だからな」

「はひい。そうですかあ」

ほのぼのが抜けきつてないのが功を奏し、姫を含めた女性陣はこちらから意識を外してお茶を啜つた。……バレなくてよかったね、明久。

（……明久、いつか貴様を殺す）

（……上等だ。殺られる前に殺つてやる）

小声で物騒なことを言いながら、にこやかにしてい明久と雄二。ハタから見れば仲良し2人組だけど……全く。

（それで伊御。これはどう言う状況なんだ？ 胡麻団子を食べたところまでは覚えてるんだが……）

（後で話すよ）

戸惑う櫛を取り敢えず落ち着かせ、俺達はほのぼのが抜けかけてる女性陣と一緒に清涼祭に向けての話し合いをすることにしたのだった。

【おまけ】

「……なるほど、姫路の料理かー。いつかの真宵のカエル入りチョコとは一線を画すな」  
「あれは食べれるだろう？ 真宵が言うには姫路さんの料理から薬品めいた味や匂いがしたらしいし、下手をしたらバイオ兵器だと俺は思ってる」

「バイオ兵器って……。それ女子高生が作れるレベルを超えてるだろ！」

「実際雄二は下手したら死んでたし、お前も危なかったと思うぞ」

「……生きてるって、素晴らしいことなんだな」

「ああ。その通りだな」

「……ん？　なあ、伊御。一つ疑問なんだが」

「なんだ？」

「姫路もアレを食べてるんだよな？　流石に味見はするだろうし。つてことは、姫路の味覚は……」

「でも、俺のクレープや胡麻団子は美味しそうに食べてたぞ？　味覚がおかしいつてことはないじゃないか？」

「そうだよなー。なら、考えられることは……」

「……姫路さんはすでにかなりの毒物耐性を得ている。ということか」

「……………」

「早く、なんとかしないとな」

「マジで頼むぞ、伊御」

## 第20話

……トンテンカンカンッ

「……ふう、こんなもんかな！」

「おう！ 明久サンキユー」

「これくらいなんてことないよ」

清涼祭を間近に控えた午後、僕は伊御達が出すクレープ屋『つつみん』の準備の手伝いをしている。そしてたつた今、屋台の骨組みを榭と一緒に組み終えたところだ。

「いや、実際助かってるしな。これなら学祭定番の徹夜もしなくて良さそうだ」

「あはは……。僕は向こうじゃ役立たずだからね。役立たずなりに頑張らせてよ」

「あー……。どんまい」

「……ぐすっ」

そう。僕はFクラスの出し物を準備するにあたって、雄二から戦力外通告を言い渡されてこつちの手伝いに駆り出されていた。

雄二はFクラス全体の指揮とババアとの話し合い。姫路さんと美波、秀吉は衣装の採寸と接客の勉強で、ムツツリー二は衣装の作成と飲茶の料理指南とそれぞれが忙しく

備している。

そんな中、僕は特にやることがなかった。他の雑用をしようにも、人手は余り過ぎているため逆に邪魔だった故の戦力外通告である。……な、泣いてなんかないやいっ！

「おおーっ！ もう出来上がってるんじやよー！」

「後は看板と内装を整えるだけね」

「お二人とも、お疲れ様ですう」

「あ、みんなお帰り！」

僕が目尻に溜まりそうになる汗と格闘していると、御庭さん達が買い出しから帰って来た。

「真宵ー。お前の機械類、設置しといてくれ」

「了解じやー！ あ、明久さん。伊御さんと榊さんの清涼祭での服を持って来たから、伊

御さんと呼んで来てー」

「うんわかった。因みにどんなの？」

「それは後のお楽しみじやよ♪」

チツチツチと指を振る真宵さん。……なんだろう。こういう時の真宵さんはあまり信用できないからなあ。

伊御は家庭科室近くで何かを縫い縫いしている。真宵さんと榊が頼んだみただけ

ど……こつちも正直不安だ。あの真宵さんと榎だし。

そんなことを思いながら、僕は伊御を呼びに家庭科室に向かった。



僕が校舎に入って向かうと、家庭科室前の廊下で作業に勤しんでる伊御を見つけた。

「とつ、伊御！」

「……ん？ 明久か。どうしたんだ？」

「真宵さんが清涼祭で着る服を持って来たから、こつちに来て欲しいって」

「わかった。キリのいいところまでやったら行くよ」

伊御は返事をした後、紺色の大きなものを手際よく縫い始めたってちよつと待って。

アレって見間違いないじゃなかったら……。

「……伊御。それってまさか、着ぐるみ？」

「ぼいっのかな。真宵と榎に頼まれたつみきの衣装だよ」

そう言つてキリがいいところまで来たのか、縫い針やまち針を抜いてそれを広げた

……つて。

「凄っ!？」



これ手編みで作ったの!? 伊御のスペック高過ぎじゃないっ!?

確かに伊御のいう通り着ぐるみっぽいのだ。ネコミミがついたフードの部分が被り物だったらまんまそれだ。ご丁寧に尻尾まで付いてるし。……でも本当に凄い。服自体はとても可愛いし、何よりこれを御庭さんが着たら可愛さ二乗だ。でも……

「い、伊御? すっごく可愛いんだけど……。それ、御庭さんが着てくれるかな? と僕は思うんだ……」

「そうかな? 喜んでくれると思ったんだけど……」(しゅんつ

「あー、やっぱ僕の気のせいだねー! 本当に可愛いし、何より伊御の手編みなんだから御庭さんも喜んでくれると思うヨ!」

「……うん、ありがとう」(てれり

ダメだ! 僕には言えない! しゅんつとする伊御を見て、「御庭さんはもつと年頃の女の子が着るものが良いんじゃないかな?」なんて死んでも言えない!

「さ、早く行こうよ伊御!」

「そうだな。行こうか」

僕は急かすように伊御を連れてみんなのところに戻った。……ごめん御庭さん。不甲斐ない僕を許しておくれ。



「と、いうわけで……ジャーンッ！ これがお二人の衣装じゃよ！」

「~~~~~／／／／／」（ダクダクダク

「そこまでか!? ……まあ、かなりしっくりきてるが」

「ああ。思ったよりも着やすいしな」

「2人共、すごく似合ってるよ！」

僕の賞賛に紳は伊達眼鏡をくいとさせ、伊御は袖口に両手を入れて微笑んだ。

2人が着ているのは、所謂書生服と言われるやつだ。明治時代とか大正時代の学生服だったと思う。オプションとして、レンズが丸い伊達眼鏡を装備してるんだけど……これが本当にハマってる。特に伊御のハマり具合がやばい。

「よく見つけたなこんなの」

「世のネット通販で買えないものはないんじゃないよ」

人の文明の発達って偉大だよな。

「それじゃあ真宵、女子の衣装は俺が決めるってことでもいいんだよな？」

「ういうい。可愛いのを期待してるんじゃないよ！」

「あ、因みにだが。御庭の衣装は伊御のお手製だからな。しかも手縫い」

「!? い、伊御によ……手縫い?」(びこびこ♪)

榎の言葉を聞いて、御庭さんが喜んで。顔は素面でも、ネコミミは感情を隠しきれない。ぐうっ!?! 僕の中の良心が万力で締め付けられるっ!

「ああ。何かは内緒だよ? 楽しみにしてて」(ぼふっ)

「……うんっ」(てれびこ♪)

「よかったですね、つみきさん」

2人の微笑ましさの背後で薄く笑う悪童2名。くっ! これじゃあ僕も奴らの共犯だ! 僕が伊御を説得出来ないことまで予想済みだったというのか!?

「さて、衣装合わせも済んだし、作業に戻るか!」

「[[「おー!」]]」

「僕は……どうすればっ!」(ボソツ)

僕の良心の呵責をよそに、みんなは再びそれぞれの作業に戻るのだった。



各々が作業に戻ってしばらく。

「あ、あの……」

「ん？ えつと……君は？」

僕と榊が看板を屋台の正面上に貼り付け終えて一息付いてると、見知らぬ女の子が声をかけてきた。雰囲気からして2年か3年だとは思うんだけど……。

「あ、あの！ ……よかつたら、こ、これをどうぞつ。み、皆さんで食べてくださいっ」  
そう言つて僕たちに差し出される数個のプラスチックの容器。中身は焼きそばのようだ。えっ?! もしかして差し入れ!? 僕達に?! しかも美味しそう〜!

「わあ、ありがとう！ みんなで食べさせてもらうよ！」

「は、はいっ！ ……あ、あのつ。音無君は何処に……？」

………あー、なるほど。そういうことか。

「伊御は別の用事があつて今はいないんだ。でも、後で必ず渡しておくよ」

「え、えと……。じゃあ、よろしくお願ひしますっ」

女の子は僕に頭を思い切り下げて、駆け足で離れていった。……はあ。

「自分を意識してる女の子が現れたと早とちりした明久であった」(ナレーション風)

「うるさいな！ あんな風に声をかけられて、勘違いしない高校生男子は居ないよっ!!」

「ナハハツ。悪い悪い」

榊の言葉によりダメージを受けた僕。し、仕方ないだろ?! 比較的モテる榊じゃなく

て僕に声をかけられて、さらにはモジモジとしながらも差し入れを渡されたんだ!

「僕にもやつと青春がつ!」って思っちゃったんだよ!

「……はあ。遣る瀬無いよ。……しかし伊御はモテるね」

「まあな。これで差し入れ6個目だし」

「え!?! そうなの!?!」

「ああ。まあ、別に困るもんでもないし、伊御も俺も全部貰ってる」その話、詳しく教えてくれないかしら」……………」

あ、獲物を殺る目をして爪を研いでる御庭さんだ。榊の冷や汗がハンパないことになってる。

あの様子だと、御庭さん達は知らなかったみたいだ。……女の子達も、御庭さん達が居ない時を見計らって来てたんだろう。今は屋台の中を任せていたから、姿が見えなかったみたいだ。

「そ、その……御庭? とりあえずその爪をしまおう。な?」

「教えてくれるかしら?」(キラーンツ……ザシユツ!)

「ノオオオオオオつ!?!」

榊が顔を縦に引つ搔かれて、転がり回ってる。高校生男子を馬鹿にした罰だね!

それから御庭さんが榊を問い詰めることしばらく。

「あ、戌井君! これ、音無君に……」

「フーツ!!#」

「キヤーツ」(脱兎の如く

しばらく……。

「はいこれ。つてあれ？ 音無君は何処に……」

「フシャーツ!!#」

「うわっ。な、何よあん……ちよ、お、覚えてなさい！」(脱兎のry

し、しばらく……。

「それじゃ、ちゃんと食べてね？ 音無君によろしくー」

「フツカーツ!!#」

「あははっ。バイバーイー」(余裕を持って

御庭さんは差し入れを持つてくる人(伊御目当ての人限定)を威嚇して追い返すようになった。ほとんどは渡す前に逃げてくけど、中には威嚇されながらも差し入れを渡して去って行く図太い人もいた。……というか。

「伊御モテすぎだよ……」

同じ男であるはずなのに、明確な差をさまざまと見せつけられて泣き崩れる。……ううっ。わかっていただけ！ わかっていたけど!!

「ま、顔が良くて気配りも出来る。優しくて頭もいい。何より頼りになる男、それが伊御

だからな。そりやモテるだろ。……男にもモテてるし」(ボソツ

蹲る僕の横で半ば呆れたように話す榊。伊御に呆れたのか僕に呆れたのかわからないけど、榊の言う通りだ。伊御はパーフェクトマンだからね。僕も悔しさより虚しさで胸がいつぱいだよ。……最後に聞こえてきたものは聞かなかったことにする。

そんなふうに僕が打ちひしがれる中、事件は起こった。

「戌井君。ちよつといい？」

「おう！　なんだ？」

「はい、綿菓子。甘い差し入れも欲しいでしょう？」

「お、くれるのか。ありがとさん！　つて、一個だけ？」

「当然よ。私は『貴方』を労いに来たんだからね？」

「……ん、とお」

「ふふつ。私の甘い贈り物、ちゃんと食べてね？　それじゃ、頑張つて」

笑顔を浮かべ、手を振って去っていく女子生徒。その姿を榊は右手で頭の後ろを掻きながら、困ったように眉根を寄せて苦笑した。……ふちつと、僕の中の何かが千切れた。

「……つたく。どうしろつてんだよ」(てれり

「僻み妬み嫉みを宿した我が悲拳の極致を魂に刻めええーっ!!」

「ブラアアアアアっ?!?!」

榊は身体の中心点を穿った僕の拳により、風車のように飛んでいき瓦礫に突っ込んだ。見たか! これが生涯モテなかった男の真の力だ!

……因みに、榊を飛ばした衝撃で舞い上がった綿菓子は無事にぼくの手の手の中だ。彼女の思いに罪はないっ!

「人間の吹っ飛び方ではなかったわね」

「御庭さん、なんであの娘は追い払ってくれなかったの?」

「……なんのこことかしら」(ブイツ)

ああもあからさまに威嚇しておいて、誤魔化せると思ってる御庭さんはある意味ムツツリーにも負けてないよ。まあ、あの娘の目当ては榊だったから、御庭さんも威嚇もしなかったんだろうけどね。

「皆さーん。調子はどうです……のっ?!? き、榊君っ?!? 大丈夫ですのっ?!?」

「……大丈夫。君の甘さは受け取ったよ」(ふっ)

「なんの話ですの?!?」





榊は桜川先生に助け出され、一命を取り留めたようだ。僕はあのまま帰つてこなくても一向に構わなかったけど。榊はあの娘に対しては今の所なんとも思つてないらしい。……けつ、モテ男の余裕か！

僕がふてくされながらも作業を再開し、あたりがもう薄暗くなら頃まで続けた。

「……うっし、今日はこんなところか」

「うん、そうだね。伊御を呼んで帰ろうか」

「明久、榊。お疲れじやのう。もう屋台は出来上がったのか」

この声は秀吉だね。様子を見にきてくれたのかな？

「あともうちよつとつてとところだよ、ひでよぶへいっ！」（鼻血ブシャー！）

「あ、明久!? どうしたのじや!？」

どうしたのじや、じやないよ秀吉！ な、なんだいその……そのミニスカチャイナ服はっ!? こ、こんなの、こんなの……っ！

「大変眼福であります！ ありがとうございます！」（ダラダラ

「う、うむ。そう言われて悪い気はせぬが、とりあえず鼻血を止めるのじや」

そう言つて、僕の鼻を拭いてくれるチャイナな秀吉。ぼ、僕はもうこれだけで幸せです！

「そ、それで。秀吉は様子を見に来たの？」

「そうじゃな。それと、この姿で歩けば在校生たちへの宣伝になると雄二がの」  
「なるほどね」

流石雄二。男というものをわかつてる。こんな美少……年が歩き回っていれば、男ならどこの出し物だと気にならないはずがない！

そう感心していた矢先、空気が一瞬にして凍った気配を感じた。な、なんだ!? 何が起こつたんだ!?

「……ひくでくよくしく?」(パキポキ)

「あ、姉上っ!?!」

僕等が周囲を見渡すと、秀吉の後ろに伊御を連れた木下さんが立っていた。この氷点下は木下さんが原因か!

「ちよくつと話があるから、こつちへいらつしやい?」

「い! あ、姉上! 腕はそつちには曲がらなつ!」

秀吉は木下さんに腕を固められながら物陰へと連れていかれた。そして聞こえてくる絶叫。……裏では何が起きてるんだろう。体の震えが止まらない。

「秀吉はまたどうしてあんな格好でいたんだ?」

「僕達の様子を見にくるついでに、Fクラスの宣伝だつて」

「……ああいう服装を嫌がらずに着るから、女の子だつて勘違いされるんだよ」

「だな。それに似合ってるからなおタチが悪い」

「えっ!? あ、そうだよね! 秀吉は男だもんね!」

「……………明久、まさかとは思うけど」

「なんでもないよ! 僕は正常さ!」

確かに時たま秀吉が女の子だつて間違えそうになるけど、まだ踏み止まつてるよ! だから伊御、そんな目で僕を責めないで。榊は笑うな!

それからしばらくして、日が暮れる頃に秀吉の絶叫が止んだ。物陰から出てきた木下さんはとても清々しい感じで、秀吉は白目をむいて倒れていたのだった。

## 第21話

『あー、アー。マイクテス、マイクパス……』

『パス?』

『……………マイクパス!!』(ガツシャーンツ！)

……………ズコーーッ！(全校一同)

『本当にパスすんな!』

『……………んっ！ ではこれより、清涼祭を開催いたします！ 徹夜明けの人もそうでない人も、今からが本番です。青春の1ページを思い切り楽しみましょう!』

「「「おおー!」」」

色々あった準備期間も終わり、とうとう清涼祭が始まった。

僕はこれから召喚大会の第1回戦に雄二と出場するんだけど、その前に雄二と一緒にクレープ屋『つつみん』に向かっている。僕達の中華喫茶は始まりからそこそこのお客さんが来てたから、伊御達はどうかのなななで様子を見に行くことにしたんだ。

『つつみん』に向かう前に、僕達が召喚大会に出場することを知った美波と姫路さんに優勝商品で誰と行くのかと問い詰められた場面もあったんだけど、雄二のフォローによつ

て難を逃れた。……………僕のホモ疑惑を犠牲にして。

仕方のないことだとわかつてるけど、どうしてくれるんだ!? このままじゃ同性愛の似合う生徒ランキングがまた上がってしまったんじゃないか! ……いつか雄二とは決着をつけねばなるまい。

そして半ば逃げるようにFクラスを出て現在、僕達はクレープ屋『つつみん』が見えるところまで差し掛かっていた。

「いらつしやいませー☆」

「美味しいクレープは如何ですかあ?」

すると、少し遠くから聞き覚えのある声が聞こえて来た。

「あれは真宵さんと春野さんの声だね」

「ああ」

僕と雄二はその声が聞こえる方へ足を運ぶ。そこには……開始1時間も経ってないにも関わらず、クレープ屋『つつみん』へと繋がる行列が出来ていた。

「わあっ。もう行列ができてるね!」

「確かに予想以上の集客率だ。まあ、伊御のクレープとそれを販売する店員の容姿を考えれば納得だな」

「まあね」

「お客様ー！　ここが最後尾じゃよ〜ってあれ？　明久さんと雄二さんじゃにやい？」

「お二人とも、どうしたんですかあ？」

僕達が行列を眺めると、呼び込みをしていた真宵さんと春野さんが僕達に気付いて声をかけてきた。……うん。

「ビューティフォー……」

「いやんいやんっ。照れるんじやよ〜♪」

「は、はうう〜。恥ずかしいですう／＼／＼／＼（てれりこ）

僕の言葉に各々頬に手を当てながら悶えてる。……悶え方一つ見ても可愛さに差が出るよね。

そんな2人が今着ているのは矢絣模様が刺繍された袴で、所謂明治時代の女学生服つてやつだ。袖が自分達が書制服なら、女子はこれだろうと何処からか調達してきたんだ。大正ロマンに偽りなし！

「中々に盛況のようだな」

「ういうい！　元々、『ハチポチ』で宣伝はしてたんじやよ。そのおかげもあるねん」

「はひい。そうですね」

「僕は2人の容姿も理由だと思っけどね」

「うう〜。あ、明久さん、そ、そのくらいにい／＼／＼／＼（てれてれ

「ははっ」

「容姿でいうならあゝ……つみきさんも忘れちゃダメなんじゃよっ！」（バンツ！）

「……………」（むっすっ）

真宵さんの腕で示した先には、仏頂面をした大きな猫さんの姿がっ！

「……………」や、やつぱりとつても愛らしいね！ 可愛いよ御庭さん！」

「……………」（ぶいっ）

僕の言葉にも顔色一つ変えず、不機嫌さを前面に出す御庭さん。まあ、そうだよね。

真宵さんと春野さんが矢継の袴っていうハイカラさんなのに対して、御庭さんは猫の着ぐるみフードだからなー。よく着たと思うよ。

それは今日の朝のこと。

……………

……………

……………

「着ないっ」（ぶいっ）

「「えーっ!!」」

「……………」似合うと、思ったんだけどな」（しゅん）

「……………」（びくんっ）

「せっかく伊御さんがつみきさんのために縫い上げたのに……」

「……つつ」（びくんつぶくんつ

「夜なべまでしてたよな……」

「……つつつ」（びくんつぶくんつぶくんつ

「してないけど……」

「……くくつ！ き、着ればいいんでちよつ！（やけ

「計画通り」（キュピーン☆

「おー」

「……み、御庭さんつ」（感動と懺悔に打ち震える僕

……

……

……

ということがありました。まる。

「んもー。なんだかんだ言つて、伊御さんに可愛いって言われて満更でもなかったく・

せ・につ」（つんつん

「……#」（めきよつ

「べへいつ!」（めり込む裏拳



「はひい!？」

「……片瀬は学ぶということをししないのか」

「……だね」

「2人に言われるのは不本意じゃよ!？」

速攻で復活した真宵さんが何か言ってるけど、よくわからないなあ？ 僕は常に学ん

で生きているさっ！

「おーいお前ら、何遊んで……ってなんだ明久達か」

「榊、調子どう?」

「見たまんまだ。大盛況だぜ!」

書制服を着た榊がニヒツと笑みを浮かべて答える。その姿も様になっていてなんかムカつく。だから軽く腹パンしといてやった。

僕らは4人と別れ、クレープを焼いている伊御のところに向かう。呼び込みの邪魔をいつまでもするのもダメだしね。

屋台まで行くと、伊御は女の子達にクレープを渡した後、一緒に写真を撮ってるようだった。伊御と並んでいる女の子達の笑顔が眩しい。くっ！ モテる友人を持つと辛いねっ！ 主に僕の男としての敗北感が！

「ん？ 明久と雄二か。どうしたんだ?」

「召喚大会の前に様子を見にな」

「そっか。……それで、なんで明久は歯を食いしばって泣いてるんだ？」

「お前が女子にモテてるから悔しいんだろ」

「あれは書制服が珍しいだけだと思うけど……」

伊御は少し困ったようにそう言うけど、そんなわけないじゃないか！ 伊御はいい加減自分がどれほど出来た人間か自覚したほうがいいよ！ いつか後ろから刺されちゃうんだからね！ ……誰からとは言わないけどさ。

「音無さん！」

「来ちゃいましたっ♪」

「やあ、いらっしやい」

僕らが話していると、次のお客さんである女の子達から伊御が声をかけられた。……もう、もうツッコまないぞ！ ツッコむもんか！

「伊御、知り合いか？」

「ああ。近所の子達だよ。それじゃ、好きなのを選んでいいよ。奢りだ」

「ほんとっすか！ やったー！」

「それじゃ私はチョコバナナ生クリームで」

「ウチはマロンカスタードっす！ それと……」

「スマイルくださいっ」（きやぴっ♪

「あははっ。伊御、どうするの?」

「ふむ……」

女の子達が何処かのファーストフード店のようなことを注文した。さて、この注文に對する伊御の回答は……。

「お持ち帰りですか、お客様?」（キラ☆

「はううっ／＼／＼／＼!」（ズッキュンツ!

「伊御をテイクアウト、だど!」

伊御の答えに女の子達もタジタジだ! 流石伊御! ハートが撃ち抜かれた音が聞こえてきたよ!

それから少し慌てながら「ここ、この場でっ／＼／＼／＼」と返した2人。伊御はクレールを渡す際にスマイルを渡して女の子達を帰らした。……慣れてるなあ、伊御。

そんなイベントもあつたが、僕と雄二はここも大丈夫だろうと安心して召喚大会へ向かった。……よし、やるぞー!

□ 召喚大会へ向かう最中 □

「ぶしゅ……／＼／＼／＼」

「……あれ!? つみきさんも姫っちゃんもどうしたんじゃよっ!？」

「この症状は……伊御か!」

「どうやらここまで口撃が届いていたようだな」

「無差別口撃ってやつだね……」



「はい、チョコバナナアイスです」

「わあー! ありがとうございます。……あの、写真いいですか?」

「はい。他のお客様もいらっしやるので、1枚だけでよければ……」

「は、はい! お願いします!」

清涼祭が始まってから、俺達は大忙しだった。『ハチポチ』での宣伝が功を成したのか、はたまたつみき達の容姿に惹かれたのか、短いながらも行列が出来るほどお客様がクレープ屋『つつみん』に来てくれた。

来てくれたお客様は俺が着ている書制服が珍しいのか、度々写真を一緒に撮って欲しいと言ってくるので、1枚だけでいいならと一緒に撮っている。まあ、これもサービスかな?

クレープを作りながら周りを見渡すと、櫛と姫がクレープを買ってくれたお客様と写真を撮つてるところが見えた。どうやら、クレープを買ってくれたら写真を撮つてもいいですよって呼び込みをしてるみたいだ。ちやつかりしてるね。

「おい、注文いいか？」

「あ、はい。いらつしやいませ、何にしますか？」

次のお客様は珍しく男の二人組だった。制服からうちの男子生徒だとわかる。1人は坊主頭で、もう1人はソフトモヒカンの髪型をしている。……多分三年生じゃないかな？

（おい、本当にやるのか常村？）

（今更何びびってんだ夏川。向こうが失敗したんだからやるしかねえだろ）

（……わあつたよ）

俺がクレープを作ってる間に、目の前のお客様が小声で何かを話していた。……もしかして、気付かないうちにお客様の気に触ることをしたのかもしれない。

「あの、お客様？」

「っ!? な、なんだ!？」

「いえ……。顔をしかめていらしたので、自分が何かしてしまったのではないかと思いまして……」

「あ、あーいや。……んんっ！　そ、そうだ！　お前なんだこの「お客様ー！　少し失礼しますにやーっ！」ぼへいつ！」

「えっ」

「常村っ!?　て、てめえ！　なにしやが「ささっ！　どうぞこちらへーっ！」どほうっ!」

「……………」

やはり俺が何かしたらしく、話を聞こうとしたんだけど……。そんな矢先に、真宵と榊がそれぞれ常村さんと夏川さんに一撃を決めた後、2人をどこかへと連れ去っていった。……えーつと。

「あ、あのー?」

「……はっ。す、すみません。注文をどうぞ」

何が何だか分からないが、今はとりあえず並んでるお客様を優先しよう。

「お客さくん。言いがかりのクレームはいけないにやあ?」(バチバチッ！)

「どうやらFクラスでは妨害に失敗したようで?」(バチバチッ！)

「ど、どうしてそれをつ!?!」

「馬鹿野郎！　ち、違うんだ！　俺達は別にクレームなんてつ!?!」

「チツチツチ。証拠は揃ってるんじゃないよ」(バチバチッ！)

「注意するようにと写メも届いてるしなあ？」（バチバチッ！）

「「ちよー！ まっ！」」

「「問答無用!!」」（バチバチバチバチッ!!）

「「アバババババババツツ!!」」



「営業妨害してる人がいる？」

「ああ。さっきムツツリーニから写メ付きでメールが来てな。写メに写ってるやつらがFクラスで営業妨害してて、雄二が追っ払ったみたいだぜ」

「んでんで、その犯人が次はこっちにくるかもって警戒してたら案の定ってわけじゃよ。ほら、これが例の写メじゃよ」

お客様も落ち着いて一息ついた頃、榊と真宵にさっきのは何だと聞いたところ、そんな答えが返って来た。真宵の写メを見ると、雄二にバックドロップを決められてる夏川さんとそれを怯えた目で見える常村さんが写っていた。……雄二。

「クレマーに対処するためにバックドロップって……」

「過剰防衛ね」

「雄二らしいよな」

「ぼ、暴力はダメですよお」

「何を今更」

「あうう」

「……それにしても営業妨害か。多分、学園長の秘め事に巻き込まれたかな？ だつて、たかだか学園祭の出し物に営業妨害なんて普通はするはずがない。

相手の狙いは何だ？ 営業妨害つてことは、Fクラスの教室の改修を阻止するというのがあげられるけど、それこそ相手にとつて関係はない。つてことは……。

「……召喚大会の優勝商品、か」(ボソツ)

学園長の秘め事に関係するつてことは、やつぱりそれが狙いだらう。おそらく、営業妨害をすることで、召喚大会に集中できなくさせて明久達を負けさせることが相手の狙いだ。……さて、誰の差し金なんだろう？

「……伊御？」(くいくい)

「……ん？ どうしたんだい、つみき」(ぼふっ)

「……えっと」(もじもじ)

「？」(なでこなでこ)

「……あまり、抱え込まないで……ね？」(ぴこ？)



「! ……うん。心配してくれてありがとう、つみき」(なでりなでり

「べ、別に心配にやんかしてにやいわっ」(ぴこぴこ)

俺は感謝を込めて優しくつみきの頭を撫でてあげる。……俺はいつもつみきやみんなに心配をかけてばかりだな。

「「ニヨニヨ」」

「!? ……フツカーーーッ!!」

「「キヤーツ」」

「ふふっ」

いつものようにつみきに威嚇されて楽しげなみんなを見て、俺はふと笑みがこぼれた。……せつかくの清涼祭なんだから、くだらない陰謀で台無しにならないようにしないな。後で明久達と話し合おう。

心配事はあるけれど、今はクレープ屋に集中しよう。俺はこの場をみんなに任せて、足りなくなった材料を取りに校舎へと向かった。



「はあ……。ホント最悪」

私は一人、人気のない校舎の中を歩く。私が今いるここは一般客の立入禁止区域で、物置として指定されている場所だ。時たま人が通るが、奥に進むにつれてそんな人もいなくなっていく。

そんなここは、今は誰とも会いたくない私にとって都合のいい場所だった。

さつきまで出場していた召喚大会で、「元」カレである根本君と別れてきた。だってあんなもの見せられたら誰だって別れるわよ。

それは先の召喚大会のこと。対戦相手であったFクラスのバカコンビが持っていたアルバム。そこには様々な衣装でポーズを決める根本君の姿があった……女装で。しかも後半になるにつれて、満更でもなさそうにしてるものだから目も当てられない。

私達の棄権を条件に譲ってもらったけど、譲ってもらってホントに良かったわ。このまま知らなければ、私は女装趣味の男と付き合う女って思われるところだったんだから。

「……はあ。根本君は『そこそこ』の人だったんだけど、ね」

彼は狡賢く、狡猾で、見た目も悪くなかった。成績も本当ならばBクラス代表にはなれないまでも、Bクラスに入れるほどには良かった。それに思ったより気もきいてたし。たまに抜けてるところも可愛げがあつて、悪くないかなって思ってたんだけど。

文字通り、100年の恋も冷めるってやつよね。まあ、100年も付き合うつもりな

んてさらさらなかつたけど。

「それに、あのバカコンビに遅れをとってる時点で幻滅よ」

私は周りに誰もいないことをいいことに、胸に溜まった鬱憤を晴らすように一人言葉を発する。

「はあくあ！ ホンツツトに最悪！」

2年に進学してからいいことがまるでない。新年度早々、変な策略に巻き込まれて、挙句罵倒されるし。試召戦争ではAクラスに負けて設備が落ちるし。その策略がFクラスからの策略で！

……私もFクラスなんて馬鹿の集まりに遅れをとって!!

「ああーっ！ もうっ!!」

私は行き場の無くしたこの気持ち悪い感情を晴らしたい一心で適当なものに当たろうとした時、小さな声が聞こえた。

……みゃく

「……………」

一瞬、私の気のせいかと思いついて無視しようとしたけど、時々聞こえてくる声に気のせいではないと辺りを見回す。そして、その弱々しい声がなんであるかに耳を傾けた。

「みく……………」

「……猫？」

その鳴き声は猫のようだった。それに気付くと、何故か私のさつきまでのイライラがゆつくりと収まっていき、モヤモヤは残るがある程度頭も冷えてきた。

「……はあ、なんでこんなところに猫がいるのよ」

ここは校舎の中だ。普通なら猫なんて入ってこない場所のはずだけど、清涼祭の食べ物の匂いにもつられて入ってきてしまったのかしら？

「………はあ」

私はここにきて何度目かのため息を吐いて、周囲を見渡す。人というのは一度気になったものは気になって仕方がなくなる生き物で、せっかくだから気分転換も兼ねて猫を探そうと思ったのよ。

それからしばらくして……。

「……あ、見つけた」

それは木材と木材の小さな隙間に隠れるように蹲っていた。首輪がないので野良猫のようだけど、白い毛並みは綺麗で、だからよりそれは目立った。

「……もしかして、怪我をしてるの？」

その白猫の後ろ足が朱に染まっているのが見えた。多分この場所に紛れ込んだ際に木材のささくれにでも引つ掛けてしまったんだと思う。それに思い当たると、白猫は足を

庇うようにして蹲つてるようにも見えた。

「どうしよう。ここには治療するものなんてないし……」

私はまた辺りを見渡すけど、やっぱり都合よく救急箱なんて置いてる事なんてないわけ。

「みゃ〜……」

「ああんもうっ。そんなに鳴かないで。……こうなったら連れて行くしかないかしら？」

白猫の絞り出すような鳴き声に心が揺さぶられ、私まで胸が苦しくなってしまう。私は少し焦りながらも、白猫をここから連れ出して保健室に連れて行くことにした。それはいいんだけど……。

「ほ、ほら。こつちにおいで？」

「……ふーっ」

「だ、大丈夫。こ、怖くない。怖くないよ〜」

「…………っ」

「……ダメね。警戒されちゃってる」

先ほどの私の怒つてるところでも見たのか、または私自身が気に入らないのか。猫は近づこうとする私に威嚇し、隙間の奥へ奥へと引っ込んでしまう。その時に血が溢れて

しまい、私の焦燥がこみ上げる。

「あつ。ダメ！ 近付かないから、大人しくしてて！」

私の声が届いたわけじゃないと思うけど、白猫は動くのをやめて私をジツと見つめた。……まだ警戒してるみたいね。

「こうなったら仕方ない、か。……ねえ、救急箱を持つてるからから、そこでじつとしてるのよ？ いい？」

「……………」

私は白猫に言い聞かせるようにそう言つて、脅かさないようにゆつくりと立ち上がつて踵を返す。そして……

「……………ん？ えーっと、Cクラスの小山さん、だよな？ どうしたんだい？ 慌てている

ようだけど……………」

「……………音無、君？」

その日。

私は。

多分。

初めて。

……恋をしました。

## 第22話

「……ん。これでいいかな」

「……………」

「? どうしたんだい?」

「……別に。なんでもないわ」

「みやあくくあう……」(くしくし)

さつきまでの警戒は何処へやら。白猫は今、私の腕の中で眠そうに手で目元を擦り、大きな欠伸とともに鳴き声をあげた。

私はその様子に小さくため息をつき、隣をそつと見やる。そこには白猫の様子に微笑む音無君の姿があつた。

Fクラスの音無 伊御。

成績はAクラス上位者並み。温厚な性格で、滅多なことでは怒ることもない。顔もかなり整つてる方で、稀に見る人格者だ。そんな優良物件が放置されるはずもなく、私の



クラスにも彼のことを狙つてる娘が確かいたと思う。

そして、どういふわけかFクラスに落とされた人だ。……そう。さつきまでのイライラの原因の一つであつたバカコンビと同じクラスに所属し、かつそんな馬鹿どもといつても一緒にいる友人としても有名だ。

なんでそんな人が私の隣に座つているかというと、白猫の治療をしてくれたのが音無君だつたからだ。

音無君とは、私が保健室に救急箱を取りに行こうとした際に、この物置と化した校舎で出くわした。出店の在庫がこの奥にあるらしく、それを取りに来たら様子がおかしい私を見かけたということだつた。

私は音無君の性格や人柄を少しだけ知つていたから、彼に白猫の様子を見てもらうことを頼んで、私とその間に救急箱を取りに行こうとしたんだけど……その必要がなくなつたのよね。

なぜなら、私の話を聞いた音無君が簡単な医療器具を一式すでに持つていたから。そこから話は早かつた。

音無君は私が白猫がいる方を指差した場所にゆっくり向かい、隙間を覗き込んで白猫がいることを確認したと思つたら……。

「おこひょー」

そう一言、白猫に向けて言ってあげたらすぐ。

「み、みく……」（よたよた

あれだけ警戒し、怯えていた白猫が足を引きずるように隙間から出て来て、音無君の腕の中にすっぽりと収まったのだ。その様子には唾然としながらも、何処か納得出来なかつたのは仕方がないと思う。私だって心配してあげたのに……。

私のそんな心境が伝わったのか。音無君は白猫を抱きかかえて、私のところまで歩いて来た。そして……。

「小山さんも、君のことをすごく心配してくれたんだよ？」

「なっ!？」

音無君の言葉に私は動揺してしまい、顔が熱くなるのを感じた。今になって、自分が柄にもなく猫ごときに必死になってたのが恥ずかしくなったからだ。そんな私を彼は笑うこともなく、自身を見上げる白猫と見つめ合っていた。

白猫は音無君の言葉がわかるのか、雰囲気を感じたのか。頬が熱くなってる私の方へ顔を向け、ジツとこちらを見上げてきた。

「……………」(じー)

「な、何よっ？」

「……………みやく」

「???

「ふふつ。ありがとう、だって」

「はあ? あなた、猫の言葉が分かってても言うつもり?」

音無君のことを鼻で笑う私を、しかし彼は微笑みをたたえて言葉を紡ぐ。

「分かるというか、多分そうだなって感じるくらいかな? ……ほら、手を差し伸べてご

らん?」

「……こいつ、さっきまで私を威嚇してたんだけど」

「大丈夫だよ。この子も、いきなり小山さんが現れてびつくりしたんだと思う。おかげで、俺の時はある程度慣れてたから警戒を解いて出てきてくれたんだと思うよ」

音無君の言葉に、私は絶対違うと思った。だって私でも分かるもの。……彼は、動物に好かれるぐらい優しい人なんだなって。

「この子がお礼をしたって。ほら……」

「……はあ」

音無君の様子に引く気がないことを悟った私は、白猫へとゆつくり手を伸ばした。す  
ると……。

「みゃう……」(ぺろぺろ)

「あつ……」

「ね？」

「…………ふ、ふんっ」

私は微笑む音無君を直視することが出来なかった。

それから、白猫を私が代わりに腕で抱きかかえて、音無君が白猫の足を治療をしてくれた。その間、白猫は時々痛みで身体を震わすことがあっても、逃げることも暴れることもせずに私の腕の中で大人しく治療されていた。

私も私で、猫をこんなに関近で接した機会なんて今までなくて……白猫の可愛さについていっい頬が緩んでしまった。それを音無君が見ていたことに気が付いた時は慌てて誤魔化したけど、誤魔化した自信は全くなかった。

そして今。治療も終えてホッと一息ついたところだった。

「あなた、出店はいいの？」

「ああ。紳……俺の友達に連絡したら、こっちはいいからゆっくり治療してやれって」  
「そ。……………」

「？ 何か言ったかな？」

「…………はあ。ありがとって言ったのよ」

「…………うん。どういたしまして」

「ふんっ」

「みやうう〜」

それからは猫の鳴き声だけが辺りに響く。……気まづくはないんだけど、何かしらねこの空気。居心地が少しだけ悪いわ。

彼は彼で、私の腕の中の猫を撫でて「よかったね」って声をかけて微笑むばかりで……。居心地が悪いのは私だけみたいで、少し腹が立つ。

そんな時、私はふと前から思っていたことを音無君に聞いてみようと思った。それは、あの馬鹿どものことだった。

「……ねえ、音無君」

「うん？　なんだい？」

「突然だけど、聞きたいことがあるの」

「？」

「……なんであなた、あんな馬鹿どもと一緒にいるの？」

「馬鹿ども……って、明久達のこと？」

「そう。あのFクラスの奴らよ」

「……、また君に何かしたのかな？」

「いいえ。私の元カレには随分とやってくれたけどね」

「そっか。それはごめ」

「そのおかげで、私は元カレと別れることになったわ」

「……………本当に、ごめん」

「別に、今となつてはどうでもいいわ。で、どうなの？」

「……………あー、うん。えーつと……………」

申し訳なさそうにする音無君に私は冷めたようにそう言った。実際、それは私の本心だった。

根本君と別れたことに関しては、ホントにどうでもよかつた。今は彼がどうしてあんな奴らと友達でいるのかの方が気になる。

どうして私はそんなことが気になつていたのか。それは、この前の試召戦争が終わつた後の彼とのやり取りが原因だった。それは、あの試召戦争が終わつたあとに彼が私のところまで謝罪しに来たときのことよ。

「小山さんはいるかな？」

音無君はCクラスに来てすぐにそう言つて私を呼んだ。私に謝罪しに来た彼の手には、綺麗に包装されたクッキーがあつた。

私はFクラスに嵌められたこともあつて、かなりぞんざいに対応した。あの時は、対応するだけありがたいと思ひなさいとまで思つていたわ。

音無君はそんな私の皮肉や罵倒に反論することもなく、ただごめんと謝るだけだつ

た。そんな彼がごめん以外を口にしたのは、私の八つ当たり（今となつては八つ当たりだとわかる）がひと段落した頃合いだった。

「今回は俺の友人が本当にごめん。許してなんて、君を傷付けてしまったことを思えば絶対に口にできない。だけど、雄二達も仲間のために全力で頑張れる気のいい友人なんだ」

それから彼は馬鹿どものことを庇いながら、誠心誠意私に謝罪した。

しばらくそんなことが続いたんだけど、謝る彼を嫌みたらしく対応するという凶に、だんだんと周りも、そして私自身も私の方が悪者みたいに感じて……。それが嫌になつた私は適当に彼の謝罪に了承し、水に流すことにした。

音無君は私の言葉にやつと安心したのか、ホツと息を吐いて今度は微笑みながら手に待つていたクツキーを私に渡してきた。

「お詫びと言つてはなんだけど。……これ、よかつたらどうぞ。小山さんの口に合うといいな」

音無君の手に乗せられたクツキーを、私は適当に受け取つて彼をさっさと帰した。彼は最後まで私に丁寧で、頭を下げて帰つて行つた。

私は音無君がいなくなったことでやつと一息つけたと思ひ、ゆっくりしてから帰ろうと思つただけど、彼の手作りクツキーを羨ましそうに見る他の娘達が鬱陶しくて、私

は足早に自分の家に帰ることにした。

帰った私は自室で着替えて、やつと一息つけたと勉強机の前で身体の力を抜いた。それからぼーっとしてただけど、ふと机の上に置かれたクツキーが私の目に入った。私  
はなんとなしに、音無君から貰ったクツキーを一口食べてみたんだけど……。

「美味しい……」

それは私の口から自然と溢れた感想だった。そして、心の底から美味しいと感じられるものだった。こんなに美味しいものが手作りで、しかも男子が作ったことに驚愕したのは記憶に新しい。……女として釈然としなかつたことも。

私はこんなに美味しいのは、音無君の気持ちが進められてるからなのかな、なんてらしくないことをこの時考えていた……恥ずかしいわね、もう。

けど、そんなことを考えていたせいか。私は音無君とのやり取りを思い出して、Fクラスだからと彼に八つ当たり（この時に八つ当たりだと気付いた）したことに少しだけ罪悪感を覚えた。でも、それも後の祭りで……。

だからこそ私はその時疑問を抱いたんだと思う。評判通り、近年稀に見るこんなに来た人が、なんで馬鹿どもの尻拭いをしなくちゃいけないのか、と。

あいつらは学校一の問題児だ。音無君はそんな馬鹿どもが毎度問題を起こすたびに何かと後始末をしてきたんだろう。



音無君は嫌にならないのだろうか？ 迷惑だと、鬱陶しいと思うわなのだろうか？ そんなことを考えながらも、どうせ彼とは話す機会なんてないからと罪悪感と疑問を飲み込んだんだけど……まさかこんな風に話す機会が訪れるなんて思わなかった。だからこの機会に聞いてみようかと私は思ったの。

過去の回想を終えて、私はほとんど目を閉じている白猫を優しく撫でる。みく……と閉じられた口の隙間から抜けるような鳴き声が聞こえた。

そんな風に白猫で和んでいると、私の質問に考え込んでいた音無君が口を開いた。

「……………うん、そうだね。明久達と一緒にいる理由、それは……………」  
「……………それは？」

音無君は私の目を見て、微笑みながらこう答えた。

「明久達がバカ、だからかな？」

……………彼に対して残っていた罪悪感が彼方に飛んで行ったのを感じた。

「はあ？ ……あなた、私を馬鹿にしてる？」

「いや、そんなつもりはないよ」

「なら何よ？」

音無君はイラついている私から視線を逸らし、少し上を見上げて何かを思い出すように静かに語り始めた。

「前にも言ったかもしれないけど。俺の友人……特に明久なんかは、誰かのために全力で頑張れるんだ」

「……………」

「小さな女の子が泣いて困ってたら、その涙を笑顔に変えるために犯罪まがいのことをして。異国の転入生が周りの雰囲気馴染めていなかったら、その国の言語を必死に勉強して友達になろうとしたり……」

音無君は、とても嬉しそうに……。

「同じクラスの子の私の私物にイタズラしようとする奴を見かけたら、そいつを全力で殴り飛ばしてやめさせようとして。先輩が後輩をいじめてる現場を見かけたら、そこが2階でも、3階だったとしても、そこから飛び降りて先輩を蹴り飛ばしたり……」

心の底から嬉しそうに……。

「どこまでもひた向きに、真っ直ぐに、馬鹿正直に。誰かのために頑張れる……俺の自慢の友人だ」

嬉しそうに……笑う。

「雄二達もそうだ。明久ほど破天荒ではないにしろ、誰かのために頑張れる俺の自慢の

友人で、誰よりも真つ直ぐに突き進む明久を助けるために立ち上がれる……そんな奴らだ」

「……………」

そんな彼を見てみると、先程までであったイライラが収まって、今度は何か暖かいものが胸からじんわりと広がっていった。それには不快感なんてものはないけど……居心地は悪かった。それは、さつき感じていた居心地の悪さと似ていた。

「けど……真つ直ぐに進みすぎて、他を省みなさすぎるんだ」

「……………」

けれど、この今まで感じたことのない感覚が不思議と嫌じゃなくて。

「誰かのために頑張れることは間違いなく素晴らしいことだ。でも、だからと言って犯罪まがいのことをしたり、他の人に迷惑をかけていいわけじゃない。……試召戦争の時に、小山さんに迷惑をかけたように、ね」

「……………あれはビックリしたわね」

そしてまた不思議と、私はあの時のことを思い起こしても……何故だか今は笑えていた。

「うん。俺も聞かされた時は驚いたよ」

「ふふっ」

疲れたように苦笑する音無君を見て……また、笑う。

「まあ、そんなわけで……」

音無君は私を見て、今度は仕方なさそうに笑いながら続ける。

「明久達はそのところを理解してない節がある。そうやって犯罪まがいのことをして、心配する人がいるってことも含めてね。だから……」

「……………」

「だから俺が明久達の尻拭いをしたり、明久達を連れて謝りに行ったりすることで、少しでもそのことに気付いてくれたらいいなって俺は思うんだ。明久達は俺の自慢だから。友人として、誇りに思うから」

彼はまた優しく微笑んで、私に質問の最後に答えをくれた。

「まあ、長々と語ったわけだけど。結論としては、明久達はバカだけど……俺の自慢の友人だから。だから、一緒にいるんだ」

だから嫌にはならないんだと。迷惑とも、鬱陶しいとも感じないんだと。彼は笑って答えてくれた。

「……………」

私はすっかり眠ってしまった白猫を起こさないよう抱え直し、彼の答えを自分の中に受け止めた。……そして、私は音無君の答えを聞き終えて、やっとこの居心地の悪さの

正体に気付いた。

その正体は……音無君が振りまく「優しき」だった。

私は思い出すことができる限りで、他人から優しさを向けられたことなんてなかった。家族からなら勿論ある。けれど、それ以外からは無かったと思う。

友達はあるけど、特に親しい人は居なくて。何度か男と付き合ったりしたけど、どこか薄っぺらい「好き」に途中で冷めて。……いつしか、人から向けられる気持ちを簡単には信じられなくなった。

そんな私が。今までどこか達観したフリをして生きてきた私が、初めて向けられた真つ白な優しさに戸惑っているんだ。でも、気付いてみたらその居地の悪さは何よりも居心地がいいものになって……。私をその優しきで包んでくれているように感じた。

「……えーっと。俺の答えはこんな感じなんだけど、何かおかしいところがあつたかな？」

「えっ？ どうして？」

初めて感じる居心地の良さに浸っていたら、音無君からそんな言葉が飛んできた。

「だって、小山さんが笑ってるから」

「……笑って、る?」

「うん、笑っていたよ」

私は彼の言葉を聞いて思わず両手で頬を触ってしまった。しかし、その拍子に夢現だった白猫を起こしてしまい、白猫からは非難の目が向けられているように見えた。

「あつ、ごめんね?」

「みー……」(ジトーツ)

「ふふつ。起こしちゃったね」

起こされて不機嫌だった白猫も、音無君に撫でられたらあつという間にゴロゴロと気持ちよさそうに鳴き出した。……チヨロい猫。

「……んんつ。音無君、別にあなたの答えにおかしなところなんて無かったわ」

「ん? ……そっか」

「でもあんな奴らを自慢に、ね。……あなた、人生損しちゃうわよ?」

「そうでもないよ。俺はみんななどいることが出来て、とても楽しいから」

「……あなたのお人好しもお手上げね。ま、馬鹿みたいにお人好しなあなたなら、あいつらともお似合いなのかもね。同じ馬鹿だし」

「酷い言われようだ……」

音無君は言葉とは裏腹に笑みを浮かべる。

「……フーツ」(威嚇)

「あんたはお黙り」(ビシッ)

「ふぎやっ」(くしくしっ)

音無君を庇うように威嚇する生意気な白猫に制裁を下して、私は立ち上がる。

あの居心地の良さは名残惜しいけど、そろそろ音無君を返さなくちゃね。彼も私に合わせて立ち上がって、着ている書生服を軽く叩いて整えた。そういえば……。

「音無君は何で書生服なんて着てるのかしら？」

「ああ。半強制的にこれを着て出店をすることを強いられてね。意外と着心地はいいんだよ」

「ふーん……」

私は抱いている白猫を落とさないように片手で抱き、音無君の服を触ってみる。……無駄に生地がいいわね。

「……小山さん？」

「あ、ごめんなさい。つい珍しくて……」

「ううん。気にしてないよ。……あ、そうだ」

彼はおもむろに袖口に手を入れ、中から携帯を取り出した。どこに入れてるのよ、あなたは。

「小山さん、よかつたら俺と写真を撮ってくれないかな？」

「……………どうしてかしら？」

「俺が君と仲良くなれた記念に、かな」

「……………」

いつもの私なら、「はあ？　なんで私がそんなことをしなくちやいけないのよ」って答えるんだけど……………全く、仕方ないわね。

「……………はあ、いいわよ」

「よかつた。それじゃ……………」

私と音無君は2人並んで、彼の携帯のカメラへと顔を上げる。その際に私らしくないとは思ってたけど、彼の優しさにもっと触れたくて……………自分から密着していく……………うん。優しく……………あつたかい。

そんな私を不審に思うこともなく、音無君はカメラの角度を調整して……………。

「それじゃあ、撮るよ」

「ええ」

「みゃう」

そして、パシヤリ……………と。彼はシャッターを押した。

「……………うん、よく撮れてる」



「見してみなさい」

「ほら」

音無君の携帯画面に映ってる私に、私自身が驚いた。だって、そこに映る私は……自分でも見たことがない顔で笑っていたんだから。

「私、こんな顔で笑えるんだ……」

「……？　小山さんはずっと笑っていたよ？」

「えっ？」

衝撃の事実に驚く。えっ!?　いつから!?

「……俺が明久達という理由を話している時ぐらいからかな？」

「嘘……」

「ふふっ。小山さんの笑顔は、優しくて魅力的な笑顔だね」

「なっ／＼／＼／＼!？」

私は音無君の突然の言葉に声が詰まった。いやっ！　私の顔、絶対赤いつ！

「小山さん？　どうしたんだい？」

「なんでもないわよ！　この女たらし／＼／＼／＼!」

「女たらし!？」

「ふんっ／＼／＼／＼!」

私は赤くなつてると思う顔を隠すように音無君から顔を背ける。何度か深呼吸をして、顔の熱が引いてきたかなつて時に、チラツと彼を見た。

私の視界に映る音無君の顔は戸惑いに満ちていて、私の様子にオロオロとしていた。そんな普段では見れない音無君の姿が可笑しくつて……ふふつ。

「あははっ」

「……小山、さん?」

私を伺うように見る音無君。……そうだ、いいこと思いついた。

「ねえ? 許してほしい?」

「え? あ、ああ。できることなら……」

「なら、私のことを次から名前で呼んで?」

「……そんなことでもいいのか?」

「あら、ご不満? ……もしかして、私の下の名前を知らない、なんてことはないわよね?」

私が不敵に浮かべた笑みを見て、音無君も私が本気で怒つてるわけじゃないって気付いたみたい。

「……ふふつ、いいや。不満も、ましてや知らないなんてこともないよ。……友香」

「よろしいっ」

「それなら、俺のことも伊御でいいよ」

「それじゃ、お言葉に甘えて。……これからよろしくね、伊御♪」

「ああ。よろしく」

そして私達はお互いに顔を見合わせて笑いあった。除け者にされ白猫が私の腕の中で不貞腐れて暴れたけど、それを私はまたデコピンで黙らせたのだった。

これが私と伊御との出会い。

私が初めて優しさを知った日で。

私が初めて伊御の優しさと温もりに触れた日で。

私が恋に落ちるきっかけとなった……。

私の甘やかなプロローグ。

## 第23話

在庫を取りに向かった倉庫に指定された校舎で、小山さん……友香と友好を深めた。傷付いた白猫を心配したり、治療した白猫を愛でているところは微笑ましく、彼女の普段は見えない一面を垣間見た気がした。

あの白猫は友香が飼うことにするみたいだ。別れ際にお互いの連絡先を交換したんだけど、その後彼女が苦笑しながら話していた。

「結局治るまでは世話をしなくちゃいけないわけだしね。どうせならこの子を飼うことにするわ。これも何かの縁だと思うし。それとも、あんたは嫌？」

友香の顎を撫でながらの問いに鳴いて答えた白猫は、「しようがないにや」と言うように見えた。彼女もそう見えたようで、「生意気」と白猫にデコピンをしてじやれ合っていた。ふふっ、仲が良さそうでよかったよ。

そして友香と別れて少し経った頃。お昼が近づくにつれて、お客様の数も増えてきた。このままだと予定より早く完売になるかな。……予想以上の売り上げにびっくりだ。

そんなことを考えながらお客様を捌いていると、店の裏から真宵が声をかけてきた。

「伊御さーん！ また材料がなくなってきたから取ってくるねー」

「ああ、頼むよ」

「ういいうい〜！」

真宵は矢絣の振袖を揺らしながら元気よく駆けていった。こら、その格好で走るんじゃない。せつかくハイカラな服を着てるんだからお淑やかにしなさい。

俺は目の前のお客様を不快にさせないように、ため息を飲み込んでクレープ作りに集中した。

それからもおお客様の列が尽きることはなく、俺達は順調に売り上げを伸ばしていった。……うん。自分が作ったものがこんなにも売れてるのは素直に嬉しいな。しかも、美味しそうに食べてくれているから尚更、ね。

「ふうーっ。ようやくと落ち着いたか〜」

「お疲れ、榊。みんなも」

「別にそんなに疲れてないわ」

「は、はひい。そ、そうですねっ」

「姫っち〜？ 無理しなくていいんじゃないやよお？ お客様に容姿をべた褒めされた挙句、

写真を撮られまくったんじゃないからね〜」(二ヨ二ヨ

「はうっ!？」

「にししっ。クレープを買ってくれたらっことで俺と姫はかなり一緒に撮ったよな。男どもの姫を見る目と言ったら……」(ニヨニヨ)

「はうう……／＼／＼／＼」(てれてれ)

「まあ、その姿の姫はハイカラさんで可愛い「があぶっ#!」い、痛い……」  
つ、つみき? どうして俺の頭を……。

「今のは伊御(さん)が悪い」

「あ、あはは……」

「……解せぬ」

「……………ふい」(ぶんぶん)

俺は瞞まれた頭をさすりながら、不機嫌な子猫となつているつみきの頭をもう片方の手で撫でてあげる。チラチラこつちを見てはいるから機嫌も戻ったかな?

「……………ん?」

そうしていたら、ふと俺の視界に入るものがあつた。

「うゝつ、どこにいるのかなあ?」(キヨロキヨロ)

ココア色の髪をツインテールにまとめた小さな女の子が、不安そうに辺りをキヨロキヨロしていた。歳は小学生の高学年くらいだと思っただけ……誰かを探しているのかな?

「……ん？ おい伊御、なんかあったか？」

「うん、あの子なんだけど……」

「……お？ ありや迷子か？」

「多分ね」

「んじやあ探してやらなくちやな。行こうぜ！」

「ああ」

俺達はずみき達に店を任せて、ツインテールの女の子に声をかけた。

「ねえ君、もしかして迷子かな？」

「ふえっ？」

「よかつたら、俺達が探してやるぜ」

「え、と……」

俺達の声に驚いて、少し怯える女の子。まあ、当然だよな。この学園の制服じゃなくて、しかもこの歳の子ならまず見かけない書生服なんて着てる男の人から声をかけられたんだ。とりあえずはこの子の警戒を解かなくちやな。

「ごめん、驚かせちゃったかな？ こんな格好してるけど、俺達はここの学生なんだ。ほら」

そう言って女の子に学生証を見せる。女の子はそこに映る写真と俺を見比べて、やつ

と警戒を解いてくれたみたいだ。

「あう、ごめんなさいです」

「いやいや、気にすんなちびっこ。俺達の方こそ悪かったな、いきなり声かけちまつて」

「大丈夫ですつ。でも、葉月はちびっこじゃないですつ。葉月は葉月つて言います！」

「ナハハツ、そうか。悪い悪い」

「このお兄さんがごめんね？ 俺は音無 伊御。このお兄さんは戌井 榊つていうん

だ。好きに呼んでいいよ」

「よろしくな！」

「はいですつ。伊御お兄さん、榊お兄さん！」

ツインテールの女の子……葉月ちゃんは元気一杯に笑顔を浮かべて返事をした。うん、天真爛漫つて言葉がよく似合う明るい子だね。笑顔は向日葵みたいで華やかだ。

「それで、葉月ちゃんは迷子なのか？」

「葉月は迷子じゃないですつ。葉月はお兄ちゃんを探してるんですつ」

「お兄ちゃん？ 名前はなんていうんだい？」

「あう……。わからないんです……」

さつきまでの笑顔を引つ込めて、また不安そうにする葉月ちゃん。ふむ、わからないってことはこの子の家族でも近所のお兄さんつて訳でもないのか？



「なんでその名前もわかんねーお兄ちゃんに会いたいんだ？」

「……葉月、前にそのお兄ちゃんに助けてもらったんですつ。お兄ちゃんはとっても優しくしてくれて、おかげで葉月はお姉ちゃんの誕生日プレゼントを買うことができたんですつ」

「そっか。とつても優しい人なんだね」

「はいです！ それにね、その時に葉月はお兄ちゃんと結婚の約束もしたんですつ。だから葉月、お兄ちゃんに会いたくなってここに来ました！」

「……………」

さっきまでの穏やかな空気が一瞬で凍った。……………結婚で。

(おい伊御！ この子つて小学5、6年生ぐらいだろ？ 結婚つて大丈夫なのか?)

(……そうだな。小学校の低学年くらいまでなら笑つてられるけど、流石にこの歳では少しまずいと思うが……)

(だよな?)

「お兄さん？」

「や、なんでもない！ なんでもないぜ！ な、伊御？」

「ああ」

「??？」

突然変わった俺達の様子に不思議そうに首をちよこんど傾げる様子は可愛らしいんだけど、今は置いとこう。

(とりあえずそのお兄ちゃんつてやつと一緒に探してやって、危なそうなやつだったら俺達が正義の名の下に裁きを下さすか)

(そうだな)

「な、なあ葉月ちゃん。そのお兄ちゃんつてのはここの生徒なのか?」

「はいですつ。この学校の制服を着てました!」

「それじゃあ、そのお兄ちゃんの特徴はあるかな?」

「えつと……バカなお兄ちゃんでした!」

「……………」

再び沈黙がこの場に降りる。なんとも反応に困る特徴だ。

「……………はっ?!」(ピッシャーッ!!)

うお!? なんか榊が唐突に頭から雷が落ちたような顔をした。何か思い至ったのかな?

(おい伊御!! もしかしてもしかしなくてもFクラスの誰かじゃねーか!? あのクラスの奴らなら幼女に手を出そうとしてもおかしくはねーぞ!!)

……………どうしよう、反論できない。

(……………うちの学年のFクラスじゃないことを祈るばかりだよ。もう少し葉月ちゃんから話を聞こう)

「葉月ちゃん。バカなお兄ちゃんに俺達心当たりがあるんだけど、もう少し何かないかな？」

「うーんと、うーんとお……………」

葉月ちゃんが腕を組んで頭を左右に揺らしながら思い出してくれている。…………頼む、身内であつてくれるな！

果たして、俺と榊の願いは…………。

「えつと……………すつごくバカなお兄ちゃんだったんです！」

「明久だな」

見事に届くことはなかった。最悪だ。まさかの身内、しかも俺の友人が光源氏計画を進めていたなんて……………失望したよ、明久。

……………いや、まだ間に合う。俺達で明久を更生させて、矯正するんだ。

「榊」

「伊御」

「やるぞ」

「ふえ？ 伊御お兄さん、榊お兄さん？」

俺と榊は顔を見合わせて頷き、互いの拳を合わせる。そんな俺達をまた不思議そうに見ている葉月ちゃんに俺は微笑みかける。

「葉月ちゃん、そのバカなお兄ちゃんは俺の知り合いみたいだ。今からバカなお兄ちゃんがいるところに連れて行ってあげよう」

「本当ですか！ ありがとうございますっ！」

「けどな、その前にチョーットお兄さん達はバカなお兄ちゃんとOHANASHIしたいことがあるんだ。少しだけ待っててくれるか？」

「むーっ……しょうがないです。少しだけだよ？」

「おうー」

俺達はずみき達に事情を説明して、店を任せて被告人がいるFクラスへと葉月ちゃんを連れて足を向けた。

さあ、裁きの時だ。



「では、罪人吉井 明久。これより裁判を行う。……判決を言い渡す、有罪」

「いきなり有罪判決!? 罪状もわからず弁明さえ出来ない裁判なんて認められないよ  
!」

「ええい黙れ黙れ! 大人しく裁きの鉄槌を受け入れるんだ!」

「イタタタタツ!? 榊もその手を離し腕が二重螺旋構造のようにネジ切れるーっ!?」

「……………」(スタツスタツスタツ…………)

「い、伊御? なんでゆつくりこつちに歩いてくるの!? なんで無言なの!? その握りしめた拳は何っ!? ねえ!!?」

「……………ねえ坂本、一体何事よこれは?」

「俺が知るか。大方、馬鹿がまたバカやらかしたんだろ。俺はこの状況より、明久が二重螺旋構造って言葉を知ってることの方が驚きだ」

「確かにのう」

「……………」(コクコク)

「えつと、あの……………吉井君、助けなくていいんですか?」

「…あの2人を敵に回してまで助ける価値は明久にはない」

「薄情者どもっ!! あっ、伊御やめて! 拳を下ろしぼるすっ!!」(パーンッ!!)

伊御の内側から肉の華を咲かす拳を、未だ嘗てない出力で受けた! お腹から内臓が

飛び出ちやううっ!!

……どうしてこうなったんだろう。僕が何をしたっていうのさっ!!

……

……

……

数分前。Fクラス『中華喫茶 ヨーロピアン』にて。

……ガラガラガラッ

「いらっしやいませ! って音無と戌井じゃな……どうしたのよ、そんな顔して」

「いやなに。悪の道に踏み出そうとしてるダチを連れ戻しに来たのさ」

「はあ?」

「美波、お客さんが来たの? ん? あれ、伊御と榊じゃないか。こつちを手伝いに来て

くれたの?」

「榊、光源氏擬きを確保」

「はっ」

「え? ちよなにいいイタタッ!」

「ここじや営業に差し支えるから、裏へ連行」

「さあこつちだ! 犯罪者予備軍!」

「犯罪者予備軍!」 何が何だかわからないんだけど!? ちよつと2人共!」(ズルズルズル)

「おいおいなんの騒ぎ」「雄二、少し裏を借りるよ」……はい」

「何!?! 僕これから何されるの!?!」

「「明久の幻想(幼女とイチヤイチャ)をぶち殺す」

「ダメだ! なんのことがさつぱりわからないっ!」

「なに、じきにわかるよ。さあ、裁きの時だ」(ニコツ

「お、お助けえー!!」

……

……

……

で、今に至るわけで……。

「ぐ、ぐふっ……。ぼ、僕の臍物が華開くかと思つたよ……」

「裁きは下つた。次は伊御裁判長より、現代ではあるまじき志向の矯正が行われる。さ

あ立て! 光源氏を騙る愚か者よ!」

「名乗つた覚えはないよ!?! というかももう勘弁してください! せめてなんでこんな

目にあつてるのか説明してください!」

伊御と榊の冷徹な視線に本当に心当たりがないんです！　しかしそんな僕の疑問は、雄二の最悪な憶測によって掻き消された。

「お前を光源氏だと言ってるんだから……ちよつと待て。明久、まさかお前……幼女に手を出したんじゃないだろうな？」

「……………はい？」

僕が？　幼女に？　手を出したって？　……………バカなっ!!　雄二貴様！　この機に乗じて僕をとことん貶める気だな!!　だがしかし！　伊御と榊がそのような妄言を信じるはずが……っ！

「その通りだ」

「あつれえ？」

えっ!!　それがこの裁きの罪状なの!?　ならとんだ冤罪だ！　僕にそんな邪な性癖はないし、幼女に手を出したこともございませぬ！

……だからみんな、僕を犯罪者を見る目で見ないで。あつ、距離をあからさまに取らないで。美波と姫路さんはその手に持ったボールや包丁でなにをするつもりだい!!　待つて！　まずは話を聞いて!!

「ちよ、ちよつと待つてよ！　僕、心当たりがないんだ。伊御、榊。僕が幼児性愛者つていう証拠があるつていうの？　というかなんでそんなことになつてるの!!」



「あくまでシラを切るつもりか。なら伊御、被害者にご登場してもらおうか」

「……そうだね。正直に悔い改めて欲しかったけど、仕方ないか。秀吉、表に女の子がい  
ると思うから連れて来てくれないか？」

「うむ、心得た」

秀吉は素直に頷いて出ていった。……大丈夫だ。本当に心当たりなんてないんだから、堂々としてるんだ吉井 明久！ そして無罪だった暁には、伊御と榊に『ハチポチ』で一週間分奢ってもらうん「あつ！ バカなお兄ちゃんだつ！」だつはあつ!!

突如背後を襲った衝撃にむせる僕。何？ え、バカなお兄ちゃんつて僕のこと？ なんて不名誉な！

「えっ！ もしかして葉月!？」

「あ、お姉ちゃん！ 遊びに来たよっ」

僕の背中にダイビングした女の子は、次に美波の方あと駆け出して抱きついた。へえ、美波つて妹いたんだ。男勝りな美波と違って、天真爛漫つて言葉を表したような子だね。

姉妹の思わぬ再開に場がほんわかとする。……しかし、それは長くは続かなかつた。「て、ちよつと待つて。………ねえ音無、葉月が2人の言つてた被害者つてこと？」

……あれ？

「……ああ。まさか島田さんの妹さんだとは思わなかったけど」

「……………」

……ヤバイ、美波が暗いオーラを纏い出したぞ！　ってこの子がそうなの？　僕、こんな可愛い子の知り合いないと思うだけ……。

「ね、ねえ葉月？　このバカに何かされた？」

「ふえ？　ううん、何もされてないですつ。……えっと、葉月からはしちやいましたけど」

ほえ？　僕に何したんだろう？

「……………何を？」

「えへへ、ファーストキスですつ」

「確保ーっ!!!」

榊の一声によつて秀吉とムッツリーニに取り押さえられる僕。ファーストキスっ!!　僕つていつの間にか幼女に対してそんな罪を!?　……じゃなくて!

「離してっ!　僕はそんなことされた覚えはないよっ!　冤罪だ!!!」

「そんな……。バカなお兄ちゃんひどいよう。……葉月と結婚の約束だったのに

「！」

結婚の約束!! ……もうダメだ。僕には今何が起こってるのか理解できない!

「明久、もう言い逃れはできません。大人しくリンチを受けた後にブタ箱に入れ、な?」

「雄二がかつてないほどにいい笑みを浮かべている!! そんなに僕の不幸が嬉しいかっ  
！」

「何を今更」

「このド畜生めがあっ!!」

殴りたい! このキラリと歯を見せて笑うゴミを地平線の彼方へぶっ飛ばしてやり  
たい!!

「……アキ?」(ボールを持って

「……吉井君?」(包丁を持って

「ひ、ヒイイイツ!!」

美波と姫路さんがゆっくりと凶器を持って近づいてくるう!! 待つて! 話をつ!  
僕の話の聞いてください!!

「伊御! これは何かの間違いなんだ! お願いだからみんなを止めて!!」

「……明久、俺はずっとお前の友達だよ」

「伊御ーっ!!」

信じてえ！ 誰か僕の無実を信じてよお！！

「瑞希」

「美波ちゃん」

「殺るわよ」

……………あ、僕の人生……………終わった。

……………。

ぎいやあああああー……………

……………僕はこの日、一度死んだ。

## 第24話

「ぐああっ!? 足があっ!」

「なっ!? お、おいテメエ! ダチになにしゃがるっ!」

「立場分かってんのか、アッ アッ!」

「……………」(ヒュヒュヒュヒュンッ)

「…………無視してんじゃ「ヒュオンッ!!」っ!?!」

「…………次は、当てるよ?」

「…………っ!」

まさかここまで強硬手段に出るとは思わなかったよ。…………さて、とりあえずこいつらを問いただすかな。

俺はフォーク3本を片手で回しながらガラの悪い男達へと歩を進めた。

…………遡ること少し前。

俺達の愛ゆえの制裁を一身に受けた偽・光源氏は一時の間心の臓が動きを止めてい

た。

康太の蘇生治療によつて現世に戻つてきた明久から、雄二がいつかの時に見たという三途の川の渡し人に6万強請られたと聞いた。普通なら6文のところを6万とは……あの世も不況なのかな？

「い、い」おゝゝつ！ ぐずつ、えぐつ！ ぼ、ぼくのばなじをぎいでよゝゝつ!!」

その後、息を吹き返したばかりにも関わらず元気に号泣しながら俺と榊に文句を言った明久の頑丈さには少し引いた。俺達は明久があまりにも必死な形相で話を聞いてと言うので、一応聞いてみた。

明久の話を改めて聞いた俺達の判決は……情状酌量の余地ありと言うことで無罪となった。

明久としては本当に困つてる女の子を助けたかつただけで、葉月ちゃんのお婿さんにしてあげる発言は子供の言うことだったので笑つて聞き流したそうだ。……聞き流せるのは良くて小学校低学年くらいまでだよ、明久。

そんなこんなで収束した光源氏計画事件。俺と榊は、決めつけて明久を犯罪者と思ひ込んでしまったことに反省して、明久に「1日だけ『はちぼち』で好きなだけ奢つてあげることにした。その時の明久の喜びようと云つたら……」。

そんな騒ぎも一息といったところで、今はどういふ状況なのかという話になつたんだ

けど……どうやらあまり芳しくないみたいだ。

どうにか中華喫茶にお客を戻そうと考え込んでいると、葉月ちゃんから有力な情報を聞いた。なにやらこの中華喫茶の悪評をばら撒いている存在がいるということだ。……ふむ、俺達が裁かねばならない奴は他にいたようだ。

ではその元凶をとつちめようつてことで、葉月ちゃんがその話を聞いた場所へとみんなで赴くことになった。まあ、俺は行かないんだけどね。ここは明久達に任せよう。

「行つてらしゃい」

「「行つてきますー！ 父さんー！」」

「誰が父さんだ……」

みんなが報復に行つてる間、俺は中華喫茶の手伝い、榊は『つつみん』のクレープ作りに戻ることになった。俺も少しはFクラスの手伝いをしないとね。午後はつみき達も1人ずつ交代でこつちに向かうそうだ。

明久達を見送つた俺は、康太に中華服を着させられた。どうやら俺は学祭中には制服は着られないみたいだ。中華服を着た後、康太が何枚か写真を撮つて何処かへと一瞬で消えて行つただけだ……どこの忍びなんだ？

消えた康太は置いといて、俺は接客をすることにした。と言つても、お客様がほとんどいないからやることがなかった。

しかししばらくすると、お客様がポツポツと中華喫茶にいらっしやるようになった。俺と秀吉が来てくれたお客様に対応していたら、さらにお客様がやって来るようになった。突然どうしたんだろうか？ 明久達が出来てくれたかな？

『ほ、ホントだ！ 音無君が中華服を着てる！』

『さつきまで着てた書生服も良かったけど、中華服もカッコいいなあ』

『なあおい。ピラで見るよりあのチャイナ服着てる子、可愛くね？』

『だよなあ？ 声も可愛いし来てよかったな』

俺と秀吉を見ながらポソポソと何か言ってるお客様達に疑問に思いながらも接客をしていると、お客様としてやって来た顔見知りの子が教えてくれた。……どうやら俺達従業員の写真が載ったピラが突如撒かれて宣伝されたようだった。

「……効果は抜群」(グツ)

「……せめて許可を得ような？」

いきなり背後に現れた康太にため息を吐いた。というか俺の写真なんて載ってても効果なんてないだろうに……。

まあ、お客様が来るようになったからいいかと接客を続けていると、どこか遠くから騒ぎが聞こえてきた。

『おいあの子可愛くないか？』



『何処の出し物だろうな？　メイド服がよく似合う』

『でも、どうして走ってるんだ？』

『そういうイベントじゃないか？』

『とりあえず写メ撮つところぞ！』

『……やめてえ!!　僕を見ないでえ〜!!』

………。うん、向こうも頑張ってるみたいだ。俺達も気合いを入れないな。

俺は清涼祭で相次ぐ災難に見舞われている（一部俺のせい）友に心の中で励ます。そんな友の心の傷がいつの日か癒されることを願いながら、俺は茶葉のストックを取りに倉庫となってる校舎へと向かった。

俺は校舎に着き、茶葉が置いてある教室に入って目的のものを探していたら、教室にいきなりいかにもなDQNが入ってきたんだ。そいつらは俺を取り囲み、その中の1人がこう言い出した。

「音無　伊御だな？　悪いが少し痛い目に遭ってもらうぞ」

どうやら俺だと分かった上でやってきたようだった。ここで俺を痛めつけたところで意味はないと思うんだが……大人しくやられてやる必要もないな。

というわけで身近にあったフォークをいくつも持って、投げナイフならぬ投げフォークで迎撃したというわけだ。

……舞い戻って、現在。

「ううっ。イテエよう……」

DQNの1人が俺の投げたフォークが太ももに突き刺さり、痛みに蹲っている。それを見た他の奴らはそれでも怖じけずに威勢があつたが、それもさつき黙らせた。

俺もこういうことはあまりしたくないんだけど、抵抗するなら正当防衛として……手足の1本2本は覚悟してもらおうよ。

「さて、質問だ。誰に俺を襲うように頼まれたんだ？」

「「「……………」」」

……言わないか。まあ、聞いたところでどうせ黒幕じゃないんだろうな。じゃあ次だ。

「なんで俺を襲つたんだ？ これぐらいなら言えるだろ？」

「「……………」」

だんまり、か。

「……はあ、話してくれたら今回は見逃す。言わないなら……」

……ヒュヒュヒュヒュヒュンッ！

「ヒッ！」

「悪いけど、少し痛い目に遭ってもらおうよ」

俺はさつき言われたことをそのままそっくり言い返した。さて、どう出る？

「……………スーツの男に金で頼まれたんだ。『音無 伊御、吉井 明久、坂本 雄二のうちの一人を痛めつけろ』と」

素直に話した男が「写真も見せてもらった」と、俺の目の前にその写真をばら撒いた。そこには俺と明久、雄二の写真が写っていた。

「理由はなんだ？」

「知らん」

「……………」（ヒュオンッ）

「ほ、本当だ！ 取り敢えずボコせば良いって言ったんだ！」

……………まあ、こいつら多分捨て駒だ。そのスーツの男も誰かに頼まれた下っ端なんだと思う。思った以上に根が深そうですね、学園長？

「……………分かった。行つていいよ」

「わ、悪かったな。それじゃあ…………」

「だけど、次に俺達や友人に手を出したら…………」

俺は間を開けて、両手で回していたフォークを奴らに当たらないように全弾撃ち出

す。

「ひ、ヒーツ!!」

「串刺し、だからね?」(ニコッ)

「も、もうしませーんっ!!」

DQN達は蹲っていた奴も連れて教室から慌ただしく出て行った。……本当にやるなよ? フリじゃないからな?

「……ふう。これはみんなと相談だな」

俺はフォークを片付けて、茶葉のストックを手に中華喫茶へと戻った。



「……………っ!」(ぬいぬいぬいぬいっ!)

「俺と明久、伊御が狙われてる理由は簡単だ。このクラスの中心人物だからだ。Fクラス  
の動揺を誘う作戦だろうな。基本だが、効果は高い」

「俺はそんなことないと思うけど……」

「そう思ってるのはお前だけだ」

「……………っ!」(ぬいぬいぬいぬいっ!)

「けど良かったね伊御。何もなくて。投げフオークで撃退つてところが信じられないけど……」

「そうかな？ 勢いよく投げれば結構刺さるよ」

「速度は力、ということじゃのう」

「それは果たして人が出せる速度だったのかなあ？」

「試してみる？」（ヒュヒュヒュヒュヒュンツッ！

「全力で遠慮しますっ！」

「……………っ！」（ぬいぬいぬいぬいっ！

「ね、ねえ坂本？ ホントにこの服で召喚大会出なきやダメなの？ ここで着て働く分

にはいいんだけど、さすがにちよつと……」

「は、恥ずかしいです……」

「お姉ちゃん達、とつても綺麗ですっ」

「ムツツリーニが伊御と秀吉のピラをばら撒いてくれたおかげでなんとかなってるが、お前達がそれを着て宣伝をしてくれたら確実だ」

「「でも……」」

「それに、それは明久の趣味だ。なあ明久？」

「大好……愛してる」

「明久……君は本当に嘘がつけないね」

「あれ!？」

「し、仕方ないわねっ。これも店の売り上げのためよね!」

「そ、そうですねっ。お店のためですしね!」

「……………っ!」（ぬいぬいぬいぬいっ!）

俺達はそれぞれの用事を終えて、Fクラスに集合していた。明久達の話を知ると、この噂を流していたのは常村先輩と夏川先輩だったそう。Aクラスのメイド喫茶に何度も訪れて大声でここの悪口を言っていたらしい。

明久達の機転によって止めさせることには成功したが、彼らを逃してしまったようだ。……さっきの騒ぎはその追いかけてこだったみたいだ。

ただとただで逃したわけではなく、夏川先輩の頭にブラジャーが接着剤でくっつけたそう。そのおかげで、これ以上彼らが人前で妨害は出来ないだろうという話だった。……流石明久達だ。やるのがエグい。

逃げた常夏コンビ（命名、明久）を追いかける際、明久はメイド服を着て（作戦の内だったらしい）公衆の面前で追いかけたので、心に深い傷を残したみたいだ。

さつき密かに康太にその時の写真を見せてもらったけど、秀吉と同じで違和感がなく似合っていた。……康太、それを売りに出すの止めてあげなさい。

「……出来た」

そんなムツツリ商会の商人は、島田さん達のチャイナ服を羨ましがった葉月ちゃんのためにチャイナ服を一から仕立て直していた。んだけど……。

「わあつ。このお兄さん凄いです！」

「流石ムツツリニ！ 君の性への衝動は不可能を可能にするね！」

「……ふつ」

この僅かな間で完成させていた。確かに凄いことなんだけど……康太、それは決して誇れることではないぞ。下心でパワーアップするというのは恥ずかしいよ、友人として。

「全く……。それじゃあ、俺は向こうに戻るよ」

「ああ。あんなことがあったんだ、御庭達もこつちに来なくていいと言ってある。一人で行動させないようにな」

「気をつけてね、伊御」

「分かったよ」

「それと……」

「? ……うおつ」

間を開けたかと思うと、いきなり雄二に肩を掴まれた。凄い力だ。

「……伊御」

「な、なんだ？」

「Aクラスに行った時にな、翔子が持ってたんだ」

「……何を？」

「婚姻届とウチの実印」

「……」

……霧島さんはどうやら待てないみたいだ。

「俺はこの大会に優勝しないと、人生の墓場に新幹線でまっしぐらだ。……勝たなきゃ、勝たなきゃいけないんだ！」

「……何がどうなってそうなるんだ？」

「お前が翔子に吹き込んだことと俺の不注意が化学反応を起こした生成物だ」

どんな反応が起こったんだろうか？ ……まあ、それはそれとして。

「確かに結婚は気が早いな」

「お前とみいこさんのおかげで多少はマシになったがな。ともかく、そういうわけだから翔子と木下姉の打倒は手伝ってもらうからな？ 拒否権はないぞ」

「……了解」

……仕方ない、か。霧島さんと優子には応援するって言ったのに、裏切ってしまうこ



とになるな。責めは甘んじて受けよう。

「ははは葉月ちゃんっ!?　ここで着替えようとししないで!　ムツツリーニが出血多量で死んじゃうから!!」

「ほえ?」(脱ぎ脱ぎ)

「……………気に、するな」(ボタボタボタボタッ)

……………康太、君は何故出血多量で痙攣してるのに幸せそうなんだ。呆れれや侮蔑を通り越してやっぱり最低だよ。

俺は紳達の元に戻る前に、輸血パックがストックされてる場所に向かうのだった。

【おまけ】

□とある空き教室□

「……………」(トントントン)

……………ガラガラガラ

「……………待たせた」

「……………別にいいわ。で、例のものは」

「……………」(スッ)

「っ！ ……見せてちょうだい」

「……待て」

「……はあ、ほら」(バサツ

「……確かに」

「さあ、早く見せなさいっ」

「……慌てるな、まずは」

「……ゴクンツ」(もじもじ

「……書生服を着た伊御」

「これよこれ！ アタシとも撮ったし、彼一人のも撮ったけど違うのも欲しかったのよね！」

「……その上にエプロンを着た伊御」

「ああいいわ。書生服にミスマッチなエプロンも、伊御君が着ればなんとも言えない魅力を感じるわ」

「……客にスマイルを送る伊御」

「っ！ ……その相手がアタシじゃないのが不服だけど、伊御君の優しい笑顔に免じて許すわ」

「……動物と戯れる伊御(書生服ver)」

「ふふっ。やつぱり伊御君と動物はセットよね。これほど和むものもないわ」

「……最後に本日のお目玉」

「? 何かしら?」

「……中華服を着た伊御（格闘家風ver）」

「っ!?!」

「……お得意様へのサービス」

「……ああ」

「……気に入ったようで何より」

「っ……んんっ。ええ、最高のサプライズよ」

「……ではな」

「次もよろしく頼むわね」

「……」(コクコク)

……シユパッ!

「……ああ、素敵。……もうっ、伊御君はいつもアタシを惑わせるんだから!」

……チユッ

## 第25話

「……雄二の考えていることくらい、私にはお見通し」

「ふふっ♪」

「ば、バカなっ!？」

「秀吉!? どうして縄で簧巻きにされてるのっ!」

「くっ、すまぬ2人とも。ドジを踏んだ……」(もぞもぞ

「……………っ!!」(パシヤパシヤパシヤパシヤッ!

「ムツツリーニ! その写真、後で売って欲しい! (撮影なんかしてないで、早く秀吉の縄を解いてあげて!)」

……明久、本音の方が先に出てるよ。

俺は開始直前からこちらの出鼻を挫かれた、召喚大会準決勝を物陰から眺めていた。

……………

……………

……………

俺がクレープ屋に戻った後、明久たちの4回戦が開始された。しかしなんと4回戦の相手は姫路さんと島田さんだったそうで、激闘の末、4回戦の結果は雄二の“勝利”ということだった。……召喚大会ってタッグ戦だよな？ まさかとは思うけど、明久もろともつてことは……どうやらそうみたいだ。因みに3回戦目は相手が棄権して不戦勝だったみたいだ。

雄二は明久や姫路さん達の恨めしそうな顔を物ともせず、再びFクラスに戻ってきた俺に作戦の概要を伝えてきた。それはまた酷いもので、まずは秀吉を使って優子を捕縛し、秀吉が優子に成りかわる。そして準決勝の科目『保健体育』を利用して、霧島さんの気を引いた瞬間に康太に召喚獣でとどめを刺すというものだった。

雄二も俺と優子の仲を案じてか、俺を最初から作戦に組み込まず、万が一作戦が失敗した時の保険に置いておくということだった。俺としては案じてくれるなら優子にそもそも手を出さないうで欲しいんだが……。

俺は雄二の微妙な気の使い方にため息をつきながら、意気揚々と準決勝に臨む明久達の後を追うのだった。

……

.....

そして雄二の作戦の結果が冒頭である。

雄二の作戦は霧島さんに読まれ、秀吉はボコボコのうえ簀巻き。さらには……。

「ま、匿名の情報提供もあつただけだね」

という優子の意味深な言葉だ。……学園長、これが終わったら貴女を問い詰めますよ。

俺が踏ん反り返つて居るであろう学園長をどうとつちめるか考えていると、自分の策が看破された衝撃から戻ってきた雄二が再び不敵な笑みを浮かべた。……さて、出番かな。

「……ふつ。大人しく俺の策にハマっていれば、少なくとも心のダメージは負わずに済んだものを」

「なに、負け惜しみのつもりかしら？」

「……………」

「お前のその得意げな表情もそこまで木下姉。さあ来い！ 対木下姉最終兵器！！」

……最近、野球の神だったり、文月学園の良心だったり、俺に対するよく分からない

いあだ名が増えた気がする。まあ、間違はなく友人達のせいだけだ。

そんなことを思いながら、俺は自分の蒔いた種だと腹をくくって潔く裏切り者として2人の前へと歩みでた。

「えっ……」

「……音無？」

「ごめんね？ 霧島さん、優子」

完全に予想外だったんだろう。俺の登場に2人は呆気にとられていた。



雄二の作戦が失敗した。僕はその時点で「腹案」を実行しようとしたんだけど、その前に雄二が自身の尻拭いとして対木下さん最終兵器である伊御を投入した。その効果は絶大だったようで……。

「伊御君、どうして……どうしてそこにいるのっ。貴方は代表を応援してたはずでしょ！ それに、この大会の出場を進めたのも貴方なのに、どうしてっ！」

「……音無」(悲しそうな目)

「ごめんね。俺達にも事情があるんだ」

「事情って……ハッ!! も、もしかしてあの時の『優勝したら……』ってやつから貴方達の策略だったのね!!」 アタシの動揺を誘うための!」

「いや、それは……」

「酷いわっ! アタシの乙女心を利用したのね!!」

「……音無は酷い人」(少し責める目)

「……言い訳はしないよ。どう言っただって、2人を裏切ってしまったのには変わらないから」(しゅんっ)

「っ!? そ、そそそんな顔したってだだだダメよつ。ゆ、許さないんだから!」

「でも、信じて欲しいんだ。あの時の……君に言った言葉に偽りはないんだ。その後にもう言ってられなくなっただけで……」

「うっ……」

「いや、ダメだな。そんなこと言っても信じてもらえないよね。……本当に、ごめん」

「うう……」

伊御の、正真正銘真っ白で嘘偽りのない誠心誠意の謝罪の言葉に木下さんはノックアウト寸前だ。す、凄いよ伊御! あんなに勝気な表情だった木下さんが今じゃ罪悪感で涙目だ! ついでに僕達も罪悪感で胸が押しつぶされそうだ!



「は、ははっ。どうだ木下姉。見ての通り伊御は俺達の側に寝返った。こゝこゝは伊御の謝罪を素直に受け取って棄権しないか？」

雄二が右手で胸を押さえながら口角をヒクヒクさせて無理に笑みを浮かべる。普段は友達を一切の迷いなく使い捨てる外道も、流石に伊御をここで使うには相応の苦しみがあるようだ。ざまあ……ぐうっ！

そ、それにしても。伊御を尻拭いとして呼び出したのは良いとして、雄二は伊御に何をさせる気なんだろう？ 2人の仲がいいからって流石に木下さんが棄権してくれるとは思わないんだけど……。

案の定、木下さんは罪悪感に苛まれながら、それでも雄二のそんな言葉を強気に跳ね返した。

「な、なんでアタシ達が棄権しなくちやいけないのよ！ 悪いのは伊御君なんだから引き下がる理由なんてアタシ達にはないわ！」

まったくもってその通りだ。雄二もそう思っていたようで、頷きながら同意した。「だろうな。俺も言ってみただけだ。……けどな」

「な、なによっ！」

しかしかつての神童は、訝しむ木下さんにここで王手をかけた。

「伊御がお詫びに1日木下姉の言う事を聞く、と言ったらどうだ？」

「? ……………つつ!!?」

木下さんは雄二が最初何を言ってるのか理解できなかったようだけど、しばらくして理解した瞬間、凄まじい反応を見せた。つてちよつ!!? どういうことさ!

「な、ええつ!!? な、何をバカな事を言つて……………」

「バカなこととは酷いな。こちらとしては精一杯のお詫びの気持ち提示してるのに、なあ伊御？」

お詫びも何も、酷い目に合うのは伊御だけじゃないか! さつき雄二も良心の化身たる伊御を利用したことに苦しんでたでしょ! これ以上は煉獄に片足を突っ込んじゃうよ!?

まったく、こんなの伊御だつて嫌に決まつて「うん。俺に出来ることならなんでもするよ」つて伊御お!?

「なん、でもつ!!?」

「ああ」

「なん、でも……………」

それつきり木下さんは黙ってしまった。あれ? なんか様子からして伊御に罰を与

えようとかって感じじゃないんだけど、いま何を考えてるのかな？

「そうだぞ木下姉。なんでも、だ。例えばそうだなあ……、一日買い物に付き合わせるとかどうだ？」

「っ！ それってデー……っ!？」

「ああ皆まで言うな。例えばの話だ。他には、伊御に一日ご奉仕してもらうとかもいかもな？」

「ぞほうしっ!？」

「知ってると思うが、伊御は家事は万能だ。執事服を着させて、家事をしてもらって、甲斐甲斐しく世話をしてもらおう。一日お嬢様気分が味わえるぞ？」

「はうっ」

それから木下さんは雄二が出す例え話全てに食いつくように反応して行く。木下さんってこんな顔もするんだなあ。最初の頃の冷たい印象が嘘のようだ。

それと、気のせいかな？ さつきから雄二の言う例え話って、罰というより……そう、恋人同士がすることのような？

「……ま、俺が思いつくのはせいぜいこれぐらいだな。どうだ木下姉？ 伊御を、一日、お前の、好きなように、できるんだぞ？」

「くっ!？」

「…………ふむ、ならばこうしよう。それに加えて、そちらは棄権しなくてもいい。ただ、木下姉は今からの戦いに手を出さないでくれたらそれでいい。これがこちらが出す最終提案だ」

「……………っ」

雄二の言うことに対して唇を噛んで耐える木下さん。さっきまでの反応から木下さんにとっては本当に魅力的な提案のようだけど、それでも友達である霧島さんを裏切ることに抵抗があるみたいだ。

木下さんは唸りながら、頭を抱えながらと忙しそうにしながらしばらくして、決意を秘めた目をして僕たちの方に顔を向けた。あ、これは交渉決裂だね。

「……………。ぎ、残念だけど、その提案はっ！」

「…………優子、いい」

「だ、代表!?!」

おおっ!? 交渉決裂かと思いきや、それをまさかの霧島さんが済んでで止めたあ!

「…………私も優子の気持ち、分かっているから」

「でもっ」

「……………ここまで、ありがとう。ここからは、私が闘う」

「代表…………」

いつの間にか向こうはシリアスな展開だ。霧島さんがとてもカッコいい。まるで悪者に友人の人間質が取られて、友人が裏切りを促されるが主人公はそれを許して一人悪者に立ち向かうヒーローのようだ。……もちろん、悪者役は僕達だ。

「……旦那様とのデートのために」

「誰が旦那様だ!!」

一気にシリアスがシリアルになった。

「……ダメ。やっぱりダメよ、代表」

「……優子」

霧島さんに言われても、それでもこちらの提案を蹴ろうとする木下さん。……うん、あれだよ。あれこそが本当にあるべき友人の姿だよ。

しかしその素晴らしき光景に、友人として最悪な男が影を落とす。

その男、雄二はこちらを見て指示を仰いでる伊御に頷いて、霧島さん達を顎で指した。どうやらヤレということみたいだ。貴様雄二、伊御に何をさせる気だ!

伊御は雄二の指示にため息を一つ、木下さんに声をかけた。

「優子」

「っ?! な、何よ伊御君! あ、あアタシは何を言われてもそつちの提案を受け入れるつもりは」

「俺と一緒に過ごすのは……イヤ、かな？」（上目遣いで

「静観するわ」

決まったーっ！ 伊御の上目遣いが友情を凌駕したあーっ！！

いつもの決め台詞もすごいけど、まさか仕草でまで女の子をオトすなんて！ 木下さ  
ん！ 平静を保つてるように見えるけど、溢れ出ているラブ（鼻血）が止まらないよ！

「……これでもいいのか？」

「ああ、完璧だ伊御」

伊御はどうして木下さんが今ので了承したのか分からないみたいだ。流石鈍感日本  
代表だ。（断じて人のことを言えない）

それにしても……ここに御庭さんがいなくて本当に良かったよ。いたら嫉妬で伊御  
の頭が丸かじりになってるところだ。

こうして僕達は木下さんを封じること成功し、残りは霧島さんとなった。

さて、残り1人となったことで雄二の秘策、ムツツリー二の召喚獣をバレないように  
召喚、霧島さんにとどめを刺すというものだけど……。

（雄二。霧島さんに棄権させる方法があるんだけど）

（何？ お前は今更何を言ってる……）

（くたばれ）

(クペツ!?)

油断した雄二の後ろから優しく頸動脈を押さえて黙らした。よし、散々伊御や他の人たちを利用したんだ。自身もその覚悟があるってことだよねっ!

(秀吉、頼むよ)

(うむ、心得た)

さあ、等身大人形劇の開始だ!!



「……だかここは譲ってくれ。そして優勝したら結婚しよう。愛してる! 翔子!」(秀

吉ver.

「……私も、愛してる」(ぼっ／＼／＼)

「……………」

明久と秀吉による雄二を使った策により、霧島さんも堕ちた。いきなり結婚って。

……あとで知らないからな、2人とも。

そんなわけでなんとか準決勝を勝ち抜いた(?)俺達(?)は、気絶した雄二を連れて大会の会場から出ることにした。

これで今日のイベントはほぼ終了。召喚大会の決勝は清涼祭の2日目の午後に行われる。クレープの在庫的にも明日は午前中で完売だと思うから、みんなで明久達の勇姿でも見に行こうかな? ……果たして正々堂々の勝負が見られるかは、今日のを見たらすぐ疑問だけど。けど心配はいらないかな? だって……。

「い、伊御君!」

明日の決勝に思いを馳せる俺に、先程戦わずして負けさせてしまった優子のいつもより切羽詰まった声がかかる。まあ、あんな「程度」のお詫びじゃあやっぱり許してくれないよね。お叱りはしつかり受けないと。

「優子、今回は本当にごめんね。こんなお詫びじゃあ許してもらえないだろうけど……」  
「そ、そんなことないわっ! こんな最高のご褒美……じゃなくて! ……んんっ、それはいいの。貴方の誠意は伝わったから、これで許してあげる。私が伊御君に声をかけたのは、えっと……」

「……優子?」

優子はそれつきり俯いてしまった。どうしたんだろう? さっきの召喚大会のことじゃなかったら、いつたい……。

それから優子は瞳をキュツと瞑った後、右手を胸に当てながら俺を見上げるようにして口を開いた。



「……私に、何か出来ることはあるかしらっ」  
「！」

俺を見上げる瞳は真剣で、その表情はどこか不安な色が伺えた。……そっか。優子は俺がさつき言った「事情」を心配してくれたんだね。

俺は卑怯な手を使ってまで勝った俺にそれでも向けてくれた、優子の名前にもあるその気持ちに嬉しくなって、思わず右手を彼女の頭の上に優しく乗せた。

「あ……」

「心配してくれてありがとう。でも大丈夫だよ、優子」

「伊御、君」

「後は明久達が明日の決勝に勝つだけで全部丸く収まるから、心配しないで」

「……」

「明久達なら必ず勝つてくれるから、ね？」

「……さつきみたいに？」

「ふふっ、そうかもね。……けど、明日は多分、正々堂々全力でぶつかるとは思わないよ。だって……」

そうしないと明日この大会を見る姫路さんのご両親に、最低クラスの有用性を見せなきゃいけないしね。だけど、そんな計画の打算を抜きにしても……。

好きな人の前で、最後までいいカッコつけたいよね。明久。

雄二も、その辺り分かってそうだし。明日は誰が相手でも、きつと……大丈夫だ。

「……伊御君？」

「ああごめん。とにかく、明久達に任せていけば心配ないから。だけど、ありがとう。優子」

「……うん」

それでも不安そうな表情を変えない優子の頭を撫でてあげる。それでやっと安心したのか、優子はハニカミながらも笑顔を見せてくれた。

『……雄二、愛してる』（タキシードを着せながら

『………』（ビクンビクンッ

『待つて霧島さん！ 雄二には決勝もあるからクスリは許して！』

『……ダメ？』

『決勝が終わったら思う存分お気の済むまで愛し合っていていいから！』

『……分かった』

『………』（ビビクンッ

『明久よ。その前に雄二の痙攣が治らんのじゃが……』

『……いつものこと』

遠くから聞こえるいつもの騒ぎに苦笑しながらも、どこか安心する俺はもうダメかもしれないね。

「それじゃあ、行こうか」

「……ええ、そうね」

俺は優子を促して、騒ぎの元に足を向けた。



アタシは隣を歩く伊御君の横顔をそつと見やる。そこからはいつも通りの伊御君が伺えて。……何もかもが「いつも通り」の彼の様子に私は歯噛みする。

貴方はいつもそうね。

アタシには頼ってくれなくて。

あんなバカ達には全幅の信頼を置いて。

信頼されてないわけじゃない。

けど、彼にとって私は……いつまでも守る対象で。

彼の力になってあげたい時に限って、私“達”は蚊帳の外。

……悔しい。

……………。

ねえ御庭さん。

貴女も、そう思うでしょ？



「明久。今日という今日はお前をクロス」

「あはは。やだなあ雄二。目が怖いよ？」

「まあまあ。勝ったんだからいいじゃないか」

「……伊御、せめてその愉快げな顔を戻してから言いやがれ」

俺と明久は気を失っていた雄二を人気がないところへ連れて正気を取り戻させた。

……明久が雄二の腹を殴ってクスリとやらを履かせた後、冷水につけていたら雄二が復活した時には正直言葉が出なかったよ。

「ちゃんと後で霧島さんをそれとなく諫めておくから、それで許してくれないか？」

「……ちつ。本当に頼むぞ？ それで、姫路や島田は教室にいるのか？」

「え？ まだ確認してないけど、いるんじゃないの？」

唐突に雄二が彼女達の場所を尋ねたことに、明久は不思議そうにする。……まさか雄二。

「おそらく伊御の考えてる通りだ。多分、そろそろ仕掛けてくるはずだと思うんだが……」

「え？ え？ 2人揃ってどうしたの？」

明久は俺達は何を言ってるのか分からないみたいだ。俺も自分の考えを信じたくない。流石にそこまではしないはずだ。しかし……。

「……雄二」

「ムツツリーニか。何かあったな？」

「(コクリ) ……ウエイトレスが連れていかれた」

「えっ!？」

「……………」

俺の予想は、見事に的中してしまうのだった。